

新・ギルガメッシュ叙事詩

赤坂緑

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

黄金の英雄王に転生した男の物語

「神話編」 完結。

現在「第四次聖杯戦争編」

※神話編は文章力がzeroです。読み飛ばしていただいても大丈夫です。

目次

「神話編」

誕生	1
人生は辛いよ	3
女神籠絡計画開始	6
逆光源氏計画	9
ドラゴン退治は英雄の本懐！〈前編〉	12
ドラゴン退治は英雄の本懐！〈後編〉	17
勇者は「伝説の剣」を手に入れた！	23
英雄王子の華麗な日常	29
女神様の未知なる思い	35
勇者は………	39
我らが「王」	44
王は辛いよ	48
王様は勇者	52
勇者は黄金の鎧を手に入れた！	60
神殺しは王の本懐〈前編〉	65
神殺しは王の本懐〈後編〉	71
英雄（ヒーロー）は遅れてやって来る	81
天の鎖	92
嵐の前の静けさ	98
滅びの日	102
英雄王ギルガメッシュ	106
宿敵エルキドゥ	115
神々は俺が裁く	124

未来へ

「番外編」

「(新) ギルガメッシュ叙事詩」

「人物設定」

「第四次聖杯戦争編」

召喚

王の悲願

英雄たちよ、集え！

英雄王の初陣

断罪の炎

王の忠告

変わらぬもの

闘いの心得

英雄の条件

王の怒り

王の宴《前編》

王の宴《中編》

王の宴《後編》

その答え

真・英雄無双《前編》

真・英雄無双《中編》

真・英雄無双《後編》

影の刺客

王の杯

それぞれの道。訪れる運命の戦い。

131

145

152

159

167

175

182

190

200

205

213

219

232

245

255

264

278

289

301

316

332

344

355

見届けよ、その勇姿を。

恋せよ乙女

王の戦

女神降臨・憑依変性



418 398 384 369

「神話編」

誕生

声が聞こえる。「生まれよ。さあ！現世にて、使命を果たすのだ！」

………なんで命令形？　なんで俺？ふざける氏　何様？だいたい俺は今マラソンしてるフオウ君の応援で忙し

「産まれるのだ！ギルガメツシュよ！」

………そういえばなんか暗いなここ。画面右下のフオウ君もないし。なんか暖かいし。なんか光がこっちに迫ってくるし

「ようやく出会えましたね。世界に生まれし御子。ギルガメツシュ」

………なんかありえないレヴェルの美人がこちらを女神のような笑顔で見ている。

これは暇を持て余した神々（抑止力とも言う）による「僕が考えた最強の主人公ギルガメツシュ」の無垢な魂を凶々しくも乗っ取ってしまった名も無き男の新たな英雄叙事詩である。

英雄王ギルガメツシュの身体を乗っ取って5年が経つ。

この5年でなんとか現状を理解し、貧弱な魂ながらなんとか本来の魂に自我が芽生える前に主導権を握ることができた。

いかに英雄王といえども、自我が芽生えていない状態で大人である「俺」に勝つなど不可能だったのだ！

フハハハハハ！　これで「俺」が英雄王ギルガメツシュだ！

………すいません。盛りました。ぶつちやけめちやく

ちや大変でした。正直な話自分が誰だったか？そもそも大人だったのか？

記憶を代償にして生にしがみつきました。

しかし、なんとか自分の手元に置くことのできた記憶もある。

例えば、この世界は紀元前のFateの都市であるURUKUであること。自分がギルガメッシュになってしまったこと。

セイバーが可愛いこと。第4次5次聖杯戦争の過程と結末。セイバーに会いたいこと。そしてセイバーと結婚したいこと。

……………え、いろいろ覚えすぎじゃないかって？仕方ない。セイバーに関する事と、何よりこの俺ギルガメッシュに関する事は覚えておいて損は無い。さてと、どうしたもんかねー
覚えておいて損は無い。さてと、どうしたもんかねー

セイバーに会うためには英雄王として生涯を全うし、第四次聖杯戦争で「優雅たれ」から呼び出されなければならない。しかし史実通りに生きようと思っても多分本来の「ギルガメッシュ」とは異なる人生を歩むことになるだろう。だって、ぶつちやけ粘土板に記されているギルガメッシュの行動なんて覚えていないのだ。

え？さつきギルガメッシュに関して覚えていると言っていたじゃないかって？申し訳ないが俺が覚えている「ギルガメッシュ」とは、黄金の鎧と髪それから黄金の魂に「王の財宝」などなど粘土板の記述どこ行った！みたいな彼の特徴だけである。

本当にセイバーに会えるのかな

第四次聖杯戦争に続く？

人生は辛いよ

風が吹き荒れる。その風の荒々しきと云ったら碌に目も開けていられないほどだ。

やがて風が止み、暗く狭い部屋に立ち曇る煙の中から黄金の「王」が現れた。「王」は自分を両腕を広げて迎え入れる顎鬚の男に向かって言葉を紡ぐ

「貴様が俺のマスターか？」

はっ！夢か。目を開けば無駄に豪華な天井がある。

もうお分かりいただけたと思うがここはウルクである。

「なんでやねん！なんでまだURUKU？なんでまだ8歳？フツーに考えたらトツキーに召喚されてセイバーと港で出会うシーンでもおかしくねえだろ！」

朝起きていきなりわけのわからないことを叫ぶギルガメッシュ王子5歳。

まあ第2話でいきなり召喚なんて都合のいいことが起こるはずもなくそもそも英霊にすらなっていない状況である。

「しかし、本当にどうするかなあ、英雄になろうにも何したらいいかわかんないし、史実を参考にしようにも覚えてないし。でも、スベック的には最強なんだよなあ。すべてを見通す千里眼に甘いマスク。神々に設計された最高峰の肉体にイケ面フェイス。英霊3騎分の膨大な魂に女を惑わせる美貌。そして呪いにも等しいカリスマと顔あと顔。」

しかし、これだけ素晴らしい肉体を持っていようとも、中身は今の自分の顔に酔っているただのナルシストである。本当にこんなやつが英霊になれるのか？

「ギルガメツシユの弱点は接近戦だから、剣の稽古は必須だな。あとは王の財宝だが……………あれ？王の財宝ってどうやって手に入れるんだ？」

……………とりあえず「王の財宝！」

シーン

「やばい。俺セイバーに会えないかも」

まさかの宝具使用不可能状態に心折れそうな主人公。

「いや。こうなったらドラゴンでも何でもいいから持前のスペックで倒して英雄伝説を作るしかない！」

しかし、自分のスペックの高さに自惚れて、王の財宝なしで英雄になろうとする主人公。だいたい英雄とはなろうと思ってるものなのだろうか？

「よし！そうと決まれば今日から素振り1000回開始だ！」

無駄なポジティブさを発揮して剣技だけで英雄になろうと素振りを始める

ギルガメツシユ5歳。

「しかし、こんなことになるんならもう少し真面目にギルガメツシユについて勉強すればよかったぜ。こんなことでは、英雄王大好きクラブ会員の皆様に怒られてしまう。せめて記憶の片隅にでも役立つ情

報が残っていないかねえ。」

素振りを開始しながらもやはりあきらめきれないギルガメツシユ
5歳。

生を得るために記憶を犠牲にしながらも今ある記憶を探って、英雄
になるヒントを得ようとしている。

「あれ？なんだこの記憶。地雷女イシユタル？」

女神籠絡計画開始

女神イシユタルとはメソポタミアにおいて性愛・豊穡・戦いを司りウルクの都市神であるとされる非常に美しい女神である。その人気は非常に高く、後代ではイシユタルの名は、広く「女神」を意味するまでになる。

ーここまで聞けばなんか凄い女神様に思えるが、その一方で数多くの男性と関係を持つ所謂「ビツ〇」である。しかも最終的に被害をこうむるのはすべて男性側という地雷っぶり。凄まじい女神様である。

しかし、そんなことは全く知らない我らがギルガメッシュ王子はこうお考えになられた。

「地雷女？ギルガメッシュがそう思うなんて凄い女なんだなあ。確か、エルキドウの死亡の原因だったような気がする。ああくやつぱりちゃんと覚えておけばよかった。……いや、でも逆に考えよう。このなんか危なそうな女神様をこっちの味方にできれば俺の人生うまくいくんじゃない？女神の加護を受けていたとかなんか聞こえがいいし！」

うまくいかないから地雷女なことに全く気づいていない。

「そうと決まればまずは……父上く！女神イシユタル様について知りたいのですが！」

◆父王ルガルバンダ◆

我が息子ギルガメッシュは天の神々の意思によって作られた存在だ。

その髪の毛一本から血の一滴に至るまですべて神々のために尽くさなければならぬ。だからこそ私はこの息子に愛情を注ぐことは決してしないと決めていた。しかし、私のことを「父上！」と無条件に慕い、無邪気な笑顔で戯れてくるこの可愛らしい子供をどうして突き放せようか！

——先のことはわからない。それでもこの可愛らしい我が息子が何者にも縛られることなく、自分で自分の道を選んでほしいと切に願う。

「父上」

「おや？今日もまた質問攻めか。やれやれ。なに？」「イシユタル様」について知りたい？イシユタル様はな性愛・豊穣・戦いを司りウルクの都市神であるとされる——中略——「このように素晴らしい方であらせられるのだが、少々男性関係がドロドロしているというか、地雷というか、ビツ〇というか、お前ももう少し自重しろというか、えっ？会ってみたい!?お前人の話きいてた?いいえダメですパパりん絶対に許しません!あんな阿婆擦れお前の将来のためになりません!」

キャラを捨てて息子を止める現国王ルガルバンダ。これだけでもイシユタルの凄さが分かるうというものだ。

しかし、死亡フラグっぽい以上なんとしてもこちらの味方にしたイギルガメツシユも引き下がらない。

「父上!どうかお願いします!」 子ギル上目遣い+カリスマ発動!

「ごふっ!」 ルガルバンダに宝具チェインが突き刺さる!

「うーむ…………… ちよつとだけよ?」しばらく悩んだ後、渋々認める父王

「やったー!」喜んで飛び跳ねる中身分大人のギルガメツシユ王子「ただし!本当に会えるかどうかはあの女神次第だし、もし仮に会えたとしても、お触り禁止だから!100メートルぐらい離れて会話してもらうから!えっ?そんなに離れてたら会話できない?安心しろ。私が50メートル地点で会話の中継するから!そこんところよろしく!」

◇ギルガメツシユ王子◇

父上がいきなりキャラ崩壊を起こした件について。父上までもお

かしくするとは、イシユタル恐ろしい子！。

まあ、とりあえず面会する準備をしてくれるそうなので、こちらも準備をしなければ！

「鏡よ鏡、世界で一番の美少年はだ〜れ？」

「それは、あなた様です！」（裏声）

「フッフ、そうかそうか！確かにこの子ギルシヨタスマイルならば、女神も瞬殺だぜ！がんばって近所のお姉さんポジにつかせてみせる！」

「さあ、女神よ！キュン死にの準備は十分か？」

逆光源氏計画

前回の父上のキャラ崩壊からおそらく2週間ぐらい経った後、女神イシュタル様とはエアナとかいう神殿らしきところで会えることになった。

準備は完璧だ！天使のような微笑みから小悪魔のようなあざとい笑顔まで鏡を見ながらの練習ですべて獲得した。これが今の俺の唯一の宝具だ。

さあ！いざ行かん！

ギルガメツシュ王子は意気揚々と神殿に向かって歩き出した。

――神殿までの道中――

「最近はおっぱら剣とシヨタスマイルの練習で引きこもっていたので、こうして街を歩くのは久しぶりだ。」

正直なところ、このギルガメツシュは古代都市ウルクのことを舐めていた。どうせ現代の都市には勝てねえだろうと内心紀元前の人々を見下していたのだ。しかし、一度街の中に溶け込んでみるとどうだろうか。

確かに現代には遠く及ばないところがたくさんある。建物も交通も不憫なところが多い。しかし、人はどうだろうか？

街を行く人々は皆が前を向いて歩いている。背筋を伸ばして働いている。

活気で溢れている。何より皆がギルガメツシュを敬い、アイドルみたく、もてはやしてくれるのだ！

「ギルガメツシュ様くうちのリングはいかがですか？」

「ギルガメツシュ王子、どこに行かれるので？」

ギルガメツシュはあまり現代のことは思い出せないながらもこの体に移るまで過ごしていた多くの物や背の高い建物に囲まれた生活をそれなりに気に入っていたことを覚えている。あわよくば帰りたいと思っている。そう、だから英霊を目指すのはなにもセイバーのためだけではなくそういった郷愁の念もある。

しかし、ここでちやほやされる……間違えた。ここで暮らす人々を見つめるのも悪くないと思い始めていた。

――閑話休題――

その女は美しかった。くびれた腰まで伸びる美しく艶やかな黄金の髪。男の情欲を誘う真っ白な肌。整ったいや、整いすぎてたとえどれだけ優れた画家でも表現しきれない顔。男好きのする真っ赤な唇。そして妖しい光を放つ魅惑的な紅い瞳。男であればこの世界に住む誰もが彼女の美しさに見とれ、彼女を欲した。しかし、一度は手に入れたと思っても、やがてはその美しさに伴う残酷さに気づかず、その身を滅ぼしてしまう。

そんな女神の元にまたもや愚かな男がやって来る。もつとも、それは「男」というには、いささか若すぎたが……

◇イシュタル◇

今現在このウルクを治めているルガルバンダからこのイシュタルに息子が会いたがっていると伝えてきた。ルガルバンダの息子といえば、神々によって作られた御子だったはず。名を確か「ギルガメツシユ」といったか。しかし、いくら世界に望まれた御子とはいえ、まだ齢5つほどではなかったか？まさかとは思うが、その年で女に目覚めたわけではあるまいな！いや、流石にそれはないか……。しかし、天の神々が散々いじくって作った身体なのだから、そういうことがあってもおかしくはないのか？

――まあいざれにしろ適当に済みますか。

神官「イシュタル様。ギルガメツシユ王子が参られました。」

ギルガメツシユ「お初にお目にかかりますイシュタル様。私の名はギルガメツシユといいます。遠くない未来、この地を治めることになる身として、この地にあらせられる女神さまに一目お会いしたく、参

上しました。」にこっ（天使スマイル）

その少年は驚くほど美しかった。サラサラの金色の髪に頬がほんのりと赤く染まった白い肌。好奇心たつぷりの紅く美しい瞳。そして穢れを知らぬ真つ白な笑顔。

もし、仮に、この少年がそのまま順調に育てば、一体どれほど美しい青年になるのだろうか？

もし、仮に、この少年を自分好みの「男」にできたのなら、それはもしかしたら、今まで感じたことのないものをくれるかもしれない。

女神イシユタルは大きな期待に胸を膨らませ、妖艶な笑顔でギルガメツシユを迎え入れた。

ーギルガメツシユの雑な計画通りとも知らずに……

ドラゴン退治は英雄の本懐！ 〈前編〉

◇ギルガメツシュ◇

イシユタル様と神殿で出会ってから3年が経った。

えっ？早過ぎじゃないかって？そうはいつてもここ3年はただ剣の鍛錬に打ち込んだり、イシユタル様とお茶会をしたり、一日一回「王の財宝！」と叫んだり（黄金の波紋は現れなかった）街へ繰り出していずれは俺の民となる者たちと交流をしたり（なぜかイシユタル様もついてきた）

まあ、ここで語るべきことはない。今のところ順調に体力もイシユタル様との親密度も上がってきていると思う。

あとは、神々の機嫌を損ねないようにだけ気を付ければいいだろう。ついでにドラゴン退治もしなければ。

今の俺の発言でお分かりいただけだと思うが俺ははつきり言つて神々を廃する気なんてない。むしろ媚を売つて手っ取り早く英雄になりたいくらいだ。だいたい俺が手を下すまでもなく、神々は滅びるだろう。（他人任せとも言う）

おっ！そろそろイシユタル様とお茶会の時間だな。順調に近所のお姉さんっぽくなってきたし、今日も親密度を稼ぎますか！

◆イシユタル◆

神々が作りし御子「ギルガメツシュ」と出会ってから3年が経った。今のところ順調に私好みの男に育ってきているように思える。

勤勉で頭の回転が速く、素直で真面目。剣の鍛錬を欠かさず、口癖は「将来、自分がこのウルクを守ります！」ときた。

なるほど神々が設計しただけあってまさに完璧な美少年！これはますます将来に期待が持てそう。もしかすると、この私の「夫」になる可能性もあるかもしれないわねえ。

「イシユタル様〜」んっ？この可愛らしい声は、どうやらあの「王子様」がやって来たらしいわね。さて、今日もしっかり私の色に染めるとし

ますか！

◇ギルガメツシユ◇

今日もお茶会は雰囲気よく進んでいる。目に毒な格好と、時折こちらに向けてくる肉食獣のような視線さえなければ……

神官「たつ大変です！イシユタル様」

身体を舐めるように眺めてくる視線に少々うんざりしていたころ、タイミングよく神官が飛び込んできた。

「何事です!？」

お茶会が邪魔されたからなのか、それとも俺を見つめる邪魔をされたからなのか、怒りをあらわに怒鳴るイシユタル様。

「そっそれが、ドラゴンがこの付近に現れました。」

マジか！マジで本物《マジ》のドラゴンがこの近くに!？」

「神殿兵たちに迎撃させなさい!！」

「空を飛んでいるので攻撃が届きません!！」

神官の報告を聞いて思案するイシユタル様。やがて納得したような顔を見ると、神官に問いかけた。

「なるほど、それで私の空を駆ける随獣を狩りに出せというのですね?」

「……はい。」

心苦しそうな顔で頷く神官。

「しかし、いくら私の随獣が強いといっても、天空を舞うドラゴンをおせるのかしら?」

ーイシユタル様の随獣（使い魔的なもの）は確か空を駆けるライオンだったはず。以前のお茶会でどや顔で喋っていたのを覚えている。しかし、空を飛べる以外のことは言ってなかった気がするので、戦闘能力はドラゴンほどではないのだろう。つまりそのライオンに

またがって、ドラゴンを撃墜する「勇者」が必要なわけだ。

「仕方ありませんね。許可を出すので誰か神殿兵を「俺がいきますー！」
「えっ！……」

俺が歴史に名を遺すチャンスと思えば名乗りを上げると、心底驚いたような顔をしてイシユタル様がこちらを見つめてくる。しかし、すぐさま怒ったような顔でこちらに詰め寄ってきた。

「いいえ、ダメです。これは兵士たちの仕事なのです。王子のあなたが割り込むことはありません！それに齢わずか11と少しのあなたに何ができるといいます！おとなしく下がっていなさい！」

ーイシユタル様は俺のことを純粋に心配しているのだろう。

父上からイシユタル様について色々吹き込まれたし、実際に貞操の危機を感じたこともあったけれど、この女神様が決して悪い女神でないことは既にわかってのことだった。ほんの少し……いや、割と多くの部分で人間と価値観がずれているだけなのだ。

だからこうして純粋に心配されて怒られるのは、なんだか近所の美人のお姉さんにお叱りを受けているみたいで、少しばかりこそばゆい。

しかし、これは明らかにチャンスなのだ。ここを逃してしまつたら今以上に警備が強化され、俺にドラゴンがまわってこないかもしれない！

えっ？年取ってからドラゴン退治にいけないって？

いやいや、考えてみてほしい。俺は神々に望まれし御子。つまり神々はこの地上を「俺」に治めてほしいのだ。つまり俺の予想だが、あと5年か10年でも経てば、即位させられる可能性があるのだ。王位についてしまえば、最初に言ったように俺は神々に従って統治しなければならぬ。

話が長くなったが、ともかく俺は「今」ドラゴン退治がしたいの！だからここは絶対に押し通してみせる！

「……イシユタル様。先ほどこれは俺には関係のないことだと

おっしやいましたね？しかし、それは間違いです。人々に危機が迫っているのに自分は神殿の結界のなかで兵士たちが戦っている姿を見つめることが正しい王子の在り方なのでしょうか？「王」ならばそれでいいでしょう。それが正しい在り方です。民を守るために命を下げばいい。しかし！俺はまだ王子です。兵士でも、王でもない中途半端な存在です。だから……俺は誰に命令されるわけでもなく、また誰かに命令するでもなく、自分の心に従いたい！」

◆イシユタル◆

ただ前だけを見据えて語られたまだ幼き王子の言葉に私はしばらくの間何も考えることが出来なかった。頭の中が真っ白になり、呼吸さえも忘れた。背筋を伸ばして立つ小さな王子の堂々とした姿に胸が震えた。

ああ、ギルガメツシユ！貴方こそ私の……………

しかし、すぐに現実に戻り立ち返る。いくら言葉を並べてもまだ10歳の子供なのだ！ドラゴンに勝てるわけがない。

そんな私の心を見抜いたのかギルガメツシユは明確な意志を宿した瞳でこちらを見つめながら口を開いた。

「心配なく。俺も現実を見ずに先ほど自分の思いを語ったわけではありません。俺の身体をながれる血液の2／3は神の血です。そのため俺は昔から身体と力が強く、また、今日まで続けてきた剣においてもなかなかの腕前であると自負しています。それどころか下手な神殿兵よりも強いと思います。イシユタル様どうか！どうか！俺に剣を取らせて下さい。」

確かな根拠をもって自分の力をアピールするギルガメツシユ。しかし、それでも戦場に出すには早過ぎる気が……………

「俺にあなたを守らせて下さい！」

……
気がつけば随獣の手綱を渡していた。

ドラゴン退治は英雄の本懐！ 〈後編〉

◇ギルガメツシュ◇

神殿兵が使う11歳の子供が借りるには大きすぎる剣を楽々持ち上げて、少年兵たちが訓練の際に身に付ける小さな防具を身に纏う。準備が終わって視線を上上げると、いつの間にか目の前に立派なライオンが召喚されていた。

「おお。これがイシュタル様の随獣ですか！凄くたくましいですね！」

初めて見る神獣に思わず声を挙げてしまった。

美しい毛並みにその場を圧倒する存在感。僅かに開いた口から見えた牙は恐ろしいほどに研ぎ澄まされており、思わず寒気がした。堂々と立つその気高い姿からは、イシュタル様の随獣であることを誇りに思っているように見える。

…………… なんか、予想以上にかっこよかったのであの背中にまたがってしまったのか不安になってきた。というか、あれだけ強そうなら、ドラゴンなんて余裕なんじゃ？

まあ、これなら負ける気がしないぜ！

…………… にしても、イシュタル様（の随獣）を褒めたのに珍しく嬉しそうな顔も、どや顔もしないイシュタル様。一体どうしたのだろうか？

「ギルガメツシュ。こちらへいらっしやい。」

そんなことを考えていたら、不安そうな顔のイシュタル様が俺を呼んだ。

不思議に思いながら近づくと、イシユタル様は片膝を立ててしゃがみ、顔を近づけてきた。

ーそして、俺の額に接吻を……………

その瞬間、言葉では説明できない力が俺の身体を覆い身体の内側からも力が溢れてきた。

「…………… 私は戦いを司る女神です。その加護を今、与えました。」

そうか、これが女神様の加護の力。

「ご武運を、ギルガメツシュ王子。」

…………… 女神様のキスまで貰ったんだ。これは負けられないな。

「ギルガメツシュ行きますー！」

ライオンに飛び乗っていよいよ出陣。さあ、英雄伝説への第一歩だ！

ー神殿周辺の上空ー

黒い鱗に獲物を求めて辺りを見渡す黄金色の瞳。風を切る巨大な翼。その姿はまさしく倒しただけで英雄になれるというドラゴンであった。その巨体に立ち向かっていく美しい獣とそれにまたがっている武装した小さな英雄（になりたい少年）。皆さんお久しぶりです。

ナレーターです。

今回立ち向かう敵はビツ〇ではなく、本物のドラゴンである。この時代にドラゴンがいるのか?とかドラゴンというのか?みたいなツツコミはなしでお願いします。

英雄になりたいがために怪物に挑む少年。だが、その戦う理由に女神様のキスとほんの少しだけ、民のためという気持ちが混じってなくもなかった。

◇ギルガメツシユ◇

やばい。やばい?やばい!なにあれ!?ドラゴンでか過ぎじゃね?刃が通らないんだけど!強すぎるんだけ「うわっ!」

……… かすった!今、炎のブレスがかすったよ!?女神様の加護があつたから助かったけど。

さて、刃が通らない以上、俺の武器はこの女神も虜にする美貌しかない。

……… いや?もう一つあるじゃないか!

「発動! 千里眼」

——?????——

私はただ静かに暮らしたいだけだった。仲間も雌もいない生活だったが、森の中なら食べ物には困らなかつたし、時々遠くから「人間」の暮らしを眺めているだけで十分だった。

しかし、ある日、匂い立つような「神性」の持ち主が黒いローブを身に纏って私の目の前に現れて尋ねてきたのだ。曰はく「人間が憎くないのか?」とお前を森にまで追いやった「人間」が………

私は「人間」を憎いと思ったことはなかった。それどころか懸命に生きようと知恵を絞って足掻く彼らを好ましく思っていた。

その旨を伝えると黒いローブの男は一言

「……………残念だ。」とつぶやき、私に手をかざした。

——首にチクリと痛みを感じた途端に強烈な空腹感が私を襲った。食いたい、クイタイ！、お腹減った、オナカヘツタ！「人間」「ニンゲン！」食わせろ！クワセロオー——！！

◇ギルガメツシュ◇

「……………頭痛い。割れそう。だから使いたくなかったんだ！くそっ

直死の魔眼かつての。見たくもないもん見せられるしよ……………」
ライオンの背中で頭を抱えてうずくまるギルガメツシュ王子。しかし、頭を数回振ると、真っ直ぐに眼前の「敵」を見据えて剣を構えた。

「ともあれ、弱点らしきものはわかった。ライオンさん！あのドラゴンの首の上に回り込めますか？」

無言で頷くライオンさん。ハードボイルドだぜ！「うわっ！」

噛みついてくる大顎をすれすれで避けてクルツとターン。なんとか首の上にたどり着くことができた。

勇気を振り絞ってドラゴンの首に飛び乗る！

そこには予想通り、なんか紫色の変な模様があつた。完全に皮膚と一体化している。

「……………解除は無理そうだな。すまない。その命、貰うぞ。」

——あの黒いローブも千里眼の頭痛も今は無視だ！

「うおおおおおおおおお」

雄たけびとともに逆手に持った剣を振り下ろす！

「グギオーーーーーー」

ドラゴンの悲鳴とともに暴れだした体が宙を彷徨いながら、森の方角へと落ちていく。

◆イシユタル◆

加護を与えたものの、やはり心配で私は神殿兵たちに囲まれながら戦いを見に外へと出てきた。

空を見上げると、そこでは想像を絶する戦いが繰り広げられていた。

巨体をくねらせながらギルガメツシュに襲いかかるドラゴン。時折、口から炎を出している。

それに対し、ギルガメツシュは見事に私の随獣を操り、紙一重でドラゴンから逃れながら時折、剣で反撃を加える。鱗と剣がぶつかるたびに、激しい火花が散っている。

ハラハラしながら見守っていると、突然ギルガメツシュがドラゴンの首にまたがり、剣を突き立てた！

森の方角へと互いに落ちていくギルガメツシュとドラゴン。

「ギルガメツシュ！」

気がつけば、森へと駆け出していた。

◇ギルガメツシュ◇

いてててつ。どうやらなんとか生きていたらしい。と思つたら、俺が腰を下ろしているのはドラゴンの腹の上だった。

「……………そうか、空中に投げ出された俺を助けてくれたのか。」

結局、変な模様に一撃入れて森に落ちる途中で俺は空中に投げ出されたのだ。それを助けてくれたという事は……………

ゆつくりとうつ伏せになったドラゴンの瞳を覗き込んでみると、そこには、柔らかな光が宿っていた。しかし、その光ももうじき消えてしまいうだ。

「…………… あんたを刺した俺が言えることじゃないけど、ありがとう。」

心から感謝をし、小さく頭を下げた。

俺のお礼に対しドラゴンもまた、小さく頷いた気がした。

「ーやがて俺の命を救ったドラゴンは、ゆつくりと前へ這って行く。」

どこか帰る場所があるようだ。

…………… なんとなく、見届けるべきだと思った。

しばらくドラゴンに合わせてゆつくりと歩いていけると、目の前の木々が一瞬視界から消えて、開けた場所にたどり着いた。

天に届かんとばかりに高く伸びた木々の間から柔らかな日光の光が降り注いでいる。ここで昼寝をしたら、さぞかし気持ちよかっただろう。辺りにはリスなどの可愛らしい動物もいる。ドラゴンがやって来たのに驚きもせずドングリを口いっぱいにはおぼっている。

ここが住処だったのだろう。ドラゴンはゆつくりと体を丸めて眠りにつき始めた。

…………… ドラゴンの表情など今日初めて見たが、この千里眼など使わなくてもその顔が安らぎに満ちていることはなんとなくわかった。

遠くのほうからイシユタル様の声が聞こえる。とりあえず、王子の特権でこの場所は秘密にすることを堅く誓って、俺は声のする方向へと歩き出した。

勇者は「伝説の剣」を手に入れた！

◇ギルガメツシュ◇

やあ！みんなの英雄《ヒーロー》ギルガメツシュだよ！

前回のドラゴンとの戦いの後、神殿から駆けつけてくれたイシュタル様に抱きしめられたり（役得だった）、父上からこっぴどく怒られたりしたが、何とか無事に帰ってきた。

しかしその後、騒ぎを聞きつけた神々からお呼び出しがあったのだ。

やばい。目をつけられたかも shouldn't。やばい。神殿の裏に呼び出されてボコボコにされるかもしれない。やばい。エルキドウが俺のもとにやって来るかもしれない。（ちよつと会ってみたいけど）

そう、エルキドウがやって来るということは、神々が俺のことを諫めようとしているという意味になってしまうのだ。

まあ、行くしかないか。

ーの会議場ー

そこは「人間」程度では呼吸すらままならない程の神秘で満ち溢れていた場所だった。この世ならざる不確かな雰囲気でありながらも、そこに見える人影からは厳かで、息苦しいほどの気配が読み取れる。

その気配の一人が口を開く

「今回のギルガメツシュの行動、どう思われる？」

それは性別、年齢、そして人間かどうかさえもわからない声だった。

「正義感に駆られての行動でしょう？良いことではないですか。」

どうやら我らがギルガメツシュ王子について話しているようだ。

「しかし、あまり好き勝手に動かれて、勝手に死なれても困る。あれを作るのには苦勞したのだぞ。特にあの魂と身体は替えが効かんだ。」

また別の声が響く。今度は少し傲慢な感じがする。

「我々はトカゲを始末させるためにあの《人形》を作ったのではないぞ

「もうこれ以上余計なことをする前にさっさと王位に就かせればよいのだ！」

機嫌悪そうに別の人影が怒鳴り散らす。

「それどころか、最近ではイシユタル様に色目を使っている始末だぞ！」

人影の一人が嫉妬を感じさせる口調で語る。

「まあ落ち着け、」

会議がギルガメツシユにとって都合の悪い方向に流れ始めた頃、今まで黙ったままだった人影が口を開いた。その瞬間、白熱していた会議場が静まり返った。

「しかし！……では、アヌ神はどのようにお考えなのですか？」
この会議場をたった一言で黙らせた一際存在感を放つこの人影の名を「アヌ」と言うらしい。

「あやつはまだ子供。自分の心の制御もままならんのだ。釘を刺しておけばよいだろう。それでも我らに従わぬようであればその時は……」

沈黙したままの会議場。どうやらこのアヌ神とやらの決定に異論はないらしい。

「それと、あやつがわしの娘に色目を使っていると聞いた者がいたが、いくらイシユタルが美しいと言っても齡一にして女に目覚めるように設定したのか？それこそあり得んだろう。ともかくあやつには、わしから厳しく言っておこう。会議はこれまでだ。」

——人影たちは煙のように消え、後には何も残っていなかった。

◇ギルガメツシユ◇

神殿に呼び出され、俺は今片膝を付いた状態でアヌ様のお説教を聞かされている。ぶっちゃけ長い。長すぎる！ギルガメツシユ陛下が神様嫌いになったのもわかる気がする。

「よいか？ギルガメッシュ。お前は我ら天の神々と地に住む人々の期待を一心に背負って生きていかなければならないのだ云々以下略ーであるからしてー以下略ーだかー以下略ーおいー以下略ー以下」聞いておるのか!？」

「…………… アヌ様はイシユタル様の父上だ。神としての地位も高く、天空の神として君臨なされている。よってこの神様に嫌われるのは、よろしくない。」

「聞いておりますとも。要は、これ以上勝手に暴れるなどおっしゃりたいんでしょう？わかっています。しかし、民を守り導くのが私の務めであると教えて下さったのは、アヌ様ではありませんか！しかし、今度は民のために剣を振るうなどおっしゃる。これでは、矛盾していません！」

嫌われたくないので、以前アヌ様が言っていたことを使って反撃を試みる。

「いやそうなのだが、お前が直接剣をとる必要はないのではないか？」
正論で返してくるアヌ様。だが、甘い！

「私は目の前で危機に晒されようとしている人を見捨てることなどできません！」

必殺！正義に燃える若き少年の叫び（カリスマ発動！）

「…………… 仕方がない。そこまで言うのならば、今まで以上に鍛錬に励み、力を蓄えよ。」

勝利！内心の喜びを顔に出さぬように気をつけながら、深く頭を下げた。

よっしゃ！やっと帰れるぜ！

「待てギルガメッシュ！今回のドラゴン退治の褒美がまだだったな。何か望むものがあれば申してみよ。」

……マジで！これはもしかして、《あれ》を手に入れるチャンスじゃないのか！

「あの～でしたら王の財宝《ゲートオブ・バビロン》をいただけませんか？」

遂に、毎日《ゲートオブ・バビロン！》と叫び続けた努力が報われる時が来たのか！よっしゃ！発音は完璧だ！いつでもこいやー！

「……………なにそれ？」

しかし、告げられたのは残酷な真実。そんなあく期待していた分、落ち込むぜ。思わず手まで床についてしまう。

「……………なんかよくわからんが、他にほしいものがあれば申しあげよう。」

他に欲しいもの？んなもんあるわけねえだろが！いや、あるにはあるけど

「じゃあ、武器を下さい。世界で一番強い武器を。より具体的に言うと、剣みたいな形をしていて……………いや、どちらかと言うと鈍器かな？それでもって発動させると世界を切り裂いちやうくらいの力があるやつです。」

俺が王の財宝よりやばいやつを要求すると、急にアヌ様の顔色が変わり、厳しい目でこちらを睨んできた。

「……………貴様、《あれ》の存在をどこで知った？」

やばい！これ触れちゃいけないやつだった!?

どっとうしよう？

……… 此処はスーパーファンタジーワールドURUKU!ならば、これで行ける！

「そつそれが、以前剣の鍛錬で指南役の男にお叱りを受けまして、そんなもので民を守る王になれるのか！と……… 私はその夜悩み、ただ大きな力を求めながら、眠りにつきました。そして、夢を見ました。剣の夢です。黒い刀身に紅い模様が走っていました。地獄のような世界がその剣のようなもので創られていました。私は思ったのです。この力さえあれば皆を守る。立派な王になれると！」

半分真実で半分嘘である。剣の指南役に怒られたのは本当だが、夢は毎日

《ゲートオブ・バビロン！》叫んでいるうちに、いつの間にか見るようになっていた。ないものねだりというやつだ。

「……… ふむ。《あれ》がお前に答えたということか。ならば……」

あれっ？この流れは？

「よいか、ギルガメッシュ。これから渡すものは我ら神々さえも恐れる原初の地獄の体現だ。本当は我らの手元に置いておきたいが、《あれ》は王にしか答えん。いずれはお前の手に渡る運命だったがお前が欲し、《あれ》が答えているのならば仕方あるまい。心して受け取れ。」

アヌ様が空中に何かを描くと、中から《あれ》がでてきた。

そう、「剣」と呼ぶにはあまりに歪なギルガメッシュの最強宝具。

——乖離剣「エア」が！

「それに名はない。無銘だ。だが、くれぐれも扱いには気をつけるのだぞ。」

俺は震える手で対界宝具「エア」を受け取った。

………
まあ何はともあれこれからよろしくお願いします！

——「エア」が俺に答えて少し唸った気がした。

英雄王子の華麗な日常

◇ギルガメツシュ◇

「ギルガメツシュ王子？ギルガメツシュ王子？ギルガメツシュ王子？！」

「ー声が聞こえる。美しい女の声だ。とても美しいのにこんな朝っぱらから怒鳴っているのも魅力は半減だ。」

「起きてください王子！今日も剣の鍛錬とあのよくわからない鈍器の特訓をなさるのでしよう？」

王子である俺の朝は意外と早い。王子なのだからもう少し寝させてくれないかと思うが、自分から頼んだことなので渋々起きる。

目を開けると目の前には流れるような黒髪に以前ドラゴンと舞った青空の如く澄み渡った青い瞳をもつ20代前半くらいの女性が立っていた。

「…………おはようシエム。それからあれは鈍器じゃなくて、世界を滅ぼす剣だから！……………剣だから！」

大事なことなので2回言った。そんな俺を少し残念なものでも見るように

見つめてくる王子の世話係であるシエム。

「あれでいったい何が切れるのです？（※世界です）ともかく、急いで支度をなさって下さい。ダモスはもう表で待っていますよ。」

急いで表に行くところには剣を2本携えた立派な髭の偉丈夫がいた。

「おはようございませす王子！今日もいい天気ですなー！」

「ーやたらでかい声で挨拶してきたこの男こそ、俺の剣の指南役であるダモスだ。ちなみに昨日の天気は雨で、今日は曇りだ。」

乖離剣を手に入れるためのダシにしたことを謝ろうと思っていたが、やっぱり止めた。

「さてー今日も一緒に美しい剣の音色を奏でましょう！」

気色の悪いことを言いながら片方の剣を俺に投げ渡すダモス。そ

して開始の合図などなしに襲いかかってきた！

「またそれか……」

こちらにも慣れたもので、受け取った剣でそのまま迎え撃つ。

実は、このダモスという男、立派な髭に鋭い眼光、隆起した筋肉に大きな声というパワータイプ of の化身みたいな外見をしながらも、得意なのは不意打ちとか小細工ばかりなのである。

具体的に言うと、戦闘中に砂をかけてきたり、足払いをかけてきたり、俺の尻にばかり突きを放ってきたり……あれ？

ーだがそれでもやはり俺の指南役に選ばれただけあって、真正面からぶつかってもまず勝ち目は無い。

しかし、こちらにも小細工を仕掛けようにも全く隙がなく、少しでもおかしい動きを見せてしまうとすぐさま気づき、持ち前のパワーを生かした剣技でこちらの動きを封じに来るのだ。

実際、俺がこの男に勝てたことはなく、今も剣を受け取ってから結構時間が経つが、現在進行形で追い詰められている最中だ。

「はあっ！」

決めにきたのだろう。ダモスの袈裟斬りが右斜め上からきた。

ー風を切り、唸り声を上げながら豪剣が俺に迫ってくる。最初の内はびびっていたものだが、俺のびびった顔を見てダモスが心底嬉しそうに笑うので意地でもびびらないようになった。だからこの程度の斬撃は大したことはない。問題はこの後に来る一撃だ。

合わせて受け止めるか？……いや足払いをかけられる

躲すか？……いやタツクルがくる

弾き飛ばすか？……力が足りない

ならば……千里眼！ほんの少しだけ眼を使わせてもらう。

――膨大な情報が頭の中に流れてくる。その中から比較的マシな未来を見る！

……ちよつとリスクが高いが、これしかないだろう。

――まず、剣を逆手に持ち替えてから思いっきり地面に突き刺す！この際、一瞬で地面にしゃがむのがポイントだ。

地面に刺さった剣とぶつかるダモスの斬撃。奴は驚いた顔をしている。

よしっ！チャンスだ！しゃがんだことで奴は一瞬だけ俺を見失った筈。

俺は一気にその場からスタートダッシュを切る！

狙うは男の急所！

――そして、俺の渾身の蹴りが奴の股に突き刺さった！

「……なるほど。なかなかいい一撃でした。」

きつ効いてないだど!?

「しかし、相手が悪かったですな。私は不意打ちをする者として常に不意打ちされやすい場所を熟知しています。ならば、そこを鍛えるのは当然のことでしょう？いいですか王子、不意打ちをしていいのは、不意打ちをする覚悟がある者だけなのです！」

……なんだかよく分からない理論を説明されながら、今日も俺はボコボコにされた。

――宝物庫――

煌びやかな宝石、磨き抜かれた剣や槍、豪華な鎧、見たこともないような素材でできたオレンジ色に光る七つの玉。などなどそれらは

一言で言うのであれば、「宝」であった。その「宝」は日本語で「王の財宝（の入り口）」と書かれてある部屋に一纏めにされている

そこへと向かうボロボロだが美しい少年。

少年は一度部屋の扉の前で立ち止まると、辺りを見渡してから大きな声で叫んだ《ゲートオブ・バビロン！》

……しかし、なにも起こらない。ちなみにもう皆さんもうお分かりだと思うが、この少年は我らがギルガメッシュ王子である。

「……はあ。なんで黄金の波紋が現れないのかねえ。せつかくこうして宝物庫まで作らせたのに……」

ギルガメッシュ王子はなにかをぼやきながら宝物庫の奥へと足を進める。

やがて、ある「武器」の前で足を止めると、その「武器」を持って外へと戻っていった。

◇ギルガメッシュ◇

乖離剣を手に入れてからおよそ1年経った。毎日特訓を繰り返しているが、未だに使いこなせていない。

あまりの出来の悪さに、一度アヌ様に取り上げられそうになった。（涙目を使って阻止したが……）

とにかく努力あるのみ！

俺は外に出ると特訓場所に向かって行った。

——「エア」を剣を持つように構え、魔力を流す。3つある円柱のうち、下にある円柱の1つが回転を始め、紅い魔力の風が吹き始めた。これ以上は俺の今の筋力では危険なのでここままで我慢する。

軽く振ってみると、近くに生えていた木々が根こそぎ吹き飛んでいった。

やれやれ、この特訓場所ももうじき駄目になるな。

木々を吹き飛ばしてその威力を確認した後、荒れ狂う風の制御を試みる。

形は巨大な1本の「剣」をイメージしながら風を収束していく。

「……よしっ！」

不格好ではあるものの、何とか形になってきた。

試しに目の前の巨大な岩に向かって振り下ろしてみると、全長およそ5メートルくらいの「風の剣」が岩を粉々に粉砕し、そればかりかその先の障害物すべてを切り裂いてしまった。

「よっしやー！」

これが1年間の成果である。なかなか大したものである。

しかし、ここで止めときやいいのに我らがギルガメツシュ王子は自重という言葉を知らない。

「これなら2本目行けるんじゃない？」

調子こいて2本目の円柱にまで魔力を流してしまった。

その結果は皆さんお分かりだと思うが……

「うわあああああああああ」

その細腕だけでは支えきれない風が噴出し、辺りを破壊し始めた。

「吹き飛ばされるううううううう…… いや待てよ、吹き飛ばされる？」

何とか踏ん張っていたギルガメツシュ王子が何かを思いつく

「そうか！吹き飛ばされればいいんだ！」

ギルガメツシュは突然「エア」を腰だめに構えた。

ーするとギルガメツシュの小さな身体は「エア」の風によって前に進み始めた。

そう、これこそは、セイバーがデイルムツドに使ってみせた「風王結界」を解放して自らの推進力とした戦法を真似したものである。

「ひゃっほー……！」

抑えていた力を解放し、ジェット機のように突き進むギルガメツシュ。

これこそまさに、「エアジェット！」

女神様の未知なる思い

◆イシユタル◆

私は美しい。これは自惚れでも何でもなく、れっきとした事実である。

この世界の男たちは皆私の美しさに見惚れ、自分のものにしようと蠅のように群がってくる。私は性愛を司る女神。こういう男たちが自分から迫ってくる分には困らなかつたし、自尊心も満たされた。

しかし、暫くすると気づくのだ。男たちの浅ましさに……………

彼らは言うまでもなく私の身体が目当てだった。聞こえのいい綺麗な言葉を並べて私にすり寄ってくる。私の話を聞いてくれることなどほんの数回しかなかつた。

「愛」のないその行為に飽きて別れを切り出すと、決まってその男たちは怒りをあらわに私を自分の所有物にしようと襲いかかってくる。私は仕方なく女神の権能を使い、彼らを撃退する。この繰り返しだった。

そんなことを繰り返していれば周りの神々からの評判が悪くなるのは当然のことだった。最近ではお父様のお説教も優しく諭すものから厳しく怒鳴り散らすものへと変わっていった。

——仕方がないことだ。確かに私が悪い。しかし！私の話も聞いて欲しい。そんな思いを抱えながら最近では人間たちの所に行くことが多くなつた。

「人間」はいい。無条件に私を敬ってくれるし、何より常により良いものを求める姿勢とその行動力を好ましく思っていた。

……………いや、はつきり言うとは私は彼ら「人間」に憧れていた。

女神が人間に憧れを抱くなどおかしな話だが、それでも私はいつまでも間違いを繰り返して、変わることのできずにいる自分よりも彼らのほうがよっぽど強く、美しいと感じていた。

——そんな私の前に最近になって小さな「王子様」が現れた。

彼の名は「ギルガメツシュ」。神々によって作られ、運命を決められたかわいそうな御子。

しかし、そんな印象は何度か会って話をするうちに塗り替えられていった。

彼はなんとというか、私のよく知る「人間らしさ」に溢れていた。

神の血が2／3も流れている筈なのに残る1／3の人間の血がそうさせているのか、それとも「彼」が特別なのか……………

ともかく何故か始まったギルガメツシュ王子とのお茶会は予想以上に楽しいものだった。

彼は私の話に真剣に耳を傾け、頷きながら話を返してくる。大人のような顔で考え込むこともあれば、年相応に無邪気によく笑う。安易に私の容姿を褒めることをせず、ふとした瞬間に「しかし、イシユタル様の髪の毛は本当に綺麗ですね！太陽の光を浴びて黄金のように輝いています！」などとよく使われそうな口説き文句でありながら何故か赤くなる顔を抑えられないような言葉を紡ぐ。

また、以前に一度剣の稽古を覗いたときは、髭顔の男に何度も何度も立ち向かっていく姿に限界を知らない「人間らしさ」と、「男」を感じさせられた。

——そんな日々が2年続き、ある日のお茶会の途中でドラゴンの襲撃があった。私の数少ない楽しみを邪魔してくれたドラゴンに思わず苛立ちを隠せない。さらに、ドラゴンは空中から「人間」を狙っており、私の随獣が必要だという。まあ、それで解決できるならば仕方ないと思いつつながら随獣を召喚しようとしていたところ、思いもよらないところから声が上がった。

「俺に行かせて下さい！」

——思考が停止した。なぜ？……………なぜギルガメツシュが？

すぐに停止した頭を動かしてその行動の意味を考える。

まさか……………自分の力を試したいと考えている？

だとしたら、それはとてつもなく愚かなことだ。

確かに彼は強かった。髭の男との戦いではまるで剣が来る場所が分かっているかのように斬撃を避け、反撃を繰り返していたが、それでもドラゴンと戦うには早過ぎる！

しかし、それは私の思い違いだった。彼は言ったのだ。

「自分の心に従いたい！」と。

身体はおろか、その魂すら神々によって作られた彼が自分の心に、民をそして私を守りたいと願う心に従いたいと……………

その姿はまさしく「人間」

——私は気がつけば安易に与えることの許されない戦いの加護をギルガメツシュに与えていた。またお父様に怒られるかもしれないが、知ったことか!!

私の随獣を見事に操り、無事ドラゴンを退治したギルガメツシュを森で見つけた瞬間、思わず安堵のあまり彼を抱きしめてしまった。

今までこうしたスキンシップをとることはなかったため、彼も少し照れているようだ。

彼が少し苦しそうにし始めたので一度身体を離すと、彼は顔を真っ赤にしながらも私にお礼を言ってきた。曰はく「イシユタル様の随獣と加護のおかげでドラゴン退治を果たせました。ありがとうございます。それから、ドラゴンの死体は何故か消えてしまったので探す必要はないかと……………」

思えば、こうして面と向かってお礼を言われたことなど何時ぶりだろうか？暖かい気持ちに胸に広がる。

——それにしてもドラゴンの死体は消えてしまったのか……………残念だ。見事ドラゴン退治を成し遂げた彼にそのドラゴンの鱗と牙でできた鎧を作らせてプレゼントにしようと思っていたのに……………

ドラゴン退治を成し遂げたというのに、あまり嬉しそうな顔をせず、何かを考え込んでいる彼を気にしながらも私たちは帰路に着いた。

私は美しい。これは自惚れでも何でもなく、れっきとした事実である。

そして……………「変わることを恐れている」。

しかし、小さいながらも強くなろうとあがいている「王子様」を見て思うようになった。

この子の歩む道を見つめ、たどることができたのならば、「私」も今よりも多少はましな自分に「変われる」のではないのかと。

……………なぜか吹き飛ばされながら岩にぶつかって気絶してい

る「王子様」の頭を膝に乗せ、サラサラの金髪を撫でながら、これから先の未来に思いを馳せた。

勇者は……………

◇ギルガメツシュ◇

なんか、ものすごく柔らかくてスベスベしたものが俺の頭の下にある。こんな感触はこれまで味わったことがない。しかもなんか落ちて着く。

しかし、名残惜しいがそろそろ目覚めなければならぬだろう。確か「エア」の特訓の途中だった気がするので……………ん？……………あつ！あの俺がぶつかりそうになった人影はどうなったんだ？

急いで目を開き、頭を持ち上げると、あの柔らかい物体の正体が分かった。

ーイシユタル様の膝枕……………

マジか！なんてこった！目を覚まさなきゃよかった！というか、これ歴史的快挙だろ！俺の「真・ギルガメツシュ叙事詩」に記載されるべきだろう！

あたふたと慌てる俺をイシユタル様は優しい目で見てくる。……………思えば、ここ数年で随分とイシユタル様も丸くなったもんだ。

最初のうちはどこか冷たいというか、冷めた目で俺のことを見ていたが、最近ではもう本当に近所のお姉さんって感じだ。

ーそういえばなんでイシユタル様がここに？

俺とイシユタル様のお茶会は基本的に午後からだ。

午前中はダモスの変態剣技指導に「エア」の特訓をしている。その後お昼ご飯を食べて父上もしくはは家庭教師による帝王学の勉強会を終えてからおやつ時間位にイシユタル様がやって来てお茶会が始まる。なのでここにイシユタル様がいる訳が分からない。

そんな俺の心境を読み取ったのかイシユタル様が隣に置いてあつ

た籠を持ち上げて口を開いた。

「実は、とある男神から果物の贈り物がありました、一人では食べきれなかったのです、ここ最近周囲を破壊しながら特訓を繰り返しているギルガメツシユ王子の見物がたら、差し入れとして持ってきました。」

「…………… ああ、なるほど。つまりもう少し自重しろとおっしゃりたいんですね。」

「自重するかどうかは置いておいて、丁度お腹が空いていたので朝飯代わりに頂くとする。」

「…………… というか、イシュタル様に届けられたプレゼントを俺が食べてしまつていいのだろうか？」

「…………… まあ、いつか！」

「深く考えるのを止めて黄金のように輝くリングに口を開け……………」

「イシュタル様！俺が手に握っていた剣はどこです！」

「リングを持つ手を眺めると「エア」がないことに気が付き、慌ててイシュタル様に詰め寄る。」

「剣？あの妙な鈍器ならその木に立てかけてありますが…………… 後ろを振り向くと確かに「エア」があった。」

「よかつた〜！」
「リングを籠に戻して「エア」を手に取る。」

「…………… ギルガメツシユ、それはいったいなんですか？禍々しい気配を感じるのですが……………」

俺の手に持つ「エア」を見て警戒した態度を見せるイシュタル様。流石は「エア」そこに在るだけで女神様を警戒させるとは……………」

俺は自慢気に「エア」を手に入れた経緯とその力を説明する。すると、

「なるほど。世界を切り裂く鈍ゲフンゲフン、剣ですか……………」

しかし、そんな危ないものを持ち歩くのは関心しませんね。まあ、鞆がない以上仕方ないのでしょうが……………」

俺にとつてはもはや相棒であり、主戦力なので持ち歩くことに抵抗はないのだが、確かに危ない気がする。

「せめて、物を出し入れする空間でもあればよいのですが……………」

本当に「王の財宝」が欲しい。いや、ホント、マジで。

「空間ですか……………」 私に権限はありませんが、お父様なら余った空間の1つや2つ持っているかもしれないですね。」

…………… え？

◆イシユタル◆

お父様に余った空間の譲渡をお願いすると、あっさり通った。

空間を欲しがっていた筈のギルガメツシュは何故か神殿の床に膝をつき、

「…………… 伝え方が悪かったのか？」

なにやらブツブツ言いながら項垂れている。さらに、

「空間が欲しかったのか？それならば太陽神のやつが黄金の立派なやつを持っておつたが、わしの余りでよいのか？」

神殿の床に頭をぶつけ始めたギルガメツシュ王子。兎に角、怪我をしたらいけないので押さえておく。

「…………… もう、それでいいです。」

疲れ切った顔でつぶやくギルガメツシュ。

.....喜んでくれると思ってお父様に頼んだのにこの落ち込みよう。何があったのか知らないが.....面白くない。

「ふう、灯台下暗しってやつか。仕方ない俺が間抜けだったただけか。

イシユタル様！ありがとうございます！」

小声で何かを呟いた後、いつも通りの彼に戻って元気一杯にお礼を言ってくるギルガメッシュ.....それだけで許してしまいたくなるのだから、随分と単純になった自分が嫌になる。

だが.....これもまた、心の奥底で願っている「変わる」ことなのかもしれない。

——??????

ギルガメッシュとイシユタルが立ち去った後、その場に黒いローブを纏った人影が音もなく現れた。

置いてけぼりにされた籠をチラリと一瞥すると、中のリンゴを一つ手に取り、弄びながら誰に聞かせるでもなく静かに語り始めた。

「結局、あの王子はリンゴを食べなかったか。しかし、まだ手は残っている.....次は『森の番人』でも使ってみるか。しかし、準備に時間が掛かるな.....まあいいさ、時間はたっぷりある。せいぜい苦しめよ王子様？そして.....覚悟するがいい「人間」次こそは、滅ぼしてくれる！」

形容し難い声を上げながら人影は音もなく消えた。

――後に残ったのは一つだけリンゴの減った果物籠だけだった。

我らが「王」

◇ギルガメツシュ◇

うっかりで見落としていた「王の財宝」も拾いあげて1年が経った。つまり俺は今14歳だ。

今日は大事な日である。大きく息を吸って……

「我が名はギルガメツシュ。今日からお前たちの『王』になる男だ！これから先どのような困難が待ち受けていようと、お前たちを守り導いていくことを……この『剣』に誓おう！」
エアを天に向かって突き上げる！

「…………… それ、止めたほうがいいと思いますよ？」

微妙な顔をしながら戯言をほざく我が侍女シエム。

「なんで!?!かっこいいじゃん！」

個人的にはこれ以上ない程の出来前だった。

「演説自体は良かったのですが…………… それ、『剣』じゃなくて『鈍器』ですよ？」

…………… やれやれ、どうやらシエムは働き過ぎで疲れているらしい。

「なにを言ってるんだシエム?どっからどう見たって『剣』じゃないか！見てごらんこの切れ味良さそうな刀身を！」

うむ、今日も「エア」は美しい！

「それが『剣』に見えるのは王子だけです!…………… もしかして王子緊張なさってます？」

またまたおかしなことを抜かす我が侍女

「べ、ベベベ別にき、きききき緊張なんかしてねえし！」

…………… ちょっと噛んだだけだし！

「…………… やれやれ、王子。こちらへ。鈍器はそちらに置いて下さいー！」

呆れるような顔をしつつも笑みを浮かべながら俺を呼ぶシエム。

俺が素直に『剣』を置いて近づいて行くと、シエムは俺を包み込むように抱きしめた。

「私は……いえ、『私たち』は皆王子が立派な王になるために努力を積み重ねてきたことを知っています。朝早くから剣の稽古に励み、怪我だらけで帰って来たあなたをどれだけ心配したことか……さらに、午後からはルガルバンダ様たちから帝王学について学び、この国の未来を熱く語っては疲労困憊になっていましたね？……あの女神のお茶会は未だに承諾しかねますが……ともかく、すべてが貴方によって続けられてきたことです。自信を持って下さい王子。貴方は間違いなく私たちに必要な王です。」

……この世界に生まれて14年。確かに俺のことをずっと見ていてくれたのはシエムだった。

いや、シエムだけではない。父上もイシュタル様も民たちも……ダモスも……みんなで日常を過ごしてきた。

もうすぐ日常は終わる。俺は「王」になる。少しだけ寂しいが、みんながいてくれるのならば、勇気を出して一歩踏み出すことにする。

「ありがとうシエム。これからもよろしく。」

無意識のうちに震えていたらしい手はもう正常に動く。

「はい。いってらっしゃいませ。ギルガメツシュ王子。」

人生最後の『王子』を聞きながら俺は一步を踏み出した。

――王宮前の広場――

ウルクに住むすべての人々が集まっている。大抵の場合、多くの人が集まれば会話の1つや2つ自然と起こりそうなものだがこの広場は不思議な緊張感に満ちており、誰一人として口を開かない。

今日は王位継承式。彼らの新たな「王」が誕生する日だ。

やがて彼らの視線が一斉に上を向く。そこには王宮の奥から姿を現した、

現国王ルガルバンダがいた。彼は民たちを一通り見渡すとよく通

る声で語り始めた。

「皆の者、よくぞ集まってくれた。この度、天に君臨する神々より神命が下った。曰はく『ギルガメツシュを新たな王にせよ』と。」

ここで一旦言葉を切り、ルガルバンダはもう一度自分が治めてきた民たちを見つめ、再び語り出した。

「よって、これより先は我が息子ギルガメツシュがお前たちを治める『王』となる。……これまでよく私についてきてくれた。感謝する。」

――黙って聞いていた民たちの中から拍手の音が聞こえ始めた。

最初は小さかったその音はやがて全体に広がり、ルガルバンダを労わるように鳴り続けた。

こうして一人の王がその役目を終えて、新たな王が生まれる。

――拍手が止んだ頃、ルガルバンダが横に逸れ、王宮の奥から少年が姿を現した。

少年はルガルバンダが立っていた場所に立ち、美しい声で語り始めた。

「我が名はギルガメツシュ。偉大なる王ルガルバンダの息子だ。俺はこの世に生まれ出でた瞬間から『王』になることが決められていた。」

あらかじめ決めていた内容と違うことを話し出すギルガメツシュに驚きを隠せないルガルバンダが思わず息子の顔を見つめてしまう。

しかし、息子の堂々とした立ち姿を見てそのまま息子に任せることにしたようだ。

「だが、俺はそのことを運命だからといって安易に受け入れることも、仕方がないことだと割り切って考えることを放棄したことは一度もない！」

静かに始まったギルガメツシュの語りに熱が入り始めた。

「今日まで『王』とはなにか？どうすればこの国を守ることができるのか？ずっと考え続けてきた！」

真剣に耳を傾ける民たち

「答えは全く出てない！」

誰かがずっこけた気がした。

「だからこそ、この答えは皆で探すものなのだろう。」

人によって求める『王』は異なる。しかし、俺の身体は一つだ。よつて一人一人の『王』になることはできない。だから、俺はお前たち全員にとっての理想の『王』の姿を生涯考え続け、『王』としての役目を果たそう。

この国には大きな危機が迫ったことはない。だから守り方など分らない。だから、皆で意見を出し合って危機に備えよう。」

少年はここで一旦言葉を切り、自分の民となる者たちを見つめ、宣言した。

「我が名は『ギルガメッシュ王』お前たちを守り導くものだ。」

——拍手の音が鳴り響く。先代の王を労わった音にも負けずとも劣らない大きな音が………

王は辛いよ

◇ギルガメツシュ◇

俺が王になって2年が過ぎた。王になってからの日々はそれはもう忙しく、2年経った今でも多忙な毎日を送っている。

「ギルガメツシュ王！『学校』の方から練習用の剣を増やしてほしいとの知らせがありました。」

「分かった。武器職人たちに在庫があるかどうか聞いておけ。ああ、シエム！『城壁』のほうはどうなっている？」

忙しそうに俺のもとまで走って報告にきたシエムは現在俺の侍女ではなく、秘書のようなことをしてもらっている。

「今のところ順調に進んでいるようです。しかし、いささか疲れたような空気が流れていたのが王が赴いて士気を高められたほうがよろしいかと。」

「分かった。これから向かうとしよう。ついでに学校にも足を運んでみよう。」

「お待ち下さい王！もう一つ案件がありました。」

なんてこった。まだまだ仕事があるってのに。今日も忙しくなりそうだ。

「すべての仕事を終えた後で構いません…………… お休みになって下さい。ここしばらく十分な睡眠が取れていないのしょう？」

「…………… 分かった。すべて片付けた後、早急にその案件に取り掛かろう…………… ありがとうシエム。」

深く頭を下げたシエムに背を向けて俺は外へ視察に出かけた。

——剣と剣のぶつかり合う音と幼い子供たちの掛け声が聞こえてくる。

ここは俺が提案し、作らせた「学校」だ。

生徒の数はおよそ40人。生徒全員俺が千里眼でその高い潜在能

力を見抜いた者たちだ。

クラスは剣技指導、政治指導の2つに分けられており、そのクラス編成も千里眼で分けた。

今のところは上手く成り立っているが、人口が増えるもしくは千里眼を持つ俺がいなくなれば崩れてしまう危ういシステムなのでいずれは何とかしなければならぬだろう。

今日は要請のあった剣技指導クラスに行くことにする。……あまり気は進まないが。

「甘いわ！貴様らそれでも漢か！ギルガメツシュ王の幼い頃はそれはもう可愛らしい顔で怖がゲフンゲフン勇ましく立ち向かって来たのだぞ！」

……… 大声で俺の黒歴史を叫んでいるこの暑苦しい男は皆さんご存じ俺の指南役だったダモスである。そしてダモスの足元には幼い子供がボロボロの状態で倒れている。あの子は確か剣の才能が高いバルスだったかな？

「む？この甘く爽やかな体臭は……… おお！ギルガメツシュ王！よくぞ来られましたな！」

50メートル以上離れているのに俺に気づいて振り向くダモス。

つとその瞬間倒れていたバルスが練習用の剣をダモスの尻に突き刺した！

沈黙する学校の訓練場。やがてダモスが尻に剣を刺した状態で男の子の方に振り返り、静かに語り始めた。

「なかなかいい一撃だったぞバルス。だが私は尻を狙う者として常に尻を鍛えているのだ。よいかバルス、尻を貫いていいのは、尻を貫かれる覚悟のある者だけだ！」

……… 相変わらず訳の分からない、いや訳は分かるけど分かりたくないことをペラペラと話すダモス。

しかし、この変態をこの剣技指導クラスの顧問にしたのは自分なので仕方なくダモスに話しかける。さっさと要件を済ませて次に行こ

う。

「――俺は尻に剣の刺さったままのダモスと要点だけを話し合い、城壁へと逃げるように向かつていった。」

「――体格のいい男たちが威勢のいい掛け声を掛け合いながら巨大な城壁を築いている。しかし、その勢いも工事が始まった頃に比べるとだいぶ弱まった気がする。確かにこれはシエムの言うように発破をかけたほうがいいかもしれない。」

「みんなー聞いてくれー！」

大声で呼び掛けてきた王の登場に皆が手を止めて声のした方向に体と意識を向ける。

「一番最初に話した通りこの城壁を築く目的は最近増えている森の方角からやって来る魔物たちからこの国をつまりはお前たちの命を守るためだ。」

そう、近年になって森の方から何かに追い立てられるように魔物たちがこの国にやって来るようになった。追い詰められたように怯えながら必死の形相で人間に襲いかかるのだ。(まあこのファンタジーワールドでは人間が対応できないような魔物が襲いかかってくることはよくあった。)

たまに俺が戦ったよりも小さなドラゴンが、さらに人食い狼や凶暴な熊など普通の人間では太刀打ちできないような魔物が頻繁に出現するようになった。

それでも訓練された兵士ならばなんとか倒せるレベルなので今のところ大丈夫なのだが怪我を負う兵士たちが増えてきており、戦力は減る一方だ。

学校を設立した訳にはこの件も関わっている。

さらにごく稀に兵士では対応できない。つまり俺でなければ撃退できないような怪物もやって来る。これについてはアヌ様に頼み込んで許可を貰って俺が出陣している。

ともかく、これ以上の戦力減少を防ぐためにも城壁が必要なのだ。「この国の兵士たちが魔物からこの国を守るために傷を負っている。子供がこの国を守らんと剣の稽古に、勉強に励んでいる。」

しかし、魔物だけでは済まない予感がある。

魔物たちの背後に恐ろしい何かが潜んでいる気がする。

具体的に言うとなあ『黒いローブの人影』が……………

「皆がこの国のために自分にできる精一杯の努力をしている。そして、この城壁はお前たちにしか作れないものだ。よって苦しいだろうが改めて王命を下す。この国を守る為に皆で一丸となって城壁を完成させよ！」

今は備えるしかない。耐えるしかない。苦しくとも皆で一緒に、一生懸命に。

「はいっ！」「応！」「お任せを！」「然り！」

皆の士気が高まったのを確認してから俺は残りの仕事を片付けるために背を向けて歩き出した。

王様は勇者

◇ギルガメツシュ◇

さらに2年の時が過ぎ、俺は今18歳だ。城壁も何とか完成の目途が立って来た。後は城壁全体に神々の加護をかけてもらえば魔物たちも簡単には近寄れないだろう。

――神々で思い出した。今日はイシュタル様来る日だったな。

王になる以前は3日に1回とか、長くても1週間に1回位のペースだったけど、今では1か月に1回位である。

――イシュタル様は以前と同じ頻度で会いに来ようとしていたが、シエムに反対され正論を叩きつけられて涙目で帰っていき、今のペースになった。

(涙目のイシュタル様超かわいかった)

というか、女神様を涙目にして追いつ返すシエムっていったい……………

◆イシュタル◆

今日は久しぶりのギルガメツシュ王とのお茶会だ。

彼が王になってからは以前のように気が向いた時に会うことは出来なくなってしまった。

これもすべてあのシエムとかいう女のせいだ！

確かに王としての仕事忙しいのは分かっている。しかし、ギルガメツシュの疲れ切った顔を見るに息抜きぐらいは必要なのではないかと思う。

まあ、最初の頃に比べるとだいぶ睡眠はとっているようだ。

あのシエムとかいう女のおかげだろう。悔しいが認めよう。

それに会う頻度が減ったことで分かるようになったこともある。

彼の成長だ。

背は大人の男のようにスラッと高くなり、筋肉も目立つようになり始めた。声も低くなり、あの可愛らしい声が聴けなくなったのは寂しいが、今の声も悪くない。というか、色気があってとてもいい！

顔立ちも端正になり、最近では忙しいためか常に厳しい目をしているため、切れ長の瞳が鋭く鋭利な印象を与えている。

……最近ではこちらがドキッとさせられることのほうが多い。

しかし、会話の内容には色気は全くない。

やれ、城壁がどうの やれ、学校の剣技指導クラスにいくと尻に悪寒が走るだの……

しかし、相変わらず私の話に耳を傾けてくれる。そして、こちらのつまらない話をよく吟味し、笑い話に変えてくれる。私がそれに笑わされ、彼もつられて笑い出す。

——この時間がいつまでも続けばいいと思っていた。

「ギルガメツシユ王。アヌ様がお呼びになっています。」

——神官からの知らせを聞き、私は何故か私の「日常」が終わってしまうような気がした。

◇ギルガメツシユ◇

女神様との優雅なお茶会の最中に上司（アヌ様）からお呼び出しがかかった件について……

ふざけるな！と八つ当たりでエアで神殿の掃除をしてやろうかと思っただが、自重した。

……というか、俺は随分とイシユタル様とお茶会の時間を楽しみにしていたらしい。

そんなことを考えたらいつの間にか神々が地上に姿を顕す時に使う神殿に着いた。

そこには既に姿を顕したアヌ様が難しい顔をして待っていた。

「……よくぞ来たギルガメツシユ。今回お前を呼び出したのは

重要なことを伝え、その上でお前の判断を聞くためだ。下手をすればウルクが滅びかねん程に重要なことをな……………」

あのアヌ様がこんな悩んでいるとは、よっほどのことだろう。

「実は……………森の神『フンババ』がこのウルクに迫っている。」

……………はっ？フンババってあの森の超強い神様のフンババ？

嘘っだ〜

「本当じゃ。」

……………声に出していたらしい。というか、なんで!?あの神様は確かにそこに在るだけで人に害をもたらず傍迷惑な神様だが自分から動くというタイプではなかったはず。

「原因はわしにも分からんが、間違いない奴は此処へ進行してきている。このままではウルクは滅びる」

そんな……………いや、だがアヌ様なら撃退できるはず!

そんな俺の心境を読み取ったのかアヌ様は申し訳なきような顔で語り始めた。

「実は、今神々は2つに分裂しているのだ。1つはわしが率いている『穏健派』じゃ。その思想は《人間との共存》。人なくして神はなく、神なくして人はない。そんな考えを持つ神々の集いじゃ……………だからこそ、わしらはお前を作ったのだ。」

アヌ様はここで一旦言葉を切ると俺の顔を見てきた。なんとなく分かっていったことなので頷いて先を促す。

「もう1つは『急進派』じゃ。その思想は……………《人間の根絶》。さらにはその果てに神々だけの国を作ろうと企てている神主義者の愚かな連中じゃ。」

アヌ様は吐き捨てるように言った。

なるほど、そんな神々もいるのか……………

「今現在、おそらくは何者かが手回ししたのだろう。この2つの組織の亀裂がかつてないほどに大きなものになりつつある。よつてもしこの緊迫した状況下でわしが神退治などに出かけたら、最悪神々の間で戦争が起こりかねん。」

……………それなんてラグナロク？

マジか！まさかそんなに危ない状況とは知らなかった。

つまり、俺が此処に呼び出されたのは……………

「ギルガメッシュよ。無理を言っているのは承知だが、どうかわしの代わりにフンババを退治してくれんだろうか？ 勿論今ならわしらのバックアップ付きじゃぞ！」

「……………少し考えさせて下さい」

俺は逃げるように神殿から出ていった。

ー分かっている。選択の余地がないことは。このままだとウルクは滅びる。

アヌ様は優しい。本当だったら俺に確認など取らずに命令して送り出しても何の不思議もない状況だ。

そう、俺が行くしかない。

しかし、相手は「神」だ。ドラゴンとは比べものにならない。

いくらアヌ様たちが支えてくれるといっても、俺では勝てないかもしれない。

……………死ぬかもしれない。

これまで明確な「死」を経験したことがあっただろうか？

ドラゴン退治のときですら「死」を感じてはいなかった。

だが、今は感じているのだ。無意識に発動した千里眼か、それとも直感か、ドラゴン退治の時よりも鮮明に「死」を。

.....
冗談じゃねえぞ。戦う前からこの様とか、絶対に無理だろ。

「ギルガメツシユ？」

ふと気がつけば目の前には心配そうな顔をしたイシユタル様이었다。

どうやら気づかないうちにお茶会の場所に戻ってきたようだ

「どうしたのです？ 悩み事ですか？ 私でよければ相談に乗ってあげてもいいですが.....」

若干の上から目線で相談に乗ると言ってきたイシユタル様。普段だったらともかく、流石にこれは相談できないだろう。

「いえ、大丈夫です。申し訳ないのですが、今日ほこれでお開きで構いませんか？」

「.....いいえ、ダメです。」

何故か反対されてしまった。

さらにイシユタル様は昔シエムがよくやってくれたように俺を抱きしめてきた。

「何を悩んでいるのかはわかりませんが、今の貴方の顔色を見て黙って帰すことはできません。誰にも言えないような悩みならば私に相談して下さい。私は『女神』です。『人』に相談できないような悩みでも私なら大丈夫かもしれませんよ？」

.....
なんだかよく分からない説得力に負けて俺は全て話していた。

ー後にして思えば、俺は誰かに相談したかったのかもしれない。スケールのか過ぎるこの話を受け止めてくれる誰かに.....

「.....なるほど、神々の対立に迫りくる森の神ですか。

確かに一人で抱えるには大きな問題ですね。」

予想以上に落ち着いた様子で話を聞き終えたイシユタル様は深く考え込むように頭を捻った。しかし、ふと頭を上げると俺に問うてきた。

「しかし、幼い頃の貴方なら真つ先に突っ込んでいったでしょうに、これが成長でしょうか？」

イシユタル様はなにか勘違いしているようだ。

「あのドラゴンの時は勝算があつたから突っ込んでいけたのです。」

そうドラゴン程度、千里眼があれば何とかなると思つて突っ込んで行つたのだ。……結構危なかつたが。

「勝算ですか……では、今回は勝算がないから無茶をしようとしませんか？」

何を聞いているのだろうか？勝算がなければ挑まないのは当然のことだろうか？

そんな俺に向かってイシユタル様は何かを思い出すように目を瞑りながら語り始めた。

「昔、ドラゴンに勝つた貴方は勝てたのは私の加護と随獣のおかげだと言いましたね。その時私は思つたのです。ではもし私が加護を与えなければ貴方は勝ち目が無いとして諦めていたのかと？恐らく貴方はそれでも立ち向かつたでしょう。」

いや、あの時は本当に舐めてたいたというか、加護なしでも勝てると思つていたというか、そもそも加護もらえると思つてなかつたというか……

「その顔は加護をもらえらると思つていなかったという顔ですね？」

では、何故私が加護を与えたと思ひますか？」

えっ？それは、勝つ確率を上げるためじゃ？

「それは、貴方に勝ち目が無いと思つたからです。普通に考えて下さい。11歳の男の子が自分の何十倍もの巨体を持つドラゴンに挑んで行く。ねっ？どう考えても勝ち目ないでしょ？」

……確かに。今思えば、何してたんだ俺？

「正直な話、私の加護さえあればあの場にいた神殿兵たちは誰でもあ

のドラゴンを退治できました。」

「……………マジで！恥ずかし！今までどや顔で街歩いてた！」

「落ち込まないで下さい。私が感動したのは貴方の『勇気』です。普通に考えたら大人に任せると自分が倒すのだと突っ込んでいきましたね？そんなあの頃の貴方に感激したのです。」

「……………あの頃か。つまり今はもう」

「しかし、今は貴方が成長してくれて良かったです。流石にあの頃のように突っ込んでいては死んでしまうから。」

予想外の言葉に驚く。てっきり失望されたと思っていた。

「貴方は『恐れ』を覚えました。それは良いことです。しかし、私からすれば11歳の子供がドラゴンに挑むのと、18歳の少年が神に挑むのとはどちらもただ勝算がない戦いにしか思えません」

「……………確かに、なんか字面的には一緒な気がしてきた。」

「なにも私は貴方に神と戦えと言いたいわけではありません。寧ろ逃げてほしいくらいです。だいたい神々の事情で人間に迷惑を掛けるわけにはいきません。いざとなれば、私も説得に加わりましょう。」

俺に逃げてほしいというイシユタル様。正直意外だった。

「ただどちらを選ぶにせよ、後悔だけはしないで下さい。今の貴方がどちらを選択するにせよ私は貴方の味方であり続けましょう。」

「……………何故俺にここまでしてくれるんです？」

俺が尋ねると、イシユタル様は顔を真っ赤にさせてうつむいた後、何かを決心した瞳で俺を見つめて語りだした。

「実は、つい最近になって気づいたのですが、私はあのドラゴンに挑むと言った貴方の迷いも後悔もない瞳に魅入られたのです。最初は小さかった胸の高鳴りが今では貴方に会うだけで抑えきれないほどで、貴方との会話は楽しく最近では私の唯一の楽しみです。勇ましく剣を振るう姿も、王として君臨する姿も、全てが私の目には新鮮に魅力的に映りました。つまり……………私は貴方のことが好きなのです。」

「……………私に逃げられる方を選ぶことであの瞳をもう一度見」

れるのならば、貴方がいつものように私とお話をしてくれるのなら、私はそれで構いません。」

………女神様の情熱的な告白は取り敢えず置いて想像してみる。どっちが後悔しないかを。

―――満身創痍で神に挑む俺

―――民たちに背を向け王の責任も放棄してアヌ様にすべてを任せる俺

………なんだ、想像して見れば簡単にわかることじゃないか。

「イシユタル様。すいません。ちよつと神殺しに行ってくるので返事は帰って来てからでいいですか？」

イシユタル様はちよつとだけ不貞腐れた顔をした後、笑顔で頷いた。

その顔はなんだか俺が選択する方をわかっていたようだった。

勇者は黄金の鎧を手に入れた！

◇ギルガメッシュ◇

俺が神殿に戻り神と戦う決意をしたことを伝えると、アヌ様は一言札を言った後、明日の朝もう一度この神殿にやって来いと言った。

王宮に戻った俺は戦いに備えて準備を始めた。

「ギルガメッシュ王、何をしておられるのです？」

近くを通りかかったシエムが武器の手入れをしている俺を見て尋ねて来た。

「ああ、実は神退治をすることになったから武器の手入れと本数を確認しようと思つてさ。」

「なるほど、神退治ですか……………はっ？」

「俺が留守の間も今まで通りに城壁の建設は続けさせてね。」

「……………」

「どうしたのシエム？」

「……………なんで、貴方が神退治を？」

シエムが押し殺したような声で訳を尋ねてきた。

とりあえず、事情を説明する。

「……………なんで？なんで？なんで？なんで？貴方が？」

しかし、いきさつを話したにも関わらずうわごとのように繰り返すシエム。何やら様子がおかしい。

「貴方は！この国に、私たちに必要なお方です！駄目です！絶対に……………神に挑むなど……………駄目です。」

急に怒鳴ったかと思えば、次第に泣き始めたシエム。

……………彼女が泣いているところなど初めて見た。

しかし、どうやら彼女は勘違いをしているようだ。

「おい、なんで俺が死ぬこと前提で話しているんだ？神は神でもアヌ様みたいなどんでもない神様じゃないから大丈夫だ。」

説得力を持たせるためにいつもより強い口調で言ってみる。

「いいえ無理です！貴方は死にます！考え直して下さい！だいたい、神々の争いなど私たちには関係ないじゃありませんか！アヌ様に全

てお任せしたらいいじゃないですか！……………もうこのことは忘れて明日からまた一緒にこの国のために働きましようっ！」

感情に任せて叫んでいたシエムは最後に弱弱しい声で俺に見て見ぬふりをしろと頼んできた。

「……………それはできない。考えてみる、神々の間で戦争が起こって人間が巻き込まれないと思うか？それに、アヌ様たちが勝利するという保証がどこにある？俺が行くしかないんだ。分かってくれシエム。」

おそらく、俺が言うまでもなくシエムは分かっているだろう。それでも感情が納得できていないのだろう。そして、それは俺がそれだけ大事に思われているということだ。

「俺にお前を、お前たちを守らせてくれ」

「……………生きて帰って来て下さい。絶対にですよ？帰って来なかったら王が幼かった頃の恥ずかしい記録を石板に載せて後世まで残しますから。」

それは勘弁してほしい。勘弁してほしいので、改めて勝利を誓う。
「任せる、必ずや勝利をこの『剣』……………エアに誓おう！」
ちよつと締まらなかったがシエムは少しだけ笑って頷いてくれた。

——次の日の朝になり、俺はシエムの「いつてらっしやいませ」に見送られて神殿に向かった。

「ギルガメツシュ参りました。」

神殿にはアヌ様ともう一人、体の所々に黄金の装飾品を身につけた神がいた……………正直趣味が悪そうだ。

だが、アヌ様に勝るとも劣らない神格に、そこに在るだけで周りの物を灰にせんとばかりに感じる熱量。おそらくは太陽神シユマシユ様だろう。

「うむ、よく来たなギルガメツシュ。早速だがお前に加護を与えましょう。」

アヌ様は俺のところまで来るとその手を俺の頭に乗せた。

その瞬間、身体の奥底から力が沸き上がり、波打つ魔力が身体のあるところを駆け巡るのを感じた。

「さて、わしの加護はそれじゃ。ただの身体強化ではないぞ。身体が羽のように軽くなったのを感じるじやろう？他にもお前がその身体を上手く扱えるように動体視力、聴覚、嗅覚、そしてさらに舌まで敏感にしておいた。感謝するのだぞ？」

…………… それ、ただの身体強化じゃ？

「ついでに、これをやろう。風を呼ぶ剣じゃ。」

渡されたのは黄金の双剣だった。

…………… 千里眼で見た感じ、エアの風のほうが強いな……

「さて、わしからは以上じゃ。次はシユマシユからじゃな。」

アヌ様が退くと、後ろからあの趣味の悪そうゲフンゲフン、シユマシユ様が俺の前までやって来た。

「…………… フン、なかなかの面構えだな。まあ、確かにこいつになら俺様の加護を与えてやらんこともないかもしれんな。」

…………… キャラ濃い神様来たー！

まあ、加護とやらが気になるのでここは叫びたいのを我慢する。

…………… ぶっちゃけアヌ様のだけでは心もとないので。

「お任せ下さいシユマシユ様。フンババめは必ずやこのギルガメツシユが退治してご覧に入れますよう。」

「…………… フン、いいだろう。貴様には特別にこれをやろう」

シユマシユ様が指を鳴らした瞬間、何かが俺の身体を包み込み、それと同時に少しずっしりとした重さを感じた。

これがシユマシユ様の加護か…………… しかし、身体が重くなるのはいかなものだろうか。アヌ様の加護のおかげでどうってことはないのだが。

「フン、なかなか似合っているではないか。その『鎧』」

…………… 現実逃避するのはやめよう。俺は今、原作のギルガ

メツシユが着込んでいた全身黄金の鎧を身に纏っていた。

「流石に神退治に出掛けるのだから、それに相応しい戦装束をと思つて特別に用意してやったのだ。その鎧ならば、フンババの放つ石化の呪いからも逃れられるだろう。」

なるほど、フンババ対策の鎧ということか。

「黄金は太陽の加護の証だ。俺様の加護を受け取ったのだから必ず勝てよ小僧。」

俺はどちらかと言うとシンプルなデザインのものが好みだが、この鎧もよく見てみると、なかなかカッコイイ鎧に見えてきた。

「お任せ下さいー！」

俺は機嫌よく神殿を出た。

ーいよいよウルクの出口が見えてきたところで城門に誰かがいるのが分かった。

「ギルガメツシユー！」

城門までたどり着くと誰か、つまりイシユタル様が駆け寄ってきた。

「イシユタル様！なぜ此処に？」

「実は、貴方に渡したいものがありました。」

そう言つてイシユタル様は一步横に退いた。するとそこからドラゴン退治のときにお世話になったライオンさんが堂々と俺の前まで歩いてきた。

「私なりに貴方に何ができるか考えてみました。この子を手連れて行って下さい。きつと貴方の役に立ってくれる筈です。」

ライオンさんが付いて来てくれれば百人力だ！

「イシユタル様！ありがとうございます」

ー俺がイシユタル様にお礼を言おうとした口はイシユタル様の唇によって塞がれていた。

「…………… 私からの加護です。ご武運を、ギルガメツシユ王」

イシュタル様の唇から力が流れ込んでくるのを感じた後、イシュタル様は静かに唇を離し、真剣な表情で俺に言った。

「…………… お任せ下さい。この口付けに誓って必ずや神に打ち勝って見せます。」

俺はライオンさんに飛び乗り、アヌ様に教えられた森の方角へと駆け出して行った。

神殺しは王の本懐〈前編〉

◇ギルガメツシュ◇

ライオンさんの背中の上で鎧の着心地を確かめたり、エアの回転具合などを確かめながら森へと向かうこと3日。前方に何やら紫色の不穏な瘴気が漂う森へとたどり着いた。

「…………… 此処か。ライオンさんここから先は慎重にお願いします。」

無言で頷き歩き出したライオンさんに合わせてこちらもライオンさんから降りて、エアを空間から抜き出す。

こうして俺たちは森に足を踏み入れた。

森の中は静かなもので…………… いや、静かすぎるな。動物の姿などどこにも見当たらない。

もしかすると、あのウルクにやって来た魔物たちはこの瘴気漂う森から逃げてきた、もしくは瘴気に充てられておかしくなったのかな？

暫く歩いていると木々の生えていない開けた場所に着いた。

「そこに「それ」はいた

見上げるほどの巨体。白く不気味な表面の肌。口と思われる箇所。口に十数本口を覆うように生えている。顔はない…………… 口が顔なのだ。

（読者の皆さんにも分かり易く伝えるのならば、某狩りゲームのフルミみたいな感じだ。）

「…………… それは、ただ何もせずこちらを観察している。

…………… 冷や汗が止まらない。やばいな、千里眼を使うまでもなく分かってしまった。こいつはやばい…………… ！」

「…………… ただこちらを見るだけだったぞ。こいつは「エア」を見た瞬間、大きく身体を痙攣させた後、『鳴き始めた』

「ぐっ！」

——鳴き声などという可愛いものではない。その音だけで周囲の物体をすべて破壊せんとする声にたまらずギルガメッシュは耳を押えてしまう。

その隙にそいつが大口を開いて迫ってくる。

「つーありがとうライオンさん！」

そんなギルガメッシュをすぐさま口にくわえて離脱するライオンさん。

実に優秀である。

「さて、あいつが森の神フンババか、全然神様って感じじゃないが……… そんなことより、あいつ『エア』を見てから急に暴れだしたな。……… まさか、『エア』を恐れているのか？」

空中でライオンさんの背中に乗りながら思考する。

「だとしたら、これは相手が真の姿とか出す前にさっさと決めたほうがよさそうだな。千里眼によるとあと1回変身を残してるみたいだし。」

ギルガメッシュはエアを突きを放つ前のように構えると魔力を流し始めた。エアが唸りながら3本の円柱が回転を始める。

「3本目まで回すのは久しぶりだな。よし！ライオンさん、奴の近くまで接近して下さい！」

いつの間にかエアを使いこなせるようになっていたらしいギルガメッシュがライオンさんに指示を出し、フンババに迫る。

「喰らえー！『天地乖離す開闢の星』！」

時空を切断する紅い風が森の神の身を切り裂こうと迫りくる。とある時空においては人類最強の聖剣すら軽く凌駕してみせた一撃だ。

——果たしてその一撃は森の神に直撃し、その身体を削っていく。

「ピギャー——————！」

形容し難い声が森の中に響き渡る。

「……… やったkゴホッ！どうなった？」

フラグ立ては断固阻止するギルガメッシュ。警戒を怠らずに空中から着弾地点を見る。

――瞬間ギルガメッシュとライオンは地面に叩き付けられた。

「ぐっ！何が起きた？」

地面に巨大なクレーターを作りながらも鎧と加護のおかげで幸い無傷だったギルガメッシュが状況確認のためにすぐさま起き上がる。

「……………嘘だろ？」

――それは「神」だった。

先の身体など比べものにならないほどの真つ黒な巨体。全身に紫色の模様が走っている。全長40メートル以上はあるのではないだろうか？その巨体からさつきまでなかった腕が左右に三本ずつ、合計六本の腕が生えている。さらにはご立派な尻尾まで生えている。はるか頭上にある紅い一つ目がこちらのちっぽけな身体を見下ろしている。

「っ！やべーライオンさん！」

巨大な腕がこちらを踏みつぶそうと迫ってくる。何とか無事だったライオンさんの背中に飛び乗り、何とかその場を離脱する。

「どうやらあの手に叩き落とされたらしいな。白い肌じゃなくなってるし、脱皮したってところか？」

あの神様はギルガメッシュの一撃を脱皮するかの如く前の身体を盾にして受け流したらしい。そして後ろから忍ばせていた手でギルガメッシュたちを叩き落としたと……………

しかもあきらかに最終決戦使用っぽい巨大な姿を見るに、制空権もあちらに奪われたようだ。

「まあ、一撃で終わってくれるとは思っていなかったがな。それに、あの姿にエヌマ・エリシュを放つても通らなそうだな。」

千里眼を発動させたギルガメッシュが呟く。

「まあ、悪いがいろいろと約束をしてきたんでな。今回の俺は諦め悪

いぜ？あんたの命が尽きるまで付き合つてやるよ！」
ギルガメツシユはエアの一番下の円柱に魔力を流して風の刃を作り出すと森の巨大化した神に切りかかっていた。

ローフンババー

我（われ）は神だ。この命溢れる森を守る番人だ。

我にはこの森さえあれば他には何もいらなかった。

そう、「人間」など微塵も興味が沸かなかった。

しかし、何時からだっただろうか？我が「人間」に憎悪を抱き始めたのは。

あの『黒いローブの男』が現れてからだっただろうか？

「人間」が憎い！滅ぼさなければ……………

そんな訳の分からない義務感によって「人間」の住む場所へと向かっている途中でその男は現れた。

神獣を従えているようだが、「人間」である以上は我には勝てない。

しかし、問題はその男の持っている『剣』だった。

あれはまずい！あつてはならないものだ！

あの『剣』は……………！

◇ギルガメツシユ◇

迫りくる腕を躲しながら時折「エア」の風のロングソードで切りかかる。先程からその攻防が続いている。

正直このままでは埒が明かない。それどころか、こちらの状況は悪くなる一方だ。

というのも、ライオンさんの消耗が激しいのだ。

此処は瘴気に蝕まれた森。俺は神々の加護があるから大丈夫だが、

ライオンさんはそうもいかない。段々と動きが鈍くなっている。

……………仕方がない。

「ライオンさん。一度俺の開く空間の中で身体を休めて下さい。俺な

ら大丈夫です。暫くの間なら、持ちこたえられます。」

ライオンさんは少し迷っていたようだが身体を休めるのが先決と思ったのか俺を地面に下した後、俺の開いた「王の財宝」の中に入っ
て行った。

さてと、千里眼で見た限り、今のフンババにはエヌマ・エリシユは
効かない。

しかし、そうなると思われることが出てくる。

――なぜ奴は「エア」を恐れたのか？

効かない攻撃にビビるやつはいない。だが、最初からあの神は間違
いなくこの「エア」にビビっていた。同じくビビりの俺が言うのだから
間違いない。

そうになると、奴には少なくともこの「エア」をビビる箇所があると
いうことになる。そこを見極めることができれば……………

――俺はそんなことを考えながらこちらを捕まえようと蠢く巨大
な腕に「王の財宝」から剣群を放ちながらエアジェットで空へと逃れ
る。

「王の財宝」も未完成なので本数に限りがある。よって無駄打ちはで
きない。

――攻撃を避けながら頭痛覚悟で千里眼を使ってみるが変なノイ
ズが入っていて相手の過去はおろか、弱点なんて見えやしない。

「ぐわっ！」

考えに集中し過ぎたのか巨大な裏拳を頂戴してしまい、一気に森の
木々を倒しながらはるか遠方に吹き飛ばされる。

「ぐっ！……………くそっ！」

まるで歯が立たない。こちらの斬撃は身体の芯までは届かず、あちらの攻撃は身体はおろか精神まで粉々に磨り潰さんとばかりに迫ってくる。

「ふう、だが生憎だったな。この俺を諦めさせたければこれの三倍は持つてこいというものだ！」

エアを杖代わりにして立ち上がる若き英雄ギルガメッシュ王。

「いくぞ森の神。腕の準備は十分か？」

神殺しは王の本懐〈後編〉

◇ギルガメツシュ◇

俺がライオンさん抜きの孤独な戦いを強いられてはや十数分位経った。

状況はこちらの不利に変わりない。

一度、森の神なんだから炎に弱いんじゃない？と安易な考えで以前武器職人に作らせたネタ装備、「炎剣」を振り回して森を火事にしてやろうとしたが、すぐに謎の瘴気によって消火された。

……… というか、余計に怒らせただけだった。

「ふう、一旦休憩を……… うおっ！」

森の木々の間に隠れても、何故かすぐに居場所を見つけて攻撃を仕掛けてくる。

「くそっ！動きにくいなこの鎧！」

前方に転がって腕を避けたもののあまりの動きにくさに文句が口から零れ出る。

「つちーしつこいなー！」

木から木へと飛び移りながら腕を避けていると、「王の財宝」の空間が少し波打った気がした。

「まさか……… ライオンさんが復活したのか！」

すぐさま空間を開くと中から元氣一杯のライオンさんが出てきた。とりあえずその背中にまたがって上空へと離脱する。

しかし、それでもなお追いつがってくる巨大な腕。

「しまったー！」

エアで撃退しようとした瞬間、横から迫っていた腕とぶつかってしまい、『うつかり』エアを空中で手放してしまった。

——致命的な隙をさらしてしまったため、重い一撃を覚悟するが奴が追ったのは俺たちではなく、「エア」だった。

「そういうことか………」

俺は取り敢えず落下するエアの下に空間を展開して「王の財宝」に収納する。

今のはつきりとわかった。奴が追っていたのは「俺」ではなく、「エア」なのだ。

「やはり攻略の鍵は『エア』か……………」

エアを見失った奴は今度こそこちらを狙って腕を振るってきた。それを避けながら考え事に集中する。回避はライオンさん任せで。

——やはり弱点はあのデカイ目玉か？ 試しに目に放った剣を嫌がっていたしな……………」

——あの目玉にエヌマ・エリシユを撃つか？ しかし、もしもその予想が外れていた場合、死ぬのはこちらだ。本気のエアなんてそう何度も連発できないうえに放った後の隙がデカイ。

そんなことを考えていると気がつけば真正面からデカイ拳が迫っていた。

「やばいーライオンさんー！」

流石に避けられそうにないので、真正面に空間を開きライオンさんを再び収納。こちらはライオンさんの背中からおもいつきり跳躍してエアを手元に呼び出し、エアジェットで遙か上空まで逃れる。

えっ？ お前も「王の財宝」の中に入ればいいじゃないかって？ 残念ながらそれはできない。何故ならこの空間は「俺」を起点として物呼び寄せているからだ。よって、俺がこの空間に入ってしまうと次に出られる出口はウルクの宝物庫の前のみということになる。

「くそー！ どんだけしつこいんだ！ そんなにエアが怖いか？」

エアを抜いた瞬間、待ってましたとばかりに襲いかかってくる腕たち。

ちよつと嫌になったので少し多めに魔力を注いでエアジェットの高度を上げていく。

腕が追いつけなくなった辺りで上昇を止めて下を見ると……………」

ーそこには果てしなく広がる雄大な森があった。思わず戦闘中なのに眺めてしまう。

しかし、そんな森もあのラスボスみたいな巨大怪獣とその周りを囲む紫色の瘴気のせいでは台無しだ。

「神退治じゃなきゃゆっくり観光できたのに……………ん？……………分かったかも……………弱点。」

ーフンババー

こざかしい「人間」が忌々しい『剣』を振るって我に挑んで来る。何度この腕で弾き飛ばそうとも諦めなど知らんとばかりに迫りくる。

石化の呪いも瘴気も効かない。

ああ、全くもって忌まわしい。あの「人間」の諦めの悪さも、見るだけで本能が恐れを感じる恐ろしき『剣』も。

しかし、遙か上空まで昇っていったあの「人間」は空を駆ける神獣にまたがって地上に戻ってきた。あの『剣』はない。

あの『剣』がないのならばこちらのものだ！

腕で叩き潰そうとするが、相変わらず素早い神獣の動きにこの巨大化した鈍重な腕が追いつかない。おまけにあの神獣と「人間」は森の木々の間をすり抜けるようにして逃げているので発見も困難だ。

ふと、今まで感じていた魔力の気配を見失ってしまった。あの神獣の気配も、あの「人間」が身に纏っていた太陽神の特徴的な魔力も見当たらない。

まさか……………逃げられたか？いや、それはあり得ない。この「森」から抜け出すことなどできない。

――突如、頭上の背後にあの神獣と『剣』の気配を感じた。

振り向くとそこにはあの『剣』の柄を口にくわえた神獣がいた。なにをするつもりかは知らんが、その『剣』だけは使わせん！その口にくわえてある『剣』を奪い去ろうと腕を伸ばす……………

しかし、突然神獣の背後の空間が揺らいだかと思えば、一気に劍群が我の「眼」に向かって飛んできた。

ぐっ！この技はあの「人間」の技だと思っていたが、この神獣も使えたのか！

――我は気がつく、「人間」のことなど忘れて目の前の『剣』をくわえた神獣と劍群に意識を持っていかれていた。

◇ギルガメツシュ◇

俺は今……………全裸だ。

何やってんだとか「AUO」とかそういうツツコミはなしで願いたい。

これもすべては作戦のうち。奴の感知から逃れるためだ。

奴は今、俺が全裸になつてゐることなど知らずに「エア」を口にくわえて「王の財宝」を使つてゐる…………… ように見えるライオンさんに集中している。ライオンさんが「エア」をくわえているのは本当だが、「王の財宝」を展開させてゐるのは俺だ。まあ、つまりライオンさんは「エア」をくわえて空中に浮いてゐるだけということになる。

俺はというと現在、フンババから少し離れた地面に……………全裸で

瘴気はイシユタル様のキスがあるから大丈夫です。

さて、実は俺は今まで正真正銘の全力でエアを使ったことはない。理由は簡単だ。本気で使えば俺の「手」がもたない。だからこそ最終形態前のフンババに放ったのも全力じゃないのだ。

……別に出し惜しんだとかそういうのじゃないから。慢心とかじゃないから。どうせ効かなかったろうし。

だがおかげで分かったことがある。

この「鎧」……さっきまで着ていた「鎧」の力だ。

この鎧は俺が全力でエアを使った際に生じる熱を吸収してくれるのだ。

例えば、原作のギルガメッシュも本気を出した「ネイキッドモード」でも鎧の手の甲だけは残っていたような記憶がある。

いつもギリギリだったエヌマ・エリシュがなんともなかった以上、もう一つ上の段階のエヌマ・エリシュも放てるだろう。

そして、正真正銘の本気の一撃で狙うのは……

ーおっと、そろそろかな？

今回の一撃で大事なのは、いかに素早く全力の一撃を放てるかだ。エアを握った瞬間に全力で魔力を流し込み、一瞬でエアを起動させて最高の一撃を放つ。この時大事なのは鎧の着用も並行して行うことだ。

……失敗すれば死ぬのはこちらだ。

……外せば最後、隙だらけの身体を潰されて終了。

……まあ、大丈夫さ。ずっとエアを使ってきたんだ。

……俺ならできる!!

ていたのだ。

少し違うが、言うなれば『固有結界』みたいなものだろう。ならばこの「エア」を恐れたのも分かる。壊されなくなかったのだ自分の『世界』を。

森の瘴気が晴れたことで千里眼をいつも通り使えるようになった。さらに、いささか弱体化したように見える。今ならエヌマ・エリシユも通りそうだ。

しかし、残念ながらエアはただ今冷却中だ。風の剣にエアジェット、さらに掛け値なしの全力を放ったので仕方ない。

つまり、ここから先は本気のガチンコバトルだ。

しかも時間をかけてしまえばあの固有結界もどきが復活するだろう。

「先手必勝！行くぜ！出し惜しみはなしだ！」

未だに動揺しているらしいフンババに「王の財宝」を展開しながら突っ込む。

空間から剣が槍が斧が剣をくわえたライオンが射出されていく。

俺もアヌ様から貰った風を呼ぶ双剣を抜く。

狙うは千里眼で見つけた「紫色の模様」

明らかに身体の模様ではないうえに、ドラゴン退治の時も見かけたやつが首の辺りにあるのだ。

しかし、首の辺りと言っても相手は全長何十メートルあるか見当もつかないほどの巨体の首の辺だ。

しかし、この身体は人類最高峰の性能を持っている。垂直な壁の走破すら楽々できてしまうのだ。

いざ、覚悟！

ーペシッ

あっけなく腕に叩き落とされた……………

先に攻撃を開始していたライオンさんが「だから俺の背中に乗れっ

て言ったのに……………」みたいな目でこちらを見てくる。

……………
なにくそ！剣よ、風よ！

やけくそに手に持つ双剣に魔力を流すと、凄まじい風が剣から溢れ出してきた。

これなら！俺は剣を両方とも地面に向けると、なんとか身体が宙に浮き始めた……………ぶっちゃけエアジェットよりも魔力消費が少ない……………

落ち込むのは後だ！俺は一気に首元まで接近すると風を一旦止め、さつきまでの勢いを利用しながら身体をひねって双剣の2連撃を叩き込んだ。

なかなかいい一撃が入ったと思ったが、少し模様に切れ目が入っただけだった。

しかし、弱点らしいものがあそこしかない以上は地道に一撃を入れて行くしかない！

俺は双剣を操り、空中で浮かびながら方向転換を試みる。

すると、突然目の前に巨大な手のひらが現れた。

「っ！危ね！」

何とか避けたがさつきよりも防御が堅くなった。

ライオンさんには奴の注意を逸らすために目を攻撃してもらっているが、あまり効果はないようだ。

……………
だったら、

俺は奴の首元に「王の財宝」を多数展開する。

炎の炎剣に鋭利な槍。黄金に輝く斧に…………… 「エア」

「っ！」

自分のすぐ近くに展開された「エア」にビビったのか驚くフンババ。さらに「エア」を掴もうと模様を隠していた腕を伸ばしてしまう。

「貰った！」

おそらくこのハツタリが効くのはこの一回のみ！

絶対に逃せないチャンスだ！

「うおおおおお！」

先程の切れ目に向かって全力で突っ込む。

千里眼で微調整をしながら一気にたどり着き、剣を一本捨て、一本を切れ目に突き刺す！

そして、一気に魔力を流し込む！

——結果、紫色の様子は砕け、フンババは悲鳴を上げる。

「ピギャー——————！！」

「ふう、なかなか手強かったな……………」

華麗に着地を決めるギルガメッシュ。

——そして、怒り狂うように暴れだしたフンババ

「なんでやねん！なんで？なんでまだラスボスモード？」

その場を離れながらツツコむ。

「くそっ！エアはまだ使えねえし……………」

しかし、それでも動きは鈍っている様に見える。

「もう、そんなに怒るなって。クールに行こうぜフンババ！」

もう疲れたから思わず変なことを口走ってしまう。

「ん？……………クール？」

……………しまった。またうっかりだ。

——ギルガメッシュは逃げる足を止めると無言でエアを取り出し、さらに『氷雪系』の宝具を取り出すとエアにそれを当ててエアの冷却を始めた。

ついでに魔力回復の容器を取り出すと一気に飲み干した。

「……………天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）」

今度こそ森の神は滅びた。

◇ギルガメツシユ◇

………めっちゃ疲れた。

それにしてもなかなかの激戦だったな。黄金の鎧は所々凹み、体中が痛い。顔は泥だらけで俺の美しい顔は見ると影もないだろう。「王の財宝」の中身もほとんど空だ。いずれダモスにでも回収させよう。

そんなことよりも今はイシュタル様への告白の返事だ。

イシュタル様の気持ちはとても嬉しいが、残念ながら俺にはセイバーという生まれながらに（俺が）決められた婚約者がいるからなあ

………真面目な話、俺はイシュタル様にどのような感情を抱いているのか自分でも分からないのだ。少なくとも、近所のお姉さんに抱く感情よりは上だと思うが………

ーそんなことを考えながらウルクに戻った俺に伝えられたのは、イシュタル様がキシユ族たちに連れ去られたという報告だった。

英雄（ヒーロー）は遅れてやって来る

◇ギルガメツシュ◇

イシュタル様がキシユのものたちに3日前に連れ去られたという報告を聞いた俺はすぐさま踵を返して駆け出した。

「キシユ」とはバビロンの南にあるウルクに及ばないながらも大きな町である。

この人の少ない紀元前の世界では自分たちの力だけで生き残り、町を築いている時点でなかなかそのキシユに住む者たちの生存能力あるいは戦闘能力が優れていることが分かる。

しかし、彼らはウルクに好意的ではなかったとはいえ神々の加護が大きいウルクに攻め込み、あまつさえ女神を攫うなどという暴挙に出るとは思えなかった。しかもそれを成功させるとは……………

……………俺のせいか。イシュタル様の随獣であるライオンさんを連れて行った俺の……………

「くそっ！どうして俺がいないときに！タイミング悪すぎだろ！」

ーいや、待てよ…………… タイミングが良すぎるな。

まるで俺とライオンさんがいないのを知っていたようなタイミングだ。

なぜキシユに住む者たちが俺の不在を知っている？

それに、イシュタル様は戦いを司る女神様だが本人の戦闘能力はそこまで高くない。しかし、人間程度なら女神の権能で撃退出来ると思う。

ドラゴンに森の神フンババ、女神の誘拐…………… どうにも陰謀っぽい気配を感じる。あの『黒いローブの人影』の……………

そんなことを考えながら疾走する俺に並ぶ気配があった。ライオンさんだ。そうかライオンさんは主人を攫われたんだ、助けに行きた

いに決まっている。

というか、随分と間抜けな光景だと思う。黄金の鎧を纏ったボロボロの青年と立派な毛並みをグチャグチャに乱したライオンが大地を一心不乱に駆け抜ける。でも、本当に気がつけば勝手に身体が動き出していったんだ。

どうやら、俺は予想以上にイシユタル様のこと重大だったらしい。

ライオンさんが俺の前を走り始めた。背中に乗れってことだろう。俺は重さを減らすために上半身の鎧をパージして「王の財宝」の中に仕舞い、その背中にまたがった。

ーふと、考えた。イシユタル様を攫った目的は？

「っーライオンさん急いで！」

古代の男が女を攫う理由？そんなの決まってるじゃないか！

「くそっーライオンさん！空中に浮いてもらえますか？」

その光景を想像するだけで今まで感じたことのないほどの憎悪がこみ上げてきた。無意識のうちに唇を噛んでしまう。

ライオンさんの消耗は回復していないので空中を進む速度も遅い。しかし、それでも十分だ。

俺は風を呼ぶ双剣を呼び出し、全力で後方に向けて風を噴射する。ジェット機のように飛行する俺とライオンさん。

キシユまではおよそ3日かかるがこの速度なら1日かからずに到着できるはず。

「っー失ってから気づく大事なものと勘弁しろよ！……」

俺は張り裂けそうな胸の痛みを感じながら双剣に魔力を流し続けた。

◇イシユタル◇

それはギルガメッシュの無事を祈りの間で祈っている時に突然現れた。

ウルクの城壁の外から聞こえる野太い声。そして、何かがぶつかる音。

急いで外に出てみると、神殿兵たちが慌ただしく動いていた。

「何事！」

近くを通った神殿兵を捕まえて尋ねると、

「それが、キシユの者たちが、イシユタル様を寄越せと訳の分からないことを叫びながらウルクに襲い掛かってきたのです。」

「なにを馬鹿なことを……………」

私を寄越せ？たくましい男は嫌いじゃないが、これは流石にお断りだ。

「さっさと追い払いなさい」

威勢のいい返事をして去って行く神殿兵。私は踵を返して先程の祈りの間に戻ろうとする。

「追い払う？酷いなわざわざキシユからやって来たのだぞ？性愛を司る女神なら全員を労って相手をしてやるものだろう？」

突然後ろから声が聞こえた。驚きながらも平静を装って振り向くと、そこには端正な顔立ちに筋肉質な身体をした男がいた。

「貴方……………何者？」

後ろへと下がりながら尋ねてみる。取り敢えず、時間を稼いで神殿兵を呼び出すしかない……………

「キシユの長エンメバラゲシである。さあ、来てもらうぞ、汚らしい女神イシユタルよ……………」

「断るわ！貴方たちのような無粋な輩の相手をする気にはなれない。さっさと立ち去りなさい！」

「……………やれやれ仕方ないな。キシユに着くまでの間眠っただけもらうぞ。」

男は小さな短刀を取り出すと切っ先をこちらに向けた。

すると、急激に眠気が襲ってきた。女神である私にまで作用するのは、

「っーさせない」

短刀に向けて女神の権能を発動させる。此処は私の神殿だ。いかに強力な武具であろうともギルガメツシュのもつ「鈍器」でない限りはその能力を封じるもしくはその武具を破壊できる！

「よしー」

短刀の刃が砕けて喜んだのも束の間、気がつけば男が目の前まで接近していた。

「ぐっー」

何をされたのかは分からないが落ちていく意識。

「ギル………ガ………メツシュ。」

◆??????◆

女神イシュタルの意識を奪った男エンメバラゲシの姿が一瞬で掻き消え、そこに現れたのは『黒いローブの人影』だった。

人影は自分が意識を奪った女神を横抱きにするとキシユの者たちと合流するために神殿の外へと歩き出した。

「さて、アヌ神よ。自分の娘が人間たちに乱暴されたと知ってそれでもなお人間の味方であり続けると言えるかな？」

人影は不気味な笑みを浮かべながら神殿を去って行く。

「破滅の日は近い。せいぜいそれまで何も知らずに過ごすがいい人間どもよ。そして最期の時を迎えて呪うがいい。貴様らを守れなかった無能な王『ギルガメツシュ』をな！」

◇イシュタル◇

目が覚めるとそこはどこかの寝室だった。外はうつすらと暗い。

両手は何やらよく分からない金属でできた拘束具で縛られている。

服装は最近ギルガメッシュに清楚に見られるために着始めた真っ白なロングスカートのままだ。どうやら意識を失っている間に何かをされたということはないらしい。

「おお、お目覚めですかイシユタル様？」

突然男が入ってきた。思わず睨み付けるが私を攫ったその男エインメバラゲシは飄々と肩を竦めただけだった。

「随分と嫌われたものですな。しかし、私は以前に一度遠目から貴方のことを見た時から貴方のことだけを思い続けていましたよ？」

そう言つて私の身体を舐めるように見つめてくる。

久しく感じていなかった男の獣のような眼で……………

「相変わらず美しい……………やはり、貴方こそ我々キシユの妻に相応しい！」

この一方的な会話も昔はよくやったものだ……………

私は他人事のようにこの状況を把握していた。別にこれから自分に何が起ころのか分かっていないわけではない。しかし、もう少し近づいてこれないと女神の権能を使えないのだ。

「貴方にはこのキシユの者たち全員の赤子を産む母親になつていただきます。」

一瞬驚いてしまった。このキシユとやらに何人の男が住んでいるのかは知らないが、その全員の赤子を私に産ませようとするとは……………

目の前の男はなかなか端正な顔立ちをしており、身体も筋肉質でたくましい。ぶつちやけ結構好みだ。

しかし、快樂だけを求めていた昔の私ならいざ知らず、今の私は恋する乙女、それも告白の返事待ちだ……………断られる可能性が高いけれど

いい！
ーだからこそ、このような無粋な男に身体を許すつもりは毛頭な

エンメバラゲシがこちらへと自分の服を脱ぎながら迫ってくる。

「さあ、イシユタル様。共に素晴らしい夜にしましょう。」

もう少し…………… 今だ！

女神の権能を発動させる。取り敢えずこの男を気絶させて……………

「…………… 今、権能を発動させようとしたな？」

しかし、発動しない権能。なぜ!?

「おとなしくしてりや優しくしてやったのによー！」

エンメバラゲシは顔を歪めると私に平手打ちをしてきた。

「キャッー！」

痛みに耐えながらも考える。どうして? どうして権能が?

すると腕の拘束具が怪しく光っているのがわかった。

これのせいか!

「抵抗してくるとは思わなかったぜ。まあいい。その身体、たっぷり楽しませてもらうぜ?」

「っ！来ないで！」

「おっ！いいねえ。おとなしくされるよりそっちのほうが楽しめるってもんだ！」

引き裂かれる真っ白な服。押さえつけられる両腕。近づいてくる顔。

…………… ごめんなさいギルガメツシユ。貴方の返事を貰う資格を失う私を許して下さい。

…………… でも、たとえどんな返事でも貴方の私への気持ちが知りたかった。

——瞬間壁が吹き飛び私の上に乗っていた男も吹き飛んだ。

「イシュタル様。告白の返事をしに来ました。」

そこに立っていたのは黄金に輝く私の『王子様』だった。

◇ギルガメツシユ◇

魔力が空になるたびに回復用の容器を飲み干す作業を続けること
で何とか半日かからずにキシユに着いた。

もう魔力も回復薬も空だ。ついでに俺の体力も。

町の中は何故かお祭り騒ぎなので簡単に侵入できた。

取り敢えず目立つ鎧は装着せずに近くの茂みにライオンさんと身を隠す。

すると酔っ払った男たちの声が聞こえてきた。

「綺麗な顔だったなあ〜女神様。」

「ああ！身体つきも最高だったなあ〜」

「俺らもちゃんとあの身体にありつけるんだよな？」

「ああ、エンメバラゲシ様は俺たち全員の赤子を産ませるって言うたぜ」

「おいおい！それ、女神様の身体持つのかよ!？」

「大丈夫だろ、女神様だし。多少乱暴に扱っても大丈夫だろ？」

……………取り敢えず鎧は装着せずに目の前の男2人に近づく。

「おい。」

「うん?」「なんだ?」

その顔に本気のストレートを一発ずつお見舞いする。

悲鳴を上げることもできずに倒れる2人。

その醜い顔が俺の拳でさらに陥没してもはや人の顔ではなくなっ
てしまった。もしかしたら死んだかもしれない。

「まあ、いいか。……いや、イシユタル様の居場所聞き忘れた。」
また『うつかり』だ。

取り敢えず千里眼の透視で探るか。

俺は黄金の鎧を装備して千里眼を発動させると町の中央に向かって歩き出した。

さっきの会話から察するにエンメバラゲシ様とやらがこのキシユのリーダーなのだろう。ならばそいつの家はどこにあるのか。まあ、だいたいリーダーってやつは真ん中にいるもんだ。

「おい！なんだそこの金ぴか！祭りの見世物か!？」

取り敢えず寄ってきた男の胸倉を掴み上げて聞いてみる。

「女神イシユタル様はどこだ?」

「なんだお前?まさかウルクの王子様か?ヒヒツこいつは傑作だ!おいみんな!金ぴかの王子様が女神様を助けに来たぜ!」

俺たちのもとに集まって来る人々。なるほど、自分で探したほうが早そうだな。

「最後にもう一度だけ聞く。イシユタル様はどこだ?」

「おう!答えてやるよ!エンメバラゲシ様の腕の中だ!」

……取り敢えず目の前の男の首をへし折ると集まってきたハエどもの中に放り込む。さて、イシユタル様はこっちなかな?

「てめえ!生きて帰れると思うなよ!」

「その黄金の鎧!全部剥ぎ取って売りさばいてやるぜ!」

「死ねえ!」

取り敢えず真正面から襲い掛かってきた男の剣を鎧の手の甲で受け止めてその剣を奪い取る。そのまま剣を貸してくれたお礼に裏拳を一発プレゼント。

大柄な男が後ろから斧を振り下ろしてくる。受け止めるのは面倒なので今手に入れた剣の切れ味を試す意味も込めて男の腰をスライスする。上半身と下半身がさようなら

左からの槍の突きを鎧で弾き、逆にこちらの突きをお見舞いする。そのままそいつの槍もレンタルさせてもらう。

「さて……女神イシユタル様の随獣よ!現れよ!」

いくらこいつらが雑魚でもいちいち潰すのは面倒なのでライオンさんに任せることにする。

「王命を下す！………こやつらを殲滅せよ。」

男どもの悲鳴を聞きながらイシユタル様を探しに中央まで歩いていく。

ふと、前方の民家を透視で覗いた。

ーすると、千里眼にイシユタル様に覆いかぶさる男の姿が………

瞬間、かつてないほどの踏み込みで地面が陥没する。その勢いで突っ込んで行く。途中ですれ違った男どもの首を刈り取りながら直進する。

血糊と刃こぼれで使えなくなった剣を捨て、槍で民家に突撃する。民家の壁と男を吹き飛ばし、槍を捨ててベッドを見るとそこには驚いた顔のイシユタル様がいた。

取り敢えず約束を果たすことにする。

「イシユタル様。告白の返事をしに来ました。」

◇イシユタル◇

突然現れたギルガメッシュはボロボロだった。黄金の鎧は血に汚れ、所々傷つき、大きくへこんでいるところもある。顔も泥だらけだ。それでも此処にいるということは無事ファンババを倒したのだろう。ほっと一安心だ。見たところ大きな怪我もないし。

すると突然ギルガメッシュは私の手を引きベッドから降ろすと私の前に立ち語り始めた。

「幼少の頃より貴方と共に過ごして来ました。貴方とのお茶会は俺には勿体ないほど楽しくいつも時を忘れて貴方との会話に夢中になっ

ていました。貴方のことはとても大事に思っています。俺が心の内を曝け出せる数少ない人物です。しかし、俺はあの神退治の前に告白されたとき、自分の貴方への気持ちが変わらなくなってしまうた。俺が貴方に抱いているのは親愛か？恋慕か？」

真剣な瞳で語るギルガメッシュ。

「しかし、今なら分かります。いや、情けなくも貴方が攫われてから分かりました。……俺は貴方のことが女性として好きであると。……いえ、愛していると。」

瞬間、時が止まった。いや時が止まるはずなどないがそれでも止まったのだ。

「自分の気持ちに気づくこともできない愚か者ですが、どうか俺と添い遂げてくれないませんか？イシユタル様。……いや、『イシユタル』「好き」ではなく『愛している』、「イシユタル様」ではなく『イシユタル』。」

「はい。喜んで！」

私のギルガメッシュ王との「日常」は終わり、『ギルガメッシュ』と新たな『日常』が始まる。

◆エンメバラゲシ◆

くそっ！どうなってやがる！黒いローブの奴が女神を俺らにくれるっていうからそれに乗ったってのに！

取り敢えずあの黄金の男から逃れなければ！

「どこへ行く？」

——気がつけば目の前に『王』が立っていた。

「まつ待ってくれ、俺あ黒いローブの奴に頼まれただけなんだ！どうか命だけは！」

「……………実はたった今、このキシユを我が領土に加えることにした。つまり、今からこの王は俺ということになる。」

何か訳の分からないことを言っているが好きにさせておけば逃げられる！

「なるほど！あなた様なら治められるでしょう！ですので命だけは……………」

「実は貴様には借りがあってな。俺に自分の気持ちを分からせてくれた。よって慈悲をくれてやろう。」

「ありがたき幸せで『カランツ』す？」

「王命を下す。その剣でもって疾く自害せよ。」

俺の地面に向けて投げられたのは血に染まった剣だった。

「どうした？俺の慈悲だぞ？疾くその剣で腹を切り裂け。」

「ふっふっふぎけるな！」

くそっ！こうなったらイチかバチかこいつを殺して生き延びてやる。

目の前の男に切りかかった俺はしかし首元に激痛を感じ、攻撃を止めるしかなかった。

首元にライオンが噛みついていていた。

「そうか、慈悲はいらぬか。ならばその神獣の餌となつて……………死ね。」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアア！」

ギルガメッシュ王は踵を返すと疲れた妻が眠っている民家へと歩いて行った。

天の鎖

◇ギルガメツシユ◇

キシユから結婚を申し込んだイシュタルと一緒にウルクに帰ってきた俺。

イシュタルをライオンさんの背中に、俺は徒歩でウルクの城門をくぐると

「ギルガメツシユ様！万歳！」

「イシュタル様！お帰りなさい！」

「流星は我らが王だ！」

「然り！然り！然り！」

ウルクの民たちが大歓声とともに俺たちを迎えた。

どういうことだ？俺は何も知らせずに一人で突っ走っていたつもりだが？

…… まあ、いつか！

俺は兎に角疲れていたので深く考えずにこのパレードを楽しむことにする。

そうだ！どうせなら……

「聞け！俺はこの女神イシュタルを自分の妻にすることを決めた！…… 王命である！我ら夫婦を祝福せよ！」

一瞬静まり返り、次の瞬間ドツと先ほどよりも大きな歓声が沸き起こった。

「やっと結ばれたのですね！おめでとうございます！」

「ギルガメツシユ夫婦万歳！」

「これでウルクは安泰だ！」

俺は真っ赤な顔のイシュタルをお姫様抱っこしてウルクの街道を歩いて行った。

「お帰りなさいませ。ギルガメツシュ王」

取り敢えず、イシュタルを神殿まで送り届けた俺は王宮に戻った。するとそこには久しぶりを見るシエムが頭を下げて待っていた。

「ああ、ただいまシエム……………とところでこの騒ぎはお前の仕業か？」

「いえ。それがギルガメツシュ王が神退治に出かけた後、アヌ様が天空に現れておっしゃったのです。『お前たちの王はこのウルクに迫りくる邪悪なる神フンババを退治しに森へ出掛けたのだ。お前たちは自分たちの王を信じ、いつも通り国の発展に努めよ。』と。」

なるほど、アヌ様が……………おそらく、急進派の神々への牽制でもあったんだろう。自分は神退治などに出掛けていない。行ったのは国を守るために立ち上がったギルガメツシュであると……………

「そう言えば、アヌ様がギルガメツシュが帰ってきたら自分の神殿まで来るようにと言伝がありました。」

フンババ退治の劳いか、それとも……………

まあ、行くしかないか。

◇イシュタル◇

お父様の神殿まで呼び出された私。取り敢えず出向いてみるとそこには丁度ギルガメツシュがいた。

「イシュタル様！……………じゃなかったイシュタルお前も呼び出されたのか？」

「そういう貴方も呼び出されたのですか……………呼び出されたの？ギルガメツシュ。」

実は、これまでの口調や呼び方では以前と何も変わらないと思ったらしいギルガメツシュが急に私のことと呼び捨てかつ、少し乱雑な素に近い口調で話しかけてくるようになった。よって私も素に近い口調で話すことに決めた

……………まだお互い全然慣れていないが。

少しぎくしゃくしながらも私とギルガメツシュは神殿の中に入っ

て行った。

「イシユタル！無事だったか！」

神殿に入った瞬間、お父様の顔がドアップで現れた。

その顔を見るにかなり心配してくれていたようだ。

「アヌ様。ギルガメツシユ並びにイシユタル様帰還しました。」

ギルガメツシユが話し出すとお父様はすぐに真剣な顔になって頷いた。

「うむ。フンババを退治するどころか我が娘を『人間』どもから取り戻すとは、大義であった。」

少し違和感を覚える。お父様はあんなに憎悪のこもった声で『人間』と言ったことがあったらどうか？

「……………実は、そのことでお話があります。今回の黒幕と思われる『黒いローブの人影』についてです。」

そうして真剣な表情でギルガメツシユが語ったのはドラゴン退治や神殺し、そして私の誘拐に至るまで、何者かが人間を滅ぼそうと策略を巡らせているというものだった。そしてその人物はおそらく急進派内部にいます。

「……………その話は確かか？ギルガメツシユ。」

「間違いありません。実際に今俺が言うまでアヌ様はキシユの者だけでなく、『人間』そのものに憎悪を抱いていたご様子。もしそのままだったらアヌ様率いる穏健派は空中分解していたでしょう。」

「……………確かにそうかもしれんな。」

「何者かが影で蠢いています。『人間』をウルクを滅ぼさんと。早急に手を打たねば取り返しのつかないことが起こる気がします。」

…………… 思えば、あの私を攫った時のエンメバラゲシとキシユで私の身体に襲って来たエンメバラゲシは若干雰囲気異なっていたように思える。

そのことを伝えると2人して考えこんでしまった。

やがてギルガメツシユは何かを思い出したような顔を見ると未だ

に思案顔をしているお父様に向かって言った。

「あのアヌ様。イシユタルと結婚したいので貴方の娘さん俺にくれませんか?」

「ん?結婚?おめでとう。……………はっ?」

その堂々とした物言いは好きだけれど、もう少し空気を読んでほしかった。

—————
??????

そこは「急進派」の神々の集う場所。そのどこか陰険な空気の場合に一人だけこの場にいるのが不思議なほどに強烈な神気を放つものがいた。

その人物に周りの神々がしきりに話しかけている。

「人間どもの増長は増すばかりです!この世界が自分たちのものであると錯覚し、好き勝手に振る舞っている!」

「我々がいるからこそ生きながらえていることすら忘れ、神々への信仰も薄くなってきている!」

「最近では森に住む動物たちを意味もなく殺しまわっているとか!」

「そればかりか奴らは女神イシユタル様を我が物にせんと攫い、その身体を弄ぼうとしたのですぞ!」

「人間を諫めようとした我らが同胞森の神フンババさえも人間たちの王ギルガメツシュによって殺されてしまった!」

「次は我らかもしれませぬぞ!」

『エンリル神』!どうか今再び、あの『天の宝具』で人間に鉄槌を!」
どうやらしきりに話しかけられている神の名を「エンリル」というらしい。

これまで黙って聞いていたエンリル神はやつと口を開いた。

「……………うぬら、そのような幼稚な手で儂を味方にできると思うてか?」

予想と違った反応だったのか静まり返る神々。

「どうせすべてうぬらの策略であろう？ 実に下らん。そのようなものに儂の宝具を貸せとは、えらく大きくでたものだ。第一儂は裁定者じゃ。貴様らのような有象無象の神々の意見に耳を傾け、裁定を間違えるなどありえん。儂がかつて宝具で人間を間引いたのは儂がそうするべきだと裁定を下したからじゃ。今の人間たちを見て宝具を使う気になどなれん。ギルガメッシュはよくやっているではないか？ よって貴様らの側につくなどありえん。会議はしまいか？ ならば儂は帰るぞ。」

去って行くエンリル神。

しかし、その目の前に黒いローブの人影が現れた。

「なんだ貴様？」

エンリル神の問いかけにも答えない。

「…………… エンリル神よ我らに『天の宝具』はお貸いただけのですね？」

黙っていた神々の一人が口を開く。

「そう言うておろうが！ それよりもなんだこいつは！」

それには答えず神々は己の武具を具現化させる。

「っ…なるほど、貸してもらえぬのなら力づくで奪うと？ だがそれは浅はかだな。この儂にうぬらが勝てると？」

客観的に見れば明らかに不利な状況にも関わらず獰猛な笑みを浮かべるエンリル神。それはこの場にいる全ての神々を相手にしても勝てるという証明だった。

「いいえ。我々だけでは無理でしょう。しかし、残念です。貴方なら我々に賛同してくれると思つたのですが…………… 仕方ありませんね。やれ、『天の鎖』よ！」

瞬間、黒いローブの人影から鎖が飛び出し、エンリル神を締め上げた。

「ぐっ…これは！」

身動き一つ取れないことに驚くエンリル神。やがてその身体を多数の武具が貫いた。

『『天の宝具』は我々が有効活用させてもらいます。さらばだ、かつて

人間を滅ぼさんとした偉大なる神エンリルよ……」
こうしてあっさりとエンリル神は消滅し、かつて人間に襲い掛かった『天の宝具』は人間を滅ぼそうと画策する神々の手に渡った。

嵐の前の静けさ

◇ギルガメツシュ◇

そつと深呼吸をしてから千里眼を発動。前方の「敵」を見据える。大丈夫だ。奴に動きはない。

「弓」の弦を引き絞り、魔力で形成された「矢」を出現させる。

……………
今だ！

放たれた矢は前方の猪へと真っ直ぐに飛んでいき…………… その肉体を一片も残さずに消し飛ばした。

「…………… マジか。とんでもないもの渡してくれたな……………」

アヌ様たちから貰った古代兵器「YUMI」を眺めながら俺はこれを手に入れた時のことを思い出していた。

――1週間前――

アヌ様に娘さんを下さいと宣言した後、何故かアヌ様に殴られたり（後で聞いたところ、人間の父親たちがやっているのを見て自分もやってみたくならしい）

シエムからお説教をもらったり（日はくあんな女は駄目だとか）

…………… ダモスに号泣されたり

いろいろあったが無事結婚式を挙げられた。

…………… ちなみについてこの間誕生日を迎えたばかりなので俺は

19歳。

19歳!! 大事なことなので2回言った。

結婚式はそれももう凄かった。

学校の剣技指導クラスによる剣舞披露に森に住んでいた妖精たちの大合唱。ダモスの裸踊りに（王命で止めさせた）父上のやたら長い演説などなど結婚式というよりは宴会だったがまあ、イシユタルも楽しそうだったのでよしとする。

問題はその後だ。アヌ様に呼び出されたので神殿に出向くと真剣な目をしたアヌ様とシユマシユ様がいた。

「幸せを満喫しているところ悪いのじゃが実は、エンリルのやつと連絡が取れなくなった。あやつは恐ろしく強いがこうも立て続けに災難が起こっている以上は何が起こってもおかしくはない。よってわしとシユマシユは一旦神界へ戻って状況を確かめてくるゆえ先にこれをお前に渡しておこうと思つたのじゃ。」

そう言つてアヌ様は大弓を取り出した。

それはとても美しい弓だった。白を基調としたデザインに所々に金の装飾がなされている。しかし、デザイン性だけでなく真ん中の持ち手の部分は黒く握りやすそうなグリップとなつており実用性でもなかなか使いやすいやすすうな弓になつていた。

「お前がフンババ退治に行つてくれていた間にシユマシユたち穏健派の力を結集して作つた弓じゃ。名はない無名じゃ。だがその能力は極めて危険じゃ。『神を殺す』……………と言つてもただ当てれば相手が死んでくれるなどという都合のいい能力ではないぞ？その弓の本質は神の『神核』を貫くことじゃ。」

神核？なんぞそれ

『神核』とはわしらのように現象だったものが人々の認識、信仰によつてその形を確立する際に生じる核じゃ。これを砕かれた神はその人格を失う。つまり、元の自然現象へと戻る。」

なるほど……………でも現象としての本体が残っているならそれはつまり、無差別に破壊を振りまくバーサーカーみたいになるってことじゃないのかな？

「……………まあ、そういう見方もあるよね？」

アヌ様!?!そこんとこちゃんとして下さいよー!

「大丈夫じゃ！人々から神として認識されなくなった以上、その力は衰えるはず。それにその『神核』を砕かないと神は完璧には消滅せんのだ。」

「だとしたらフンババはどうなつてるんです？エアで消滅しましたよ

？」

「あやつには元々そこまで明確な意思はない。あるのは森を守ろうという漠然とした概念だけじゃ。よってこの弓を使ってもあまり意味はなかったろう。まあ、お前に渡したあの『剣』が特別ということもあるがな。」

なるほど、それにフンババと戦っている間に完成したらしいからいまさら文句を言っても仕方ないだろう。

それよりも、問題はなぜその「弓」を急遽完成させて俺に渡す必要があるのかということだ。

「……… 実は、エンリルと連絡が取れなくなってから急進派の連中の動きが静かになったのじゃ。考えたくはないが最悪、神々の間で戦争が起こりかねん。よってその弓を渡したのだ。それを受け取った以上、お前はこちら側になったのだ。……… 悪く思うなよ。」

……… なんか急にこの弓が重くなった気がした。

「ーまあこんな感じでこの「弓」を渡されたのだ。矢は俺の魔力で生成している。」

しかし、弓なんて昔イシュタルと狩りに行った時ぐらいにしか使っていない。

そこでこうして再び練習も兼ねてイシュタルと狩りに来たのだが、まさか猪の身体を吹き飛ばすとは………

「ギルガメツシュ〜！」

この可愛らしい美声は！

「や、やあイシュタル。そっちはどう？」

「結構捕まえたわよ！ギルガメツシュは？」

妻イシュタルがライオンさんの背中に乗って現れた。そのライオンさんがくわえている布の中には鹿などの動物が結構入っていた。

…… やばい！まだ一匹も捕まえてない。というか全部消し飛ばしてしまっている。

めっちゃ恥ずかしい！というか夫としての威厳が……

「あら？一匹も捕まえてないの？」

「…… 実は、この弓が悪いんだ。こっちは肉が食べたいのにその肉を一片も残さず消し飛ばすし、名前決まってるないし。アヌ様にもらったものだし……」

「あら？珍しく言い訳かしら？貴方が武具のせいにするなんて。」

悪戯っぽい目で俺に話しかけてくるイシュタル。

思うに結婚してからというもののイシュタルは少し性格が悪くなっただというか、素直になっただというか……

まあ、個人的には気遣いなしの距離感になった感じがするので嬉しいのだけでも。

「ふう、今日はもうこれぐらいにしておこう。勝負はイシュタルの勝ちでいいよ。」

こうして俺は狩り勝負で妻に負け、弓を使いこなせないまま王宮に戻った。

まあ、なかなか幸せだった。美人の奥さんを手に入れ、充実した日々を送っている。城壁も完成し、学校も千里眼なしで生徒自らに考えさせてクラス分けをできるようになってきた。

そうして順調な1年を過ごしていた。

——そして、嵐がやって来る。

滅びの日

◇ギルガメツシュ◇

朝起きると隣には全裸のイシュタル。つまりいつも通りの朝だった。

さらにいつも通りの挨拶と朝食を済まし、いつも通りにシエムと仕事に取り掛かる。暫くすると、いつも通りにイシュタルがかまってオーラを醸し出す。いつも通りにシエムがイライラし始める。いつも通りに俺の胃がムカムカし始める。

そう、いつも通りの優雅な午前だった。

ドオオオオオオオオオ

「っー！」

ーー強大な魔力の動きを感じ、思わず立ち上がる。なんだ今の!?まるで海の底から響いてくるような魔力の波動だった。

イシュタルを見ると青ざめた顔でこちらを見ている。

「こ、これは…… エンリル神の……」

エンリル神? 確かアヌ様と並ぶ強大な神様だった気がするが……

「ギルガメツシュ! な、何かこちらに迫ってきていませんか?」

イシュタルがあまりにも怯えた様子で尋ねて来たので千里眼を発動させて遠方を見る。すると、そこには……

「…………… 嘘だろ?」

ーー?????

このエンリル神から奪った『天の宝具』…… 流石は神の宝具というべきか、扱えるようになるまで一年も掛かってしまった。さらに扱

えるといつてもエンリル神が発動させたものとは比べものにならないほど威力は低い。しかし、あのウルクを滅ぼすには十分だろう。

さて、始めるか。

――終末裁定槍エンリル起動

――滅びの火は満ちた

――裁定の時だ

――いざ来たれ！滅びの水よ！

――人智滅す壅閉の蛇

◇ギルガメツシュ◇

それは巨大な水の蛇だった。全長何メートルあるかどうかとも認識できないほど長く、その胴体はウルクを飲み干して余りあるほどに巨大だ。あんなのが直撃したらウルクは瞬く間に滅びるだろう。

「っ！兵士長を呼べ！」

急いで兵士長を呼び寄せて指示を出す。

「兵士を二手に分担し片方に城壁の起動を、もう片方にはこのウルクの中心地までの避難を誘導させよ！」

くそっ！ここ一年はアヌ様たちと連絡が取れなくなっている。つまり神々の援護は期待できない。自分たちの力で乗り越えるしかない。

「イシュタルは城壁へ守りの加護を頼む！」

「ええ！分かったわ！」

あの蛇が何かは分からないがこうなった以上は妻の手も借りたい。「ギルガメツシュ！あの宝具はかつて人間を間引いたエンリル様の天の宝具よ。エンリル様は訳もなくあの宝具を発動させたりしないわ。何者かがエンリル様を誑かしたか、考えられないけれどエンリル様からあの宝具を奪った者がいると考えたほうがいいわ。気をつけてねあなた。」

触れ合うだけのキスを交わしてからイシュタルはライオンさんにまたがって城壁へと向かって行った。

俺も黄金の鎧を身に纏ってこのウルクで一番高い建物であるこの

王宮の天井へと登り、再び千里眼を発動させる。

見れば見るほど巨大だ。

しかし、その巨体ゆえに術者はその制御に苦勞しているようだ。今のところは直ぐに襲って来るといふ気配はない

「ギルガメツシュ王！城壁起動の準備が整いました！後は王の号令で起動します！」

兵市長が俺に報告をしに来た。よし、

「起動せよ！王の城壁！」

城壁に魔力が流れ、ウルク全体を覆う巨大な結界が形成される。

この結界は一度魔力を流し込めば暫くの間は起動し続ける。

さらにこの城壁にイシュタルの加護が加われば大抵の敵は諦めざるをえない。

王宮の下に住民たちが避難してきているのが見える。皆一様に困惑した様子で走っているがあれを見たら困惑は驚愕へ変わるだろう。「さてと、皆の者聞け！今このウルクにかつてないほどの危機が迫っている！だが心配することはな『ピシヤアアアアアアア！』い？」演説の途中で城壁の上から襲って来る巨大な蛇。

当然民たちの間から悲鳴が溢れる。

「落ち着け！この城壁はお前たちが今日この時のためにこの城壁を築き上げてきたのだ！この城壁さへあれ『ピシッ』ば？」

亀裂が走る結界。どういうことだ!?

再び千里眼を発動させてよく見てみると分かってしまった。

あの水蛇の宝具はおそらく粛正宝具というやつだ。人間を排除する際に最も力を発揮する。

人間を守るための城壁とは相性が悪い。

「くそっ！どうすれば……………」

ふと、視線を感じたので下を見てみると民たちが不安そうに俺のこを見ている。

そうか、王が動揺を見せちゃ駄目だよ……………

俺は真面目な表情を作って前を見据えた。

しかし、どうするかな。エアをぶっ放そうにも今発動させてしまうと結界ごと破壊しかねん。

そうなるとあの顔は破壊できても残りの水がウルクに降り注ぎ、この都市は水で満たされてしまうだろう。

それにエアの出力でもあの蛇全てを吹き飛ばせるとは到底思えない。

——どこからか聞こえてくる嘲笑を聞きながら俺は打開策を考えていた。

英雄王ギルガメツシュ

◇ギルガメツシュ◇

「喰らえ『王の財宝』！」

結界の外に展開した空間から剣群を射出してみたがなんの効果もなかった。なにせ蛇の身体を削つても直ぐに水で補強されるうえに体内に剣が飲み込まれていくのだ。………残念ながら俺はダモスに剣を回収させるのが楽しくて回収用の宝具を見つけていないので宝具の回収はできない。

試しに水だったら炎で蒸発するんじゃないか？という安易な考えでネタ装備「炎剣」も射出してみたが直ぐに体内で消化された。

………というか、気のせいじゃなければ余計に怒らせただけのような気がする。

ピシッ！

結界の亀裂は大きくなるばかり、水漏れまで始まっている。

「女神の加護（ガーデン・オブ・イシュタル）！」

突然亀裂の走っていた結界が修復されていく。これはイシュタルの加護の力か！

取り敢えず、これで時間は稼げた。状況を整理しよう。敵は水の大神、剣群による物理攻撃は効かない。エアなら吹き飛ばせるだろうが術者を排除しない限り、この蛇が再生し、襲って来る可能性がある。さらにエアではこの城壁の結界ごと破壊しかねない。かといって術者の排除を優先させて俺がこのウルクを出れば民たちはあの蛇に建物ごと喰われておしまいだ。さらに千里眼で術者を探ろうにも認識阻害の術でも使っているのか全く姿を捉えられない。

「ギルガメツシュ！」

状況をまとめているとイシュタルがライオンさんにまたがって戻ってきた。

「イシュタル、加護をありがとう。労ってあげたいところだが少し考え事に集中させてくれ。」

「考え事はいいのだけれどその前に民たちの不安を取り除いたほうが

いいんじゃないかしら？」

「……… 確かにそうだな。亀裂の走っている結界に、難しい顔をして黙り込んでしまった王が視界に入っているのは不安にもなるだろう。」

「聞け！我が民たちよ！状況は我々に不利となっている。かつて人間を滅ぼさんと猛威を振るった『天の宝具』が何故かこのウルクに迫り、その術者もその目的も未だに不明である。」

「取り敢えず、包み隠さず状況を伝えるところから始める。虚偽の情報を伝えたところで民たちはついてこないだろうからな。」

「しかし！案ずることはない。恐れることはない。なぜならばここにはこの俺が、ギルガメツシュがいるからだ！」

「迫りくる神を殺し、蛮族どもから女神イシュタルを救い、今日までお前たちの頂点に立ち続けたこのギルガメツシュがな！」

「取り敢えず、自分の自慢をしておく。君たちの王様はめっちゃ凄いなだぞ！ってアピールをしておく。」

「そして、ギルガメツシュとは王の名である！」

「王の使命とは己の法と心に従い自らの国と宝を守護することだ！」

「お前たちは我が宝ぞ！宝を盗人から守るは王の使命！お前たちは必ずこのギルガメツシュが………」

「あれ？なんか今俺凄いいこと言わなかった？」

「……… なあ、イシュタル。俺さっきなんて言った？」

「小声でなんか陶醉したようなうっとりとした顔で俺を見つめていたイシュタルに聞いてみた。」

「『聞け！我が民たちよ！状況は我々に……… ギルガメツシュが』と言っていたわ！」

「……… おそらく一言も間違えずにリピートしてみせたイシュタルに少し引きつつ俺は打開策を思いついた。」



案外脆いものだな「人間」も……………

結界が消え、ウルクへと侵入する自分の蛇を見ながらそう思った。物事はあっけなく済むとかえって達成感を味わえないものなのだと今日初めて学んだ。

さらに達成感を味わえなかったただけではなく軽い失望も感じていた。

こちらの計画を悉く潰してくれたあの「ギルガメツシュ」がこの程度で終わるとは……………

——そんなことをぼんやりと考えていると突然蛇の肉体が破裂した。

「なに!?!」

ギルガメツシュは乖離剣を使えないとこちらは踏んでいた。確かにあの剣は恐ろしいが民を第一に考えているあの王が被害を無視して使うとは思えなかったからだ。紅い暴風がウルクから吹き出し、あつというまに城壁に張り付いていた蛇の肉体を吹き飛ばした。

「あれは乖離剣か…………… フン! 結局はあの男も自分のことしか考えていないということか。」

何故か胸の内に芽生えた落胆の気持ちを感じながら終末裁定槍エソリルを地面に叩き付け、宝具を発動させる。

「…………… あれでは城壁の結界は使えないだろう。行け!」

人智滅す閉關の蛇（エンリ・シュティム）よ!」

宝具を発動させ、ウルクに襲いかかる『七匹の蛇』を無表情で眺めながら私は人間の終焉を見届けることにした。

◇ギルガメツシュ◇

「宝」というものは総じてその価値が高ければ高いほど盗人に狙われるものだ。しかし、宝の所有者も狙われているからといってなにも対策を講じないわけではない。

ではその対策とは何か?

まあ、基本的には大事に「宝箱」の中に入れておくよな?

「全員『王の財宝』の中に入ったな？」

隣にいたシエムに確認する。

「はい、私とギルガメツシュ王……とついでにイシュタル様以外は全員宝物庫の空間の中に入りました。」

「誰がついでですって!?!」

俺の考えたことは単純だ。民たちが大事な宝なら宝物庫に入れておけばいいじゃない？

この若干異空間となっている王の財宝の宝物庫なら収納人数は実質無限だし、このウルクの中でも安全な場所といえるだろう。

まあ、宝物庫ごと破壊されてしまえば全員この空間に閉じ込められてしまうのだけれども……

兎に角、俺が全力で暴れられるというのはいいことだ！

「さあ、二人とも避難を……」

「……………」

空間の中に入れと言ったのに黙り込んでしまった二人。

やがて二人の美女はお互いに顔を見合わせるとため息を一つついでから笑顔で俺のほうに向き直った。

「ギルガメツシュ王。私はいつも貴方が無茶をしたことを後から人伝いに聞き、その度に寿命の縮むような思いをしまりました。しかし、今日は貴方の無茶を宝物庫の中からはいえ近くから見守ることができません。不謹慎ですが私は嬉しく思っています。これで貴方に置いていかれずに済むと……………」

「シエム……………」

「気がつけばこんなに背も高くなって……………」

「シエム……………」

「……………どうかこの国を私たちをお救い下さい。ギルガメツシュ王。」

シエムは空間の中に入って行った。

続いてイシュタルがこちらに歩み寄って来た。

自然と視線が絡み合う。お互いに目で語り合う。

「……………武運を、ギルガメツシュ。」

やがてイシユタルはそれだけ言うとは軽く唇を重ねてきた。

「帰ってきたら話したいことがたくさんあるんだから。絶対に帰ってきなさいよ!」

そうして最後にもう一度だけ唇を重ねてイシユタルも空間の中に入って行った。

「……さて、行くか。」

頭を切り替える。まずはあの蛇を吹き飛ばす。被害を気にしないでよくなった以上はこちらの方が有利に立った。

しかし、考えなしにあの蛇を全力のエアで吹き飛ばすのもまずい気がする。あの再生力を見るに全てを根こそぎ吹き飛ばさなければ直ぐに復活してくるだろう。加えて言うとは敵が認識阻害に魔力を回す余裕があるということはこの蛇は本気でない可能性がある。

「まあ、悩んでいても仕方ない。王の城壁（ガーデン・オブ・バビロン）解除!行くぞエア!」

まず城壁の結界を解除し、エアの一撃を放つ。

破裂する蛇の肉体。しかし、すぐさま再生する。

それでもウルクに張り付いていた蛇は消えた。チャンスだと思いい術者を探そうとするがとんでもない悪寒が走り、千里眼で遠方を見る

と、

「……おいおい、嘘だろ?」

遠方を見れば襲い来る『七匹の大蛇』が……
確かにさつきまで本気じゃないんだろうなくとは思っていたが実は1/7しか力出してませんでしたくなんて誰が予想する?」

「っ!まずいな。」

七匹と言っても元は一匹の胴体の途中から七匹の蛇が無理やり生えて来ましたという感じか。例えるならヘラクレスが戦った蛇みたいな感じ。

しかし、二、三匹ならともかく七匹同時はきついかもかもしれない。

えっ?ヘラクレスは九匹まとめて倒したって?

………サイズが違うわ!?

千里眼で見た感じでも俺の魔力では全ての蛇を消滅させることは

できないと出ている。たとえば魔力回復用の宝具を使っても回復している間にむこうは再生を済ませて襲って来るだろう。

「くそっ！……ん？」

ふと迫りくる蛇の一匹を千里眼で見ると王の財宝から射出した劍群が体内に残っているのが分かった。

「消化されていないのか。まあ、そりゃ水の蛇だからな……」

ふと、妙なアイデアが頭を横切った。本当に唐突にフツと。

「――王の財宝！」

劍群が蛇に襲いかかる。煌びやかな劍が槍が斧が。しかし、その全ては蛇の身体を少し削りその体内に吸い込まれるにとどまる。

だが執拗に顔の部分を狙っているので多少は怯んでいる。

「よし・ライオンさん！」

俺はイシユタルと結婚したことで夫婦共有の随獣となったライオンさんを召喚してまたがり、蛇に向かって直進する。

「こちら辺でいいよ。ありがとうライオンさん！」

ある程度近づいたところで降ろしてもらおう。

劍群を放ちながら円盤のような浮遊宝具を発動し、空中でエアを起動させる。

紅い暴風が発生し、一気にこちらを向く七匹の頭。エアの風を止めようと迫りくる。

さて、非常に勿体ないが仕方ない。

「壊れた幻想（ブロークンファンタズム）！」

投影宝具ではないし、技の名前も多分違うけれど、兎に角奴らの体内にとどまっている俺の宝具が爆発する。

「『』『』ピシャー『』『』『』『』」

破裂する蛇たちの身体。再生しようとして水が元の形に戻ろうとするがそうはさせない。

『天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）！』

紅い暴風に蹂躪され消滅していく蛇の身体。

しかし、その身体はまだ残っている。

さて、本当に成功するのか疑問だがやる価値はあるか……

「よし、来い！」

俺の背後の空間が揺らぎ、王の財宝の空間からイシュタルが出てきた。

と言ってもその左手はまだ空間の中に入ったままだ。

「これから貴方の言う通りにウルクの皆の魔力を貴方に託すわ。頑張ってギルガメツシュ。」

イシュタルの右手が俺の肩に乗せられ、魔力が流し込まれてきた。

イシュタルの左手は指示通り王の財宝の中の民たちと繋がれているのだろう。

俺の思いついたアイデアは単純。おらに元気（魔力）を!!だ。

馬鹿らしく思うかもしれないがこの世界で俺ほどではないが魔力量の多い者は結構いる。攻撃の手を緩めるわけにはいかない以上はみんなの魔力を貰うしかない。

――みんなの魔力が俺に流れってくる。

――優しく穏やかな魔力。

――力強い魔力。

――やがて、願いが聞こえてくる。

――このウルクを守ってくれと

――まだ生きていたいと

――俺に、英雄王ギルガメツシュに勝ってくれと

「その願い受け取った！天地乖離す開闢の星々（エヌマ・エリシユ）！」
しかし、俺には誤算があった。このウルクに住むみんなの魔力を貫くというところがどういふことなのかきちんと理解していなかったのだ。

「……………やりすぎた。」

エアに注ぎこまれた膨大な魔力によってどこぞの時空で英雄王が見せた「天の理」ばりのエヌマ・エリシユが炸裂。数十キロに渡って大地に痛々しい爪跡を残していた。

「ん？」

さらに向こうから水が流れてくる。思わず身構えてしまうが水は蛇に変形するなんてことはなくただ俺が作ってしまったところを流れている。

「あ… ありのまま 今起こった事を話すぜ。気がつけば川を作ってしまったっていた。な… 何を言っているのかわからねーと思うが俺も分からない。

みんなの魔力だとか天の理だとかせんなチャチなもんじや断じてねえ！もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……………」



それは突然だった。紅い暴風が私の元へと迫っていた。

「っ！」

思わず空中へと退避するが左腕とその手に握っていた終末裁定槍エンリルを持っていかれた。

パリンツッ！

何かが割れる音を聞いたと思った瞬間、「水」がさつきまでいた場所から噴き出してきた。

「まさか…………… 終末裁定槍エンリルが壊れ、その魔力が水へと変換されたのか？」

地面には終末裁定槍エンリルの矛先が刺さっており、そこから水が溢れ出している。

水は大地の大きな爪跡を伝ってウルクへと流れて行く。
状況は未だによく分からないが人智滅す閉關の蛇（エンリ・シユ
ティム）を正面から打ち破ってみせたというところか……

「つち！」

ウルクのほうから飛来した魔力で生成された「矢」をギリギリで回
避する。

地面を転がってから前方を睨むとそこには

黄金の英雄王ギルガメツシュがいた。

宿敵エルキドウ

◆?????
私に「名」などない。

生きる意味も

生の喜びも

悲しみも

何もない。

あるのは「人間」への憎悪だけ。

この身体は神々の意思によって作られた人形。

この身体は神々の兵器……いや、「道具」だ。

私の意思は神々の意思に沿うもの。

……… ああ、だとしたらこの憎悪さえも作られたものなのかもしれない。

◇ギルガメッシュ◇

宝物庫の扉を開き民たちをウルクに戻した後、千里眼であの巨大な蛇の術者を発見した。

まだこちらには気づいていない。チャンスだ！

俺はアヌ様に貰った弓矢で攻撃を仕掛ける。

「なに?」

しかし、避けられる一撃。

完璧に隙をついた「矢」を避けられた以上は接近戦に持ち込むしかない。

「ハアアアアアア！」

移動用宝具で敵の前まで飛び、手に持った剣で切りかかる。

ウルクを滅ぼそうとした奴だ。勿論エアで吹き飛ばしたいがその前にこいつが何者かを知っておく必要がある。

ガキンツ！

相手は無手だ。速攻で沈めてローブを剥いでやろうと思っていたが何時の間に取り出したのか向こうも剣で対抗してきた。

さらに目の錯覚でなければ吹き飛んでいた左腕まで生えてきていた。

「つち！何者だ貴様！」

目の前で飛び散る剣と剣の火花。それを尻目に無駄と分かっている問いをする。

「……………」

案の定答えないローブ。

すると突然奴の身体から『槍が生えてきた』

「うおっ!？」

顔を狙ってきた槍を鎧の腕の部分で弾く。

一息つく間もなく奴は一気に身体中から武器を生やし、こちらの顔を狙って来る。

取り敢えず、バックステップで距離をとるが今度はなんと武器が飛んできた。

「残数は少ないが……『王の財宝』！」

手に持った剣と背後からの剣群射出で何とか敵の武器を全て叩き落した。

「…………… 貴様だなドラゴン、フンババ、イシユタル、そして、あの天の宝具を使ってウルクを滅ぼそうとしていたのは。だが生憎だったな。俺もウルクの民もあの程度でくたばるほど軟じやない。後は元凶たる貴様を倒せば全て終わりだ。」

確認の意味も込めて挑発してみると、奴は反応を示した。

「……ウルクの民は人間は生きているのか？」

男か女か判別できないような声だった。しかし、思っていた以上の美声に少し驚いてしまった。

「ああ、全員生き残っているとも。俺が宝物庫の中に匿うことで生き延びたのさ。残念だったな。」

すると奴は突然後方へと大きく下がり、両腕を大きく広げた。

それと同時に馬鹿みたいな魔力が奴に集っているのが分かった。

——気がつけば無意識のうちにエアを構えていた。

これは、まさか……………

『人よ、神を繋ぎ止めよう（エヌマ・エリシュ）！』

「っ！『天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）！』」

二つの巨大なエネルギーがぶつかり合う。

互いに相手を削ろうとせめぎ合う。

大地が消滅していく。

それはもはや原初の地獄。

生命体の存在を許さぬ絶対的な力。

「っ！」

「うむむむ」

その決着は双方共に痛み分け。

ギルガメツシユは黄金の鎧の何割かを持っていかれて、痛みを苦しんでいる。

対する敵はそのローブを吹き飛ばされ、その顔が顕わになっていた。

その美しい中性的な顔立ちは間違いなく俺が前世で見たことのある顔。

英雄王ギルガメツシユの唯一の友エルキドゥだった。

「っ！千里眼！………そういふことか………」

やっと俺はここにエルキドゥがいる意味が千里眼で分かった。

俺が圧政を敷かない以上はエルキドゥはやってこない。

しかし、エルキドゥ自体は俺が生まれたその時から保険として穏健派の神々によって作られていたのだ。

ならば俺がきちんと神々に逆らわずにいた結果、その保険はどうなってしまったのか？

決まっている穏健派に敵対する急進派の神々によって悪用されたのだ。

俺が千里眼で見たのは何も知らないエルキドゥに人間への憎悪の感情を埋め込み、その身体を道具のように扱う屑神ども。

喜びも悲しみも知らずただ憎悪だけを胸に抱えて道具として使われ続ける哀れな人形。

しかし、人形はそのことを不幸と思うこともできない。

名もないまま無銘の剣のように使い捨てられる。

………これは間接的にだが俺のせいなのだろう。原作のエル

キドゥは最期はどうあれギルガメツシユと共に友としてその命を燃やしたのだ。

きつと幸せだったのだろう。あの英雄王がエルキドゥとの日々を宝物と言ったぐらいなのだから。

しかし、だからといって俺は自分のこれまでの生に後悔があるかと問われても「否！」と答えるだろう。それほどに鮮烈な人生だった。だからこそ、このエルキドゥ……いや名もなき敵は王たる俺が倒さなければならぬのだろう。

「行くぞ、名もなき敵よ。貴様はこの英雄王ギルガメッシュが討ち果たしてくれようぞ。」

静かにエアを宝物庫に戻して無銘の剣を構える。

絶対に勝つ。民のために俺の人生のために。

そして、目の前の「命」のために……

◆????◆

英雄王ギルガメッシュは強い。それは認めるべき事実だった。

乖離剣を宝物庫に戻した時は正気を疑ったがそれでもその剣の腕前を見れば納得もした。

流麗で綺麗な正統派の剣を振るっているかと思えば突然不意打ちじみた変則的な剣技を繰り出してくる。

その体格でどうやったたらそんな威力になるのだというほどの豪撃を繰り出し、地面を割る。

こちらの動きを先読みしているかのように立ち回り、新たな武器を作ろうとすればすぐさま動きを封じに来る。

もう何時間打ち合っただろうか。ギルガメッシュは何十本目かどうかもわからないほど剣を折られ、その度に新たな剣を取り出して対抗してくる。

……この男はいつもそうだ。神々の指示によって私が仕掛けた罠をその輝かしい魂で乗り越えてみせる。

私なら諦めてしまいそうなことに平然と挑んでいく。

この苛立ちは何だろうか？

状況が進展しないことへの苛立ち？それともこの諦めを知らない男への嫉妬？

いや、馬鹿な。私が嫉妬などという感情を覚えるはずがない。

そうだ、だから私がこの男に羨望を抱いているなど……

くそっ！なんなのだ！この苛立ちは!?

……だが不思議なことに私は苛立ちと同時に理解不能な感情を感じ始めていた。

彼と剣を交え火花を散らす度に心が浮き立ち、頭の中が一瞬真っ白になる。

鉄と鉄の交わる音が空っぽの心に反射して身体中を駆け巡る。

ふと、ギルガメツシユの顔を見ると彼は笑っていた。

「意外に楽しいな！……そういえば、大人になってから誰かと真剣勝負をすることもなくなっていたな。お前はどうか、楽しいか？」

楽しい……分からない感情だ。

でもこの剣の舞踏が終わってほしくはないと思う。

……そういえば、私はあれほど「人間」を憎んでいたのに一度も「人間」と直接関わりを持ったことがないことに気がついた。

どうして関わってもないのにこんなに憎んでいたんだろう？

でもそんなことも全部どうでもいい。ただ今はこの時間を『楽しい』

「……なんだ、そんな顔もできるのか。ほら見てみる。お前今楽しそうに笑っているぞ。」

そう言いながらギルガメツシユは鏝ぜりあっていた剣を私に近づけてきた。

その剣の表面には見たこともない顔をした私が映っていた。

……いや、この顔を私は知っている。遠くから眺めた人間た

ちが浮かべていた顔だ。確か名前を

『笑顔』

と言ったか。

……………これではまるで私が人間のようではないか。

「まるで人間のようだなその笑顔は。楽しいんだつたら笑えばいい。殺し合いでも笑って終われるのならそれはずっと胸のうちに残るだろうさ。」

ギルガメツシユは一旦距離を取ると、剣を大きく構えた。

「お前を我が宿敵と認めよう。喜べ、笑え、そして構えよ。決着をつけるぞ。」

こちらにも剣を構える。

全ての音がうるさく聞こえる。

手に持った自分の剣を落としてしまいそうだ。

緊張する……………これも初めてだ。

終わりたくないけど目の前の男を倒したい。

こんな矛盾していて複雑な気持ちは初めてだ。

私は……………

——そして踏み込もうとした足が泥に戻って崩れる。

突然のことにバランスを崩して転倒してしまう。

まずい！徹底的な隙をさらした！

「おいー！どうした!?!」

しかし、さっきまで剣を構えていた男はその剣を地面に放り投げてこちらに駆け寄ってきた。

「……………どうやら……………終末裁定槍エンリルの……………代償……………の……………よう……………だ。」

無防備なその男をしかし何故か私は斬る気になれなかった。

「……………止め……………を……………ささな……………い……………のか？」

男は首を振って止めをささないことを示した。

「このような決着は俺が許さん!!おい、立て!立つのだ!!」

しかし、それは無理な相談だ。私の身体はどんどん泥へと返って行く。

いづれ訪れることは分かっていたこの肉体の死を何故かひどく残念に思った。

「お前、泣いているのか？」

ふと静かになったギルガメツシュが問うてきた。

言われてみれば確かに頬を雫が流れている。

「……………それは涙と言つてな、嬉しい時と悲しい時に流れるもんだ。これは俺の推測でしかないがお前は今、悲しくて泣いているんだろう。」

悲しみ……………これも初めての感情だ。

そうか、この胸に迫るような息苦しい感情が『悲しみ』なのか。

「……………我が名は英雄王ギルガメツシュ。ウルクを治める王だ。」

分かりきったことを突然話し始めるギルガメツシュ。

「そしてお前はこのギルガメツシュと張り合ってみせた存在、つまりは我が宿敵だ。」

宿敵……………そうか、私とこの男は「宿敵」なのか。

「だがこの俺の宿敵に名がないなどあつてはならんことだ。故に俺が直々に名を与えてやろう」

名を私に？

「……………『エルキドゥ』それがお前の名だ。次に俺と決着をつけるまでその名を忘れるでないぞ。」

『エルキドゥ』

それが私の名前？

「エル……キ……ドウ」

その名を呟いた瞬間、あるはずのない心臓が一際大きく跳ねた気がした。

身体中を説明できない暖かい血が流れている。

世界が私の、エルキドウの誕生を祝っているような気がする。

一個の命として、認められる。

「ギ……ルガ……メツシユ……ま……たね。」

私は生まれ、死んでいく。

それでもまた私の誕生と死を見届けたこの男にもう一度会えるような気がしたので悲しくはなかった。

「……ああ、またなエルキドウ。」

王は宿敵の最期を見届け自分の国へと帰って行った。

神々は俺が裁く

◇ギルガメツシュ◇

宿敵エルキドゥとの戦いを終えてウルクに戻り一週間ほど経った。
この一週間は兎に角忙しかった。

具体的に言うと、蛇の攻撃&エアの暴風で破壊されたウルクの城壁の修復に、何故か誕生してしまった川の整備などで本当に忙しかった。

さらにそんな中、空気も読まずに今さら帰って来たアヌ様とシュマシュ様に俺の堪忍袋の緒が切れるのは仕方ないことだった。

「どういうおつもりですかアヌ様！このウルクに未曾有の危機が訪れたというのに肝心な時におられず、危機が去ってからのこのこ帰って来るとは……最高神が聞いて呆れますね！」

最高神に向かって怒鳴り散らす俺。

完全に不敬だ、自害だ、腹切りだ、ライオンの餌だ。でも言わずにはいられなかった。

しかし、アヌ様は難しい顔をしたまま何も言い返して来ない。

……
なんか調子狂うな。

「……ギルガメツシュよ。儂らが不在の間よくぞこのウルクを守り抜いた。そして何の力にもなれず申し訳なかった。」

神妙な顔で頭を小さく下げるアヌ様。アヌ様が人に謝っている……

……
なんか調子狂うな。

「さらに儂はこれからお前に過酷な命令を下す。すまないが心して聞いてくれ。」

………
実は急進派の神々との対立が明確なものとなり、武力衝突が避けられない状況になった。儂とシユマシユの帰りが遅れたのも連中の妨害を受けていたからじゃ。」

………
えっ？ということはスーパー神話対戦ラグナロク開始？

「じゃが正面からぶつかれば双方共に甚大な被害を被ることになる。さらに人間たちも巻き添えを喰らうことになるだろう。よって不意打ちの先制攻撃を仕掛ける。」

なるほど、敵の足並みが揃う前に出鼻をくじっておこうということか。

「その不意打ちの任をギルガメツシユ、お前に任せる。」

………
なんか耳が狂ってきたな。

いやいや無理だつて！確かに俺はエアを持った超イケメンの完璧王だけでも、神々を相手にするにはいささか力不足な気がする。

「お前には『神々を殺す弓』を渡したはず……… 忘れたとか亡くしたとか言わせんぞ？」

あ……… ああ、あの弓か！

まさかあの弓を手に入れた瞬間から俺の運命決まっちゃった感じ？

「つ、つまりあの弓でもって急進派の神々を闇討ちしろと？」

「闇討ちではない！奇襲または不意打ちと言え！」

………
なんか頭痛くなってきた。

「……… 真面目な話、本当にお前にはすまないと思っている。お前にはこれまでも神々の衝突を避けるために、ウルクを守るために儂の

代わりに戦ってもらっていた。しかし、結局は争いを避けることはできずこうなってしまった。全て儂らの責任じゃ。」

アヌ様……………

「じゃがせめてこのウルクだけは守ってみせよう。そのためには神格が高くなく、神気もそこまで濃くないお前のような中身も外見も中途半端な半神の力が必要なのだ!!」

……………
なんかアヌ様で弓の試し撃ちを試してみたくなった。

「引き受けてもらえるか…………… ギルガメツシュユ？」

まあ、俺にだってこれがベストなことはよく分かっている。仕方ないか。

…………… いや自分を偽るのは止めよう。俺は奴らを殺したくて仕方ない。我が宿敵の身体を貶め、ウルクを滅ぼそうとしたその罪、万死に値する。連中はいづれアヌたちを利用してでも皆殺しにしようと思っていた。これは丁度いい機会だ。

「分かりました。神々を討ち、ウルクを守り通してみせましょう。」

「……………ということなんだ。」

夜、夫婦の営みを済ませたベッドの上でイシユタルに出張が入ったいきさつを話す。勿論俺のどす黒い本心はオブラートに包んで。

「……………そう。帰りは何時になるの?」

思っていたよりもあっさりと受け入れてくれたことに少し驚きつつ正直に話すことにする。

「それが……………分からないんだ。でも多分早くて1、2年。遅くて……………ごめん、分からない。」

そう、何年掛かるか分からないのだ。こればかりは神と直接対峙しない限りは分からないだろう。

「そう……………せめてこの子の出産に間に合ってくれば嬉しかったのだけれども……………」

「ああ、そうだな。俺もせめてこの子が産まれるまでには……………」

……………え?この子?

「あらごめんなさい。うっかり言うのを忘れてたわ。このお腹には貴方の赤ちゃんがいるのよ。」

……………はいiiiiiiiiiiiiiiiiii!?

エルキドゥと戦う前に言ってた話したい事ってこれええええええええええ!?

「うふふふ、ビックリした？」

「しました!!めっちゃしました!!俺に子供!?

「私としては当然貴方の子を産みたいのだけれども、貴方はどう？」

「少し不安そうに尋ねてくる我妻イシユタル。」

「答え?決まっているじゃないか!

「産んで下さい!産みまくって下さい!」

「よっしゃ!!出産までに絶対帰ってきてやるぜ!!

「神様がなんぼのもんじやい!!!!!!

「――そんな夜を過ごした次の日、シエムにも事情を説明し（何故か説教された）俺が留守の間の業務を振り分け、武器の手入れをしてからいよいよ出発の時間になった。」

「ご武運を貴方。絶対帰ってきてね。私のために、この子のために。」
「まだ膨らんでいないお腹に手を当てながらイシユタルが言う。いささか束縛的な言葉だが帰る理由が強制的に作らされていれば結構生き残る気力が湧いてくるものなのだ。死にかけているうちに学んだ。だから絶対に帰ってくる。……… 出産までに!!!」

「…………… またあなたは騒動の中に鈍器片手に突っ込んで行くのですね。必ず無事で帰って来て下さいよ。じゃないと英雄王ギルガメッシュの武器はダサイ鈍器だったと後世まで語り継がせますから。」

呆れたような顔をしながらも心配そうな目が顔を裏切っているシエムが言う。

大丈夫さ。遠距離から狙撃するだけだから無事に帰って来るさ。

……後、鈍器じゃなくて『剣』だから!!

「お前が留守の間のウルクは必ず私が守ってみせよう。安心して行って来い、我が息子よ。」

俺がいない間、ウルクに臨時で王に復帰してくれる父上が優しく俺の背中を押してくれる。隠居生活を楽しんでいたところを申し訳ない。

「ギルガメツシユ様ー！私は貴方のことが好き
変なことを言いかけたダモスを蹴り飛ばす。」

「……………コクリ。」

無言で頷くライオンさん。今回ライオンさんはウルクに残つてもらう。

思えばこれまで数々の苦難をライオンさんと一緒に乗り越えて来た。

もはやお互いに相棒とさえ呼べるだろう。

そんな相棒もいない状況で神に一人挑む俺。だがしかし、なぜか緊張はない。

それはライオンさんがいつも通りにハードボイルドだからだろうか。

……………それとも俺が胸の内に秘めている怒りのせいか。

最後にもう一度相棒と頷きあつてから俺はウルクを城門から街を

眺め、みんなの顔をもう一度見てから神退治へと出掛けた。

神だかなんだか知らないが、俺はまだやるべきことがたくさんあるんだ。

サクツと倒して帰宅させてもらおう。

あっ！この弓の名前思いついた。

『神々は我が裁く（ジャツジメント・オブ・ギルガメツシユ）』

……
なんか中二病っぽいな

未来へ

◇ギルガメツシュ◇

深く息を吸う。

標的を見据えたまま呼吸を止めて弦を引き絞る。

魔力を静かに流し、矢を生成する。

どれもここ数年で慣れた動作だ。

標的に動きはなく、こちらに気づいた様子はない。

限界まで引き絞った弦から指を離し矢を放つ。

矢は真っ直ぐに飛んで行き、標的の神核を………

「撃ち抜くはずが直前で身体をひねって肩を貫くにとどまった。

「ちっ！またか！」

実はこの「神々は我が裁く（ジャツジメント・オブ・ギルガメツシュ）」

で仕留められた神はそこまで多くない。

これは俺の狙撃の腕前が悪いというよりは神々の勘がよすぎると
いうか、

正直な話これほどまでに神が厄介な存在とは思わなかった。

後ろに眼でもついてんのか!?みたいな察知能力で避けるのだから
手に負えない。（本当に後ろに眼が付いている神もいた。）

さらに千里眼で見ると数キロ離れた所から狙撃したはずなの
にこちらの居場所を見つけ憤怒の表情で目前まで迫ってくる神の姿
が………

「仕方ない。エア！」

弓を仕舞って乖離剣エアを取り出し魔力を流す。

実は俺は今隠密のために黄金の鎧を装着していないのでエアを全
力で振るえない。

しかし、今回の神相手に黄金の鎧を着込んで正面からやり合う気はない。

「ふっ！」

エアを軽く振るい、地面をめくって相手の視界を塞ぐ。

相手はこちらを見失っている間に俺はこっそりと移動。そして、

「王の財宝！」

その大部分を蛇との戦いで失ったものの宝物庫には未だに武器職人たちが剣を補充してくれているうえに、ここ数年で倒した神から奪った宝具も入っているので本数は少ないものの中身自体は結構充実している。

「ぐっ!?!」

敵の神は目の前に次々と現れる宝具を捌ききれずにいる様子。

よし！今度こそ……

「神々は我が裁く（ジャツジメント・オブ・ギルガメッシュ）！」

完璧に隙をついた一撃はしかし直前で反応した神によって避けられる

「甘いな『神の追跡者（ジャツジメント・チェイサー）』」

しかし、彼方へと飛んで行くはずだった矢はその先に展開されていた空間の中に入り、宝物庫の中を通って数多の宝具と共に打ち出され、神の神核を貫いた。

…… まあ、かっこいいネーミングをしているがようは王の財宝を併用した射撃だ。

「ふう、やっと終わって『グオオオオオオオオ！』」

何故か高まる神の魔力。どうやら神核に少し罅を入れただけのようにだった。

「はあく結局こうなるのか。倒したと思ったら強くなって復活とか、いったい俺は何レンジャーなんだ？」

黄金の鎧を装着しながらぼやいてみる。

「ゴールド戦隊ギルガメッシュ参上!!……… 恥ず。」

ポーズまで取って現実逃避をしていたが敵さんが迫っている以上

は仕方ない。

「……行きますか。」

こうして俺はここ数年で慣れたように荒れ狂う神へと鈍器片手に突っ込んで行った。

◇イシユタル◇

あの人が神々との戦いに身を投じてはや4年。出産までに帰って来ると言っていた約束はどうしてしまったのか……

これまで約束は全て守ってきたあの人がここ最近連絡すらとれなくなっている。宝物庫の剣が減っているということは無事な証拠だと思いがそれでも心配だ。

「母上？」

ふとあの人に思いを馳せていると息子の『エルマドウス』が心配そうな顔で私に駆け寄って来た。

息子に心配されるとは……私もまだまだね。

「ごめんなさいエルマドウス、何でもないわ。さて！今日は何しましようか？」

うーん……と可愛らしく悩む息子。というか可愛すぎ。まるであつたばかりの頃のギルガメツシユだわ。

「今日は城壁に登ってみたいですよ！」

「今日はじゃなくて今日でもでしょ？そんなにあの城壁が好き？」

「はい！だってあれは父上が作ったんですよね？」

「ええ、そうよ……やれやれ一回も会ったことないのにどうしてこんなにお父さんっ子になったのかしら？」

「母上？」

「いえ、何でもないわ。さあ、行きましようか！」

◇ギルガメツシュ◇

ウルクよ……私に帰って来た!!

ふう、何年ぶりだ?ここ最近は時間の間隔がおかしくなってきたからな。

……まあおそらく俺の子供は産まれているだろう。出産までに帰るという約束、果たせなかったな……

ふと前を見ると金髪に紅眼の美女と同じ色の髪と眼を持つ子供が手を繋いで歩いていた。何故かそんなに離れていないのに姿はぼんやりとしか見えない。

すると美女が俺に気づいた。

暫く啞然としていたかと思うと急に顔を両手で覆って泣き始めた。子供の方は急に泣き始めた母親にビククリしてオロオロするばかり。

やがて母を泣かせた原因が俺にあると睨んだのかこちらへと近づいて来た。

「おい!お前!母上を泣かせるとはいったい何者だ!」

ここまで来れば俺にだってこの泣いている美女と子供の正体は分かる。

というか何故ぼんやりとしか見えなかったのか分かった。

俺も泣いていたからだ。

……さて、俺の正体だったな。

「我が名は英雄王ギルガメツシュ。このウルクを統べる王である。そして……お前の父親だ。」

こうして俺はウルクに帰って来た。

――俺の帰還を知ったウルクはそれはもう凄かった。民たちは英雄王の帰還を喜び3日3晩宴が続いた。父上からもみくしやにされながら酒を飲みまくった。裸になったダモスを転移宝具で場外へと飛ばした。シエムに泣きながら説教された。息子に冒険の話がせがまれた。

そうして祭りを終え、何時の間にか賢者モードになった状態でイシュタルとベッドの上で向かいあっていた。

彼女には迷惑を掛けた。いや彼女だけではない、多くの人たちに迷惑を掛けた。そして、これからも……

「なあ、イシュタル。」

「うん？」

可愛らしく首をかしげて返事をするイシュタル。

彼女にこれから残酷なことを言わなければならぬと思うと胸が痛い。仕方がない。

「実は……」

――次の日、俺はイシュタルと共に神殿を訪れた。

そこではアヌ様が静かに待っていた。

「ギルガメツシュよ。此度の働き真に見事であった。神々の出鼻を挫けとは言ったがよもや壊滅にまで至らしめるとは……………」

「……………」

「何を黙り込んでおる？…………… いやそういうことか。安心せい、お前の言いたいことは分かっている。だからその眼で儂を見るな。」

こつそりと千里眼を発動させていたのがバレたようだ。

「…………… お前はこう言いたいのだろうか？儂らの時代は終わったのだと。ここから先は人間の時代なのだ…………… だがお前は知っている筈だ。お前の治めている人間たちの愚かさを、醜悪さを。」

ここ数年、神々と戦い続ける中で分かったことがある。

「欲望のままにこの美しい大地を汚し、私利私欲のために同じ人間同士で傷つけあう。儂らのような神という存在がなければ奴らはまとも生きることにすらできん！そうだ！！奴らには必要なのだ！儂が！神が！！」

「いいえアヌ様。貴方はもう必要ないのです。」

そう、神はもう必要ない。

「…………… なに？ではいったい誰が人間を『管理』するのだ！奴らを束ね、支配するこの重要な役割をいったい誰が果たすと言うのだ！！奴ら目を離すとすぐに下らん争いを始めるのだぞ！！」

『管理』ね……………」

「残念ながら管理する者はいませんが『導く者』ならここにいます。」

「ほう？貴様が人間を管理するのかギルガメツシュ？」

「だから管理ではないと申し上げた筈。導くのです…………… そもそも人間を管理すると言い放った時点で貴方は支配者に相応しくない。」

「何だど？」

「アヌ神よ、貴方のいう管理とは人間をこのままの状態で維持し続けることでしょうか？」

「他に何かがある？ 奴らは直ぐに下らん思い付きで自然を汚すのだぞ！！」

「それは仕方ないことでしょう。なにせそれが彼らの存在意義なのですから。おっと失礼、自然を汚すことが存在意義と言いたいのではないのです。俺が言いたいのは先ほどアヌ様がおっしゃった下らん思い付きです。」

結局のところアヌ様も急進派の神々も人間のことを人間として見ていなかったのだ。

「人間の存在意義は進み続けることです。下らない思い付きから己の考えを広げ、周りの自然や人を犠牲にしながら前に進み続ける。そこそが人間の存在意義です。だからこそ『管理』ではいけないのです。現状から停滞したまま前に進まず自己の限界に挑まないなど人間ではありません。」

人間は人間だ。神々には申し訳ないが産まれてしまった以上は人間なのだ。

「……だがそれが人間の存在意義だとしても自然を破壊している理由にはならない。自然は農らのものだ。」

「いいえ、この自然は神々のものではありません。」

「……では人間のものと？ 自分たちのものだから汚してもよいと？」

「いいえ、人間のものでもありませんし汚していいものでもありません。」

「ではいったい誰のものだ？」

「誰のものでもありません。この空にも大地にも所有者の名前など書かれておらず、ただそこにあるだけです。そう、そこにただ存在しているだけなのです。それを人間はやれあつちからこつちは自分のものだやれお前は大地を取り過ぎだのと確かに醜く愚かですね。そうやって自然を星を食いつぶしていくのでしよう。」

「そ、そうだ！だから儂はお前たちを管理しなくてはならないと言っておるのだ!!」

「…………… アヌ様、この星の寿命がいくつかわかりますか？おそらく分からないでしょう。しかし、この星の終わりまで美しい自然をぼんやりと眺めながら朽ちていくおつもりですか？そのように停滞した生に何の意味があると言うのです？」

「……………」

「人間はこの星を滅ぼすでしょう。欲望の赴くままに。その過程で多くの悲劇が起こり、多くの自然が汚されるでしょう。」

しかし、人間は進み続ける。それが存在意義なのだから。そしてこの星が終わりを迎えた時、彼らは新たな星を求め、旅立つでしょう。進み続けるために……………」

「…………… 人間はもう儂らの手の中から巣立っている？」

「ええ、とつくの昔に。」

「…………… 進み続けるか…………… いいだろうこの先からはお前たちだけで歩かせよう。なあギルガメッシュ？」

…………… あの顔を見るにどうやらこつそりと王の財宝からこの会話をウルク中に流していたことがばれていたようだ。

「実はな、儂も最近存在し続けることに疲れておつたのだ。今回の問答をもって儂の生を終わらせるとしよう…………… 儂はもう行くが

お前は どうする？ イシユタル。」

「…………… 私は息子の成長を見届けてからそちらへ行きます。今までありがとうございます。ございましたお父様。」

うむ。とアヌ様は頷くと両腕を大きく広げながら立ち上がり、ウルク中に響き渡るような大きな声で語り始めた。

「人の子らよ聞け！ お前たちはこれから自分たちの足だけで進んでいくことになる！ 完全な自由だ！ だがしかし、安易に喜ぶことなかれ！ これからお前たちが直面するのは人間同士による絶えない悩み事や争い、さらには理性なく襲いかかる理不尽な自然だ！ お前たちはもはや我々神々の加護を得ることのできぬその脆弱な身体でその全てを乗り越えなくてはならない！ 怖いだろうか？ 恐ろしいだろうか？ だが、恐れることなかれ！ お前たちの生き汚さは儂がよく知っておる。進め！ 進むのだ！ そしてその果てにお前たちが産まれてきた意味の答えを出すのだ！…………… 頑張れよ。」

最高神アヌは神としてこの世を去った。

——2年が過ぎた。アヌ様に続いて他の神々もポツポツと現世を去るようになっていった。

俺はというと、当然忙しかった。

法整備から始まり学校の制度も自主性を重んじるものに整備した。俺の息子も学校に通わせて帝王学を学ばせている。

できちゃった川は終末裁定槍エンリルが水源となっていて、分かったので水中にエンリルを奉る立派な祭殿を作らせた。

仕事だけに忙しかったわけではない。遊びもちゃんとやった。

ウルクの技術を全て結集させ、さらにまだ現世に留まっていた太陽神シユマシユ様の力も借りてヴィマーナを完成させた。

ライオンさんに乗ったイシユタルとヴィマーナに乗った俺とで鬼ごっこをしたりもした。

地面に王の財宝から剣を大量に突き刺し、炎剣による演出を使って「無限の剣製」のものまねをやったりもした。

王の財宝が未完成なことに最近気がついて急いで財宝をかき集めたりした。(当然間に合わなかったので未完成のまま)

本当に忙しくて楽しかった。

そして今日、目が覚めた時点で気がついた。

……………俺の命は今日終わると。

実は神々との戦いの最中、とある神から呪いの掛かった一撃を受けてしまった。

別に俺は油断も慢心もうっかりもしていなかった。ただそいつの一撃が変態的な軌道を描いて俺に直撃したのだ。

さらに運の悪いことにその呪いは数年間の間は身体の中に潜んで根を張り、攻撃を受けたことを忘れた頃くらいに命を吸い取り始めるのだ。

……………あの絶対に避けられないような軌道といい、この嫌らしい効果といい、個人的にはこの時代からあるのかどうかは知らないが抑止力的な何かが働いている気がする。俺が強くなり過ぎるのを危惧したか？まるで影の国の女王みたいだ。

まあ、俺も精一杯解術する方法を探したりいろんな宝具を試してみたが俺の身体と一体化している以上は無理だった。

このことはイシュタルにだけ伝えてある。

伝えた時はそれはもう泣かれた。泣きまくっていた。俺もちよつと貰い泣きした。

そしてひとしきり抱き合って泣いた後、残る命を精一杯使って幸せに生きようと決めたのだ。

「…………… イシュタル。悪いが今日までみたいだ。」

「…………… そう。」

お互いに覚悟していたことだ。そこまで驚きはない。それでもやはりイシュタルは今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「みんなを呼ぶ?」

いや、俺は首を横に振ると玉座までイシュタルの手を借りながら歩いていった。

最期の時をいざ迎えるとなると何をしていたいか分からないものなんだと今知った。

…………… そうだ！せっかくだから「千里眼！」

俺のウルクが見える。そうだなまずは、「学校」を見てみるか。

——子供たちが剣を振っている。あれは剣技指導クラスか。

相変わらずダモスの変態剣技指導は続いているようだ。

まあ、あの不意打ち特訓のおかげで不意打ちが得意になったのだからあのダモスにも感謝してやらんこともない。

——子供たちが先生の話を真剣に聞いている。あれは政治指導クラスか。

ん？あれは…… エルマドウスか！そうか、俺の息子がああやって真剣な表情で授業を受けているとは…… なんか感慨深いな。あまり父親らしいことはしてやれなかったが頑張れよ。

さて、次は川に行くか。

――民たちが何か頭に頭を下げながら水を汲んでいる。

ん？あの特徴的な口の動かし方をする名前は

ギ・ルガ・メッシュユ？

いや、なんか感謝されてもあんまり嬉しくないっていうか……
もういいや。元気でな俺の民たち。

さて、次は城門か

――見張りをする兵士たち。

……
驚くほど何もないな。職務ご苦労さん。

続いて街中を見ている

――あれは…… 父上だ！

ん？果物屋の女の子にすり寄って…… 口説いてる!?

何やってんの父上!?

……
死に際にとんでもないもの見てしまった。

次は……

――黒髪の美しい女性が忙しそうに指示を出している。

シエムは相変わらずご苦労さん。というか本当に今までありがとう。

「……………ところでシエムはいつ結婚するんだろう？」

何度かお見合いを進めてみたが全て断られた。本当に美人なのに勿体ない

彼女には本当に幸せになってほしい。

そして最後にイシユタルと目を合わせた。

「なあ、俺がいなくなつてウルク大丈夫かな？」

急に不安になつて来た。

「あら？ 私たちは信用ならないかしら？」

「…………… 何名か心配な人が…………… いやもう考えないことにしよう。

そうだな、もう任せると決めたからな。後は任せる。」

さて、言うことがなくなつてしまった。

…………… いやあつたな。

「イシユタル。今までありがとう。愛している。」

短い言葉だがこれで十分な気がした。

「…………… 私も愛しています。」

その言葉に満足して目をゆっくりと閉じる

——突然目が勝手に開き千里眼が発動した。
なんだ!?! なんだこれ!?!

そして映し出されたのは人間の歴史。これから始まる歴史。
争いを繰り返し

悲劇が積み重なっていく

それでも前に進んでいく人間たち

発展していく街、乗り物、道具

減っていく豊かな緑

やがてこの星を自分たちで滅ぼし、宙へ……………

「何を見ているの？」

「…………… 未来だ。」

そして、今度こそ目を閉じ、暗闇に身を任せた。

英雄王ギルガメツシユ享年26歳。

やり残したことはあるが満足のいく人生だった。

「番外編」

「(新) ギルガメツシュ叙事詩」

ギルガメツシュ叙事詩とは、実在したとされる古代ウルクの英雄王ギルガメツシュの墓の内部に記されていた物語である。

その人類最古の英雄伝記とされているギルガメツシュ叙事詩が後世に与えた影響は凄まじく、後の英雄物語の大部分はこのギルガメツシュ叙事詩がモデルとなっっている。

その明確で分かりやすいストーリーからは多くの派生作品が生まれ出され、それらの系統の作品をひとまとめにしてギルガメツシュロマンスという。

さて、ギルガメツシュ叙事詩の解説に入ろう。

物語はギルガメツシュが産まれたところから始まる。ギルガメツシュは人間の父王ルガルバンダと女神ニンスンの中に産まれた半神半人だがその血は2/3が神という人間よりは神よりの血筋であった。

ギルガメツシュ叙事詩を語る上で欠かせない存在がいる。ギルガメツシュの妻の美しい女神イシュタルである。

彼女とギルガメツシュの出会いはかなり早い頃であった。ギルガメツシュがおよそ5歳の頃に神殿を訪れた時に2人は出逢った。

5歳の頃のギルガメツシュ王子は日々剣の稽古に励み、帝王学を学んでいたという。

そんなある日、ウルクにドラゴンが迫って来た。女神イシュタルと神殿にいたギルガメツシュ王子は兵士たちだけに戦わせることを良しとせず、この危機を前に自ら剣を取って立ち向かう。

そんなギルガメツシュ王子に女神イシュタルは加護と自らの随獣を貸し与えた。

天を舞うドラゴンへと立ち向かうギルガメツシュ王子。巧みに剣と神獣を操り、見事ドラゴンを退治せしめた。これが人類最古のドラゴン退治である。

やがて時は流れ、ギルガメツシユは「王子」から「王」へと変わった。ここからギルガメツシユの歴史は加速する。

王になったギルガメツシユはまず最初にウルクに襲いかかって来る人食い狼に凶暴な猪などの魔獣たちから民を守るために巨大な城壁を築き上げた。この城壁の一部はまだ残っており、世界遺産に登録されていることは諸君も知っていることと思う。

さらにギルガメツシユが成した偉業の中でも一際大きな功績として讃えられているのが「学校制度」の設置である。

これは帝国が滅びるまで続けられた制度で、再び学校ができるのはこれから2000年も後になる。

ギルガメツシユが王になって数年が経ち、遂に物語は動き始める。

なんと森の神フンババがウルクに迫ってきたのだ。

この危機に再び剣を取り立ち上がるギルガメツシユ。

彼は天空神アヌと太陽神シユマシユから加護を授かりさらに女神イシュタルからも再び加護と随獣を受け取って意気揚々と神退治へ出掛けた。

森の神フンババは強かった。

その吐く息は死。

その身体は森の化身にして恐怖の体現。

しかし、ギルガメツシユは諦めない。

何度も何度も立ち向かい、やがてイシュタルの随獣が作った隙を突き、剣を思いつき振り下ろした。

森の神は滅びた。ギルガメツシユは上機嫌でウルクへと帰還する。

しかし、帰還した先で聞かされたのは長年懇意にしていた女神イシュタルが敵対しているキシユの者たちによって攫われたという知らせだった。

ギルガメツシユは激怒した。そして怒りのままにウルクを飛び出し、一直線にキシユへと向かった。

3日は掛かる道のりを半日で走破し、キシユの長エンメバラゲシに

よって穢されようとしていた女神イシユタルを寸前で救い出した。

そしてそのままの勢いでギルガメツシユは女神イシユタルに愛の告白をする。

「ああ、美しき女神イシユタル様！私は貴方のことをずっと思っていました。どうか私と添い遂げていただけませんか？」

ギルガメツシユを受け入れる女神イシユタル。

この連れ去られた美しい女を男が救いに来るというのは昔からよく使われる手法である。

キシユを新たな領土に加え、妻を手に入れたギルガメツシユは意気揚々とウルクに帰還する。民たちはギルガメツシユを讃え、イシユタルとの婚約を祝福した。

やがて2人は結婚式を挙げ、正式な夫婦となった。

幸せ絶頂のギルガメツシユにしかしまたしても危機が訪れる。

エンリル神の力を奪ったギルガメツシユの宿敵エルキドウがウルクの城門すら軽く上回る大洪水をウルクに向かって放ったのだ。

死の恐怖に怯える民たち。しかし、ギルガメツシユは恐れない。

ギルガメツシユは迫りくる大洪水の前に立ちふさがり、手に持つ剣を振り下ろした。

すると洪水は真つ二つになり、ウルクは絶滅の危機を回避した。

さらにギルガメツシユの放った一撃の余波で地面が裂け、洪水の水が流れ込んで川となった。

これがティグリス川、ユーフラテス川に並ぶ三大河川、「ギルガメツシユ川」の名前の由来とされている。

この迫りくる大洪水は後の旧約聖書に出てくる「ノアの箱舟」の元になったエピソードとされている。

そして水を真つ二つに分断したというギルガメツシユの技はこれもまた旧約聖書に登場する「モーセ」の海割りと似ているため、これも旧約聖書の元になったとされている。

洪水を防いだギルガメツシユは泥から造られた神々の兵器エルキドウと対峙する。

2人の力は拮抗しており、お互いに何度も剣を持ち替えながら戦い

続けた。

ギルガメツシユは自分に匹敵する力の持ち主であるエルキドゥとの戦いを心の底から楽しみ、かつてないほどの戦いを讃えエルキドゥを宿敵として認めた。

しかし、2人の決着はつかなかった。

大洪水を起こしたエルキドゥの身体には限界が訪れていたのだ。泥へと還っていくエルキドゥの身体。

ギルガメツシユはそんなエルキドゥにたいそう悲しんだ。

しかし、再び対峙し決着をつけることを互いに約束しギルガメツシユは宿敵の最期を見届けた。

やがてギルガメツシユはウルクを滅ぼそうとした神々の罪を償わせるために自ら神々へと戦いを挑んでいった。

これは神を信仰していた時代においては到底考えられないことである。

しかし、ギルガメツシユは時代に流されることなく自分で考え、この決断をしたのだろう。

長きに渡る神々との戦いについてはこの本ではなく、私が書き下ろした本

「ギルガメツシユと神々の戦い」に書かれてあるのでそちらを読んで頂きたい。

神々との戦いを終えてウルクに帰還したギルガメツシユは天空神アヌから正式にこの地上を統治する権限を与えられた。

アヌ神は現世を去り、全てはギルガメツシユに託された。

まずギルガメツシユは法を作った。人類最古の法だ。

単に人類最古というだけではなくその内容も近代とは時代背景が異なるので参考になるものではないものの、大変こと細かく素晴らしいとされている。

現在でも「ギルガメツシユ法典」の原本は大英博物館に展示されて

いる。

書店に行けば分かり易くまとめられた本があると思うので諸君も一度手に取ってみるといい。

さらにギルガメツシュは川をきちんと整備し、民たちの生活の役に立てようとした。

これまで語ってきたようにギルガメツシュとは武力、知力の両方に優れた王だったということが分かる。

武力のほうは人間とは思えない逸話が多いためおそらく後世まで伝説が伝わるうちに歪められてきたものと推測できるがその知力のほうは紛れもなく本物であると考えられる。

なにせ3000年経った今の我々がようやくと教育の大事さに気づき始めたというのにギルガメツシュは生きるのに精一杯だったであろう紀元前の世界でもう国を発展させるうえで重要な教育の大事さに気がついていたので。

彼こそまさしく名君といえるだろう。

名君とは国の外にも内にも目を配り、その国を発展させた王のことを指す。

武力で他国を押しつぶすだけではいけない。

内政ばかりで外の危機に目を向けないのもいけない。

広い視野でもって世界を見渡し、国を守り発展させた者にだけ名君の称号が与えられるのだ。

ーしかし、皮肉なことに名君というのはあまりこの世には留まっていられないものだ。

ギルガメツシュは神々との戦いの最中に受けてしまった呪いによつてその命を蝕まれ、早々にこの世を去つてしまった。

おそらく26歳ほどだと思われる。

ギルガメツシュの葬式は悲しみに包まれたウルクの中で行われた。せめて王のことを忘れぬようにと民たちは巨大な墓を作った。

そしてその中に王の遺体と王が生前集めていた財宝が収められた。この巨大な墓もまた世界遺産に登録されていることはご存知だと思ふ。

もしも彼がもう少し生きていられたのならばきっと歴史は大きく変わつていただろう。

ギルガメツシュの死後王位についたのはギルガメツシュの実の息子である

『エルマドウス』であつた。彼の名を知らない人もまたいないだろう。偉大なる父から国と民を受け継いだエルマドウスはウルクの威信を知らしめようと他国に遠征を繰り返し、遂に世界をウルク改め「バビロニア帝国」の下に一つにした。

父のギルガメツシュを大変尊敬していたとされるエルマドウスは屈服させた国のあちこちにギルガメツシュ王の像を建てさせ、その逸話を崇めさせた。

また支配した国も全て父ギルガメツシュのものであると言いつつ続けた。

全ての国を支配下に置いたエルマドウスだがその政治手腕はお世辞にも優れているとは言えず、孫の代であつさりとして帝国は崩壊してしまつた。

――神々に代わって地上を治めたギルガメツシュ。

「神」という一つの古い神話に終止符を打ち、現代でも通じるような法、学校などを整備したその在り方はまさに「革新者」と呼ぶに相応しいだろう。

伝説の真偽はどうあれ諸君も常に広い視野を持つことを忘れないでほしい。

そうすればきっと君たちも時代に流されない「革新者」になれるはずだ。

「人物設定」

真名：ギルガメツシュ

身長：185cm

体重：69kg

出典：(新)ギルガメツシュ叙事詩

地域：バビロニア、ウルク

属性：混沌・善

特技：カリスマを感じさせる演説（プロパガンダ）

好きなもの：自分の顔、美人、ウルクの民

苦手なもの：「うっかり」という概念、蛇

天敵：エルキドゥ、クーフーリン

〈人物〉

産まれた直後のギルガメツシュに変な魂が混ざった結果誕生した英雄。

性格としては基本的には大らかで自分の道に一直線な英雄らしい男。

しかし、あまり表には出ないが原作のギルガメツシュのような残忍さや冷酷さも持ち合わせており、敵対者や罪人へは容赦がない。

また若いころに死去してしまったので原作のギルガメツシュよりも精神的に未熟な面もある。

神話編ではあまり目立たなかったがウルクに転生して王として過ごすうちに価値観や生死観が歪んできており、果たして現代に適応できるのかどうかは心配なところ。

王としては常に広い視野を持つことを心掛け、僅かに残っていた現代知識などを活用してウルクを発展させた。

基本的には自己中心のだがウルクの民を思う気持ちは間違いなく本物。

当初は強大な力を持つ神々に恐れを抱き、流されるまま戦っていたが、宿敵エルキドゥの末路や滅びの危機に陥りかけたウルク、そして4年に渡る神々との戦いを経て原作のギルガメツシュと同様に神を

廃することを決意した。

死後は神格化されたことになっているが本人は神様殺しまくった手前、他の神と顔を合わせるのも気まずかったので英霊の座にしがみついている。

見た目は神々との戦いで髪を切る余裕があまりなかったため長髪になっている。

イメージとしてはPSYCHO-PASSの槇島聖護が一番近い。

〈能力〉

基本的には千里眼による先読みを駆使した接近戦に「王の財宝」の中距離殲滅戦、そして弓による遠距離射撃という近・中・遠すべてこなせる万能型の戦士。また不意打ちも得意。

しかし、決して無敵というわけではない。

まず、多くの伝説を残しているものの敵の多くは神や魔物などの人外だったため、対人戦の経験が少なく圧倒的な技量を誇るサーヴァント相手だと少々分が悪い。

また、クーフリーン兄貴との相性は最悪。

なにせ矢避けの加護でこちらの対神宝具の弓を避けるうえに強力な呪いの魔槍であるゲイボルグには呪いで死んだ身としては少々苦手意識を覚えるらしい。さらに槍捌きも見事なもので基本的に剣しか使わないギルガメッシュではクーフリーンの技量に追いつけない可能性が高い。

……だがここまで言っておいてなんだがエアを使えば全て丸く収まる。

ちなみに原作のギルガメッシュと戦った場合、多分勝つのは原作のギルガメッシュと思われる。

これについてはまた機会があればその時に。

余談だがもしも抑止力からの一撃を避けていた場合、120歳まで生き続け、さらにその後も世界の外側から人類史を見守るということになっていった。まさにスカサハの先輩。

勿論その戦闘能力も上昇し続け、手の付けられない化け物になっていった。

……………
抑止力はこいつを殺して正解だった。

〈固有スキル〉

カリスマ(A+)：ここに立っただけで王者の気を漂わせるという便利なスキル。また自分の演説にも説得力を持たせられる。生前ギルガメッシュが最も多用したスキル。これのおかげで英雄になれたと言っても過言ではない。実は結構危ないスキル。

紅顔の美少年(B+)：これとカリスマの複合技でイシユタル様の心をほぐし、魔改造を施した。

黄金律(B)：上のスキルが上がった影響かランクが下がっている。けどまあ問題はない。

神性(A+)：神を廃したものの嫌いというわけではないので別にランクは下がっていない。でも神々の同窓会に参加する気はない。

千里眼(A)：相手の過去を覗き見る、敵の戦闘能力を見破る、限定的な未来予知をする、などなどとても便利な眼。でも原作のギルガメッシュにははるかに及ばない。

神殺し(A)：これと下記のスキルが合わさることによって神様絶対殺すマンへと変身する。スキルランクが低いと思われるかもしれないが基本的にアサシンとかエミヤみたいな感じで神を討ち取っ

てきたのでこんなもんかと……

星の開拓者（EX）：原作のギルガメツシュよりも明確な形で旧き神々の時代に終止符を打った功績から与えられた。

うっかり（A+）：ギルガメツシュが作者の手から離れて暴走した結果入手した隠しスキル。効果は名前の通りだが、幸運ランクAのおかげで必ずしもマイナスになるということはない。また予想外の方向からのアプローチに役立つことがある。（例；乖離剣を早めに手に入れた）

【シエム】

ギルガメツシュに幼少の頃から付き添っている黒髪青目の美女。秘書としての能力も高く、公私共にギルガメツシュを支え続けた。

ギルガメツシュとはお互いに強い絆で結ばれており、お互いによりき理解者だった。

実は、ギルガメツシュのことが異性としても好きだったがイシユタルに取られたため気持ちを伝えることができなかった。しかし、めげることなくギルガメツシュの側室にしてみらおうと考えていたがそんな矢先にギルガメツシュがこの世を去ってしまったため、その願いも叶わなかった。

結局生涯独身だった。しかし、ギルガメツシュと国のために尽くした人生に後悔はないらしい。

【イシユタル】

ギルガメツシュによって魔改造された女神様。

初期の頃はギルガメツシュを自分好みの人形にしようと思っていたが結局ギルガメツシュのカリスマと紅顔の美少年によるスキルコ

ンボによって少し気を許したところを日本人固有スキルK I K I J O U Z U や O M O I Y A R I によって心を開き、逆にギルガメツシュ好みの女にされた。夫婦仲は非常に良い。

息子の成長を見届けた後は神の座にいるものの大抵はギルガメツシュの座のほうに入り浸っている。

ちなみにイシュタルをギルガメツシュが籠絡していなかった場合、ギルガメツシュがシエムと結婚？イシュタルが美しいギルガメツシュに目を付けて告白？ギルガメツシュ拒否？イシュタル激怒からのアヌ様に頼み込み天の宝具発動!?ウルク滅亡というルートになっていた。

【エルマドウス】

ギルガメツシュとイシュタルの間に産まれた息子。

母イシュタルに父ギルガメツシュの雄姿を語り聞かされながら育ったため父上すげええええ!!状態で帰って来たギルガメツシュと会った。

ここでギルガメツシュが少しでも人間らしきを見せておけば良かったものを、寿命が残り少ないことに焦っていたギルガメツシュは王としての仕事に打ち込み、息子の前では英雄王としての姿しか見せなかった。

さらにその状態で死んでしまったのでエルマドウスの中でギルガメツシュは父ではなく最後まで国のために尽くした英雄王という認識になってしまった。

女神様な母イシュタルもまともな子育ての方法など分からなかったため、ギルガメツシュを慕っているならそれでいいか!と考えさらにギルガメツシュの凄かった部分だけを強調して煽ったのでもはやエルマドウスの中でギルガメツシュは神にも等しい絶対の存在となった。

自分にできることは何か?と考えた結果、父と父が守ったこのウルクの凄さを世界中に見せつけることだという結論に至り、世界征服を開始した。

ギルガメツシュの成果によって生まれた軍隊の力は凄まじくこれにますますギルガメツシュを尊敬しながらも順調に快進撃を続け、本当に世界を一つにしてしまった。

ギルガメツシュの威光を知らしめることにしか興味がなかったの
で支配した国の統治には興味がなかった。

また生前ギルガメツシュがやけに一生懸命財宝を集めていたのを覚えていたため、この支配した国の財宝を父に献上したら喜んでくれるかな？という考えで父の墓に財宝を献上し続けた結果、「王の財宝」完成。

毎年増えていく国単位の財宝にギルガメツシュは顔面蒼白。

世界もエルマドウスが集めた宝なのにギルガメツシュに捧げると言つて聞かないエルマドウスに困ったものの、もういつか！と開き直りギルガメツシュの宝具となった。

ちなみにサーヴァントとして召喚された場合、財宝自体はエルマドウスが集めたものなので本人も「王の財宝」が使える。

ギルガメツシュも召喚された場合、ギルガメツシュと敵対する可能性は0なので敵はメソポタミア最強親子によるダブルバビロン！を受けることになる。

【アヌ神】

イシュタルの父にして神々の王。ギルガメツシュがどう足掻いても勝てないほどの力を有している。

神なくして人はなく人なくして神はないと口では言っているものの心の底では自分たち神が人間を支配するべきだという持論を持っていた。

その本心をギルガメツシュの千里眼によって見破られ、問答の末この世界を人間に委ねることに決めて現世を去った。

【エルキドゥ】

ギルガメツシュ同様、原作と大きく違う道を歩むことになった泥の

人形にして神々の兵器。

強制的に人間への憎悪を埋め込まれ、幾度も人間を滅ぼそうと画策し、その度ギルガメツシュに阻止された。

最終的にギルガメツシュとの一騎打ちをすることになり、その最中にギルガメツシュから宿敵として認められ、お互いにその関係に落ちて着いた。

ギルガメツシュと決着をつけることが叶わなかったため、またどこかで決着をつけることを約束し、ギルガメツシュから与えられた名前を胸に抱いて泥へと還っていった。

ありとあらゆる姿になることができるうえにあらゆる武器を使いこなすことができる。

サーヴァントとして現界した場合にはエンリル神から奪った槍も持つてくるのでギルガメツシュぐらいしか相手にならない。

しかし、本気でギルガメツシュとぶつかった場合、比喩ではなく本当に世界が滅ぶ可能性がある。少なくとも開催地は地図から消える。

「第四次聖杯戦争編」

召喚

冬木市の中でも一際歴史を感じさせる洋館、遠坂邸の自室で遠坂時臣は目の前にある古めかしい箱に目をやりながら立派な顎鬚に手を当てて思考に耽っていた。

「……………どうしたものか。」

深刻そうな顔の彼の前に並んでいるのは博物館かどこかで管理されていてもおかしくないような、というか展示されていた一個人が所有しているのはおかしき重要な品である。

しかし、博物館に展示させておくには惜しいものであると時臣は断言する。何も知らない一般人たちの衆目に晒されるぐらいならば、自分が崇高な目的のために使用すべきだと……………

——今からおよそ50年前、世界に名高い大英博物館で大事件が起こった。なんと嚴重に保管されていた「ギルガメッシュ法典」の原本の一部が盗まれたのだ。

これには世界中が大騒ぎになった。今でもギルガメッシュを信仰している国の人々は激怒し、ギルガメッシュ法典に則り罪人に死を与えるべきだとまで主張し始めた。

しかしその後、監視カメラに映っていた犯人と思われる男が死体で発見され、人々の怒りは他所に事件は鎮静化していった。

しかし、先代の遠坂家当主にはこの一連の事件の黒幕が分かっていた。

アインツベルンという魔術師の名門である。その目的は間近に迫っていたとある戦争のことを考えれば一目瞭然だった。

彼らは欲したのだ、考えうる限り最強のサーヴァントを。

しかし、口封じに実行犯の男を殺してまで強奪した聖遺物での召喚はなされなかった。

最強の英霊はアインツベルンの声に応えなかったのだ。

当然のことだろうと時臣は思う。かの英雄王がそのような薄汚い手段によって入手された聖遺物の召喚に応じるわけがない。

結局アインツベルンはわけのわからないイレギュラークラスのサーヴァントを召喚し、初期の段階で早々に聖杯戦争から脱落した。

……と、まあここまでの話ならばアインツベルン馬鹿だなくで済むのだが残念ながら馬鹿だったのはアインツベルンだけではなかった。

今、『時臣の前にはギルガメッシュ法典の一部がある。』

そう、つまり先代遠坂家当主もまたアインツベルンの動きに敏感に反応し、盗まれた法典の一部を実行犯の男から金で少しばかり分けて貰っていたのだ。（勿論先代の召喚も成功しなかった。）

これには時臣も頭を抱えた。なにせ自分の父が知らぬうちに露骨な表の犯罪に手を染めており、尚且つ未だに搜索が続けられている法典の一部が自分の目の前にあるのだから。これがもしも見つかってしまえば自分は間違いなく刑務所送りだろう。

時臣は聖杯戦争を前に刑務所送りになりかねない未来に真剣に悩んでいた。こんなことならば父からの怪しげな宿題など解くべきではなかったという後悔と共に。

しかし、暫く悩んだ後時臣は開き直った。そうだ！これはきつと天が自分に与えた聖遺物に違いない！」と。

一見すると自信過剰というか頭の中メルヘン過ぎだろという感じだが遠坂時臣はこれが運命だと信じてやまなかった。

開き直れば後は早かった。璃正神父に急いで連絡を取り、触媒が決まったことを知らせた。念のため以前から頼んでいた触媒の発送も続けておいてもらう。

——そして時は流れ、魔術師の夜がやって来る。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する。」

運命の夜がやって来た。これから始まる戦いのためだけに研鑽を積み重ね、苦渋と刑務所送りにされかねない微妙な恐怖に耐えてきた。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シユバインオーグ。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

祭壇の上に乗っているのは小さな石板の欠片。一見するとただの文字が刻まれた石だが、あの石板の欠片なくしてこの儀式は成功しない。

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ——」

かの王が召喚されるとしたらセイバー、アーチャー、ライダーのい

ずれか一つ。伝説を考えればセイバーが望ましいがこの際なんでも構わない。

「――誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者――」

先代が失敗した王を呼ぶ儀式に不安はなかった。

父が少々汚い手段で手に入れたものの、息子の自分に残した聖遺物。

そして今日までの鍛錬とその成果が時臣に自信を与えていた。自分こそが選ばれし者であると……

「――汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

逆巻く荒々しい風に目を焼き潰さんばかりの閃光が迸る。様々な魔術を扱ってきた時臣だがここまでの規模の大魔術は初めてだ。

風が止み、ようやくと目を開けた時臣の前に立っていたのは……

『問おう。貴様が俺のマスターか？』

それは人間とは思えないほどの美貌を持った青年だった。

スラリと伸びた長身を所々に黄金の装飾がなされた白く上等そうな古代衣装と軽装が包んでおり、さらにその衣装を鮮やかな赤い布マントが覆っている。

肩甲骨辺りまで伸ばされた男にしては長い黄金の髪はしかし、その艶を失うことなく光を放っている。

顔はぞつとするほど整っており、冷たさを感じさせるほどだった。しかし、そんな冷たい印象を与える美貌の中で神性を表す紅い瞳だけが強烈な熱を放っていた。

間違いない。『英雄王ギルガメツシュ』だ。

なにも時臣はその人外の美貌だけで目の前の青年をギルガメツシュと断定したわけではない。

その身体から迸る魔力、そして今すぐにもひれ伏したくなるような圧倒的な王としての威風。

気がつけば自然と頭を垂れていた。自分のサーヴァントにするにはあまりにおかしな動作をしかし、時臣はあっさりと受け入れた。

「はい、私が貴方をお呼びした者です。王よ、貴方様の降臨を待ち望んでおりました。」

ギルガメツシュは臣下としての礼をとる時臣を暫く眺めた後、

「いいだろう、此処に契約は成った。貴様を現世の拠り所として認めよう。」

時臣をマスターとして認めた。

ー契約を済ませた時臣とギルガメツシュは地下から居間へと場所を移してそこで協力者の言峰親子と合流し、今回の戦争の方針を話し合うことになった。

「さて、俺のクラスだがこの軽装を見れば分かると思うがアーチャーだ。ほう？残念そうだな時臣とやら。」

王の探るような言葉を否定しながらもほんの少し、落胆の気持ちを持ったことは否定できない。

「だが、それは表向きの話だ。俺にクラススの縛りなど全く関係ない。俺の宝具は全て宝物庫の中に収納されている。無論あの『剣』もな……………ほう？嬉しそうだな時臣。」

今度は否定できなかった。なにせ時臣の脳内ではすでに6体の英霊に組体操の人工ピラミッドを作らせ、その頂点に腰掛けて酒を煽るギルガメツシユの姿が映し出されていたからだ。

やはり、この戦い我々の勝利だ！

「して、貴様らは俺をどうやって使うつもりだ？」

随分と皮肉った言い方だがどうやらこちらの策を知りたいようだ。

そこでこちらも勝利をより確実にするためのアサシンを総動員した策を王に説明する。

「……………なるほど、姑息だが悪くない策だ。」

この戦争に勝つために編み出した必勝策だ。当然褒められて嬉しくないはずがない。それも英雄王ギルガメツシユ直々の賛美となればなおさらだ。

「しかし、それは俺が現世に舞い降りた理由に反する策だ。残念ながら承諾しかねるな。」

……………そうだ失念していた。ギルガメツシユとてなにか目的があつてこの戦争に参加したのだろう。

「俺がこの戦争に参加した理由は……………まあ、色々あるが神々の手から離れた人間たちの世界がどうなっているのか気になったところか。それに俺に代わって英雄を名乗る者たちの力を試してみたくなつたのだ。」

なるほど、人類最古の英雄にして旧き神々の神話を終わらせたギルガメツシユらしい参戦理由だった。確かにそれではアサシンは邪魔

でしかないだろう。

「それに他のマスターたちがアサシンを警戒しているが時臣、お前は何も心配することなく戦争に挑めるのだぞ?..... まあ、最もこの綺礼とやらが裏切らなければの話だが.....」

確かにそうだ。ギルガメッシュほどの強力な英霊を倒そうと思うにはマスターを潰した方が手っ取り早い。もしも他の陣営がアサシンのマスターと手を組んでいたならば、他のサーヴァントによってギルガメッシュが足止めを食らっている隙に気配遮断によって近づいてきたアサシンによって令呪を使う間もなく殺される可能性もある。そういう意味においてもやはり綺礼にアサシンを召喚させておいてよかった。

ちなみに綺礼が裏切るといふあり得ない話はスルーした。

「そうなる..... すまないが綺礼、君には正式な形で聖杯戦争に臨んでもらう必要があると思う。もう教会にも立ち寄れないだろう。急いで住む場所を探してもらえるかい?」

作戦を変更することに決めた時臣たちの行動は早かった。直ぐに綺礼の新しい住居を決め、作戦を練り直し、アサシンにもつとこと細かく役割を振って分断させた。

いきなり予定が狂ったものの時臣に不満はない。

『常に余裕をもって優雅たれ』が遠坂の家訓なのだから。

……だから人間観察と主張しながら遊び歩き、図書館で借りた自分の叙事詩を見ては爆笑しているギルガメッシュについては見て見ぬふりをした。

王の悲願

英雄王ギルガメッシュは今日も今日とて街へと出掛ける。

「英雄王、時臣様がお呼びになっていきます。」

そんな自由奔放なサーヴァントを呼び止める女の声があった。

時臣の警護のために、遠坂邸に残ったアサシンの一人だ。

「ああ分かった。ご苦労だったアサ子」

鍛え上げられた美しく、しなやかな肢体にブラジル水着のような黒い煽情的な衣装を纏ったハサン・サツバーハの多重人格が一人女アサシンは骸骨の仮面の下で微妙な顔をしていた。

彼女が以前よりも細かく役割を分担され遠坂邸の護衛に任せられたのはつい先日のことだ。本来ならマスターの言峰綺礼のサポートに徹するはずだったのだがギルガメッシュから直々の指名を受けて遠坂邸での勤務になったのだ。

なんで指名を受けたのかというとギルガメッシュ曰はく「男に酒を注がせても面白くない」からだとか……

まあ実際にギルガメッシュが敵のサーヴァントとガチンコで戦いたいと言いつ出したためアサシンの仕事は減ったので英雄王の酒の相手をする余裕くらいはある。

そしてこの女アサシンにとっても意外だったのはこの英雄王の酒の相手をするのが結構楽しかったことだ。

女のアサシンというだけあって貴族の男相手に踊りを見せたり酌をすることもあったので英雄王からの申し出もそこまで気張ってはいなかったがこの英雄王は今までアサシンが出会ってきた貴族たちと違うというか、口調こそ尊大なものの、思いやりがあるというか、アサシンは適度な緊張感を保ちながらも英雄王との会話を楽しんでいた。

特に世界に名高い「ギルガメッシュ叙事詩」をアサシンに音読させ、所々で止めては笑いながら訂正し、実際の話聞かされた時は本当に面白かった。

そんな愉快な英雄王ではあったがどうしようもない欠点も抱えていた。

………
「アサ子」ってどうよ？

英雄王にはネーミングセンスがなかった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「王よ、お待ちしておりました。」

軽く臣下の礼を取ってギルガメッシュを迎えたのはマスターの時臣だった。

「うむ。して、要件はなんだ？」

それに軽く頷いてすぐさま要件を尋ねるギルガメッシュ。

彼は早く遊びに行きたいのだ。

「実は、昨夜でこの聖杯戦争に参加する七体の英霊全てが召喚されました。」

「……………そうか。」

神妙な顔で頷くギルガメッシュが時臣には少しばかり意外だった。あれだけ戦いたいと言っていたのだからつきりもう少し喜ぶものと思っていたのだ。

「今夜あたりにでも早速一騎潰しておくか。」

と思いきや、やっぱりノリノリの英雄王。

「俺はこれから街に出るが今夜は帰れんかもしれんな……………なにせサーヴァントの首を取りに行くのだから。」

本来なら喜ぶべきサーヴァントの発言なのだろうが何故か時臣は

素直に喜ばなかった。

◆◆◆◆◆

現代の街並みを興味深そうに、あるいは懐かしそうに見て歩きながらギルガメツシユは思考に耽っていた。

実は、彼には悩みがあった。

名誉、美人な妻、美しい容姿、伝説の武具、財宝、後世まで残る伝説、

とおおよそ人が欲しがらるであろうものをほぼ全て手に入れた彼ではあるがこの中に一つだけ入ってないものがある。それこそが彼の悩みなのだ。

……ずばりそれは、「友達」である。

そう、彼には何気に友達がいなかった。

欲しいのだ「友達」が。こう胸の躍るような死闘の末に互いを認め合うような熱い青春というか、某少年漫画の主人公のようにいい友達を作りたいのだ。

下らないと思うかもしれないが、彼は本気である。なにせ原作のギルガメツシユですら「親友」がいるというのに彼ときたら友達ゼロである。

原作よりも性格がいいという自信がある身としては友達ゼロのままで人類の終わりを見届けるとかあり得ないのだ。

よって彼がこの聖杯戦争に参加した本当の理由は……友達作りだった。

だからと言って時臣に言ったことが嘘というわけではない。彼に語って聞かせたことも理由の一つではある。ただ、英雄たちとの死闘の末に互いを認め合って「友達」になれたらいいなという思惑を言わなかっただけである。

「個人的にはライダー辺りがいい友達になってくれそうだな」

友達になって欲しい人ランキングをつけながら街を歩く美貌の英雄王ギルガメツシュ。

………彼は少しばかり残念なイケメンだった

やがて近くのカフェに立ち寄った英雄王もとい残念なイケメンは窓側に席をとり、アイスコーヒーを注文した。

暫くぼんやりと窓の外を眺めていたがやがてウェイトレスがコーヒーを運んできた。

「お待ちせしました！アイスコーヒーになります………」

ギルガメツシュと目があつたウェイトレスはその美貌にやられたのか職務を放棄してしまった。

しかし、思ったよりも早く立て直したウェイトレスはコーヒーをきちんとテーブルに置いた。

「すみません。あんまりにも綺麗な顔だったので……今日は外国人の方でパーティーでもあるんですかね？」

その後半の独り言が気になったギルガメツシュはコーヒーに手をつけずにその詳細について尋ねてみた。

「そ、それがつい先ほども綺麗な銀髪のお姫様みたいな女の人とその付き添いのようなこれまた綺麗な金髪の少年がこのカフェを横切つたんですよ。」

うつとりと頬を染めて語るウェイトレス。

………間違いない。セイバーとアイリスフィールだろう。

「すまないが用事を思い出した。このコーヒーは君に譲ろう。」

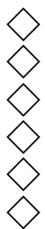
立ち上がったギルガメツシュにウェイトレスは不思議そうに尋ねる。

「あのくもしかして、お知り合いでしたか？」

別に知り合いというわけではない。こちらが一方的に知っているだけだ。

「知り合いではないが、強いて言うなら………彼女たちのファンさ。」

英雄王ギルガメッシュは街の人に2人の行き先を尋ねながらアイドルの追っかけのように追跡を開始した。



海の波と戯れる女神のように美しい銀髪の美女アイリスフィールの姿を見つめながらダークスーツに身を包んだ男装の麗人セイバーは今一度自分の願望について胸の内で見つめなおしていた。

「故国の救済」

あんな結末を認めてはならない。あんな誰も救われない結末は断じて認められない。

自分一人ならば構わない。この身一つで事足りるのならば喜んで差し出そう。

しかし、自分を信じていた民たちが、忠誠を誓ってくれていた騎士たちが無惨に何の意味もなく死んでいくあの運命だけは容認できない。

彼らは何をしたというのだ？ただ明日はきつといい日であるようにと願いながらその日を生き延びるために精一杯生きていただけではないか？

なのに運命はそんなこと知らぬとばかりに命を刈り取っていった。何も知らずに希望だけを抱きながら命を落とした者たちはまだ幸せだったのかもしれない。

だが彼女に、アーサー王に希望はあると唆され最後には希望はないと知り、絶望の中死んでいった者たちの思いはいかほどだったのか。

きつと憎かつたらうアーサー王が。
恨んだはずだアーサー王を。

彼女もまた憎かった「アーサー王」が。アルトリアという少女は
アーサー王という存在を許さない。

だからこそ求めるのだ奇跡を。

今度こそ皆を救える『理想の王』になるために。

——そしてそれは前触れもなくセイバーたちに襲って来た。

「ツ・アイリスフィール！」

まるで心臓を握り潰さんとばかりに辺りを威圧する気配。

間違いなくサーヴァントだ。

「分かってるわ、セイバー行きましょう。」

決意を胸にセイバーの手を取ったアイリスフィールだがその手は
震えていた。どうやら先ほどの尋常ではない気配に充てられてし
まったようだ。

無理もない。実際にセイバーですらその気配に充てられかけたの
だから。ともすれば宝具を解放してしまいそうになったほど
に……………

「今日一日は私が貴方の騎士です。よって戦いの場であろうとも私が
エスコートしてみせましょう。さあ姫、少々危険なダンスパーティー
の開幕ですよ？」

だがそんなことは一切顔に出さずセイバーはあえて余裕を感じさせる仕草で片手を胸に置き宣言した。

そんな冗談めいたセイバーに安心したのかアイリスフィールもまた余裕を感じさせる笑みを取り戻し、セイバーと共に気配を感じた方向へ悠然と歩み出した。

——時折発せられる気配を辿ってセイバーとアイリスフィールがたどり着いたのは無人のプレハブ倉庫だった。

そう、「無人」なのだ。人はおろかサーヴァントも見当たらない。

「どういうことだ?.....」

てつきりこちらに誘いをかけていたと思っていたので少し肩透かしをくらったような感じだ。

いやもしかしたら隠れ潜んでいるのかもしれないと思いき引き締めなおして辺りを見渡すがどこにも人影はない。

「ん?アイリスフィール、来たようです。」

すると向こう側の倉庫を軽々と飛び越えて一体のサーヴァントが現れた。

.....
しかし、妙だ。あの気配ではない?

セイバーの直感によれば、たった今セイバーの前に降り立ったサーヴァントは先ほどの気配の持ち主ではないと告げている。

現に目の前のサーヴァントもセイバーが此処にたどり着いたばかりのころのように辺りを見渡している。

しかし、セイバーに目を止めると訝りながらも問いかけてきた。

「お前が俺を此処に呼んだ気配の持ち主か？」

美しい男だった。癖のある長い黒髪を後ろに撫で付け、端正な顔立ちをしている。女を捨てたセイバーにはよく分からないがさぞかし女性に人気がありそうな甘い顔立ちだった。特に目の下の黒子が特徴的だ。

身体もまた見事なものだった。動きやすさを重視した軽装のおかげでその豹のようなしなやかな体軀が表に出ている。

その両腕には奇妙なことに一本ずつ槍が握られている。

間違いなくランサーのサーヴァントだ。

しかし、この問いかけてから察するにランサーもまたあの気配に誘われて此処にやって来たのだろう。

……つまりあの気配はランサーとセイバーを戦わせて互いに消耗したところを叩くつもりか。

ならば、方針は決まった。目の前のランサーを速攻で打ち取り、疲弊した体を装つてのこのこ出てきた気配の主を叩く。

すると相手のランサーもこちらが返答をしなかったにも関わらず状況を察したのか笑みを浮かべて槍を構えた。

「どうやら俺たちを戦わせたいやつがいるようだな。思惑通りになるのは気に食わんがこうしてサーヴァント同士が出会ってしまった以上は戦うしかあるまい。その清澄な闘気……セイバーのサーヴァントに相違ないな？」

「いかにも。そういうお前はランサーか……悪いが早々に勝負を決めたいのだ。口上もなしだが始めよう。」

「なるほど、お前もその結論に至ったのかセイバー。いいだろう、中々に斬りがいのある敵のようだ。いざ尋常に……」

「勝負！」

ここに聖杯戦争第一戦の幕が切つて落とされた。

英雄たちよ、集え！

セイバーとランサーを誘き出し、決闘を仕掛けさせた張本人、英雄王ギルガメッシュはある倉庫の上で優雅に足を組んで座っていた。勿論その姿をセイバーたちが捉えることはできない。

『神隠しの外套（インビジブル・ゴッド）』

ギルガメッシュが召喚時から羽織っている赤いマントは神々との戦いでも多用した姿を隠す認知阻害の宝具である。

神々の眼すら欺いたこの宝具は姿を隠すと言うよりも存在そのものを隠蔽することができる。

さらにこの宝具の便利な点は使用者だけではなく、その持ち物までも隠蔽できることだ。

そしてこの宝具を使ってギルガメッシュが何をしているかという
と……

「よし！行けー！そこだセイバーー！」

セイバーとランサーの決闘を着に神酒を飲んでいた。

……
どっからどう見ても野球観戦をしながらビールを飲む
休日の親父であった。



ギルガメッシュの酒の肴にされているとも知らないセイバーは

たった今ランサーに切られた左手の痛みを堪えながら初戦から誇り高い騎士と出会ったことに感謝していた。

デイルムツド・オディナ

ケルト神話に名高いフィオナ騎士団が一番槍。その伝説と違わぬ槍捌きは身をもって体験したばかりだ。

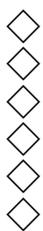
間違いなく左手を奪われた今のセイバーでは苦戦は免れないだろう。

しかし、セイバーに恐怖や不安はなかった。寧ろますます滾る闘志に身体を持て余すくらいだ。

このランサーに正面から打ち勝ってこそ聖杯への道が近づくというものだ。姿を見せぬ臆病者など恐れるに足りず。

いざ！

そして突然鳴り響いていた雷鳴に決闘は中断となった。



ウェイバー・ベルベツトは冬木大橋の鉄骨の上に張り付いている中に確かにライダーの眩きを聞いた。

「うゝむ。いかなあ。これはいかん、奴ら相当に熱くなっておるな。どこぞで見張っている奴の思惑通りになっているではないか。」

何やらとてつもない気配を感じ出所を探した結果、この大橋からセイバーとランサーの決闘を眺めることになったわけだがライダー曰はく、あの気配の持ち主は間違いなくこの近くからあの二人の決闘を眺めていると言うのだ。

「あの二人を死なすのは惜しい！さらにどこぞで見張っている奴も気に食わん！となればやることは決まったな。」

立ち上がり戦車を呼び出すライダー。

ウェイバーの忠告も空しくセイバーとランサーの決闘を邪魔する形で現場へと駆け付けけることになった二人。

そこで真名をばらしたり、敵対するサーヴァントに誘いをかけたり…… ケイネスから庇ってもらったり。

色々初っ端からやらかしたこのライダーは遂に状況を動かす言葉を放った。

「おい！どこで覗き見をしているのかは知らんが…… 隠れ潜んでいるのは分かっておる！我々を誘き出した者よ、姿を見せよ！なおも顔見せを怖じるようならば、この征服王イスカンダルの侮蔑と怒りを免れぬものと知れ！」

辺り一面に響き渡るライダーの大声による挑発。

戦車の上のウェイバーは遠い目をし、

コンテナの上で事の顛末を見守っていた切嗣は呆れ、

地下に引きこもっている時臣は胃を抑えた。

「そう大声で喚くな。十分に聞こえている。」

ーそして声がした方向に皆が驚愕に眼を開いて顔を向ける。

何時の間にか倉庫の上に赤いマントを羽織った青年がいた。

それはランサーのよりも整った冷たい美貌の持ち主だった。

人ではあり得ない完璧な顔立ちに黄金そのもののような金髪、そし

て妖しい輝きを放つ神秘的な紅い瞳。

だが美しいだけではなかった。

その身に纏う王者としての覇気が辺りを威圧している。

その圧倒的な存在感にサーヴァントたちは気配の持ち主が倉庫の上に座っている青年であると確信した。

「思ったよりあっさりとお出てきたのお。その覇気、どこぞで王を名乗っていたと見るが…… 貴様何者だ？」

ライダーが腰の剣に手をやりながら尋ねる。

「俺の名か？…… 一度しか言わぬからよく聞いておけ。」

まさかの真名暴露英霊二人目に驚く倉庫に集った者たち。

しかし、名乗られたその名に今回の聖杯戦争の参加者たちは凍り付くことになる。

「我が名は『英雄王ギルガメッシュ』此度はアーチャーのクラスで現世に降臨した…… さあ、俺に挑む最初の英雄は誰だ？」

《英雄王ギルガメッシュ》その名を知らぬ者はこの聖杯戦争の参加者の中にはいないだろう。

神秘は古ければ古いほどにその力を増すこの世界において人類最古の英霊であるというだけでも十分なアドバンテージであるというのにこのギルガメッシュはその個人の武勇伝だけでも他の英霊を圧倒している。

追従しているのはヘラクレスぐらいではなかろうか？

そんな化け物が目の前に立っている。

ウェイバーはギルガメッシュであるという発言を嘘と信じてステータスを覗き…… 絶望した。

筋力：A
耐久：A
敏捷：B
魔力：A
幸運：A＋
宝具：EX

お前アーチャーだろ!?!といわんばかりの高性能っぷりにウェイバーは心の中で突っ込む。

だがまあ知名度を考えればこれくらいが妥当なのかもしれない。

と、ウェイバーはどこか諦めの混じった思考をしていた。

勝てるわけがないあんな化け物に。

なにせ姿を見ただけでウェイバーの手の震えは止まらなくなっているのだ。

この場は取り敢えず撤退を……………

そう言おうとライダーを見上げると、彼の手もまた震えていることが分かった。

…………… まあ無理もない相手が悪すぎた。にしてもこいつでも怖がることあるんだな。

なんて少し共感を覚えていたのも束の間、ライダーは身体を大きく震わせると大きな声で笑い始めたのだ。

「ハハハハハハハハハ！英雄王ギルガメッシュとな!?!元祖征服王である『エルマドウス』が父、ギルガメッシュか！やはり余はついておる！」

理解不能なことを言い出したサーヴァントにウェイバーは思わず

突っ込む

「何がついてるだ！お前勝てるのか!?あの英霊に？」

「ふむ……………分らん。」

なんじゃそりや!?

「だがだからこそ挑む価値があるのだ。あの男を倒せば余は世界を手に入れたも当然よ！漠然とした世界征服よりよっぽど手っ取り早いだろう？」

もはや何語を話しているのかさえも分からなくなってきたウェイバーにライダーはさらに追い打ちを掛ける。

「いや！勿論世界征服もちゃんとするから安心せい！ただその前にあの男を越えなければならんというだけのことさ。」

ライダーは獰猛な笑みを浮かべながら手綱を握った。

「……………ふむ。征服王イスカンダルか。世界を我が物にしよう」と東へ突き進んだ霸王だったかな？我が息子には及ばぬもののその偉業は称賛に値する。いいだろうお前を俺に挑む最初の英雄として認めよう。」

そしてライダーとウェイバーのやりとりを黙って見ていたギルガメッシュが口を開き、片手を挙げた。

するとギルガメッシュの背後の空間が歪み、その中から数多の武器が顔を見せた。その数三十以上。

剣があった。槍が、斧が、槌が、矛が、さらには用途の分からない武器まであった。

確かな輝きを放つその神秘の群れのどれもが破格の魔力を宿した英雄の象徴、本物の宝具に他ならない。

思わず息を飲むサーヴァントとマスターたち

「まずは三十だ。耐えてみせよ英雄……………ん？」

ギルガメツシュが宝具を放とうとしたその瞬間、あらぬ場所からおぞましい魔力が吹き荒れ、新たなサーヴァントが現れた。

甲冑に覆われた影のようなその姿にギルガメツシュは胸の内でおいた

……
こいつのこと忘れてた。

英雄王の初陣

新たに出現したサーヴァント。

その黒い影のような異形の姿に全てのサーヴァントたちの注意が惹きつけられる。

全身から発せられる「負」の気配。間違いなくバーサーカーだろう。「なあ征服王。あいつには誘いをかけんのか？」

バーサーカーを警戒しながらもランサーはライダーに向かって軽い口調で尋ねる。

「誘おうにもなあ。ありやあ、のっけから交渉の余地がなさそうだし。……。それにあの黒いのはすでに誘う相手を決めておるようだしな。」

ライダーの言う通り、黒いバーサーカーはこの場に現界した瞬間から倉庫の上に座っている英雄王ギルガメッシュにのみ視線を向けていた。

これはギルガメッシュも無視することができずにライダーに向けていた宝具をバーサーカーに向け直した。

しかし、バーサーカーを警戒しながらもギルガメッシュは思考に耽っていた。

…… おっかしいな。

いや、確かにうっかり忘れてたのは謝るけど俺はアサシンを撃退したわけではないから時臣のサーヴァントってことばれてないはずなんだけど……。うーん、消去法かな？

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「はは、ははははは」

間桐雁夜は使い魔からの視界を通して戦況を観察していたが倉庫の上に突如現れたサーヴァントを見て掠れた喉で歓喜の笑いを漏らした。

間違いない。あのサーヴァントこそ真昼間から私服でどこぞに出かけていた時臣のサーヴァント！

「殺せ………」

あのサーヴァントに特に恨みはなかったが、余裕たっぷりな仕草を見て時臣を思い出したので四肢をもいでたつぷりと苦しめてから殺すことにした。

「殺せ！殺すんだバーサーカー！あのサーヴァントの四肢をもいで踏みつぶせ！」

ギルガメツシュが時臣のサーヴァントということに気づいた理由は簡単。

………
ギルガメツシュの不注意というか、うっかりである。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ボコッ

それはバーサーカーの踏み込みで地面が陥没した音であった。
ギルガメツシュへと真つ直ぐに突っ込んで行くバーサーカー

その単純な突撃に対し、ギルガメッシュもまた展開していた宝具を片手の振り下ろしを合図として射出した。

迫りくる宝具の群れに対し、バーサーカーは回避行動をとることもなく最初に飛来した槍を掴みとると同時にその槍を長年の自分の相棒のように回転させながら振るい、次々と襲いかかって来る宝具を捌いていく。

これにはその場に集う全てのサーヴァントたちが驚いていた。重さも形も何もかも知らないであろう槍をあたかも自分の武器であるかのように使ってみせるとは……

さらに驚愕はまだ終わらない。バーサーカーは一瞬で使い物にならなくなった槍を何の躊躇もなく捨てる。飛来した別の剣と斧を掴み取り、これまた巧みに操りながら武器を叩き落していった。

やがて宝具の射出が若干収まった瞬間を狙い、倉庫の上のギルガメッシュに向かって剣を投擲した。

しかし、ここでまたサーヴァントたちは驚くことになる。

なんとギルガメッシュもまた飛来した剣を素手で掴み取ると倉庫の上から跳躍し、バーサーカーに向かって接近戦を仕掛けにいったのだ。

「さて、人の形をした敵は久しぶりだな。楽しませてくれよ?」

アーチャーとバーサーカーによる接近戦という聖杯戦争の常識を覆すような勝負が開始された。

先手はバーサーカー。その豪腕でもって斧をギルガメッシュに向かって叩きつける。しかし、ギルガメッシュはこれを読んでいたかのように身体を半身に捻ってこれを躲した。バーサーカーの放った一撃は地面に大きな亀裂を走らせるのみにとどまった。

次はギルガメッシュのターン。ギルガメッシュは躲した勢いもそのままに身体を回転させながらバーサーカーの首を狙う。

斧は今使えまい。そう踏んでの一撃だったが何時の間にかバーサーカーの空いた手に握られていた槍によって阻まれた。

どうやら先ほどのランサーのように地面に落としてあった槍を蹴り上げて使用したようだ。

再びバーサーカーのターン。ギルガメッシュの首を落とそうと斧を横なぎに振るう。しかし、これまた何時の間にか握られていた新たな剣によって防がれた。

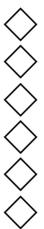
どうやらまたあの謎の空間から武器を呼び出したようだ。バーサーカーは理性なき頭で理解した。

斧と槍、剣と剣による四つの武器による命のやり取りは暫くの間続いたが、やがてギルガメッシュの左手の剣が弾かれた、しかしギルガメッシュは焦らず剣を両手で構えると力任せの大振りを放ち、バーサーカーが少しひるんだ隙について大きく後方へと下がると剣から片手を離し、虚空に突き出した。

すると先ほどのように空間が揺らぎ、数多の武器が射出された。

それらを再び巧みに捌きながらバーサーカーは機会を伺っていた。

ギルガメッシュの弱点をつける隙を。



征服王イスカンダルはギルガメッシュとバーサーカーの決闘をその優れた観察眼でもって眺めていた。

……より正確に言うとは英雄王ギルガメツシュを。

数多の宝具をまるで石ころのように射出できる凄まじい宝具。それだけではなく、自ら打って出ることでもできる技量の高さ。実際にバーサーカーと渡り合っているのだから恐ろしい。さらにアーチャーというからにはあの「弓」も所持している可能性もある。

近・中・遠、全てこなせる万能型サーヴァント。さらに知名度を考えればきつとステータスも凄まじいだろう。

さらにあの余裕の態度を見るに、何かとんでもないものを隠している可能性もある。

隙のない難敵だ。

……しかし、決して弱点がないわけではない。どうやらあのバーサーカーも気づいているようだ。

”できればあのバーサーカーには是非ともギルガメツシュの本気を引き出してもらいたいものだ”

とイスカンドルは内心で呟いた。



バーサーカーは遂に状況を動かすことにした。

まず、渾身の力で槍を投擲した。当然剣で弾くギルガメツシュ。

その隙を逃さず一気に距離を詰めるバーサーカー、そしてそのままの勢いで先ほど手に入れた剣を右手で振り下ろした。

右手に持った剣で受け止めるギルガメツシュ。

しかし、それこそがバーサーカーの狙いであった。

バーサーカーは空いた左手でギルガメツシュの剣を掴んだ。その

瞬間バーサーカーの魔力によって侵食されていくギルガメツシュの剣。

これに驚いた顔をしつつもギルガメツシュは空いた左手に剣を呼び出し、バーサーカーに振るった。

しかし、それを受け止めるバーサーカーの右手の剣。

今の状況はバーサーカーが左手でギルガメツシュの右手の剣を、右手でギルガメツシュの剣を押さええている。

これこそがバーサーカーの望んだ状況であった。

バーサーカーはギルガメツシュと戦ううちに、ぼんやりとその弱点を把握していた。

まず、バーサーカーのほうがギルガメツシュよりもパワーは上であるということ。

そして、あの武器を射出できる宝具を使えるのは《片手が自由である時》のみであるということ。

ギルガメツシュは武器を射出する時は必ず片手を空けていた。あの一番最初の攻撃の時然り、距離を取る時然り、そしてつい先ほども。つまり、武器を呼び出す時は片手でコントロールする必要があるということだ。

ならばその両手とも封じ込められたのならばこちらの勝ちということだ。

パワーはこちらが上。この状況ならばその首を落とせる！

「いや、お前の負けだ。」

そしてバーサーカーは周りに出現した数多の宝具に串刺しにされた。

なぜ!?

その疑問が真っ先に浮かんだのはバーサーカーではなくライダーだった。

彼もてつきりギルガメツシユの弱点は片手だと思っていたのだ。

しかし、ギルガメツシユの顔に浮かんでいる笑みを見てすぐさま状況を悟った。

全てはギルガメツシユの作戦だった。バーサーカー相手に少しパワーで劣っているように見せたのも、武器を呼ぶ宝具が片手が空いている時でないと使えないようにみせたのも、そしてバーサーカーがその罠に引っかかるのも全てはギルガメツシユの思惑通りだったのだ。

「さて、止めを……………ん?」

ギルガメツシユが止めを刺そうとした瞬間、バーサーカーの姿が掻き消えた。

霊体化という線はない。バーサーカーを貫いた宝具の中に霊体をこの世に縛り付けておく宝具を紛れ込ませておいたのだから。

「どういうことは……………令呪か。」

ならば仕方ない。ギルガメツシユは武器を仕舞うと観戦していたサーヴァントたちの方へと向き直った。

「今宵はもう興ざめだ。またいずれ存分に剣を交えようぞ、英雄たち。」

ギルガメツシユは霊体化して去っていった。

後に残されたのはあつげにとられたセイバーとランサーにそのマスターたちと何やら楽しそうな顔をしているライダーと白目を向いたそのマスターだった。

断罪の炎

間桐臓硯は使い魔からギルガメッシュが去り、戦意を削がれたのか次々に戦場を離れるサーヴァントたちを見届けた後、苛立ちと共に手に持っていた杖を地面に叩き付けた。

「おのれ！英雄王ギルガメッシュだと!? 遠坂の小僧め、一体どのような手を使ったのだ！」

時臣は普通に召喚しただけだが、時臣がそのことを説明しても臓硯はきつと納得しないだろう。

――実は、臓硯もまた過去の聖杯戦争でギルガメッシュを召喚しようとしたのだ。

触媒は英雄王が大洪水を切り裂いたことで誕生したという「ギルガメッシュ川」の川底にある祭壇の一部だった。

アインツベルンや先代の遠坂当主のように汚い手段を使って入手したわけではないので臓硯は絶対の自信を持って召喚の儀式を眺めていた。

しかし、ギルガメッシュは召喚に応じなかった。

結局他のサーヴァントを召喚することになった間桐は惨敗。

そしてアインツベルンの妙なサーヴァントを見た臓硯は今回の聖杯戦争の様子見として諦めることにした。

しかし、……流石に目の前で召喚を狙っていたサーヴァントの力を見せつけられれば苛立ちもする。

だが同時にこれでギルガメッシュが召喚可能なことは分かった。雁夜も遠坂時臣に憎しみを抱いているようだし遠坂邸を襲撃させて聖遺物を奪い取れば次の聖杯戦争こそあるいは……

「さて、この苛立ちは雁夜にでもぶつけるとするかの……」

雁夜が帰宅したことを察した臓硯は歪んだ笑みを浮かべながら杖を拾って歩き出した。



雁夜は痛む身体を引きずって間桐邸への帰路へと付いていた。

「くそっ！何なんだあのサーヴァント!?ふざけやがって!……時臣め……このままじゃ……終わらせないぞ……俺は……お前を倒して……必ず桜ちゃんを……救う!」

気の狂いそうな刻印虫と耐えがたい屈辱に打ちひしがれながらただ恨み言しか口に出来ない自分を呪う。

”やはり自分は遠坂時臣には一生勝てないのか?”
そんな弱気な気持ちにまでなつて来た。

「くそっ!」

そんな気持ちをごまかすために近くに落ちていた空き缶を扉に手を付きながら無事な右足で蹴り飛ばす。

カランツ

ちつとも前に転がらない空き缶さえも憎かった

「くそっ！くそっ！くそっ！」

間桐邸に着いた雁夜は苛立ちながらドアを乱暴に開け放つ。

『戻ったか雁夜よ。ちと相談したいことがあるのでな、地下の蟲蔵に来てもらえんかのお。』

家に足を踏み入れた瞬間鳴り響く臓硯の声。

取り敢えずそれに従って蟲蔵まで降りていくとそこには何やら苛立ちと喜悦が混じったような複雑な顔をした臓硯がいた。

「取り敢えず」苦勞じゃった雁夜。あのサーヴァントを相手によく健闘したな。」

珍しく純粹に雁夜を褒める臓硯……正直気色悪い。

加えて言うど屈辱に耐えている雁夜からすればそのねぎらいの言葉すら苛立ちの原因となった。

「フンツ。どうせ俺のバーサーカーはあっけなく串刺しにされたよ。口ではそう言ってるが臓硯、お前も俺のサーヴァントがあっけなくやられるのを見て嬉しかっただろう？」

「いやいや何を言う、俺は純粹におぬしを褒めておるのだぞ？素直に喜ばんか。こんな機会二度と訪れんぞ。」

「そうだ。親の称賛は素直に受け取るものだぞ。それにお前のバーサーカーは結構強かったのだぞ?」

「うるさい!好き勝手に言いやがって!だいたいお前らあのアーチャーに勝てるようなバーヴァント知ってるのか!」

.....
あれ?お前ら?

「いや知らん。すまん最強で..... あっお邪魔しているぞ。」

何時の間にかバーサーカーを串刺しにしたあのサーヴァントが目の前に立っていた。

「っ!貴様!」

臓硯が驚愕に眼を開きながら後ずさる。どうやら臓硯でさえもこのサーヴァントの不法侵入を感知できなかったらしい。

「っ!令呪を持って命ずる!バーサーカー、こいつを殺せ!」

傷が癒えていないにも関わらず強制的に実体化させられ、ギルガメッシュに襲いかかるバーサーカー。

「やれやれ、また突進か?もう俺は飽きたぞ。」

片手を挙げて背後に武器を展開するギルガメッシュ。

それに対しバーサーカーは突進は止めてその武器が射出されるのを待つことにした。

こちらに武器はない。ならば相手の武器を奪って反撃に出る。

周囲に武器を展開されても両腕が空いている今なら難なく捌ける。

身体は上手く動かないがこの狭い空間では縦横無尽に武器の射出はできま

い。

バーサーカーは狂戦士にあるまじき速さで思考を積み重ねると飛来した剣を掴み取ろうと腕を伸ばし……………

ーそして両膝の裏に展開された槍に貫かれて崩れ落ちた。

「前ばかりを見て下を見ないからこうなるのだ。先ほど串刺しになったのを忘れたのか？やはり所詮は狂戦士か。」

そして跪いたバーサーカーを囲む宝具の群れ。

「貴様は俺の友となるに能わぬ。疾く失せよ。」

射出される宝具の群れ。今度こそバーサーカーは消滅した。

《湖の騎士ランスロット》

ただでさえ強力な円卓最強の騎士を狂化させた雁夜のサーヴァントはあっけなく聖杯戦争の舞台から転がり落ちた。

バーサーカーの消滅をつまらなそうに見届けたギルガメッシュは唾然としている雁夜たちへと向き直った。

近くで見るからこそ感じる圧倒的な存在感。人間など虫けらのように踏みつぶせる圧倒的な力。

雁夜の頭の中にあの武器に自分が串刺しにされるといふ明確な死の光景が浮かび上がる。

だがそんな雁夜になどお構いなしにギルガメッシュは口を開いた。

「さて、色々と言いたいことはあるが…… まずその雁夜とやら。空き缶はきちんとゴミ箱に捨てよ。まったく、王に空き缶拾いをさせたのは人類史上お前が初めてだぞ？」

一瞬何を言っているのか理解できない雁夜だったが直ぐに帰宅途中で八つ当たり空き缶を蹴ったのを思い出した。

「…… まさかお前、ずっと俺をつけていたのか？」

「というか空き缶をきちんとゴミ箱に入れたのか……」

「うむ。実は時臣に今夜一騎落とすと宣言した手前、手ぶらで帰るのもカツコ悪かったのな、こうしてバーサーカーの首を取りに来たのだ。」

雁夜は先ほどの空き缶発言と全く変わらないノリでサーヴァントの首を取りに来たと言うこのサーヴァントが益々恐ろしくなってきた。

「…… 俺を殺すのか？」

「さてな。それは取り敢えず保留としておこう。それよりも聞きたいことがある。此処は何だ？」

「我が間桐家の工房でございませう。英雄王ギルガメッシュ閣下。」

突如黙っていた臓硯が口を挟んできた。それもえらく大仰な言葉遣いで。

おそらくギルガメッシュがあまり敵意を持っていないことに気が付き、急いで取り入ろうとしているのだろう。

「ほう？これが工房なのか？時臣のとは随分趣が異なるようだが？」

雁夜は呑気に工房を観察する目の前のサーヴァントに苛立っていた。彼は知らないのだ。この工房とは名ばかりの拷問場のことを。

「実は魔術師によつて工房も『此処は工房なんかじゃない！』む？」

臓硯の戯言を遮つて雁夜が叫ぶ。もう我慢ならなかった。

「此処は蟲蔵だ！中に放り込まれた者は気が狂う寸前まで蟲に精神と身体を犯され人権を剥奪されるんだ！いいか、よく聞け！お前のマスターである遠坂時臣はな自分の実の娘である桜ちゃんをこの蟲蔵に落とすことを良しとしたんだ！許されると思うか!?あんなに小さな子供を死ぬよりも辛い地獄に実の親が放り込んだという事実が！俺は絶対に許さない！時臣も

臓硯も蟲蔵も魔術師も！……………絶対にな。」

言葉の流れのままに任せて雁夜は思いのうちのちを語った。

「……………ふむ。その桜とかいう少女は元々遠坂の家の者で間違いないのだな？」

特に大きな反応を示すことなく雁夜の話聞き終えたギルガメッシュは桜について尋ねてきた。

「ああそうだ！時臣は自分の娘を自分で地獄に叩き落したんだ！許されるわけがない！」

反応のなかったことに憤然としつつも雁夜は律義に答えた。

「ふむ……………土産がバーサーカーの首だけと言うのも味気ないか。おい、そこな魔術師！その娘、俺がもらい受けよう。」

ギルガメッシュのこちらを一方的に無視した発言に内心大いに苛立ちつつもここを生き延びなければ聖杯も何もない臓硯は笑みを顔

こうしてギルガメツシュの極めて個人的な理由で間桐臓硯はこの世を去った。

◇◇◇◇◇

「英雄王！どこに行っておられたのですか!？」

突然ギルガメツシュとのパスが途切れ、遠坂邸で落ち着きなくウロウロしていた時臣は突然ヴィマーナで帰宅してきたギルガメツシュに驚いていた。

「喜べ時臣、お前の望み通りバーサーカーを討ち取って来たぞ。あつこれお土産。」

どうやら重傷を負わせたバーサーカーに止めを刺しに行ったのだと分かった時臣は一安心し、ギルガメツシュから渡された物を見た。

「……………桜?」

時臣の腕の中には濁った瞳で時臣を見つめる桜の姿があった。

王の忠告

まず、グラスに注いだその液体の色彩をじっくりと眺め、目を楽しませる。窓から差し込む月の光を受けて赤く輝くその液体はそこにあるだけで一つの芸術品のような存在感を放っている。間違いなく最高級の品だ。

次いでグラスを鼻まで近づけ、その香りをじっくりと堪能する。選び抜かれた素材から作られた芳醇な香りが脳を刺激する。

最後に仕上げとして妖しく輝く赤い液体を喉に流し込む。決して下品にはならないように、あくまでも優雅に。

喉を甘く、苦い味が駆け抜ける。

冷めているくせして身体を芯から熱くさせるという一瞬矛盾した至高の飲み物、赤ワインを優雅に堪能したグラスの持ち主は一言呟いた。

「……………不味い。」

”いや味は悪くないんだけど”と誰かに言い訳するかのよう
に心の中で呟いたグラスの持ち主ギルガメッシュは酒の不味くなっ
た原因へと顔を向けた。

「桜？」

「……………」

そこにはギルガメッシュから事情を説明され必死になって娘に話

し掛ける時臣と、それをぼんやりと聞き流している桜というどこか致命的にずれた親子再会の光景があつた。

ちなみに雁夜は話を拗らせるばかりだと判断したギルガメツシュによつて治療を施された状態で遠坂邸の一室で寝かされている。

「…………… はあ。桜、今夜はもう眠るがよい。」

ギルガメツシュの言葉に素直に頷いた桜は時臣に一礼をしてから部屋を退室した。

そんな人形のような自分の娘を見送つた時臣は苦しそうな表情で語り始めた。

「…………… 王よ、私は桜の幸せな未来を願つていました。その恵まれた才能でもつて自分の道を切り開き、立派な魔術師となつてくれる未来を。だからこそ間桐の家に託したのです。間桐ならば必ずや桜に幸ある未来を与えてくれると。それをまさか魔術師の教育も受けずに胎盤としての扱いを受けていたなどと…………… 許されることではない！」

時臣は激怒していた『桜が魔術師としての教育を受けていなかったこと』に。

ギルガメツシュは時臣の激白をどこか冷めた眼で見ながら桜と引き合わせた時も桜が蟲に犯されていたことよりも胎盤としての扱いを受けていたことに怒つていたことを思い出した。

この男は根本的に人とは考え方の異なる生き物なのだと今になつてギルガメツシュは悟つた。

「それにあれほど心を閉ざしては魔術を行使することさえもままにならない。このままでは桜は…………… 王よ、どうか私に助言を授けてはいただけませんか？」

頭を下げてギルガメツシュに頼み込む時臣。

正直そこまで肩入れする必要もないのだが臣下の礼をとる者の頼

みとあれば捨て置けない。ギルガメツシユは取り敢えず思考する。

まず、魔術云々は置いておいて桜を『人』に戻すところから始めなければならぬだろう。あの状態では自分で自分の道を定めることも出来ない。

心を閉ざした子供にはやはり肉親の愛情が一番効くのだろうが残念ながら魔術師としての常識に囚われた時臣の致命的にずれた愛情だけでは意味がないだろう。となれば……

「あの娘の才能についてはひとまず置いておくとして、貴様のもう一人の子供と妻はどこにいる？」

「禅城の実家に預けていますが？」

「直ぐにこちらに呼べ。まずは凍り付いた娘の心を溶かすのが先決だ。でなければ貴様のいうところの立派な魔術師になる前にこの世を去ることになるぞ？」

精神の弱さはそのまま肉体にまで影響を及ぼすことがある。生きる気力を失い、刻印虫を全て取り除かれた今、病気などにかかった場合果たして抵抗することができるのか。

取り敢えず母親の加護は必要不可欠だろう。

さらに時臣もまた必要だ。あの虫けらに何をされたかまいち分からぬ部分がある以上はこの父親もまた必要だろう。

「し、しかし今は聖杯戦争の途中です！もしものこと『黙れ』……」

「貴様は王に助言を求めておきながらそれを自分で遮るのか？いいから最後まで聞け。」

いつもよりも威圧的な覇気を纏ったギルガメツシユに反抗できるはずもなく時臣は黙るしかなかった。

「さて、まずはお前たち親子で以前のような生活をするのだ。その時に桜に自分が必要とされていると実感させよ。例えば……お前がいなくて寂しかったとか料理の手伝いをさせるなど所々でアピールするのだ。子供というのはな、大人とはまた違った意味で己の地位に固執するものだ。その地位を与えてやればそれなりに満足する。時

間はかかるだろうが根気強くやっつけていけばそのうち変化も現れるだろう。永遠に心を閉ざしたままではあるにはあの娘はいささか若すぎることからな。ここまでではいいな？」

無言で頷く時臣。

「次に心が良い方向へと回復した場合だが、どうしても魔術師にしたというのなら新たな後見人を探す必要があるな。通常ならば苦労するのだろうか……喜べよ時臣、今この冬木の地には優秀な魔術師が集まっているのだろうか？ 選び放題ではないか？……」となる、取り敢えず書類選考をしておくか。聖杯戦争の参加者の情報をよこせ。」

ギルガメツシユの勢いに流されるまま時臣は参加者のプロフィールが記載された紙を渡した。

その一枚一枚に目を通し吟味するギルガメツシユ。役に立たないと判断された紙は次々と床に捨てられ、手元に残ったのは一枚だけだ。

「ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。こいつならちよūdいのではないか？ 経歴を見る限り、あの虫けらのように気色悪い魔術の使い手ではないうえに純粋に優れたキャリアの持ち主だ。人柄は貴様が直接出向き、決闘でも仕掛けて自分で確かめよ。」

……結構いい案な気がしてきた。決闘の際にこちらが勝てば命を奪われ代わりに桜を養子に迎え入れてくれるように提案しておけば……

名門アーチボルト家の名は勿論時臣も知っている。あそこならば桜の才能の稀有さに気づき、適切な指導を施してくれるに違いない！

「ふむ。結論は出たようだな？ 最後に貴様の妻子のことだが、取り敢えずこの屋敷を俺の宝具で要塞化させ、さらに護衛も付けてやろう。これでサーヴァントに襲撃された場合も令呪を使うくらい余裕はできるはずだ。異論はないな？」

勿論異論などあろうはずもない。そうと決まれば早速葵に連絡

を……

「待て、大事なことを言い忘れていた。」

部屋の重力が変わった。そう形容してもおかしくないほどに英雄王の覇気が強く、重くなったのを感じて時臣は無意識のうちに背筋を伸ばした。

「……よいか、子は親を裏切るものだ。いずれは親の思惑から外れ、自分自身の道を定めて高みを目指す。だからこそ子の裏切りは必定だ。しかし、親から子への裏切りは許されん。断じてな。もし仮に親から裏切られた場合子供はどんな目に合うと思う？」

例えるなら目を塞がれた状態で知らぬ道を歩かされることになるのだ。

分かるか時臣？ 貴様がやったのはそういうことだ。お前はあの娘を裏切ったのだ。

碌に道を照らすこともせず、あの娘にひたすら茨の道を歩かせたのだ。

せめてもう少しあの虫けらが娘を欲しがった背景を考えるべきだったな。」

「……」

時臣は何も言えなかった。ただ寂しそうな顔で遠坂家から旅立つ桜と心を閉ざした桜の顔が頭の中を駆け巡っていた。

「あの娘は今はまだ心を閉ざしているがその心が開いた時は覚悟するがいい。もしかすると貴様……自分の娘に殺されるかもしれんぞ？」

固まる時臣に背を向けてギルガメッシュはグラスをもう一度傾けた。

「……やはり、不味いな。」

変わらぬもの

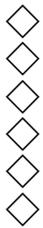
「カリスマ」とは、一部の常軌を逸した人物が持ち合わせている目に見えない性質のことで特に歴史上名高い人物がその力を発揮し、数多くの民衆を引き付けてきたという。

ここで我が王、ギルガメツシュのカリスマスキルのランクを思い出してみよう。

《A+》

驚異のランクである。間違いなく人類最高峰と言っても過言ではないだろう。というかここまで来るともう呪いとか洗脳の域に達している。

ちなみにこの驚異のカリスマスキルを所有するギルガメツシュが本気で人の心に語りかけた場合、何が起るか皆さんには想像できるだろうか？



遠坂時臣は頭を抱えていた。

「……………最近ギルガメツシュの言う通りに事が運び過ぎている気がするな。これではどちらがマスターなのか分からない……………昨夜の私もどこかおかしかった。親交も何もない魔術師の家に桜を預けるなどと……………そして最後のギルガメツシュの言葉。まさか魔術師である私の心があんなにかき乱されるとは……………魔術でも使ったわけではないだろうに……………ん？まさか!？」

昨夜はギルガメツシュの言葉を受けて心を大きくかき乱された時臣だが流石に一晩過ぎればギルガメツシュの作戦の穴にも気づく。

そしてギルガメツシュの恐ろしさにも。

「……カリスマスキルA+か。昨夜は少々精神が弱っていたとはいえこうもたやすく心を掌握されるとは……魔力の流れも全く感じなかった。これは恐ろしいスキルだな。」

時臣はようやくギルガメツシュの保有するスキルの中で最も危険なスキルに気が付いた。なにせこのスキルをギルガメツシュが本気で使えば最悪マスターを自分の傀儡に出来る可能性もあるのだ。

完全に死にスキルと思っていただけにその衝撃は大きかった。

「これは迂闊にギルガメツシュを喋らせる訳にはいかないな。……いつそのこと令呪で口と理性を閉じさせるか？……いやしかし、あの理性がなくてはギルガメツシュの理知的な戦法は取れないな。どうしたものか……」

ギルガメツシュにばれたら間違いなく殺されそうなことを思案する時臣。彼はやはりどこまで行っても魔術師だった。

……しかし、実はこの時臣の危ない思考も全ては目の前で起こっている謎の現象から目を背けるためのものだった。

「わーい！はーい！ほら、桜もいっしょにー！」

「……わーい」

現在、時臣自慢の娘たちは立派な鬘の神獣にまたがっていた。

……もう一度言おう『神獣』にまたがっていた

実は昨夜のうちにギルガメツシュは宣言通りにこの遠坂邸を要塞へと変貌させていた。

極力魔力消費の少ない結界道具を選び、それを屋敷の外に張り巡ら

せている。対軍宝具くらいならば数発耐えれるとギルガメツシュのお墨付きだ。

さらに自動防御宝具も設置し、所有権を一時的に時臣へと変更させていた。

ここまでなら手厚い英雄王の加護で喜んでいただろうが残念ながらノリノリの英雄王は止まらなかった。

「さあ出でよーライオンさ……」

『天地制す覇来の獅子（レオ・レクス）！』

ギルガメツシュが叫ぶと同時に見たこともないような眩い黄金の波紋が空中に広がり、その中から悠然と百獣の王が歩み寄ってきた。

全身からあふれ出る濃い神気。数多の戦いを潜り抜けてきたであろう立派な体躯。そしてその身を包む数多の宝具。

間違はなく目の前にいる獣こそがギルガメツシュと共に激戦を勝ち抜いてきた女神イシュタルの随獣だろう。

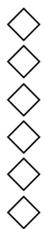
現代の魔術師たちが見たら取り敢えず3回位気絶しそうな位高い神獣の背中には、逆に凄過ぎてその価値が分からないのか無邪気にはしゃぐ凜と未だに感情を取り戻せない桜が棒読みのハイテンションでまたがっていた。

その常識を逸脱した光景に、妻の墓もまたその価値が分からないのか嬉しさと悲しさがブレンドされたような顔で微笑み、時臣は取り敢えず無意識に顎鬚を数本抜き、そして元凶たるギルガメツシュは満足そうに高笑いしながら時臣の酒を飲んでいた。

…… というかあのギルガメツシュの表情を見るに昨夜話していた内容は全てこの光景を見たいがための発言に思えてきた。

「はあ……。仕方がない桜については今後じっくりと考えるとしてカリスマスキルには付け焼き刃かもしれないがギルガメツシュと話す時は精神を魔術で補強しておこう。」

今まで以上にギルガメツシュを警戒し始めた時臣は手元の令呪をしつかりと見つめてから桜とコミュニケーションを取るために………もとい一生捧めるチャンスなどないであろう神獣を間近で見るためにライオンさんへと近づいて行った。



カリスマスキルがそんなに危険な代物とは全く知らずにいる英雄王ギルガメツシュは今現在、大変ご機嫌だった。

理由としては友達はまだにできていないものの目的の一つである人間観察をすることが出来ているからである。

「フツ、酒の味というものは思いの外化けるものだな。」

無邪気に笑っている凜もとい幼女を肴にして酒を楽しむ英雄王。

どっからどう見ても危ない人である。

しかし、本人から言わせてもらえば仕方のないことらしい。

なにせ「人間」を見に来たというのに出会うのは人間の形をした顎鬚に爺さんの形をした虫けら、影のような形をしているくせに影の薄いバーサーカーと目の死んでる幼女ときた。

え？雁夜おじさん？まああの泥臭く足掻いている感じは人間らしくて嫌いじゃないけど今は身体を治すのが先決なので相手してくれないだろうし完治した頃には聖杯戦争は終わっている可能性が高いので現世に留まるかどうか決めてない身としてはやはり雁夜おじさんは残念ながら人間観察リストには載せられない。

となれば一体誰がこのギルガメツシュの欲求を満たしてくれるのか？

ウルクの民ほどではなくていいから「人間」として確かな輝きを放

つ「個」の持ち主が現代にいないのだろうか？出来れば近くに。

……いるじゃん。

という訳で凜をこちらに招いたのだ。

最初出会った時は変わり果てた桜の様子に愕然としていたもの直ぐに我を取り戻して心の底から激怒し、本気で泣いていた。

血は繋がっているものの他人である桜のために自分のことのように怒って泣ける凜をギルガメッシュは称賛した。

さらにギルガメッシュは驚嘆することになる。

実は時臣の妻子をこちらに移すにあたって、魔術師殺し衛宮切嗣を最大限に警戒していたギルガメッシュは隠蔽宝具を多用して葵と凜をここまで警護してきたのだ。よっていつもよりはいささか物騒な気を漂わせていた。

しかし、タイミング悪く変わり果てた桜を見た凜はそんなギルガメッシュを敵と見なし、こう言い放ったのだ。

「あんた誰よ！もしかしてあんたが桜をこんな目に合わせたんじゃないでしょうね！だとしたらそこに直りなさい！この遠坂凜があんたを成敗してやるんだから！」

ちっぽけな宝石片手に万夫不当の英雄王に挑む幼き女子。

先ほども言ったがギルガメッシュは今少々物騒な気を放っている。臨戦態勢一歩手前くらいの気を。

そんな英雄王の気を受けてなお立ち向かおうとする現代の若き魔術師。

「凜！何をしている！直ぐにその宝石を仕舞いなさい！この方は……」

無粋なことを言い始めた時臣を目線で黙らせてから英雄王ギルガメッシュは勇気ある魔術師に向き直った。

「我が名は英雄王ギルガメッシュ。此度はアーチャーとしてお前の父に呼ばれた。」

さて、俺がその小娘をその状態にしたかどうかだっただな？ 残念ながら違う。その小娘は俺が拾った時からその状態だったのだ。眼は曇り、心を閉ざしてこの英雄王を前にしても畏怖することも敬うこともしなかった。まったく、最近の子供は礼儀がなつとらん。

だがそのまま英雄王ギルガメッシュの偉大さを知らずに死にゆくのも哀れでな、この家に持ち帰った次第よ。

どうだ、この話を信じるか？ それとも信じずに俺に挑むのか？

俺はどちらでも構わんが挑むというのなら…… 受けて立とう。」
そしてギルガメッシュは臨戦態勢に入った。常人ならば気絶してしまうであろうその圧倒的な覇気を前にして流石の凜も怯んだ。

しかし、寸前で踏ん張った凜は不遜にも英雄王ギルガメッシュを見極めるように睨み続けていた。

これには流石にギルガメッシュも驚いた。訳のわからない衝動に任せてこの少女を試してみたのだがまさかこんな反応が返ってくるとは……

「…… あなたの言う通りみたいね。何故かあなたの言葉は頭にスツと入ってきたしそれに、あなたとても真つすぐな目をしているんだもの。いいわあなたじゃないって納得してあげる。それから…… 桜を助けてくれたのね？ 疑ってごめんなさい。」

やがて自分の中で結論が出たのか凜は堂々と言い放ち、ぺこりと頭を下げて素直に謝った。

英雄王に対して相変わらず不遜な口調だがギルガメッシュはそんな凜を好ましく思っていた。

…… ちよつと膝が震えているのもポイント高い。

「…………… ふむ。凜とか言ったな？いいぞ気に入った。お前には特別に我が相棒の背にまたがる榮譽をやろう！」

こうして召喚されたライオンさんに現在凜は大はしやぎでまたがっている。

表情がコロコロと変わるところを見るにやはりまだまだ子供か。

にしてもこの少女はどこかウルクにいた子供たちを思い起こさせる。

あのギルガメッシュを本当に敬っているのかどうかよく分からない生意気さも、無邪気に笑いながら遊びまわる姿もあの頃のままだ。

「わーい！ありがとう、王様！」

「…………… 変わらないものもあるのだな。」

「え？何て言った？」

「何でもない。それ、次は空中を走ってもらえ。」

「うん！」

…………… ああ、あの子供の笑顔というものはウルクから変わらんだな。

胸の内で呟いたギルガメッシュは手に持っていた赤ワインを口に流し込んで一言呟いた。

「.....
美味い。」

闘いの心得

「…………… キャスターか。」

教会からキャスター討伐の件について聞かされたウェイバーは使
い魔との視覚共有を切って自身のサーヴァントを見た。

「うーむ。」

そこには図書館で借りてきた本に顔を埋め、時折顔を本から浮上さ
せて考え事に耽る征服王イスカンダルがいた。

「…………… なあ、一体いつまで読んでるつもりなんだ？その『ギルガ
メツシュ叙事詩』。」

実は倉庫での戦闘の後、ライダーは再び図書館に不法侵入を果た
し、白目を向くウェイバーを尻目に『ギルガメツシュ叙事詩』を持っ
て帰宅したのだ。

「折角敵サーヴァントの真名が分かったのだ。調べるのは当然のこと
であろう？」

「…………… なんか意外だな。お前はもつと考えなしに笑いながら
突っ込んでいくのかと思ってた。」

「うむ…………… まあ他のサーヴァントが相手ならそうしとつただろ
うが流石に『英雄王ギルガメツシュ』が相手となるとそれなりに対策
をしておかんとな。人間本当に大きな壁にぶつかった時は大体力任
せよりも知恵に任せてその壁をぶち壊すもんだ。」

明らかに脳筋な見た目のサーヴァントの口から放たれた理知的な
意見に内心ウェイバーは驚いていた。

しかし、同時に理解できない点もあった。

「でもその本が本当に役に立つのか？わざわざ本を読まなくてもギル
ガメツシュのおおよその情報は聖杯から与えられているんだろう？」

確かに敵サーヴァントについてよく知るためにその伝記を読むと
いうのは一見するとなかなかいい案のように思えるが伝記に書かれ
てあるような目立つ情報は既に聖杯から渡されているはずなのだ。

よってウェイバーにはライダーがわざわざ本からギルガメッシュについて知ろうとする非合理的な行動が理解出来なかった。

「ふむ、そうさなあ……ま、理由は色々あるがまずは簡単な文章にまとめられて目に見える形で文字が並んでいることだな。これは非常にいいもんだぞ。なにせ情報の整理がしやすいからな。例えば……ギルガメッシュが戦ってきた敵をまとめていくと……ほれどうだ！」

図書館で借りてきた本にペンで書き込みをしていくライダー。その奇行に頭を痛めながらもウェイバーは本を覗き込み、ライダーが言わんとしていることが何となく分かった。

「……対人戦の経験が少ない？」

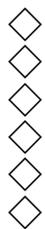
ドラゴン、魔物、神、どれも伝説上の存在だがその中に「人」はあまりなかった。あると言えばキシユ族の虐殺ぐらいのものだ。

「その通り！英雄ってのは大体戦争とかで人を多く殺してなるもんだがギルガメッシュにはそういう逸話はない。もしかしたらそこに記載されていないだけで戦争を経験しているのかもしれないがバーサーカー戦の時、奴は間違いなく『人の形をした敵は久しぶりだ』と呟いていた。結論としてギルガメッシュは対人戦の経験が浅く戦争の経験もないため、大軍で攻められれば対処を誤る可能性があると推測できるわけだ。」

”なるほど”とウェイバーは内心で呟いた。思えばバーサーカーとの戦闘においても素人目ではあるもののギルガメッシュはバーサーカーにかなり押されていたように思える。もちろんアーチャーが接近戦を行っているだけでも脅威なうえにそれ自体が演技の可能性もあるが圧倒的な技量を持っているのなら小細工などせずにあっさりとバーサーカーを倒していただろう。

「……でも大軍を用意するって言ったって……」

「まあまあ、そこは余に任せておけ！……というかもうここで教えておくか、後々驚かれても面倒だしな。よいか？余の宝具はな……」



「ふう。」

璃正神父との連絡を終えた時臣は椅子に深く腰を掛け、考え事に集中し始めた。

今のところは全て順調に事が進んでいる。いくつかイレギュラーはあったものの、バーサーカーを撃破し令呪を一つ追加できる機会も手に入れた。

胎盤にされる寸前だった桜も救えた。最近では自分から凜や葵に話しかけることもあるようだ。…………… 何故か自分には一切ないが。

「…………… ともかくまずはキャスターを討たなければ。どうやってギルガメツシュを動かすべきか……………」

桜のことは取り敢えず頭の隅に追いやって聖杯戦争について考えることにした時臣。

最近では自宅でも凜の視線が痛く、地下の工房で聖杯戦争について考えを巡らせる時が唯一の心休まる時間となってきた時臣は真剣な表情でギルガメツシュを動かす手段を考える。酒か、漫画か、幼女か「邪魔するぞ時臣。」

そんな時臣の前にタイミング良く黄金の光片と共にギルガメツシュが姿を現した。

……
何故かフライドチキン片手に

「……………これは英雄王ギルガメツシュ、丁度いいところにお越し下さいました。実は……………」

時臣は何時の間にか身に着いたスルースキルを發揮してフライドチキンを無視し、令呪を新たに一つ追加するという本来の目的を除いて全てをギルガメツシュに話した。

「……………なるほどな子供をさらって玩具にするサーヴァントとマスターか。そやつらを俺に退治させようというわけか。」

キヤスターたちの凶行、アサシンたちによつて発見された拠点、聖杯戦争の一時休戦。

全てをフライドチキン食べながら黙って聞いていたギルガメツシュに時臣はさらに畳みかける。

「奴らは見境もなく幼い子供らを自分たちの玩具にする外道です！御身の庭を汚す害虫です！どうか英雄王手ずからの鉄槌をお与え下さいー！」

「……………いいだろうお前の口車に乗ってやろう。お前の要求通りに

令呪を取ってきてやろう。」

「っ！」

部屋と時臣の温度が一気に低下した。

”教会での会談を覗かれていた!?”

だが英雄王の力を持ってすれば使い魔など用いずとも遠見の宝具を使って覗き見をするくらい簡単なことだろうと直ぐに納得した。

まだ本来の目論見がばれたとは思えないが令呪の追加については言い訳をしておかないと後々怪しまれることになるだろう。

「……………実は、私は私なりに多大な慈悲を下さる王に報いることができないかと考えた結果、令呪によるサポートが現時点における最も「俺は俺の戦いに介入を許した覚えはないが?」っ！」

どんどん墓穴を掘ってゆく時臣は追加令呪のことを隠したことに後悔していた。

「……………まあよい。これ以上追及するのは止めておこう。取り敢えずキャスターの工房まで赴けばよいのだな?」

「……………はい。」

大幅に寿命を削られたような心境の時臣はしかし、動揺をほとんど面に出さずに神妙な顔で頷いた。

「ああ、言い忘れていたが俺の召喚したあの神獣だがな……好みは人の肉でな、特に俺に従わぬ者の腐った肉が好みだそうだ。おいおいどうした？顔が真っ青だぞ？誰もお前のことだとは言っておらんぞ？……だがここ最近腹を空かせているようだからな。気を付けたほうがいいかもしれんな？さもなくばこの骨のように肉を全て削がれることになるやもしれんぞ？」

最後にとんでもない爆弾とフライドチキンの骨を落としてギルガメッシュは去って行った。

英雄の条件

「さて、行くか。」

真っ白なシャツに黒いジャケットを羽織り、首に金細工のネックレスを巻いたカジユアルな装備の英雄王ギルガメツシユは小さく呟いた後に億劫そうに立ち上がった。

「王さまどこ行くの？」

一緒に遊んでいた凜が急に立ち上がったギルガメツシユに尋ねた。「なに、ちょっとお前たちの父の敵を倒しに行くだけさ。」

時臣に釘を刺した後、暫くの間凜と桜の二人に混ざって遊んでいたギルガメツシユだが、じつところちらを見つめてきては念話で”王よ、どうか迅速にキャスター討伐を……！”と囁いてくる時臣の鬱陶しさに耐えられなくなり、ようやくと重い腰を上げることにしたのだ。

「私も行くー！」

すると案の定、自分も行くと言い出したファザゴン娘、遠坂凜。

「ダメに決まっておろう。」

「どうしてよ!？」

「危ないからだ。」

「自分の身くらい自分で守れるわ！」

「ほう?ならば……レオ・レクス！」

ガオオオオオオオオオ!!

「キャッー！」

ライオンさんの咆哮にビビッて腰を抜かしてしまふ凜。

ちなみに桜はビクともしていない。

「それ見たことか。ライオンにビビッていては、殺人鬼の相手は務まらないぞ?おとなしく家で待っている……桜!そのお転婆姫から目を離すなよ!」

コクリと頷いた桜に頷き返したギルガメツシユはキャスター討伐に出掛けた。



間桐桜…… いや、遠坂桜は顔には出ないものの困惑していた。

「凜、桜！ご飯できたわよ！運ぶの手伝って！」

はーい！と元気よく返事をして暖かい料理の乗った皿を運んでいく姉に見習って一緒に皿を運びながら桜はどこか客観的に自分の状況を整理していた。

遠坂の家を離れて間桐の家で養子に出され、何も感じられなくなるまで心と体を蟲に嬲られた。

苦痛の中で感情が麻痺し、段々と別の何かに染め上げられていく中で、かつての桜はおぼろげながら自分の未来を悟っていた。

即ち、このまま間桐の家で胎盤として意味もなく自分に群がるこの蟲たちのように生涯を終えるという未来を……

常人ならば発狂しかねない現状にも、未来に対しても桜が何かを思うことはなくなっていた。

だからこのまま

生きる意味も

生の喜びも

悲しみも

何も感じず、

ましてや誰かに思われることなどなく自分の生涯は終わると思っていた。

「どう？美味しい？」

母の作ったお昼ごはんを機械的に口に運びながら桜は取り敢えず頷いておいた。

自分のことを諦めていた桜の日々が一変したのはあの「王さま」がやって来た頃からだった。

コンコン

「邪魔するぞ…… お前が桜か？」

ごく普通のドアノックと共にその人は私の自室に入ってきた。

私はおろか私の自室まで威圧せんばかりの圧倒的な存在感に、人ではあり得ない完璧な容姿。

最初の印象はとても眩しい人、だった。

「ふむ。酷い目をしているな、普通はギルガメッシュ様くと目を輝かせるところなのだが…… まあよい、あの見るに堪えん害虫は燃やしておいた。取り敢えずお前は自由の身だが…… まあ実感もないだろうしな、今度は遠坂の家に逆戻りとも思っておけばよい。」

おじいさまが燃やされたことは何となく分かった。しかし、そのことに桜が喜びを感じることはなかった。ただ……

「…… 私はどこに行くんですか？」

「ん？だから遠坂の家だと…… いや、そういうことか。残念ながららその問いには答えられんな、それはお前自身で見つけることだからだ…… まあ、ゆっくりと探せ。」

圧倒的な覇気を放つその王さまはしかし、私に語りかけた時だけ少し複雑そうな顔をしていた。

まるで遠い昔に出会った誰かを思い出すように……

「…… ごちそうさまでした。」

丁度回想が終わった頃にご飯を食べ終わったので、取り敢えず形式上の挨拶をしてから皿を流し台に運ぶことにする。

「はいーお粗末様でしたー！」

すると、桜の挨拶に反応した母の葵が満面の笑みで挨拶を返してき

た。

「桜早く！今度はライオンさんに空飛んでもらいましょう！」

先に食べ終わっていた姉の凜が桜を急かす。

「待ちなさい凜！取り敢えず認知阻害の結界を庭に張らなければ……」

家訓の優雅はどこへ行ったのか、慌てて結界の準備を始める父の時臣。

…… 彼らが桜を困惑させている原因に他ならない。彼らといると昔の暖かな気持ちに蘇ってきそうで……

「桜？」

取り敢えず思考を無理やりストップさせた桜は首を傾げた姉の方へと駆け出した。



「なに？ライダーが？」

冬木市の上空、光学迷彩を発動させた空中戦艦「天翔る王の御座（ヴィマーナ）」の玉座に座りながらギルガメッシュは自身専用アサシン、アサ子の報告を聞いていた。

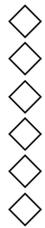
「はい。マスターの少年と共にキャスターの工房を襲撃したようです。」

「ほう？してキャスターは？」

「それが不在のようですね…… 見つけ次第報告致します。」

「分かった、報告ご苦労。ああ、それからライダーを見張っているアサシンに伝えておけ。くれぐれも勝手な真似をするな、とな。」

「かしこまりました。」



ウェイバー・ベルベットは人の法から外れた魔術師である。それは自分が自信を持つて断言できることであり、揺るがぬ事実である。

そして魔術師とは、真理の探求者の名である。自分の全てをかけてこの世界の外側、即ち根源を目指す。

そんな生き方にウェイバーは憧れていたし実際に魔術師として真理の探求、根源への到達までの努力を怠ったことはなかった。

当然人の法から外れているからには人の道を外れた行いをする魔術師も大勢いると聞いている。

ウェイバーには経験のないことだが、人の法から外れているのだからたとえ死体を見たとしても動揺しないという自信のようなものがあった。

しかし、

「……なあライダー、この子達は何を思いながら死んでいったのかな？」

キヤスターの居場所を突き止めたウェイバーはライダーと共に意気揚々と工房に乗り込んできた。

しかし、そこに待っていたのは人としての尊厳を全て剥奪された未成ある子供たちの死体……とすら言えない物体だった。

子供たちの身体を使って創作された食器、楽器等のオブジェ。

その命を使い尽くした創作物を見せられたウェイバーは胃の中の物を全て戻してしまい、ライダーは苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「そんなこと、余が知るわけなからう。だがそうさな、きつと早く終わらせて欲しかったんじゃないか？」

苦しみ続ける子供たちをみていられなかったのかライダーはキュプリオトの剣でその苦しみを断っていった。かすかに聞こえた

”ありがとう”の言葉を噛み締めながら。

その後、一刻も早くキヤスターを討つためにその工房の中の探索を

始めた。しかし、行き先を示すものも真名の手掛かりも見つからず、完全に手詰まりになっていた頃に、その男はやって来た。

「久しいな、征服王イスカンドル。」

何時の間にか現代の衣装を纏った英雄王ギルガメッシュが探索を続けるウエイバーたちの後ろに立っていた。

「おう、英雄王か。悪いが余は今少し機嫌が悪くてな………だが、相手をしてほしいなら相手になってやってもよいぞ?」

何時の間にか戦車の隣に移動していたライダーが腰の剣に手をやりながらいつもよりも低い声で挨拶を交わす。

「………なるほど、いや今回は止めておこう。」

辺りを見渡し、キャスターたちの凶行を目の当たりにした英雄王は納得したように頷くと、あっさり背中を見せるとライダーによって介錯された死体に歩み寄っていった。

そのまま死体を眺め続ける英雄王の背中を見つめていたウエイバーは気がつけばあれほど恐れていた敵サーヴァントに尋ねていた。この王なら知っている気がしたのだ。

「………この子達の死に何か意味はあったのか?」

魔術師にとつての”死”は、次の世代に自分の生涯をかけた研究結果を譲り渡すことに他ならない。少なくともウエイバーはそう思っている。だから魔術師の”死”は死ではない。

しかし、苦しみながら死んでいったこの子供たちに何か意味があったのかどうか……それがウエイバーにはどうしても分からなかった。

「………”死”というやつには2種類ある。その死によって生きている者たちに影響を与える意味ある”死”。そしてただ自然の大循環によって死ぬ自然現象としての”死”。どちらも死に変わりはないが、この子供たちの死がどちらかはわかるだろうか?」

殺人鬼の愉しみのために死ぬことになった子供たち。果たしてその”死”に意味はあったのか?殺人鬼に快楽を与えたという意味では役に立っているのかもしれないが……

悩むウエイバーを見かねたのか今度は英雄王から語りかけて来た。

「我々英霊を見る。この身は過去に一度死に、肉体はとつくに滅んでいる。しかし、ならば何故我々が写し身とはいえ再び現世にやってくる事ができたのか？しかと考えよ。」

「そ、それは…… 英霊の座があるから？」

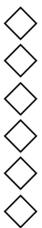
「その通りだが…… まあよい。答えはお前達が我らのことを『覚えてる』からだ。我ら英雄の生き様を、その死を実際に見てはいないとは言え覚えているから我らはここにいます。だから…… 忘れるなよ。この子たちの“死”を。今生きているお前が覚えていればこやつらにも意味を持たせてやる事ができるだろう。…… 酷なようだが、お前の生きる糧とするのだ少年。」

英雄王の宝具によって火葬されていく子供たちの死体を目に焼き付けながらウエイバーは戦車に乗った。

「場所はセイバーの城でいいかの？」

「まあそこが妥当だろうな。」

戦車の上で飲み会の相談をしているサーヴァントたちを見ながら英雄の条件には切り替えの速さも必要なのかと若干呆れながら。



「ふう……… よっー。」

遠坂邸を囲っていた時臣の結界は英雄王の「邪魔」の一声で撤去さ

れ、代わりに英雄王の防御宝具が展開された。

英雄王の防御宝具は普段は球体のような形で宙に浮いているものの敵の攻撃に対して自動的に反応、発動し、すぐさま防衛形態に移行するという優れた宝具だ。

しかし、そんな優れた宝具でもじゃじゃ馬お転婆娘の家出を防ぐことは出来なかったようだ。

あっさりと遠坂邸を抜け出した遠坂家長女の凜は心の中で両親と妹に謝りながら夜の冬木市へと駆け出して行った。

冬木の遠坂邸に帰って来てから暫くの間、凜は友人のコトネと連絡を取り合っていた。別の家の子になってしまった筈の妹と再開できたこと、凄く綺麗で偉い人に会ったこと、ライオンさんと友達になったことなどなど。

しかし、ここ最近連絡が取れなくなってしまうている。おまけに英雄王が無理やり家に持ち込んできたテレビでは連日、児童誘拐事件が取り上げられている。

極めつけは、英雄王の言っていた「父の敵」、「殺人鬼」これの意味するところは凜の聡明な頭脳を持つてすれば直ぐに分かった。

間違いなく聖杯戦争に参加しているマスターかサーヴァント、あるいはその両方がこの事件を引き起こしている。

サーヴァントが如何に強力な存在なのかということとはあの王さまのおかげでよく分かっている。だから決して正面から立ち向かったりはしない。取り敢えずはコトネを探すことに専念してもしも敵に遭遇した場合は直ぐにその場に隠れて王さまを呼ぶ。

そんな凜の装備は3つ。

1つ目は王さまに渡された古代ウルク特製の通信機だ。普段はネットワークのような形をしているものの石の部分を耳に当てながら魔力を流せば英雄王と通信できるのだ。

2つ目はお父様から貰った魔力針だ。これを使ってコトネを探し出すつもりだ。あわよくばサーヴァントも……

3つ目は水晶片だ。王さまには全く効かなかったものの、目くらましくらいにはなってくれる筈だ。

「大丈夫、大丈夫、あなたなら行けるわ遠坂凜。さあ、行くわよ！」
「どこに？」

「どこに？この魔力針の指す方向に……って桜!？」

凜の出鼻をくじいた者の正体はちゃっかり凜に付いて来た桜だった。

「どうしてここに!?!というか何でついて来ちゃったわけ!?!」

「何でって……王さまに姉さんから目を離すなって言われてたから。」

詰め寄る凜に対して桜はあっさり理由を明かした。

「……はあ、仕方ないわね。一緒にいきましよう。ただし!私から絶対に離れないこと!」

家に帰そうかとも思ったものの今帰ってしまうと両親に凜が家を出ていったことがばれてしまう。ならば連れて行って自分が守るしかない。

凜は覚悟を決めた。

そんな姉の覚悟を決めた横顔を見ながら桜は何故自分が姉に付いて来たのかを今さらながら考えていた。勿論姉に言った王さまに言われたからというのも嘘ではない。嘘ではないがしかし、それだったら両親に凜の行動を伝えれば全て丸く収まっていただろう。

桜は困惑していた。何故自分が姉に付いて来たのか?何故姉は友達だからといって両親に叱られることを覚悟してまで探しに行くのか?

「可愛いね君たち。お兄さんと一緒にパーティーしない?」

何故運よく……いや、運悪く殺人鬼と遭遇してしまったのか?

「っ!桜に近づくな!」

何故姉が命の危機にありながら血の繋がりにかない妹のことを助けようとするのか?

何故恐怖に震えながらも殺人鬼の前に立ちふさがり、桜のことを守ろうとするのか?

「こちら、女の子がそんなに怖い顔をするもんじやないよ?」

優しい笑顔を張り付けながらこちらに近づいて来る殺人鬼に対してそれでも遠坂凜は妹の前から退くことはなかった。

キツ!と殺人鬼を睨みつけたままポケットに手を伸ばし……

「これでも喰らってなさい変態!」

魔力を込めた水晶片を思いっきり投げつけた。

悪戯の一環として英雄王に隙あらば投擲し、通じずにどや顔を見せられるたびに屈辱をエネルギーに変えて改良を重ねてきた水晶片は綺麗な放物線を描きながら殺人鬼に迫り……

ピカッ!

「ぐっ!」

スタングレネードが如く発光し、殺人鬼の目を一時的に潰した。

「走るわよ桜!」

水晶片を投げつけた瞬間に桜に覆いかぶさって視界を防いでいた凜はすぐさま立ち上がり、殺人鬼の悲鳴を聞きながら桜の腕を強引に引っ張って走り始めた。

相手は大人だ。どう足掻いても力では敵わない。ならば一旦安全な場所まで逃げてから助けを呼ぶ。

凜は一瞬で状況を判断し、撤退を選択した。

「はあ、はあ、桜、がんばって……」

再開して間もない妹を励ましながら凜は路地裏を記憶頼りに駆け抜けていく。優雅さを捨てて必死に、息を切らせながら。

「……………」

桜は強引に腕を引く姉の掌から伝わる暖かさを感じながら胸の内側からあふれ出しそうな気持ちに戸惑っていた。

しかし、それでも分かることがある。それは……

「(なんだか、安心する)」

この姉に強引に手を引かれる感覚が嫌いではないということだ。

「見つけた…… やってくれたな餓鬼。」

しかし、鬼ごっこは終わりを告げる。何時の間にか凧達の進行方向には片目だけを開き、狂気的な笑みを浮かべたあの殺人鬼が立ちふさがっていた。

「っ！どうして……」

啞然と凧が呟いた。いくらなんでも立ち直るのが早すぎると

「いや、あの時片目だけはなんとか服でガードできたみたいでねえ、危なかった…… 下手したら失明してたよ？」

ゾクッ

片目の殺人鬼が放つ殺気に思わず凧は一步後ずさってしまいそうになった。しかし、自分の後ろにいる桜の存在が自然と凧の足を後ろではなく前に押し出していた。

「(そうよ！後ろには桜がいる。すっかりしなさい遠坂凧！それにこの程度の殺気、あの王様に比べればどうってことない！)」

キツ！と凧は目の前の殺人鬼もとい変態を睨みつける。

「……へえ、なかなか面白いね君。」

己の殺気を物ともせず正面から睨みつけてくる少女を前に殺人鬼雨竜龍之介は嬉しそうに笑って舌なめずりをした。

「でも、度胸だけじゃ何もできないよ？」

殺人鬼の手が迫る。その手で少女を自分の思うがままに弄るために、欲望に従ってその幼き肢体を汚すために……

——しかし、そんな狼狽を許さぬ獣が一匹いた。

「グルルルル……！」

暗黒の路地裏に聞こえないはずの唸り声が突如響いた。

「っ！誰だ！」

その本能を揺さぶるような恐ろしい響きに兩竜龍之介は凜達から目を外して虚空を睨みつけた。

すると龍之介の言葉に応えたのか唸り声の主が徐々に姿を現した。

——それは『王』だった。この世に存在する全ての獣の頂点に君臨する『獣の王』。

周りを威圧する巨体に金色に輝く鬣、4本の脚でこちらに悠々と歩み寄ってくる姿には優雅さすら感じる。

「ライオンさん！」

凜の喜びの声に答えるようにライオンさんことレオ・レクスは首を一振りした後、殺人鬼を見据えて一步を踏み出し……

「っ！なに！」

その“一步”で殺人鬼との間合いを瞬時に詰めてその鋭利な爪を振り下ろした。

「まじ……か……よ？」

その瞬間移動とも呼べる速度もさながら龍之介を切り裂いた後からの流れるような後ろ足による蹴りも見事で……

「グッ！」

その全てを受けて壁に叩き付けられながらも龍之介は意識を失う最後までその美しい獣に魅せられていた。

帰り道、隠蔽宝具を使って姿を隠したライオンさんの背にまたがって夜空を駆けながら気がつけば桜は景色を楽しんでいる凛に問うていた。

「……ねえ、姉さん。姉さんはどうして友達を探しに行こうとしたの？」

「何でって……そんなの私が遠坂凜だからに決まってるじゃない。」
なるほど、姉らしい答えだった。実際にあの現場には姉の友達のコトネもおり、気を失っているだけと分かったので近くの公衆電話から警察に通報しておいたのだ。ちなみにあの殺人鬼もライオンさんの絶妙な手加減によって重傷ながら生きている。今頃は警察署だろう。「……ねえ、姉さん。どうして私を守ろうとしたの？それも命懸けで。」

「何でって……そんなの私が遠坂凜であなたの姉だからに決まってるじゃない。一体どうしたの？」

何でもない、と首を振ってから桜は謎が解けたように少しだけスッキリしたような顔をしていた。

そうだ、悩むまでもなくこの姉は、遠坂凜という少女はこういう人だった。どこまでも優しくどこまでも誇り高い少女。

「ねえ、ほんとにどうしたのよ桜！ちよつとニヤニヤして。もしかして……あの変態殺人鬼に何かされた!？」

そして……どこまでも妹に甘い姉。

その後、家に帰った二人の姉妹は両親にこっ酷く叱られた後に思いつき抱きしめられた。

4人の家族の抱擁の輪の中で桜は居場所を見つけた幼子のような笑みを浮かべてそのまま眠りについた。

王の怒り

鳴り響く救急車とパトカーの音。

徐々に近づいて来るその音を聴きながら冬木市を騒がせた殺人鬼、雨生龍之介はうっとり神獣の爪に切り裂かれた自分の腹を見つめていた。

「へへ…：これだよこれ、俺の探してたのはさ…：」

確実に迫ってくる警察の足音を聴きながらそれでもなお、純真無垢な殺人鬼は満ち足りた表情で自身からあふれ出る血を飽きもせず見つめていた。

「なんだあ…：俺の中にあつたんなんて…：反則だろ…：」

しかし、それも仕方ないことだろう。なにせ彼はたつた今、ずっと欲しがっていたものの在り処を見つけたのだから。

「でも…：サツに捕まっちゃうのか…：旦那には悪いことしちまつたなあ…：」

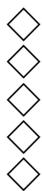
よって、案外友達思いの彼が自分だけが満ち足りた後に警察に捕まえることに罪悪感を抱くことは当然のことであり、

「旦那も…：早く探し物…：見つけなよ…：」

良き友人である青髭の幸せを願うのも必然であった。

「警察だ！両手を挙げておとなしくしろ！」

大人しく挙げたその手の甲には先ほどまであつた紅い紋章「令呪」が全てなくなっていた。



剣の鍛錬と王になるための勉強以外特にすることのなかった子供の頃のアルトリア・ペンドラゴンはある英雄叙事詩に夢中になっていた。

誰もが知っているであろうその有名な物語は立派な王を目指す少女を瞬く間に虜にし、常にその本を持ち歩かせるにまで至った。そして嫌なことがあれば直ぐに本を開き、勇敢なる王の物語に励まされた。

王になつてからも度々人目を盗んでこっそりと読みふけり、自分の気持ちを奮い立たせていた。

……とある花の魔術師には直ぐにばれてからかわれたが

襲い来る強大な敵から国を守り抜き、国を革新的な方法で発展させ、最後には神々に立ち向かって行き、数々の冒険を繰り広げた。

単純なストーリーだがそれ故に子供のアルトリアにも理解しやすく、そして何より主人公の王様にアルトリアは魅せられた。

時折失敗を重ねながらも考えを巡らながら民のために戦い続け、最後の最後まで国のために尽くし、玉座の上で息を引き取ったその王様の生き様に、アルトリアは憧れたのだ。

しかし、憧れは所詮憧れでしかない。

あの王様のようになりたくて必死に足掻いたアルトリア・ペンドラゴンの生涯は、結局何もしえぬまま無為に終わろうとしていた。

ー国を敵から守り抜くどころか国が割れて殺し合い、
ー国を発展させるどころか血と屍で大地を荒廃させた。

「どうして…… 私は…… ただ……」

血に染まった丘の上でアーサー王は一人嘆く。いつも大事に持ち歩いていた英雄叙事詩『ギルガメツシュ叙事詩』を握りしめながら。

◇◇◇◇◇

「……なるほど、キャスターはジル・ド・レエ伯爵か。」

アインツベルン城で行われている作戦会議にて、キャスターに遭遇したことを切嗣に報告するアイリスフィールは倉庫での戦闘以来どこか様子のおかしなセイバーを気遣いながらも会議に集中していた。「ええ、なんだかまた来るみたいなのを言っていたわ。その……セイバーが切り掛かった後に……」

そう、セイバーはキャスターが正気ではないと悟るや普段の冷静さをかなぐり捨て、まるで大きな感情を持って余した子供のようにならび声を上げながら切り掛かっていったのだ。

これにはアイリスフィールは勿論話を聞かされた切嗣も驚いた。そしてつい胡乱な眼差しをセイバーに向けてしまう。

しかし、セイバーは気づかない。あれだけコミュニケーションを取っていたがっていたマスターから友好的ではないとは言え視線を向けられているのになんのアクションも起こさそうとしない。どこか上の空のままである。

「チツ」

セイバーのよろしくない状態に思わず切嗣は舌打ちをしてしまった。妻のアイリスフィールが怯えてしまった気配がしたがそれでも切嗣は自分を抑えられなかった。

実はケイネスの泊まっていたホテルを爆破した後、微力ながらサーヴァントの気配を感じ取った切嗣は直ぐに身を隠し、暫くした後には舞弥との集合場所に向かったがそこに舞弥はおらず急いでホテルを見張っていた場所に行くところには重傷の舞弥が倒れていた。

なんとか意識を失う寸前に聞いた話によると、アサシンのサーヴァントを連れたい言峰綺礼に襲撃を受けたという。

言峰の目的を伝えれぬまま舞弥は意識を失った。

今はアインベルン城の一室で休ませているとは言え、暫く戦闘は不可能だろうと切嗣は判断している。

つまり、今の切嗣には早くも戦闘不能になった駒が1つ…いや下手をすると2つということになる。しかもどちらも今回の戦争を勝ち抜くために必要な重要な駒である。

「くそっ……ん？どうしたんだいアイリ？」

思わず悪態をついた切嗣だったが妻の様子がおかしいことに気が付き、心配そうな表情を見せた。

「……おまちかねの侵入者よ、あなた。」

アイリスフィールは直感で敵を悟ったのか戦士としての顔を取り戻したセイバーに目をやりながら遠見の水晶玉の準備を始めた。

◇◇◇◇◇

ありとあらゆる時代の猛者たちを集め戦わせる『聖杯戦争』ならばあの『王』が召喚される可能性も十分に考えられた。

そう、考えられることなのに考え付かなかった。

倉庫の上からこちらを見下ろし、堂々と名乗りを上げたその『王』の姿を見て真っ先に感じたのは真っ黒なドロドロした感情だった。

最初はその感情の正体がわからなくて困惑していた。あんなに憧れていたのに、あんなに会ってみたかったのに、と。

しかし、考えを積み重ねるうちに理解した。この感情は即ち、

『嫉妬』

であると。

私は嫉妬していたのだ、あの誇り高く輝かしい英雄に。私は羨ましいのだ、国を救い、発展させたあの王様が。

そして…… 私は妬ましいのだ、あの『英雄王ギルガメッシュ』が。

「聖処女よ！ジル・ド・レエ罷り越してございます！」

水晶玉の向こうには相変わらず耳障りな声で別人の名を呼ぶ頭のおかしなキャスターが映っている。

そう、別人だ。私は聖処女などではなく失敗した王、アーサー王だ。

「さあさあ坊やたち、鬼ごっこを始めますよ？」

そして私はまた失敗する。何も救うことができぬままだ立ち尽くすだけ

「やめろッ！」

いくら叫んでもキャスターとその手に頭を掴まれている少年は水晶玉の向こうだ。そしてセイバーの冷静沈着な頭脳はこう囁いている。

“あの子はもう助からない。ならば他の子供の救出に”

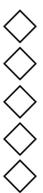
そんな風に切り捨てることを覚えてしまった自分に嫌気がさしながらもセイバーはせめて最後まで足掻こうと叫び続け、そして大きなキヤスターの腕が少年の頭蓋骨を……

グシヤ

水晶玉の向こうで咲く鮮血。それは哀れな少年の頭蓋骨……ではなく

「グアアアアアアア！」

キヤスターの腕だった。



「ふう、間一髪だったか。」

アインベルンの森から約3kmほど離れた上空の『天翔る王の御座(ヴィマーナ)』から見事キヤスターの腕を弓で射出した剣で切断したギルガメツシユはほっと一息ついた。

「3km離れた場所から矢の代わりに剣で狙撃する俺マジで弓兵の鑑。」

生前？とある紅い正義の味方に憧れていたギルガメツシユは嬉しそうに念願の攻撃方法をとれたことに喜んでいた。

「さて……まずは子供らの回収か。全くサーヴァント使いの荒いことだ。」

ギルガメツシユがブツブツ言っている間にもきちんと動き続けていたヴィマーナは遂にキヤスターの上空に到着し、停止した。

ただでさえ目立つヴィマーナは夜の闇の中でさらに光り輝いてお

り、その威容はセイバーたちは勿論キャスターの視界にも入っていた。

そして瞬時に己の腕を切断した狼藉者の正体にも気が付いた。

「おのれ！おのれおのれおのれおのれエツ!! 一体誰の許しを得て私の腕を切り落としているうううう!!」

光り輝く舟を、その舟からこちらを見下ろす男を睨んでキャスターは怒りの声を上げる。

「そもそも聖処女と私の『黙れ』っ！」

しかし、その怒りの声は圧倒的な覇者の放った一言で封殺された。

「誰の許しを得てだど? そんなものこの俺以外に誰がいる?」

英雄王ギルガメツシユは傲慢にそう言い切りながらパチンツ!と指を鳴らした。

「うわっ!」

するとその瞬間子供たちの真下の空間が歪み、一人残らずその空間に吸い込まれていった。

「子供らにはご退席願ったが... 別に構わんよなあ?」

今度はギルガメツシユの背後の空間が歪み数多の剣群が展開された。

撃ち出される数多の宝具。

主の命令通り忠実に標的に向かって飛んで行ったその宝具たちはしかし、命令を果たすこと叶わず醜い海魔を貫くに留まった。

「ん?」

ここでやっとギルガメツシユはキャスターの様子がおかしいことに気が付いた。確かにカリスマスキル全開で喋ったものの、元々頭がおかしくヒステリックに叫んでいたキャスターが黙ったままというのは少し不気味だった。

「ふん、まあいい。つまらん雑事は手っ取り早く済ませるに限る。さっさと死ね。」

先ほどよりも数を増やしたギルガメッシュの宝具が放たれキヤスターに……

◇◇◇◇◇

その男は「神」を憎んでいる。自分の都合のいいように人間たちを使つて好き勝手に遊び、興味がなくなつたらごみのように捨てる。国を守るために命を燃やした少女さえも……

その理不尽な傲慢さが、圧倒的な力が、人を見ているようで全く見えない身勝手さを憎んでいる。

『誰の許しを得てだど？そんなものこの俺以外に誰がいる？』

天からこちらを見下すその傲慢さ、光り輝くその姿、聖少女との再会を邪魔する身勝手さ、まさしく「神」じゃないか？

「……………許さない。」

その男は神を憎んでいる。少なくとも出会つたら己の命と引き換えにしてもその身を地に引き摺り下ろそうと画策するくらいには。

「……………私は『神』を許さない。」

その男、ジル・ド・レエ伯爵は神を地に引き摺り下ろすべく、それ〃を召喚する。

◇◇◇◇◇

キヤスターを狙つたギルガメッシュの宝具はまたしても海魔に

よって阻まれた。

「チツ！……ん？」

大きな舌打ちをしたギルガメツシュだが直ぐにキャスターが何かを起こそうとしていることに気が付いた。

「何をするつもりかは知らんが……させんぞ？」

敵の変身を待つなどという空気を讀む力が必要なことが苦手なギルガメツシュはキャスターの周囲を王の財宝で囲み、一気に勝負をつけようとした。しかし……

「ああ龍之介、貴方から莫大な力が流れ込んでくるのがわかります。貴方はこう言いたいのですね？あの『神』を許すな！と。いいでしょう貴方の期待に応えるべく私も全力を尽くしましょう。傲岸なる『神』を！冷酷なる『神』を！我らは御坐より地に引き摺り下ろす！神の愛した子羊どもを！神の似姿たる人間どもを！今こそ存分に貶め、引き裂き喰らい、我らの怨嗟の声と共に天界の門を叩いてやろう！」

それらの宝具は突如出現し、成長した巨大な海魔にキャスターごと引きずり込まれた。

本来ならば川辺において大量の海魔を召喚することで可能になるはずだったキャスターの切り札。しかし、その理は雨竜龍之介が無意識のうちに発動した3画の令呪と、自滅もいとわぬキャスターの神への憎悪によつて捻じ曲げられ、不完全な姿ではあるものの空中に留まるヴィマーナに届かんばかりの巨体を生み出した。

その異様な姿に数々の化け物と対峙してきたギルガメツシュも一旦ヴィマーナを引かせた。

するとヴィマーナを……いやギルガメツシュを追いかけるように巨大海魔の触手が振るわれた。

「チツ、面倒な！」

汚物そのもののような触手の攻撃をギルガメツシュはヴィマーナを華麗に操って回避する。

四方八方を囲まれようが超古代飛行兵器ヴィマーナと何気に騎乗スキルを持つている（自己申告）ギルガメツシュにかかればどうということはない。

迫りくる触手をオプシヨンの兵器と王の財宝で叩き落としながらギルガメツシュはどうしてキャスターがいきなり最終決戦モードになったのか考える余裕すらあった。

「さあ！醜いこの化け物に喰われて堕ちなさい！傲慢なる『神』よ！貴方を喰った後で貴方の大好きなこの庭も、全て喰らいつくしてあげましょう！」

ブチツと何かが切れる音がした。

「……………なるほど、貴様は俺のことを『神』と勘違いし、あまつさえこの星を滅ぼして見せると、そう言いたいのか？」

先ほどまでギルガメツシュにとつてキャスターはただのヒステリックな迷惑サーヴァントでしかなかった。しかし、キャスターの思惑がどうあれ、彼は完全に『王の逆鱗』に触れてしまった。

王の逆鱗に触れる。それ即ち……………『死』に他ならない。

「貴様が現世に留まる理由はたった今消失した。もはや1分1秒でも

長くその姿を俺の前に晒すことすら許さん。肉片一つ残さず消し飛ばしてくれる。」

ギルガメツシユは死刑宣告と共に虚空に手を伸ばした。すると空間が歪み、王の財宝の中から一つの「球体」がギルガメツシユの手元に現れた。

後世においてその宝具はこう讃えられている。

――曰はく、それは破壊神の怒り

――曰はく、それは終末に於いて投じられる宇宙を滅ぼす力

――曰はく、一度投じれば最期、世界を七度滅ぼす

すべての伝説には原典が存在する。それが神々の作り出した至高の宝具であれ、例外ではない。

【王の財宝起動、神性領域拡大を制御、空間を限定固定、処刑執行期限設定、解放段階を調整、全承認。王の怒りをもって、貴様の命をここで断つ。】

球体とギルガメツシユを囲うように空間が歪み、摩訶不思議な形をした幾つかの宝具がその危険に過ぎる力を抑えようと奮闘している。

「貴様の罪は2つ。まず1つ目は俺を『神』と呼んだことだ。俺は『王』であって『神』ではない。そこを間違えるな下郎。」

その青白く、不気味に輝くその宝具はギルガメツシユが神々との戦争の中で討ち取った神から奪取したものだ。

無論、ギルガメツシユとその息子エルマドウスがこの世を去り、宝物庫が解放された際にはその宝具の概念もまた然るべき持ち主の手に渡り、そこから伝説が生み出された。

人の宝具は人の手に、そして神の宝具は神の手に……いや、若しくはその神の手から相応しい人間へと伝説は受け継がれる。

「2つ目は、この星を喰らうなどという戯言を口にしたことだ。よいか？この星を喰らい潰すのは……『人間』だ。」

古代インドの叙事詩マハーバーラタに於いて破壊神シヴァから授けられた英雄アルジュナへと手渡されたその恐ろしい宝具の名を……

【パーシユパターオリジン終末に於ける破壊の起源】

英雄王ギルガメツシユによって投げられた破壊の光は狂気に染まったキャスターとその怪物を照らし……

「……嘘でしょ？」

それは誰の眩きだったか、ギルガメツシユの宣言通り、その身を一片の肉片すら残さずに吹き飛ばした。



「……ランサー、一旦引くぞ。」

「御意」

アインベルンの森から少し離れた丘にて、工房をホテルのフロア毎に爆破された魔術師ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは自身のサーヴァントと共に英雄王ギルガメツシユの力を苦々しい表情で眺めていた。

確かに英雄王ギルガメツシユといえば誰もが知っている超級の

サーヴァントだが、まさかあれほどまで出鱈目な宝具を保有しているとは思ってもいなかっただとケイネスは大きく跳躍するランサーにしがみ付きながら思考する。

「あの調子では、ギルガメッシュ叙事詩に登場した宝具を全て所有しているかもしれないな……」

ちよつと笑えない状況に流石のケイネスも焦り始めた。

「何か策を、あの英雄王を打倒できる策を練らねば……」

少々スタートは遅れたものの、明晰な魔術師の頭脳が回転を始めた。

王の宴《前編》

——そこは、黄金の宝物庫だった。

光り輝く剣、槍、斧、弓、諸々の武器が完璧な配置で飾られている。人の命を奪う恐ろしい武具の数々が「美しい」と感じるのは、それらの武器に製作者の魂と情熱、そして長きにわたる歴史が込められているからだろう。見る者によっては、歓喜の雄叫びと共に感動を抑えられず、咽び泣きだし、またある者は、畏怖を覚え、自身の目を疑いながら、その場から逃げ出しそうな光景である。特に心構えができていないのならばともかく、いきなり訳も分からずこの空間に連れてこられた日には錯乱してしまってもおかしくはないだろう。

——とつてもきれいだけど・・・こわいな・・・

事実その「少年たち」は困惑した後、純粋な感動と恐怖を魂で感じてその部屋から逃げ出し、部屋の最奥にあった黄金に波打つ謎の空間に飛び込んだ。

「っー」

飛び込んだ先の部屋のあまりの明るさに思わず目を閉じてしまう少年たち。

しかし、いつまでもこのままではいけないと分かっている彼らは恐る恐る目を開いた。

「……………すごい!!」

そこはまさにお伽話にのみ存在することを許される空間であった。宙に浮く魔法の絨毯、意匠をこらした黄金の椅子とテーブルに、不思議な香りを漂わせている小さな瓶、擦れば何か出てきそうな黄金のランプ、天蓋の付いた大きなベッド…

どこまでも続く宝の山に、少年たちは先ほどまでの恐怖も忘れて・・・いや、忘れようとして夢中で走り回っていた。

「おい！こつちにはでつかない『ふね』があるぜ！」

「ちよつとーそれはぼくがさきにみつけたの！」

「うわあーい！このベッドふかふかだぞ！」

皆が宝に気を取られている中、その少年はさらに奥に『扉』があるのを見つけた。

ーあれなんだろう？

それは純粹な疑問だった。どこまでも続く宝の山に反してその『扉』はどこか異質だった。何かこの宝物庫にあつて致命的にずれているような…

子供というのは好奇心の塊である。特に自身というアイデンティティーの確立が成っていない不安定な精神の子供たちは特に自分という存在を確実にするために、興味があるものには自身の糧とするためなのか、後先考えず近づいてしまう。

ーなんだかすつごくぶあつそうな扉だな…

だから親は子供から目を離し過ぎてはいけないのだ。なにせ、気が付いた時には既に手遅れになっていることの方が多いのだから…

『あら？ダメよ坊や？そこから先へ進むと貴方、帰れなくなるわよ？』

声が宝物庫に鳴り響いた。美しく、清楚でありながら妖艶、愛を囁く恋人のように、我が子を抱きしめる母のような優しきで、この宝物庫に迷い込んだ時から不安定になっていた心をほぐし、その声は少年の動きを止めた。いや、少年だけではなく、先ほどまで宝の山に夢中になっていた子供たち皆が手を止めてその声に聞き惚れており、少年

たちの中で、最も年長であると思われる少年は、何故か痛くなった股関を手で押さえていた。

『あらあら、おませさんのね？ウフフ…ん？』

そんな少年を微笑ましく思ったのか上品な笑い声をあげていた声の主はしかし、突如何を疑問に思ったのか声を控えた。

【王の財宝起動、神性領域拡大を制御、空間を限定固定、処刑執行期限設定、解放段階を調整、全承認】

「えっ!？」

突如宝物庫の中に機械的なアナウンスのようなものが響き渡った。当然動揺を隠せない子供たち。

『はあくあの人つたら… またあの電球を使うつもりかしら？』

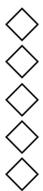
しかし、どこか呆れを含ませた先ほどの声によって子供たちの動揺は簡単に収まった。やはりこの声の主は自分たちの味方なんだと子供たちは自身の直感で判断した。

『よくお聞きなさい坊やたち！もうすぐ綺麗な金髪の王さまが貴方たちをここから出してくれるわ！そして、その王さまによってここでの出来事は全て一夜の夢になる。だから坊やたちは素直に王さまについていきなさい。いいわね？』

有無を言わせないながらも確かな優しさを感じさせるその声に安心感を覚え気がつけば少年たちは頷いていた。

『いい子ね。それとからもう一つ大事な約束があるの……王さまには絶対に私のことは話さないでね？』

悪戯っぽい声で言われた約束もまた、少年たちは頷いて律儀に守り、声の主の存在が「王さま」にばれることはなかった。



「ふう」

キャスターとの戦闘に巻き込まれた少年達の記憶をこれまた都合よく出てきた記憶改竄宝具を使って書き換えた英雄王ギルガメツシユは取り敢えず一息ついた。

「子供らの記憶改竄は無事に終了したが… どうしたセイバー？ 俺の顔をじつと見つめて？」

「いえ… これといって特に目的はありませんが、敵のサーヴァントから目を離さないのはサーヴァントとして当然のことかと…」

実はキャスターを吹き飛ばした後、すぐに駆け付けたセイバーと鉢合わせになってしまったのだが、特に戦意もなさそうだったので取り敢えず「王の財宝」内に回収していた子供たちの記憶を改竄することを優先させたのだが… その作業中もセイバーはただ黙ってこちらをじつと見つめるのみで、何というか… 非常に居心地が悪かったのだ。

いや、確かに俺も顔には自信があるからどんどん舐めるように見ってもらって構わないけれども、しかしチラツと見たセイバーの美しい碧眼から読み取れた感情は「困惑」と恐らく『嫉妬』であると思われる。

…俺なんかやったっけ？

俺が現世に来てやったことと言えば、遊んで、時臣の酒を飲んで、セイバーVSランサーの試合を酒飲みながら観戦して、影の薄いバーサーカーを串刺しにして、蟲をバーベキューして、時臣の娘をフィィィィィィッシユ！して、ライダーと飲み会の約束して、ちよつとムカついたからアインツベルンの森の大部分を犠牲にしてキャスターを自慢の宝具を使って吹き飛ばしたぐらいだぞ？

一体どこに怒られる要素があるんだ？ 優秀なサーヴァントの手本じゃないか？

「その…英雄王…？」

無駄な思考に浸っていると、セイバーがなんかもじもじと可愛らしく戸惑いながら話しかけてきた。ちなみに何気にこれが初めてのセイバーとの会話である。

「ん？どうした騎士王？」

にしても、前世？から大ファンであった彼女とこうして会話できるとは…英雄になった甲斐があったというものだ。

「子供たちを救って下さり、ありがとうございます。貴方が駆けつけなければ、多くの罪なき命が散らされてしまいました。」

そう言つてペこりと律儀に頭を下げるセイバーこと騎士王。

…天使だ、天使がいる。

えっ？なにこの聖人？見ず知らずの子供たちの命を偶々救った敵サーヴァントに心の底から感謝して頭を下げるとは…

千里眼使わずとも分かるぐらい綺麗な魂をしているなこれは…というか実物のセイバーがやばい。何がやばいかってまずブロンド好きの俺にはたまらん絹糸のような金髪に、澄み切った（嫉妬はスルー）碧眼、そして白い肌に、小柄な体躯。

見た目だけでなく、中身も…いや、中身こそがこの少女の真価であろう。他人を思いやり、故国救済を願う一途な少女。

「ふっ、気にすることはない。俺は英雄王として君臨するにあたり、当然の行いをしたままでのこと。」

これは…是非お友達からお願いするぞ！

何故か「王の財宝」の空間が揺らいだ気がしたが、気のせいということにしてスルーした。



何故か急遽敵サーヴァントと飲み会をすることになり、ライダーの戦車に乗ってアインツベルンの森にやって来たウェイバーであったが……

「嘘だろう？……一体何があったんだ？」

半径およそ3km程に渡って木々をはじめとする物質の全てが消滅していた。

「うむ……これはまた凄まじい宝具を使ったのお。何を相手にしたのかは知らんが、これでは肉片一つさえ残らんだろうさ。」

「一体誰がこんなことを……」

「これまた心にもないことを言うな坊主。お前さんだつて誰がこんな恐ろしい宝具を持っているか見当がついているだろうに……」

「…… やっぱりあいつなのかな？」

「十中八九な。騎士王の宝具は聖剣と思われる以上はどれほど威力が高くとも、剣ならば斬撃の跡が残るだろう。ランサーはデイルムツド・オディナだから伝承から見てもこんな頭の悪い火力の宝具は持つておらんはずだ。バーサーカーは恐らく宝具を使えるほど回復はしておらんだろうし、アサシンは論外であろう。となれば残るは2択だが……教会から指示があったタイミングを考えるに、キャスターをあの英雄王が吹き飛ばしたというのが1番筋が通る話だわな。」

「じゃあ、キャスターはあの英雄王に討たれて追加令呪も遠坂のものか…… はあく本当に僕たち勝てるのか？」

「なくに、案ずることはない！令呪を手に入れたのは引きこもりの魔術師であろう？ならばどうせ腹を決めかねて使う機会を逃すだろうさ。それよりも問題は英雄王がキャスターを見つけてるのが異常に早いということだな。」

「なんでだよ？あの英雄王ならどうせ便利な探索宝具を持っているんだろ？」

「いや、そう決めつけるのは早計だぞ坊主。なにせキャスターの工房を襲撃したのは我らの方が先であり加えて、あの工房にキャスターの真名のがかりはなかった。いくら英雄王といえど、姿も真名も分か

らぬ相手を探し出せるような宝具を持つておる可能性は非常に低い。」

「じゃあ…英雄王のマスターが偶然見つけたんじゃないか？」

「余もそう考えたいが、もう一つ可能性があるとすれば…未だに姿を見せぬアサシンとそのマスターが英雄王の陣営と同盟を組んでい
るということだ。」

「えっ?」

「アサシンは諜報向きのサーヴァント。影に潜み、情報を集めるのが仕事だ。そして影に潜むためには表で目立つサーヴァントに皆の注意が引き付けられていけば、非常に潜りやすい。あの英雄王は兎に角目立つからな…さらにキャスターの工房に現れた英雄王の装いは間違いなく現世の物。会話をした感じでも随分と現世に馴染んでいることから普段からマスターを置いて勝手気ままに行動しているのだろう。では何故そんなにも簡単に歩けるのか?恐らくマスター殺し即ちアサシンを恐れる必要がないからだ。まあ本人が能天気なだけでも考えられるがな。」

…相変わらずこのサーヴァントは何も考えていないようである。いろいろ考えているな。

ウェイバーは遠くを見据えて思考に耽るライダーの横顔を見ながら改めてキャスターの工房を襲撃する前に教えられたライダーの切り札を思い出していた。

アライオン・ヘタロー
王の軍勢

英霊の座にいるライダーの兵士たちに号令を掛け、皆でその心象を分かち合うことで伝説の軍勢を固有結界という形で召喚させるとんでもない宝具である。

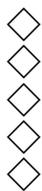
規格外の超強力宝具に、些細なことを見逃さない観察力と論理的思考力。どれ一つとってもウェイバーが敵う点はなく、寧ろお荷物になっ
ているような気さえしてきた。

ー僕なんかいなくなつてこいつ一人でなんとかなるだろ…

そんな自暴自棄な考えさえ浮かんできたウェイバーの思考はしかし、直ぐに遮られることとなる。

「おおー！ーい！！英雄王！！」

戦車の上でいきなり叫びだしたライダーの大声によって。



「ようやっと来たか…。」

2 km以上離れているであろう上空から響き渡る征服王^{バカ}の大声。

「あれは…ライダー!?!」

相変わらず俺のことをボーッと見つめていたセイバーだったが、流石に自分たちの拠点である城に新たに敵サーヴァントがやって来た^カとあれば臨戦態勢にも入ろうというものだ。

「ああ、案ずるなセイバー。奴にも戦闘の意思はない。ただ、懐のうちを語ろうというだけらしい。」

「…はあ？」

まあ、それが普通の反応だろうな。

「…それで、その語り合いには貴方も参加するのですか？英雄王ギルガメッシュ。」

「無論だ。後世の王と語らうというのは俺がこの現世に舞い降りた目的とも一致しているしな。言うまでもなく、貴様の話にも興味があるぞ？騎士王よ。」

「目的… もしや、貴方の目的は聖杯ではないのですか？」

「そうだ。まあ細かい話は宴の場ですとしよう。興味があるのなら杯を取るがいい。極上の美酒を用意しているぞ。」

徐々に地上に近づいて来たライダーの戦車を見ながら話すギルガメッシュの横顔をセイバーはじつと見つめている。

「おうー遅れてしもうたわい！」

着地した戦車から豪快に飛び降りたライダーは気軽に片手を上げてこちらに歩み寄ってきた。それに「気にしていない」という意を込

めて軽く片手を挙げて答える。

あれ？今のやり取り気心知れた友人とのやり取りに見えなくもなような……ちよつとテンション上がってきたぞ！

「では、中庭に案内します。」

内心上がったテンションは何とか微笑に変換してピヨコピヨコと動くセイバーのアホ毛を頼りに中庭に向かう。ああ癒されるな

「ところで英雄王よ、神代の美酒を振る舞ってくれるというのは本当なのか!？」

「無論だ。英雄王の発した言葉に二言はない。」

ピヨコ！つとセイバーのアホ毛が反応した気がした。



城の庭に着いた王の御一行は取り敢えず酒を振る舞ってくれるというギルガメッシュが出した指示に従ってウェイバーを除いた3人で円を描くように並んだ。

「さて……まずは席を整えるところでしょう。」

パチンツ！と鳴らされた英雄王の指での合図と同時に3人の中心に黄金の波紋が現れ、中から意匠を凝らしたテーブルと椅子が出てきた。

「おお見事なもんだ！本当になんでも入っておるのだな！これもお主の息子である『大帝王エルマドウス』が父の墓に献上したとされる宝物の一つか？」

「さてな、宝物庫が完成されたときには既に人類が生み出す宝という概念を俺が認知しないままに勝手に収集していたからな……」

王たちが着席したのを確認したギルガメッシュは掌をテーブルの上に翳し、再び宝物庫の扉を開いた。

「しかし、神が作り出した宝物もまた例外的に幾つか貯蔵されている。」

現れたのは人数分の酒器と、芳醇な香りを放つ神の酒。
全員が器に酒を注いだのを確認した英雄王ギルガメッシュは声高
だかに宣言した。

「では、これより聖杯問答を開始する！」

王の宴《中編》

杯に注がれた液体は神秘的な色合いで視界を塗りつぶし、ありえないほど芳醇な香りで激しく脳を揺さぶり、理性を刺激してくる。

されど、自分は王である。たかだか酒程度に理性を奪われるなどという失態は侵さない。

「っ!？」

しかし、そんな決意も一口、たった一口含んだだけで吹き飛びそうになった。

安易に感想を述べることもままならない。ただただ美味いという感情にのみ支配され、邪魔な喉を切り裂いても欲望のままにこの酒を掻つ攫いたい、という強烈な餓えに襲われる。このまま欲望に任せ飲み続けると、この酒の傀儡になりかねないほどだった。

「…舐められたものだな」

されど、彼女こそかつてのブリテンの地を救いし騎士たちの誉れたる『騎士王』。十二の会戦全てを己の勝利で乗り切り、一時期とはいえ、ブリテンに平和をもたらした英雄に他ならない。

どれほどの美酒であろうとも酒に違いはない。残念ながら、騎士王の理性を落とすには至らなかった。

「なるほど… 貴方の意図が読めましたよ英雄王。まずはこの美酒に耐えられるかどうか私たちを試したのですね?」

そして同時に納得した。これほど強烈な美酒を相手にしては並みの英雄では直ぐに理性を溶かされ、落ちてしまうだろう。だからこそ敢えてこの酒を自分たちに振る舞い、王の器に相応しい英雄かどうか試そうというのだろう。

「ー面白い！」

すでに王の宴は始まっているのだと悟ったセイバーは不敵な笑みと決意を持って面を上げた。

「うっまーえっ?うま過ぎるだろうこの酒!もう一杯もらおうぞー!」

「うまいのは当然であろう?なにせこの酒は… って貴様!注ぎ

過ぎだぞ戯け！一杯の意味を分かっておるのか!？」

「けち臭いこと言うでない！お主はいつでも飲めるであろうが！」

「戯け！貴様は俺の妻の怖さを知らんからそういうことが言えるのだ！…… 休肝日怖い……」

「そ、そうか…… なんかすまんかったな。そら飲め飲め！今宵はお主の嫁もおらん。羽目を外そうぞ!!」

「……」

そこには何事もなく酒に吞まれているどうしようもないバカ征服王イスカンダルと英雄た王だギルガメツアシュホがいた。



「では改めて、これより聖杯問答を行う。このような機会は二度となかろう。存分に己の懐の内を語るがよい。」

セイバーの居酒屋の前に放置された汚物を見るような視線に耐えきれず、渋々杯を置いたギルガメツシュは威厳をもって宣言した。

「おう！では早速…… 英雄王よ、お主の懐の内聞かせてもらおうか。」

「？別に構わんが、意外だな。てつきり貴様が我先にと語りだすかと思っていたのだが……」

「ふむ。確かに余も己の王道を語って聞かせたくてうずうずしておるがな、しかしそれ以上に今回の聖杯戦争で一番気になっているのはお主なのだ英雄王。」

「ほう？」

「英雄王ギルガメツシュ。古代ウルクに君臨した人類最古の英雄…… 即ち我ら英雄の祖たる存在。神を殺し、富も名もこの世のありとあらゆるものを手に入れた男。何故お主ほどの大英雄が聖杯なんてものを求めて参戦したのか余には分からんだ。」

「ふむ。では要求通りに俺から語るとするか。まずはつきりと言っておくと、俺は聖杯などというものに微塵も興味はない。俺を現世に呼びつけたシステムそのものは見事だが…それだけだ。」

聖杯を奪い合う戦争に参加しておきながら、戦利品には欠片も興味がないと英雄王は言い切った。

「俺が現世に降臨した理由は神の手から解放された人間たちの今に興味があったからだ。俺が神々の手から人間を解放しておよそ4000年の時が流れた。自然は人間たちの生存力によって文明へと変革させられ、神秘は大きく衰退した。人間たちもそのありようを大きく変えた。正直俺の出る幕はもうなかるうと座にて人類史を眺めておったが……まあ直接自分の目で確かめなければ分らんこともあると言うからな。いい機会だと思い、こうして出てきた次第だ。」

淡々と語られる英雄王の語りに目を見開いたのはセイバーであった。

「ちよ、ちよつと待ってください！確か英霊の座は時間軸とはまた異なった時空に存在すると聞いているのですが…」

英霊の座は現世から隔離された場所にあり、およそ「時間」という概念が存在しないのが通常である。

仮に英雄王の座だけ特別であったとしても、4000年もの間人類史を見守り続けるということがどういふことなのか。

セイバーは想像しただけで目眩がしそうだった。取り敢えず、普通の人間であるならば、たやすく精神が崩壊するか若しくは直ぐに逃げ出すであろうことは想像に難くない。

「その通りだ。だが俺の座は少々特殊な位置付けでな……まあ面倒だから説明はせんが。それに時空の隔たりがなんだというのだ？我が眼は時間、空間に左右まなこされることなく事実を映す。人類史を覗き見るなど造作もない。」

「……では、貴方はずっと見守り続けてきたのですか？人類史を、およそ4000年もの間……」

「ああ……何をそんなに驚いている？」

セイバーは絶句し、口をあんぐりと開けている。というかその顔可

愛いな。間抜けな顔のはずなのに、セイバーがやるだけで普段の凛々しい顔とのギャップが生まれて余計魅力的に映る。美人は得とはこのことか…

しかし… 征服王テメエはダメだ。正直吐き気しかしらないぞ。

とういかなんで二人とも驚いているんだ？そんなに驚くようなことか？何も4000年間生きていたという訳ではないのだ。ただ見ていただけ。

「っ！驚くに決まっています！どうしてそんなに長い間見守り続けてこれたのです!?!いったい何の義務があつてそのようなことをしているのです!?!」

半ば叫び声のようになりながらもセイバーは英雄王に問いかけた。

「…何が原因でこんなに取り乱しているのかは分からないが…これは真面目に応えねばなるまい。」

英雄王はその質問を機に意識を完全に切り替えた。『人』よりの意識から4000年間人類史を見つめ続けてきた『王』としての意識へと。

「人類史とは、俺が神と人間の縁を完全に断ち切った瞬間から始まった。まあ、度し難いことに俺が解放したにもかかわらず人の弱き心は自分たちを擁護する存在として新たな神を作り出していたがな。ともあれ、俺が言いたいのはこれまでの人類史は俺の下した裁定によってその歩を進めてきたということだ。」

「そ、それは全てが貴方の責任という訳ではないのでは…?」

突如変わった雰囲気戸惑いながらもセイバーは思わず全てが自分の責であるかのように話すギルガメッシュに問いかけていた。

いや、もしかしたらそれはセイバーなりの心遣いだっただのかもしれない。全てを貴方一人で背負う必要はないという…

「…しかし、英雄王はそんなセイバーの気遣いも軽く蹴り飛ばしていく」

「いや、俺にはこの未来が視えていた。……確かに今に至るまでに数え切れないほどの人間の決断と人生が積み重なってきているのは理解している。だが、間違いなく神を廃したあの瞬間、俺は人類が進むべき長い航路の最初の舵を切ったのだ。世界を乗せて、な。なればこそ、その行き先を見守るのは決断を下した王として、舵を切った者として当然のことであろう？」

英雄王は杯に残っていた酒を全て飲み干し、圧倒的な覇気と確固たる決意でもって朗々と語り始めた。

「我が名はギルガメッシュ。ウルクの王にして神の鎖を断ちし者、原初の舵を取りし者。我が眼は人の歩みを見守り、真実を読み解く紅玉の瞳。我が手足は人を諫める黄金の腕。我が剣は世界を語る原初の理。我より先に王はなく、この星の後に在る王は我のみ。我は星の終わりまで“人”の行く先を見届ける最果ての王。人は移り変わろうとも、我は最期の時まで変わらず在り続けようぞ。」

自身が人類の行き先を決めたと言い切る人類最古の英雄王。それは聞くものによつては傲慢であると非難し、その身勝手さに呆れるだろう。

しかし、セイバーは人類を、世界を背負うと言ってみせたこの英雄に幼き頃に覚えた感情を思い出した。

恋に狂う娘のように

手に入らないと知りながらなおも手を伸ばす愚者のように
ただただ胸を焦がす純粹な憧れ。

「うむ。英雄の祖に恥じぬ見事な口上であった。」

英雄王の語りの余韻に突如征服王イスカンダルが割り込んできた。いつもの笑みを消した“王”としての顔で。

「貴様がどれほどの覚悟をもって神を廃し、英雄になったのかはよく分かった。なればこそ……余が世界征服を始める時、貴様は敵として余の前に立ちはだかるといふ認識で良いのかの？」

「そうさな…… まあ状況によるだろうな。貴様が受肉の一つでもして一人の人間として征服を開始しようというならば別段俺はそれを咎めるつもりはない。それもまた一つの歴史だろうからな。しかし、死人である貴様が今の歴史に土足で踏み入り、荒らそうというのならば、俺は容赦なく貴様を処断するだろう。」

「ふむ……」

何やら考え込む征服王を尻目に英雄王は気ままに酒を流し込んでいたが、ふと黙ったままのセイバーが気になったのか声をかけた。

「どうしたセイバー？先ほどからだんまりを決め込んでいるが……お前も語りたいたことがあるのならば杯を置いて言を発するがよい。」

英雄王の言葉を機に征服王もまた顔を上げ、セイバーの語りを聞く姿勢を見せた。

完全に場の流れが自身に向けられたのを感じ取ったセイバーは小さく深呼吸をし、決意新たに語りだした。

「私の願いは…… 故国の救済です。万能の願望機をもってブリテンを、滅びの運命から救う。」

「……」

場に静寂が訪れる。

静かに腕を組み、セイバーの願いを吟味する英雄王ギルガメツシュ。

耳が痛くなるほどの沈黙の中、口を開いたのは

「…… なあ騎士王よ、貴様は自身が語った願いがどのような意味をもっているのか、本当に分かっているのか？」

先ほどまで黙って英雄王の口上を聞いていた征服王は真剣な眼差しでセイバーを見据えていた。

その目はセイバーを責めるように苛烈でありながら、どこか憐れみも含まれているようにセイバー感じた。

「ふざけるなっ！」

セイバーがその視線に対して感じた感情は憤りであった。

セイバーの願いを真つ向から否定するのならばまだいい。例え何を言われようとも、自分は自分を信じてくれたあの民たちを救うだけのこと。

しかし、憐れみなどで以ての外であるとセイバーは断じる。自身の願いに憐れみを受ける要素などない。

「貴様がしようとしているのは。共に時代を築いた仲間たちに対する裏切りだ。よりにもよって王たるものが自身の行いを悔やみ、やり直しを求めるとはな……。嘆かわしいことだ。悪いことは言わん。今すぐに剣を置き、自身について見つめ直せ。」

しかし、征服王は流れ出る言葉を止めない。それはセイバーが妄執に取りつかれた哀れな小娘であると悟ったため。また彼が“人”として王になったためか……。ともあれセイバーには理解できないだろうが、これは慈悲であった。妄執から娘を解き放たんとする征服王なりの。

「っ！王であるからこそ悔やむのだ！身命を捧げた故国が私の決断によつて滅んだのだぞ?!これを救おうと思うことの何がおかしい!？」

悲痛な声でセイバーは叫ぶ。認められぬと、あんな結末は断じて認められぬと……。

「なるほど、どうやらお主は決定的に“王”というものを履き違えているようだな。よいか？王が捧げるのではない。国が民草がその身命を王に捧げるのだ。断じてその逆ではない。」

「っ！それは……。」

『然り』

突如割り込んできた声の持ち主にセイバーは目を見開いた。

「……今何と言ったのです？英雄王」

「然り、と言った。征服王の言うとおりで。王に民草がその身命を捧

げ、王はそれを預かる。それが俺の考え方だ。」

セイバーは愕然とした後、激しい怒りに襲われた。よりにもよって貴方が、と。

「…………… それでは暴君の治世ではないか。」

何かに耐えるようにして絞り出されたセイバーの言葉には怒りと失望が混じっていた。

事実彼女は裏切られたかのような心境だったのだから。

「捉え方によつては、な。」

しかし、そんなセイバーの心境など知らぬとばかりに英雄王は飄々と呟く。

「…………… 『王』とは人間たちの上に立つ絶対君臨者の名だ。高みの玉座から人間たちを動かし、国を守つて文明を発達させる。預かった民たちの身命を礎としてな。だからこそ、その責務には最期まで見守る義務が発生すると俺は考える。」

礎となった者たちのためにも最期まで見届ける。そんな本来ならば背負う必要のない義務を律儀に4000年もの間背負い続けてきた英雄王の語る『王』の姿に思うところがなかった訳ではない。

「…………… 例え、その最期が無残な滅びであったとしてもですか?」

しかし、それでもセイバーは問わずにはいられなかった。滅びの運命をその眼で受け入れることができるのか?と。

「無論だ。事実俺はウルクの滅亡をこの眼で見届けている。」

そして帰ってきた簡潔な答えにセイバーはまたもや絶句した。

「あ、あなたは自分の国が滅んだ姿を見て何とも思わなかったのですか?! もう一度やり直したいと思つたことはないのですか?!」

「何とも思わなかったわけがあるまい。言うまでもなく悲しかったさ。しかし、やり直しを求めようとは思わなかった。」

「何故です?!」

もはやそれは絶叫だった。理解できぬと首を振りながらセイバーは英雄王へと問い続ける。答えを求めて。

「それが、王の責務だからだ。」

「えっ？」

返ってきた言葉の意外さにセイバーは目を真ん丸に見開いて例のごとく口を半開きにした。

「民を愛し、国を治め、後継者へと受け継がせる。これが理想の王というやつだろう。しかし、優れた王であるならば、皆が知っていることがある。やがては滅びゆく運命にあるということだ。どれほど栄華を極めようとも、法を作り、人を戒めようとも、それは繁栄の影に常に潜んでいる。なればこそ受け入れる他あるまい。なにせすべての民の身命は王の手元にあるのだ。王がいつまでも滅びを認めず民たちの身命を手放さないなど、それこそ暴君に他ならない。」

一旦言葉を切った英雄王は何時の間にも注いだのか、またもや酒器を傾けてから再び語りだした。

「先ほども言ったが、全ては王に責任がある。それが繁栄であれ、滅びであれな。だからこそ受け入れなければならぬのだ。王が認めずして誰が国の終わりを認めるといふのだ？それに、後に続く者たちもいる。彼らのためにも潔く認めるのが王というものだ。」

認めると、受け入れろと英雄王は言う。

しかし、それは貴方が強いからできただけの話。

私にはとても……

「……まあこれはあくまでも俺の王道だ。貴様に認めてもらいたい訳ではないし、真似されても困る。古き王の独り言ゆえ小耳にでも挟んでおけばよい。」

セイバーの葛藤を見抜いた英雄王はしかし、またのんびりと酒を飲み始めた。

そして、月を見上げて一言

「……明日は二日酔いか」

聖杯問答はまだ終わらない。

王の宴《後編》

「さて…… 最後は貴様だぞ、征服王。」

騎士王と英雄王の問答以降暫くの間会話が途絶えていた王の宴だが、

無意識のうちに酒を口に運び続ける自分に気付き、愕然とした英雄王ギルガメツシュが早く終わらせなければならぬという義務感に駆られ、

なにやら考え込んでいる様子の征服王イスカンドルを催促したことによって再開された。

「うん？お、おおう！そうであつたわい！ではゴホンツ…… 余の王道は単純明快だ。欲しいものを力づくで奪い、犯し、征服する覇者の道だ。まさしく余の異名通りよな！」

フハハハハハ！と喉を震わせ笑う征服王。

そんな征服王の姿にセイバーは思わずその秀麗な眉を顰め、ギルガメツシュは酒瓶へと勝手に伸びていく自身の右手を左手で押さえていた。

「沈まれ、俺の右手……！」

「な、なるほど、自身の我欲のためだけに動く王か。セイバーとは面白いくらいに正反対だな。」

取り敢えずは場を繋げようとギルガメツシュは震える右手を押さえながら思ったことをそのまま口に出した。

だがその場しのぎとは言いえギルガメツシュの指摘は実に的を射ていた。

大男と小柄な少女、燃えるような赤を基調とした衣装に対し清廉な青の衣装。豊かな国の王と貧しい滅びかけの国の王、そして自身の欲に従って生きた王に対し名も知らぬ他人のために生きる少女。

容姿も含め、ありとあらゆる部分で対になっている二人の王を揃えた聖杯の采配に対してギルガメッシュは苦笑を禁じえなかった。

「全く粹なことをしてくれる」と

「そうさな……確かにこれまでの問答を聞く限りでは余と騎士王が相容れることはないであろうな。」

セイバーへと一瞬だけ視線を向けて呟く征服王。

「……私も貴公のような人に理解を求めてはいない。それに貴公の願いがどんなものかは知らないが、おおよそ私が受け入れられるようなものでないことだけは分かる。」

征服王の視線を敏感に感じ取り、すぐさま言い返すセイバー。そして始まる無益な言葉の応酬。

無欲な王なぞ飾り物にも劣るわい！云々……

まるで子供の喧嘩だな、とギルガメッシュは思う。

まあ、この二人が仲良くできないことは最初から分かっていたことだ。

「貴様の王道はよく分かった。で、霸王たる貴様が聖杯に託す願いは一体何なのだ？」

しかし、このままでは宴が終わらない。

ギルガメッシュは多少強引にはあるが二人の口喧嘩を遮ってイスカンダルへと質問を振った。

「ふむ。願い、か……」

征服王イスカンダルはらしくもなく物思いにふけりながら杯を呷り、それからはつきりと答えた。

「受肉だ。」

これまでその器の大きさと私の強さを示してきた征服王が明かしたその願いの意外さに一部を除いて皆が動揺する中、

イスカンダルは拳をグツと握り込み、語り始めた。

「余はずっと見果てぬ夢を追い続けてきた。東へと立ち止まらずに進み続ければいつかはたどり着けると信じてな。」

常は爛々と輝いているその赤い瞳は

なにやら遠い昔を思い出しか小さな光を灯しながら伏せられていた。

「しかし、余には叶えたい夢はあってもそこに至るまでの明確な道が、その果てが見えなかった。」

つまり、と征服王はこれまでの道のりを振り返りながら空を仰いで続ける。

「余には絶対に倒すべき敵がおらんかった……無論、これまで倒してきた敵が倒すべき敵ではなかったとかそういう訳ではない。ただ、彼らは余が進み続ける中で立ちほだかったからなぎ倒しただけのこと。余の辿り着く場所で待ち受けるわが生涯の宿敵ではない。」

“東方遠征”

人類の歴史の針を大きく動かしたこの偉業について王の真意は未だに明らかになっていない。

一説にはペルシア戦争の復讐、領土拡大の野心、古代の英雄達に憧れたが故の行動であった、等々様々な見解があるが残念なことに定説は存在しない。

此処におられる本人に尋ねてみれば、

“オケアノスが見たかったのだ!”

というふざけた答えを返され、歴史家たちに白目をむかせること間違いないだろうが……

しかし、本当はイスカンドル自身にもなんで遠征を始めたのかという明確な理由は分からないのかもしれない。

「結局余は最期までオケアノスまでの道筋が見えぬまま生涯を終えた。宿敵に出会うことがないままな……」

征服王イスカンドルの宿敵は誰か?と問われ場合、真っ先に思い浮かぶ人物はダレイオス三世であろう。

幾度となくイスカンドルの前に立ちほだかり、激闘を繰り広げて見せたアケメネス朝ペルシア最後の王。

彼こそまさにイスカンドルの “宿敵”

……いや、違う。違うのだ。

彼は「好敵手」であつて「宿敵」ではない。
イスカンドルは彼を殺しても欲しいものを手に入れることはできない。

——だからこそ、イスカンドルはこの出会いに心より感謝する。

「だが！余は、遂に！宿敵を見つけた！」

征服王イスカンドルは椅子から立ち上がり、己が激情の全てを内包した苛烈な眼差しで目の前の黄金の王を真つ直ぐに見据えた。

「原初にして最果ての王、大帝王エルマドウスが父、英雄の祖たる王、ギルガメツシユよ、余はここに宣言する。」

イスカンドルは常に自分の身を嘆いていた。

オケアノスへの狂おしいまでの渴望だけが先走り、肉体が追いつけない我が身を

イスカンドルは常に恨んでいた。

自分を偉大なる英雄たちと同じ時代に産み落とさなかつた天を

「……………必ずや貴様を殺し、余は今度こそオケアノスへと至る。」

戦を愛し、

敵もまた愛す。

嘗ては敵であつた益荒男たちを従え、ただ東に進み続けた男イスカンドルは、英雄王ギルガメツシユの「世界を背負う」その覚悟聞いた瞬間に、己の負けを認めただのだ。

そして歓喜し、決意した。

“この男は絶対に殺さなければならぬ”と。

「貴様こそが我が宿敵だ。英雄王ギルガメツシユよ」

「……………是非もあるまい。それが貴様の願いというのであればな。

しかし、惜しいな。」

殺し合いもまた楽しむべきだという価値観の持ち主である征服王の笑いなどの感情を一切廃した絶対に殺すという宣戦布告に対し、ギルガメツシユはニヤリと冷たく鋭利な笑みを浮かべた。

「今の貴様ではこの俺にすら決して届かんよ。臣下のいない貴様にはな……。」

「臣下のいない征服王など恐れるに足らず。」

英雄王ギルガメツシユはそう言い切った。

「……。」

このギルガメツシユの挑発に対し、

暫く黙って考えていたイスカンドルであったがすぐさま面を上げた。

「確かに軍勢を持たぬ征服王では貴様の相手は務まらんだろうな。英雄王よ。」

一見負けを認めたかのようにギルガメツシユの言葉を肯定しながらもイスカンドルの口元に浮かぶのは寧猛な笑みだった。

「だが……死んでなお、夢を諦めきれぬ大馬鹿者が余一人だとは思わんことだ。」

——突如旋風が巻き起こった。

「うおおおおお!?!」

身体には熱風を、目には砂の攻撃を喰らい思わずうずくまったウェイバーだった。すぐさま状況を確認しようとする顔が上から上がった。

「つーライダー!?!」

その目線の先に立つのは紅いマントを翻し、

仁王立ちで二人の王を見据えた戦装束の征服王だった。

「まさか、あいつ……!?!」

その姿と突如吹き荒れ始めた風にウェイバーは己のサーヴァントがやろうとしていることに気が付いた。

「集えよ我が同胞たち！今こそ我らの雄姿を、夢への渴望を、時の彼方の王達に見せる時だ!!」

しかし、マスターたる彼は気が付くのが遅すぎた。

すでに王の号令が掛かり、

勇猛果敢なる戦士たちが時空を超え、

現代に集って来たのだから。

◇◇◇◇◇

迸る熱風

肌をザラザラと撫でる大粒の砂

蒼穹が如く澄み渡った青空

照りつける日の光

そしてこの場に不釣り合いなテーブルと椅子

「こ、此処は……？」

あつげにとられたセイバーが思わず立ち上がり眩いた。

それも無理からぬことだろう。なにせつい先程まで月光に照らされたアインベルン城の中庭にいたはずがいきなり砂漠に移動させられたのだから。

しかし、魔術に疎いセイバーは知りえぬことだがこの見渡す限り砂しか存在しない砂漠の世界こそ征服王イスカンドルが持つ最強の宝具である大魔術固有結界。

「ここはかつて、我が軍勢が駆け抜けた大地、すなわち我らが戦場だ。余と同じ夢を見、共に戦う中で心に焼き付けた景色だ。」

ふと、セイバーは自分たちの周りが蜃気楼のような影に囲まれていることに気が付いた。

皆が凝視する中、それらは徐々に明確な人としての形を持ち始め、存在感を増し始めた。

「先ほど余に臣下がおらんと言ったな？」

ザツ……ザツ……ザツ……ザ

足音が聞こえる。

力強く、荒々しい。

しかし、それでいて調和のとれている足音が

「故に恐れるに足らんとも」

一人、また一人とセイバーたちを包囲するように筋肉の引き締まった屈強な体躯と日の光を浴びて輝く華やかな具足の数々を実体化させ、

「この軍勢を見てもまだそんなことが言えるのか？」

此処に遙か彼方においてその名を轟かせた伝説の軍勢をここに復活させた。

「肉体は滅び、夢は潰えた……しかし！それでもなお、余に付き従う誉も高き伝説の勇者たちが、今！此処に！時空を超えて我が召喚の声に応えたのだ！おお……なんたる喜び、なんたる絆か！我らを前にしてはたとえどんな敵が道を阻もうとも、雷鳴がごとき素早さで蹂躪するに違いない！」

両腕を広げ、この世界の片隅にまで届けんとばかりに大音声で吠える征服王イスカandal。

「もう一度言うぞ。余は英雄王、貴様を殺す。余の王道と仲間たちの絆で形度られる征服王たる証『アイオニオン・ヘタイロイ王の軍勢』でもつて！」

ウオオオオオオオオ!!

然り！然り！然り！

イスカandal！イスカandal！イスカandal！

征服王は幾多の困難を共に乗り越えてきた仲間たちを満足げに眺め、

未だに席に着いたままの英雄王へと宣戦布告した。

「……ふう、やれやれ。臣下というのはそういう意味ではないのだ
がな……」

一方、宣戦布告を受けたギルガメッシュは呆れたように小さく呟く
とおもむろに椅子から立ち上がった。

その瞬間、声を止め、武器を構え警戒する兵士たち。

しかし、ギルガメッシュは欠片も気にした様子を見せずに席から立
ち上がっている征服王と騎士王に目をやっていた。

「ふむ……宴は仕舞いか。ならばこれはもう必要ないな。」

ギルガメッシュが一步退くと同時に先程まで王達が腰かけていた
テーブルと椅子の下に王の財宝が開かれ、中に収納されていた。

「さて……」

この世界に存在する全ての人がその一挙一動に注意を払う中、

英雄王ギルガメッシュはまるでこの世界の王のようにイスカンダ
ルの兵士たちを傲岸に見渡し、フツと口元を歪ませ笑った。

「臣下がいらないから連れてくるとはな……フフ、中々に面白いもの
を見せてもらった。礼を言うぞ征服王イスカンダル。」

……そして謝罪しよう。どうやら俺はお前に勘違いをさせてし
まったようだ。」

――突如眩い黄金の光が征服王の世界を満たした。

その光は太陽に照らされて輝く勇者たちの鎧や盾の間を乱反射し、
出鱈目に、皆の目を焼いた。

しかし、照りつける太陽の中戦い続けてきた兵士たちは1秒と掛け
ずに目を回復させ、この光の光源を見た。

「確かに俺は先ほど臣下のいない貴様を侮っていた。
しかし、臣下を連れてきたからと言って俺と貴様の間にある差はそ
う簡単には埋まらぬ。」

光源となっていたのは英雄王ギルガメッシュだった。

涼やかな白い布地の古代衣装と紅いマントに包まれていた彼から
黄金の光が放たれていたのだ。

「時空を超えた絆か……正直なところ羨ましくもある。だが、その絆とやらが世界の理を、この俺をねじ伏せるに値するものかどうかはまた別の話だ。」

程なくして、この世界に散らばっていた光は収束していった。

自然に皆の視線は光源にして収束先でもある一人の男へと向けられる。

——そこには黄金の王がいた。

比喩でもなんでもなく、英雄王の肢体はほぼ全てが黄金でできた甲冑に包まれていた。

丹念に磨き上げられたその黄金の甲冑は自ら眩い光を周囲に放っており、まるで黄金の太陽であった。

形は西洋の甲冑に近いが肩の部分が大きく盛り上がっており、戦よりも玉座でその權威を示しそうなデザインだ。

それに加えて光り輝く黄金の中に所々見事な青の意匠が施されており、手甲一つ取って見てもその洗練されたデザインに目を奪われるだろう。

腰当には青い意匠と燃えるように鮮烈な紅い腰マントが着けられており、王の威光を示すように大きく広がりながら風に揺れている。

総じて得られる評価は間違いなく装飾過多であろう。

戦場よりは美術館で飾っておいたほうがよっぽど人のためになりそうな鎧である。もし仮に、この鎧を着て戦場に現れるようなバカがいるのならばすぐさま首をはねられた後、鎧をただの金に戻されて売られるのがおちであろう。

しかし、誰もその鎧を、英雄王を笑うことはできなかった。

なぜならば、その鎧から迸る高密度の魔力が、確かに感じる濃い神気が、何より、装着する人を選ぶこの鎧を一部の隙もなく着こなす英雄王はもはや神と見間違えるほどの神々しさに満ちており、この世界に存在する者全てを圧倒する覇気を放っていたからだ。

「故に、もう一度俺も先ほどの言を繰り返そう。」

だが残念なことに、黄金の甲冑に驚愕している暇は彼らにはなかった。

――英雄王が剣を抜く

人の子らよ、天変地異に備えよ

原初が語られ

天と地が乖離する

理を魂に刻んだ後

天を仰げ

「届かんと言った」

然して讃えよ

――英雄王の足元に宝物庫の扉が開かれ、一本の剣がゆっくりとその刀身を現した。

いや、それを剣と呼ぶのは間違っているのかもしれない。

黒い円柱が3本連なったような刀身に紅い模様が刻まれている。

柄は黄金でできており、青い意匠も相まってどこか黄金の甲冑を思わせる。

しかし、黄金の甲冑からは太陽のような力強さを感じたのに対し、この剣からは魂まで凍り付きそうな冷たい力しか感じられなかった。「本気は出さぬ。だが、原初の力の一端を見せよう。間違っても意識を持っていかれるなよ？つまらんからな」

英雄王ギルガメッシュは黄金の手甲に包まれた右手を剣の柄に乗せた。

そして円柱が回転を始める。紅い風が頬を撫で、やがてそれは暴風へと進化していく。

「む？いかん！総員臨戦態勢に入れえ！でかいやつが来るぞおおお！」

これまで事の推移を黙って見守っていた征服王だったがギルガメッシュのやろうとしていることに気が付いたのか急いで大声で号

高らかに唄う

「人の子らよ、刮目せよ！これこそが原初の理だ！貴様らの矮小な魂では理解すること罷り成らん！どうだ？本能が軋みを上げているだろう？それこそが正しい。原初の地獄、星が生まれるその瞬間に今貴様らは立っているのだ。」

乖離剣は世界を切り裂くという性質上、剣と銘打たれているものの、それはあくまでも副次的なものに過ぎない。

その本質は語ることにある。

「この世界には正義も悪も、人の作りし理など存在しえない。欺瞞も罪も罰もなく、ただ真実あるのみだ。」

人の遺伝子、本能に刻まれているはずの始まりの記憶を

しかし、これは本来現代においては発動させるだけで自壊へと至る“権能”に相当する業だ。

いくらギルガメッシュが英霊中で最も、或は殆ど神霊に近いと言われていても世界が許すとは到底思えない。

「人の子らよ、努忘れるな。その恐怖を、純粹なる原初の記憶を。そしてそれでもなお、俺に挑もうという気骨が残っているのであれば、剣を取れ。」

だが、彼こそは英雄王ギルガメッシュ。

4年間神々と戦い、4000年間人類史を見守り続けてきた原初の観測者。

“すでに手は打つてある”英雄王は乖離剣へとその手を伸ばす。

「俺がその混沌とした理もろとも切り裂いてくれようー雑種。」

ふと、セイバーはこの世界の中心で回転を続け、この空間を形成している剣を見て、まったく似ていないものの、選定の剣カリバーンを思い出していた。誰にも抜くことのできない王を選ぶ剣。

あの乖離剣も同じだ。手にしたら最期、永遠に王としての宿命に生きなければならぬ。

しかも、あの剣は世界を滅ぼす原初の剣だ。手にしたら最期、この

星の理を背負わされることになる。人の身には余る過酷な運命。

“いったい誰があの剣を手にとれる?”

——カチャツ

英雄王ギルガメツシユは何の躊躇もなく天と地を分ける乖離剣を手を取った。

“そうだ、貴方しかいない。分かっていたことだ。しかし……”
そして無造作に一振り。

——世界は滅んだ

◇◇◇◇◇

「……はさつきのこと……?」

ウェイバーが呟いた通り、彼らは何時の間にか砂漠でも宇宙でもない城の中庭に帰ってきていた。

もちろんのこと兵士たちの姿はどこにもなく、先程までの光景がまるで夢のようであった。

しかし、ウェイバーはあれが夢だったとは絶対に言わない。なぜならば、魂に深々と刻み込まれたからだ。

あの恐怖を、人の理解を超えた理を

「ふう。ひとまず己の王道を語り、願いを口にした。今宵の宴はこれにて仕舞いとす。異論はないな?」

皆が黙り込む中、英雄王ギルガメツシユは乖離剣を仕舞った右手を腰に当て、気怠そうに尋ねた。

「う、うむ。」

「え、ええ……」

そして返ってきた気のない返事に英雄王は頷き、

月光を浴びて妖しく輝く黄金の甲冑を翻して霊体となり、黄金の粒

子となって去っていった。

最後に一言だけ残して

「汝、自らを以って最強を証明せよ」

その答え

言峰綺礼はずっと答えを探している。

人々が美しいと讃える物に共感を示せず、真に情熱を傾けることのできる物を見つけれられない歪な己という存在に関する答えを。

決して綺礼がひねくれているとかそういう訳ではない。寧ろ彼は実直で真面目な聖職者である。

故にこそ悩むのだ。

そして聖職者である彼は己が主、即ち神に問い続けてきた。

何年、いや何十年と飽くことなくただただ愚直に、真つすぐに信仰を続けてきた。――しかし神は答えを返さない。

聖書を擦り切れるまで読み込み、神の敵と闘うために地獄のような鍛錬に耐え、身体を苛め抜いた。――しかし神は答えを返さない。

自らの生き方を聖書に委ねた。つまりは聖書に書いてある通りに生活し、信仰し、父を愛し、祈り捧げた。――しかし神は答えを返さない。

妻ができた。こんな己を理解し、愛してくれる聖女のような妻が。彼女は己の苦悩に寄り添い、寄り添い過ぎた結果、自ら命を絶った。綺礼が彼女を心から愛していると証明するために。

――しかし：いや、やはり神は答えを返さない。

絶望、あるいは失望というべきか。暗い感情が己を飲み込もうとする。何十年問い続けてきたが神は己を救わない。いや、もしかすると：救えないのではないのか？

「そんなはずはない!!そんなことが：あつて：たまるものか：」

それに気づきそうになった己を強引に声でもって戒める。そうだ。そんなことがあつていいはずがない。己のしてきたことが無為であつたなど。神が我々を救えないなど：

パリンツ

甲高い音を立てて手に持っていたワイングラスが割れた。どうやら力が入りすぎたらしい。

「やはり酒の飲み過ぎはよくないな。酔って正常な思考が保てない」

ガラスの破片を片付けながら言い訳などしてみる。

そうして別のことに思考を割きながら再び浮上してきた考えに蓋をする。もう二度と考えぬように。これ以上苦しませぬように。

『いや全く同感だな。酔うと碌なことにならない』

突如虚空から玲瓏な声が響き渡った。しかし、綺礼は焦らない。寧ろまたかとはかりに呆れの表情を見せた。

「酔いを醒ましにでも来たのか？英雄王。」

「そうさな。偶には安酒で酔いを醒まそうかと足を運んだのだが…珍しいこともあるものだ。あの鉄仮面が苦しみ悶えているとはなあ。」

黄金の粒子と共に姿を現した英雄王ギルガメッシュはニヤニヤと嫌な笑いを顔に張り付けながら綺礼秘蔵のワインを手に取った。

「今の俺はすこぶる機嫌が悪い…が、貴様の悶える姿を見て多少は溜飲が下がった。ほら、言うであろう？他人の不幸は蜜の味とな。」

「……趣味の悪いことだな。」

ただでさえ悪とされる他人の不幸を自らの幸福の糧とするなどともんでもないことだ。まさに悪趣味だ。許されざる悪徳だ。

しかし、善なる神に仕える綺礼は即座に英雄王の言葉を否定することができなかつた。

不可解な己自身に疑問を抱く綺礼をチラリと見やった英雄王は肩をすくめ、飄々と言葉を返した。

「さてどうだかな？趣味嗜好など千差万別だと思いがな。まあ何はともあれ、乾杯。」

飲むにふさわしい時が来るまで寝かせておこうと決めていた秘蔵のワインが二つのグラスに注がれていく。顔をしかめる持ち主をよそにギルガメッシュは手際よく適度に注いでから片方を綺礼に渡し、乾杯の音頭を取った。

チンツと涼やかな音が響き、二つグラスがぶつかる。

「ふむ、悪くない味だ。喜べよ綺礼。俺の機嫌は回復の兆しを見せつつある。」

「それは結構だ。だが、私にはそもそもお前の機嫌が悪くなった原因がわからないのだが？あの宴では終始ご機嫌に見えたのだが…」

「…… 貴様はもう少し空気が読めんのか？ 忘れたいことがあるからこうして安酒に甘んじておるのではないか……」

どこか疲れた中高年のオッサンじみた雰囲気醸し出しながら英雄王は酒をグビツと飲み干した。

それもこれも宴の最後でテンションの上がり過ぎたギルガメツシユが調子に乗ってエアを解放したことが原因だ。

—— 言い訳をするのならあそこまでやる気なかったのだ

ただライダーにばかり切り札を自慢されるのも癪だったので真正面から粉々に打ち砕いただけなのだ。後悔はない。しかし、固有結界を切り裂いた後の皆の反応を見てギルガメツシユは悟った。「あくあ。やつちやった」と。もう皆ドン引きだった。ラスボスを見る目だった。

ギルガメツシユの頭の中を様々な憶測が飛び交う。

やり過ぎ。ラスボス。人類悪（ボツチ）。みんなドン引き。

←

友達 zero。どの聖杯戦争行ってもボツチ。カルデアに召喚されてもボツチ。絆レベル上限と共に解放されていく悲しき孤高の黒歴史マテリアル……etc

ともあれ酔いとその場の勢いで盛大にやらかしてしまった。

よって英雄王の機嫌は悪い。Q・E・D。 証明終了。

「……ふん、俺のことはよい。それよりも貴様の抱えている苦悩を話せ。そっちのほうがいい酒の肴になるだろう。」

すっかり機嫌を損ねたギルガメツシユは気持ちよく酒を飲みたいがために綺礼へと無茶ぶりをかます。

「苦悩を明かせとはな。随分と簡単に言ってくれ……」

傍若無人な振る舞いに顔をしかめる綺礼。しかし、しかしである。その一方でこの全てにおいて規格外なこの男ならば、綺礼の苦悩を少なからず理解してくれるという可能性がないわけではなかった。

「身内にも相談できぬような悩みなのであろう？ なればこそ完全に赤の他人である俺に相談するのはそれなりに得策だと思うが。」

英雄王の言う通りである。綺礼にとっては知り合いに話す方が気

の引ける苦悩であったため、聖杯戦争が終われば消える運命にある英雄王に悩みを打ち明け、心理的負担の軽減化を図るのはかなり効率的であるように思えた。



薄暗い廃墟。ただでさえ人が近寄らないであろう場所に、ただでさえ人々は眠りに就くであろう時間帯。そこに魔術的隠蔽も加えれば立派な秘密基地の完成だ。

そんな場所に一人、青いコートを靡かせる青年が佇んでいた。青年は険しい表情で遠くを見据えていたが、やがて何かに気づいたのか前で組んでいた両腕を後ろ手に回した。

「首尾はどうだね？ランサー。」

青いコートの青年、ケイネス・アーチボルトは突如虚空に向かって問いを発した。

『はっ。セイバー陣営、ライダー陣営共に招待状を確かに渡しました。そして件のアーチャーですが、遠坂邸への帰還を確かに確認しました。』

すると、ケイネスの問いへの返答と同時に虚空から美しい青年が姿を現した。美貌のランサー、デイルムツド・オディナである。

「そうか……苦勞だった。」

簡潔にねぎらいの言葉を掛けるケイネス。しかし、デイルムツドの顔は晴れなかった。

「我が主よ、不遜ながら申し上げますが……些か早急過ぎたのでは？」

「いいや。あの英雄王の突出した戦闘能力を顧みるに時期としては早すぎるはずがない。それは御三家も……あの小賢しい貧乏学生とて分かっているだろう。」

思い出したくない誰かの顔が脳裏に浮かんだのか苦い顔をするケイネス。しかし、すぐにその顔は喜悦に取って代わった。

「それにあの招待状には微弱ではあるが位置を特定できる魔術を掛け

ておいた。アインツベルンならばともかくあの子泥棒には分かるまい！——きちんと各陣営が解散した瞬間を狙って渡したろうな？」

「もちろんです。遠坂の監視の眼も感知できませんでした。」

一つ頷いたケイネスは改めてこれから立ち向かうことになる脅威。黄金の王の姿を思い浮かべた。

この世界の絶対者として君臨する男。嵐が形をとった災厄。理不尽の代名詞。

「そうだ。遠坂にだけは、強いてはあの王にだけは絶対に知られてはならない……」



「なるほど、自身の歪さを自覚していながらもその正体に至っていないという訳か……」

結局綺礼はギルガメッシュにすべてを打ち明けていた。これは意外というべきか、ギルガメッシュが聞き上手だったことも関係している。まるで手品のように言葉に詰まる綺礼からすると話を引き出し、要点をまとめて見せたのだ。

万人の言う美しさを理解できぬ破綻者。自分が捧げるに足る理念も目的も見つけられぬ空虚な人の形をした何か。

そんな自分を再確認する度に綺礼の心は暗雲に覆われていった。

「……貴様は自分が歪であると考えているようだが、そもそも正常な人というものがどういったものであると考えているのだ？」

「万人の共通認識に沿う価値観を持ち、美しいものを愛する者だ。」

「ほう？では万人が定義する美しさとはなんだ？」

「それ、は……穢れなきもの、だ。」

「ハハハハハ！穢れなきものか！これはまた珍回答だな！——まあ、不正解という訳でもでもないがな。」

「……どういう意味だ？」

「なに、美しさの定義など俺にも分からんということさ。結局のところ美を見出すのはそれぞれの感性。つまり、美しさとは主観だ。それを貴様は万人のなどという客観性を付け加えるから面倒なことになるのだ。」

「しかし…」

美しさの基準は確かに人それぞれ異なるだろう。しかし、それはあくまでも細かい話だ。問題は綺礼の持つ価値観がこの世界に生まれてはならないものであったことだ。

「どうした？よもや貴様の持つ悪性はこの世にそぐわぬものでも考えているのか？」

「当然だろう。貴様のような人ならざる魔性の者ならば他者の辛苦を蜜の味とするのも領けよう。しかし！それは許されざるものだ。少なくともこの私が歩む信仰の道においてはな！」

何年、何十年と積み上げてきた信仰の道。今や綺礼の人生の大半を占めるそれは鍛え上げた鋼の肉体と同様に己という存在を示す一つのものになっていた。

揺るぎない綺礼の信仰心を垣間見てか、ギルガメッシュも何かを見定めるように目を見開いた後、何かに納得したように目を閉じて吐息を漏らした。

「…ふむ。どうやらその信仰心に偽りはなさそうだ。しかしまあ、なんと難儀な男よなあ…それではさぞかし生きにくかろう？」

「…貴様に同情される謂れはない。それに生きにくいからこうして苦しんでいるのだ…」

「ハハハハハ！そうであったな！貴様に苦悩を明かせと言ったのは俺であった！」

上機嫌に高笑いする英雄王。ここに来ていよいよ綺礼の堪忍袋の緒はブツツンと切れそうになっていた。それはそうだろう。人から苦悩を引き出しておきながら自分はそれを肴に美味しく酒を飲んでいるだけ。

溜まっていくフラストレーション

握られていく拳

懐に忍ばせた黒鍵

臨戦態勢の神父を見て流石にからかい過ぎたと感じたのか、ギルガメッシュは真剣な面持ちになると綺礼と向かい合った。

「さて、貴様の歪な魂の在り様をこの時代の言葉で説明すると…うむ。貴様はあれだ、DSなのだ。」

「……はっ？」

突如発せられた性的嗜好の話に綺礼は一瞬固まり、そして一気に頭へと血が上っていくのを感じた。

「貴様！ふざけるのも大概にしろ！原初の王だか何だか知らないが、私を玩具にして楽しいのか！」

「ふざけてなどおらんさ。実際にその通りだろうか？貴様は人の苦痛や嘆き、不幸に快樂を見出す者だ。」

「……」

「その性さがと世間との乖離に苦しんでおるようだが、貴様のような趣向の持ち主は実際のところ、かなりの数で存在する。その証拠に深夜のコンビニに入ってみろ？他人の苦痛を描いた本に興奮しているものが多数おるであろう？」

「私をあれらと一緒にするな！…確かに人の不幸に愉悅を見出していることは遺憾ながら認めよう。しかし！私はあのようなものを断じて認めない！私は…」

「偽物では満足できぬ。違うか？」

「ッ!？」

「それが貴様の質の悪いところであろうな。貴様は人を深く愛しすぎているがゆえにあのような紙媒体の偽フィクション物では満足できぬのだ。もっと現実リアル的な、魂のぶつかり合いにこそ真の美を、悅樂を見出せる。」

「私が人を、深く愛している？」

「無論だ。『好きの反対は無関心』と言うであろう？まさにその通りだ。事実貴様は人以外のものから真の愉悅を感じられぬのだろうか？二次的な創作物を俗物と切って捨てるその姿勢を見ればわかる。」

「…しかし、私が人を深く愛していたとしても、それは許されざる、悪徳だ…」

「自身の性が許されざるものだからと言って苦悩する必要はない。何故ならば、この世に許されざるものなど存在しないからだ。貴様が必要性を感じている『許し』とは、人類の歴史が積み重なる中で需要がないからと遠ざける行為。要は、人の汚れから目を逸らしているだけだ。」

「…つまりは臭い物に蓋をしているだけだと言いたいのか？」

「その通りだ。しかし、それでもまだ需要が多少なりとも残っているからああして深夜のコンビニのブックコーナーに人が群がるのだ。」

「いや、それはあまり関係ないと思うが…」

やはり例えが悪かったか、と英雄王は頭を掻き、またまた酒を煽った。

綺礼からしてみれば英雄王の話は何というか…意外と役に立ったように思えた。まるで、自分という存在をあつさり許されたように感じ、気持ちが悪くなった。しかし、

「…それでも英雄王、私には分からないのだ。なぜ、私のようなものが生きているのかが、そしてどうすればいいのかが…」

どうしてもその答えだけが分からない。

自身の歪さは認めよう。それが人への愛とやらから来るといっても何となく理解はできないが納得はした。

しかし、だからこそ

どうしてその愛が人の苦しみへと繋がるかが分からないのだ。

「ふむ…察するに、自身の性は認めたがそこどまりか。先ほど貴様は『許されざる悪徳だ』と言ったな。そも、悪とはなんだ？」

「悪とは…？」

考える。聖書を、世の定理を思い出す。

しかし、どこにも明確な定義はなく、英雄王を納得させるような言葉は出てこなかった。

諦めて首を振る綺礼を見て英雄王が口を開いた。

「先ほども言ったであろう。それと同じだ。悪とはな、結局のところ

客観性によって塗り方固められた固定観念だ。人の世を存続させるうえで邪魔と見なされた人の一部だ。」

どこか透き通った真紅の瞳が綺礼を見据える。

「貴様の問に答えを返そう。なぜ？という問に答えはない。何故ならば貴様は俺のような存在と違って、明確な目的の元作成された個体ではないからだ。その性は貴様の魂、貴様という唯一から生まれ落ちたものだ。」

故に、恐れることはない。悲観することはない。それも貴様だ。」

朗々とした響きで語られる言葉に綺礼は聞き入っていた。一言一句見逃すものかと耳を立て、聞き入っていた。

「次に…愛とは、突き詰めれば魂の衝突だ。衝突には必ず痛みが、嘆きが生じる。貴様はただ、人と愛を見る観点が違うだけだ。」

故に、恐れることはない。悲観することはない。それも愛なのだから。」

どこか子供に言い聞かせるような優しい声音だった。

不安を取り除くようにゆっくりと、しかしハッキリと脳に言葉が染み込んでいく。

「…王よ、私はどうすれば？」

「貴様が求める愛は必ずや周りに災厄をもたらす。それを理解した上で自身の性を追い求めるのならばそれはそれでよし。俺も止めぬ。…しかし、その顔を見るに聖職者として生きてきたこれまでの人生に感じ入るところがあったようだな。」

ギルガメツシュの言うとおりだった。

言峰綺礼という存在、そして愛を知った時、これまでの人生が、妻の顔が浮かんできたのだ。

あの日々が、妻の死が走馬灯のように流れ、ずっと追い求めていた答えと駆け寄ろうとする己をせき止める。

「幸福とは絶望から遠ければ遠いほどに大きくなる。無上の喜びとはな、苦の果てに得られるものなのだ。迷い続けるがいい、言峰綺礼。貴様がこれから歩む苦難の先に貴様だけの答えがある。」

「…英雄王、感謝する。そして、すまない。」

「ふん、謝ることはない。さっさと行け。」

再び酒を飲み始めた英雄王に一礼した綺礼は隠れ家の2階へと向かった。

此処はマスターとして戦うことになった綺礼に与えられた場所。

全体的に埃臭い印象を与える家の中でその部屋だけは清潔で、神聖な場所だった。

まさに塵一つ許さぬとばかりに隅々まで清掃されたその部屋で輝く十字架。

その下に跪き、両手を固く握った。

——主よ、今一度誓います。貴方のお教えに従い、我が生を全うすると

言峰綺礼は答えを与えてくれた王から背を向け、己が主へと誓った。



「…来たか。」

緊張で固まった身体を軽く動かしてほぐし、ケイネスは努めて朗らかな笑みを浮かべ、表へと出向いた。

「あら？そっちから呼び出しておいて遅れて登場とは、随分な御身分ですこと。」

姿を現したケイネスへと鈴の音が成るような上品な声で非難が飛ぶ。

その安い挑発には乗らずケイネスは笑みを維持したまま言葉を紡いだ。

「お待たせするつもりはありませんでした。しかし、客人が全員揃っていないのに主催者がいきなり登場というのもどうかと思ったもので…」

「?…どういう意味かしら」

——その時、雷鳴が轟いた。

「アアアアアララライイイイイ!!」

特徴ある野太い掛け声。そして遅れてエコーで響く少年の悲鳴。間違いなくあの陣営だ。

「ふう、…ん? セイバーではないか!? さっきぶりだなあ!」

「はあ!? 何でセイバーが…」

やはり罠だったか、とセイバーは冷静に分析し、聖剣へと手を掛けた。

宴の後直ぐに渡された誘いの文。その渡し方も怪しかったが内容はもつと胡散臭かった。

しかし、セイバーの真の主であるあの男はこの誘いに乗れというのだ。

命令が下った以上は出向かざるを得ない。渋々やって来たセイバーだったがどうやら文を送られたのはこちらの陣営だけではなかったらしい。

「これはどういう要件だメイガス魔術師。事と次第によつては貴様の首、ここで刎ねるぞ?」

聖剣エクスカリバーの切っ先を青いコートの魔術師ケイネス・エルメロイ・アーチボルトへと向ける。

常人ならばそれだけで気を失いかねない気配の中、ケイネスはゆっくりと両腕を広げ、高らかに宣言した。

「要件は簡単だ。ようこそ! 英雄同盟結託会議へ!」

ここにボツチ補完計画が始動した。

真・英雄無双《前編》

古今東西「主人公」とは、勝利し続ける者である。

何度心を碎かれ絶望と敗北を味わおうとも、その度に敗北から学び、過去の自分を乗り越えて立ち上がる不屈の英雄である。

そんな英雄の起源とされているのが人類最古の主人公であるギルガメツシュである。

「ギルガメツシュ叙事詩」が後世の人々に親しまれている理由はいくつかあるが、その最たるものはギルガメツシュという英雄の戦い方や生き様にあるだろう。

まず、彼の戦いの舞台が魅力的だ。

メソポタミアを離れ、時には異国の海で、空で、砂漠で、果ては宇宙まで進出し、彼は戦い続ける。まさに世界を股にかけて大冒険である。

また、ギルガメツシュという英雄は伝説上において、敵に合わせて武器や戦闘スタイルを切り替える多芸な戦士だった。海を切り裂く剣や、5つに分かれる槍、さらには炎を放つ弓も扱って見せ、光の舟も所有していた。

時に剣で切り結び、時に弓を扱う。この戦闘スタイルの柔軟性と数多の武器を駆使する応用力が万人受けしているのかもしれない。

しかし、そもそもなぜ彼はこれほどまでに武器を持つことになったのか？

これもまたギルガメツシュという英雄の特性になるのだが、彼は新しい敵、即ち神が現れ交戦する度におおよその確率で初戦は敗退するのだ。そして手元の武器を破壊され肉体と精神を打ちのめさす悲嘆にくれてしまう。しかし、最後には必ず新たな武器を手に入れ、戦いの中で技を覚えて敵を打破するのだ。

この敗北から学び、新たな武器や技を手に入れるスタイルは現代の仮面ラ○ダーやジャ○プの主人公に通じるものがある。

残念ながら最初の方で出てきた武器や技は、後半になるとほとんど登場しないものの、マンネリ化を防ぐ戦い方が人気な理由の一つだと

思われる。

「ギルガメツシユと神々の戦い」より抜粋

◆◆◆◆◆

「…む？」

聖杯問答から一夜明け、遠坂邸にて朝から晩まで居間にて読書にいそしんでいたギルガメツシユは唐突に手元の蔵書から顔を上げた。

「王さまどうしたの？ジャンプ読み終わったなら私に貸して欲しいんだけど？」

「いや、周囲を警護していた宝具が一機潰されたようだ。雷ということとは…ライダーか？」

ギルガメツシユの愛読書、ジャンプへと伸びてくる凜の手を叩き落としながら王の財宝を開く。
ゲイトオブ・バビロン

（奇襲か？だが、それにしてもは雑だな…）

「ライダーの奇襲だ！総員速やかに避難せよ!!」

屋敷に巡らせてある防御宝具を全て起動させ、屋敷を揺らすほどの大声を張る。

すると、すぐさま屋敷の中はドタバタと慌ただしくなった。

時臣は結界を増強するためギルガメツシユが無理矢理作った結界部屋に籠り、葵はすぐさま地下の工房へと二人の娘を連れて避難する。桜も凜も心得たもので何も言わずに母の後についていく。（凜は何故か耳を押さえていたが）

雁夜おじさんは最初から安全な部屋へと隔離済み。

これこそが日頃ギルガメツシユが行ってきた聖杯戦争避難訓練の賜物である。昼夜問わずに何度も不意打ちで訓練をした甲斐があったというものだ。

満足そうに頬を緩めたギルガメツシユだったが、すぐさま顔を引き締めると武装を纏い霊体化。一瞬で屋根上へと現れ、その眼を凝らした。

すると、数キロ先から雷を纏った戦車がこちらへ馬鹿正直に真正面

から突っ込んでくるのが見える。

「来るか…：征服王よ。」

数キロ離れているにもかかわらず、英雄王と征服王の視線が交じり合った。

イスカンドルの眼光を読み取ったギルガメッシュの眼が喜悦に染まる。四肢に血が通い、犬歯をむき出しにして笑う。

ゲイトオブ・バビロン
王の財宝開門。装備転換。

ギルガメッシュの手元と腰元に黄金の波紋が波打つ。

瞬きもせぬ一瞬で手元に弓が握られ、腰には洗練されたデザインの矢筒が装備された。

真つ白な柄が美しく、先端には発射口のような奇妙なものが取り付けられた神秘的なその弓こそは、古代インドの大英雄アルジュナが炎の神アグニから賜ったこの世に打ち落とせぬもの無き神の弓、その原型である。

アグニ・ガンディーヴァ
その名を炎神の咆哮

ギルガメッシュが混沌とした火の国にてメソポタミア神の残党狩りをしていった際に割り込んできたどこかの神。

恐ろしく強いその神から逃走を図るため、敢えてそいつの懐に飛び込んで隠れていた際に偶然発見し、そのまま拝借。適当にぶっぱなしながら最後には無残に破壊されたといういわくつきの逸品である。後に改善を加えた新品がアルジュナの手に渡ったらしいがギルガメッシュは結構この弓のことを気に入っていた。

「――吠えろ炎神の咆哮!!!」

簡易ながらも真名解放。

数ある弓の中でも最上級の名器から放たれた一矢は蒼白い炎を纏ってミサイルのごとくライダーへと迫る。一見すると彗星のように映る幻想的なその一撃は、このまま的の頭蓋を柔らかく砕くこと必然だった。

だが、黙って見ているライダーではない。即座に剣を引き抜き、気合い一閃。

矢の直弾を避けることはできた。しかし、それだけだ。

軌道を逸らすことしかできない矢の威力に戦慄する中、絶望がさらにライダーを襲う。

「なにっ!？」

視界を埋め尽くす蒼い炎。意識の合間を縫う神速連射である。

それが何かを認識するよりも早くライダーは全力で手綱を引いていた。

「おオオオオオ!!」

戦車の角度を一気に傾け、急激なGに耐える。矢のカバーしきれない部分を狙った離脱だ。

だが、それでも誘導弾じみた精度で矢は追ってくる。追撃を振り払うべく、イスカンドルは縦横無尽に戦車を引き回す。戦車の底を焼きながら矢が通過し、戦車の装甲を抉る。

冷や汗を流しながらもギリギリ耐えたライダーの目の前がまたしても蒼に埋め尽くされた。

千里眼

過去、現在、未来を見通す眼を持つてすればライダーの動きを読み切るなど容易いこと。

弓兵のクラスで召喚され、神々との戦いで鍛え上げられたギルガメッシュの弓術を前にして無事でいられる英雄は少ない。

(ここまではか…すまんな坊主。あまり粘れなかったわい。)

心の中で一言己のマスターに謝ったライダーことイスカンドルは目を閉じ、一言呟いた。

「来い。」

——そして、世界は砂漠に塗り替えられる。

◆◆◆◆◆

「…やられた」

英雄王ギルガメッシュは珍しく苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

屋根の上から周囲を見渡せば一面の砂漠と、遠坂邸を取り囲む無数

の兵士たちが見える。

「まさか固有結界の中に遠坂邸ごと取り込むとはな…」

上手い策である。これでギルガメッシュは考えなしに暴れることができなくなってしまう。もしも加減を忘れてしまえば己のマスターとあの可愛らしい少女たちは肉片一つ残さずこの世を去るだろう。

「征服王も健在、か…」

ここからそう離れていない位置でイスカンドルの戦車は宙に浮かんでいた。

先程命を刈り取る予定だった矢は世界を塗り替える際、狭間に飲み込まれたのだろう。

上手く誤魔化したな、と賛辞を送っておく。

だが、賛辞は送ってもこの世界は認められない。さっさと切るに限る。

ゲートオブ・バビロン
王の財宝の深奥に手を伸ばす。ありとあらゆる事象を切り裂く最強の剣、乖離剣を抜こうとする――

「さっせぞー！」

が、それは名も知らぬ猛者による槍の刺突によって防がれることになる。

――乖離剣エアをキャンセル。デュランダル 絶世の名剣へと変更。

鎧を纏っていない今の状態では並みの一撃でも、当たり所によっては致命傷になりうる。

確かな修練によって磨き上げられた一撃を躲し、懐に接近。王の財宝から抜刀したデュランダル 絶世の名剣でその身体を切り裂いた。

英霊の座へと還っていくイスカンドルの盟友。しかし、それを見て安堵する暇はなかった。

再びの殺気。振り向きざまに剣を振るい、いつの間にか屋根上まで来ていた兵士の首を狩る。

次は左からだった。上段から放たれた一撃を、下から振り上げたデュランダル 絶世の名剣で力尽くに粉碎する。砕け散った刃に啞然としている顔を尻目に槍を射出して串刺しにする。次は…とここで征服王の作戦

を理解した。

(なるほど、乖離剣を使わせない魂胆か。)

ギルガメツシユをこの場で釘付けにし、隙を見せたところでイスカ
ンダルが止めを刺すつもりなのだろう。

「乖離剣さえなければ恐れるに足りぬと？まったく…舐められたもの
だな。」

槍の刺突を剣の腹で受け止める。並みの剣ならへし折れているだ
ろうが、生憎とこれは絶世デュランダルの名剣だ。そのまま剣先まで槍を滑らせて
大きく下から弾く。致命的な隙をさらした兵士を切り伏せ、原罪メダロックを
空いてる左手に呼び寄せ背後から迫っていた斬撃を弾いてそのまま
蹴り飛ばす。次！と顔を上げれば辺りは無数の兵士で固められてい
た。むさ苦しいことこの上ない。

「ハアッ！」

裂帛の気合いと共に手に持った双剣を煌めかせ、その場でクルリと
大回転。空気が唸り、見るも鮮やかな剣技が周りを囲む10人の兵士
を切り裂いた。

悲鳴を上げる間もなく霊子となる英霊達。それらを一瞥したギル
ガメツシユは、鋭い眼光で下に群がる兵士たちを眺め、その数を見て
思わず呟く。「面倒だな」と。

まさしく蟻のように遠坂邸に群がる筋肉隆々の男たちは余りにも
絵にならな過ぎた。

どうしたものかと傲岸不遜に兵士達を眺めていたギルガメツシユ
だが、唐突にいいことを思いついたとばかりに笑みを浮かべ、手元の
双剣を宝物庫へと収納した。

怪訝な顔をする兵士達をよそに英雄王は美しいその人差し指で空
を指差した。

「——天を見よ！」

思わず空を見上げた彼らの眼に映ったのは真つ青な空に現れる幾
つもの黄金の波紋。

空が黄金に染まっていく神秘的な景色を啞然と眺める兵士達。

何十、いや何百という武具が黄金の砲門からその顔を覗かせている。魔剣があつた。聖剣もあつた。呪いの槍が、灼熱の剣が、雷の槌が、王の号令を待っていた。

「全員まとめてかかつて来い！英雄の格の違いを教えてやるツ!!」

ありふれた台詞だが、英雄王から放たれた言葉は重みが違った。まるで言霊の一つ一つに重力が宿っているのではないかと錯覚するほどに重く、心を圧迫してくる。

恐れをなしたのか？伝説の英雄王に――

否、と征服王イスカンドルは、その盟友たちは答える。

寧ろ血が滾る。これから起きる神話の戦いに身体が武者震いで震えている。興奮を抑えるために噛みしめている奥歯は今にも砕けそうで、握りしめた拳はすでに青白くなっている。

「戦うしかあるまい」

征服王は傍観ではなく、皆の期待を感じ取り、呟いた。

大声で呟いたわけでも無かろうに、皆が武器を構え、王の号令を待つ。

世界が静まり返る。緊張が高まり、誰も声を発しない。

始まりの合図は何だったか。

誰かが唾を飲み込んだ音が、足を一步進めた音が、それとも僅かに動いた英雄王の人差し指か――

「突撃いいい!!」

おおおおオオオオオオ!!

何であれ、ここに戦いの火ぶたは切つて落とされた。

「砂漠に雨は降らぬが…なに、今宵は特別だ。存分に、雨に濡れよ!」

剣の雨が降る。黄金の王によつてもたらされた血と恐怖の雨が。雨粒の一つ一つが超級の宝具で出来たその雨は触れるだけで肉を抉り、骨を砕くだろう。兵士たちは濡れぬよう盾かきをしているが、雨粒の大きさによつては盾ごと貫通してくるものもある

だが、それに恐れをなして足を止める者は一人もいなかった。剣に肉を切られ、骨を断たれようともその歩みを止めることなく、ただただ眼前の敵を倒すためだけに進み続ける。

「その首貫うぞツ！」

——そして遂に英雄王の元までたどり着く者たちが現れる。

何百という王の財宝ゲイトオウ・パピロンを開門し、その制御に神経を割いている現在の英雄王にとつて接近戦は鬼門だった。それを知って知らずか、右腕を吹き飛ばされながらも突撃して来たその兵士の顔には笑みがあった。

「甘いわッ！」

だが、満身創痍の兵士を相手に手間取る英雄王ではない。先程までと同じように難なく切り伏せて見せる。だが、倒れない。

「なにッ!？」

それは執念か。肩まで食い込んだ刃を両手でつかみ、名も知らぬ兵士は不敵に微笑んだ。

——そして背後から迫る殺気。その数5。

「貫き焼きブリユ尽くす五尖槍ナナク」

しかし、それでも英雄王には届かない。王の財宝から矛先を露にした太陽神ルーの槍。その5つに別れた穂先から放たれた五条の光が兵士たちの体を蒸発させた。声を上げることもできず死に絶える仲間達、その消えゆく屍を見てもなお進むことを止めない愚直な王の軍勢。

「——見事だ。だが、それでは足りん。」

遠方より飛来した30の投槍を再び手元に呼び出した炎神アケニ・ガンディーヴァの咆哮の連射で一息に落とす。

さらに、上空に展開している王の財宝を遠坂邸の周りを囲むように配置し、周りを牽制。

そして、弓の弦へと手をかけ——

「A A A A L a L a L a L a L a L a i e !!」

その瞬間、これまで沈黙を保っていた征服王がもはや我慢ならぬとばかりにアドレナリン全開で黄金の雲から降り注ぐ殺戮の雨へと乗り出した。

ザシユツ!!

「グう…」

空から降り注いだ鋭利な短剣が肩に突き刺さる。

ヒュツ!!——ガキンツ

槍が降る、剣で弾く。斧が降る、剣で弾く。大剣が降る、弾く…が
体勢を崩す。剣が降る、刺さる。剣が降る、刺さる。槍が降る、刺さ
る。剣が降る、刺さる。槍が降る、刺さる。斧が降る、弾く。

その体はたったの数秒で死に絶えの満身創痕。自慢の戦車は傷つ
き、神牛たちも、ゼウスが視ようものなら雷による鉄槌は免れぬほど
に血みどろの悲惨な有様だ。だが、それでも彼の顔に浮かぶのは少年
のような笑顔。——そんな彼を見て英雄王が小声で何かを呟く。

「ハア、ハア、彼方に…こそ…栄えありイイイイ!!」

ワイア・エクスブグナテイオ
遙かなる蹂躞制覇

ギルガメツシユまでの距離は500mもない。満身創痕ながらも
英雄王の姿を視界に納めた征服王イスカンドルは高らかに真名解放
を行った。

主の思いにこたえるべく、二匹の神牛『飛蹄雷牛（ゴッド・ブル）』
が死力を尽くす。

戦車が纏う雷電はこれまでにないほどに苛烈に輝き、その熱量は大
気を焼くと共に迫りくる宝具の幾つかを払いのけてまで見せた。

（行ける!!）

「おおおおオオオオオ!!」

暴れ狂う雷が迫りくる。傲岸不遜に王の軍勢を眺める黄金の王を、
地に引きずり落とさんと。——だが、征服王の命をかけた特攻を前に
しても英雄王の余裕は崩れない。それどころか、どこか澄んだ眼でイ
スカンドルを視ていた。

「…見事だ。これを見せられてはこちらも手を抜くのは失礼だな。」

——弓の弦へと手がかかる。

伝承に曰く、英雄王ギルガメツシユは神々との戦いの中で数々の技
を習得している。特に有名な技は、宇宙にてギルガメツシユが自ら異
国の神に教えを請い、苛烈な修行の末手に入れた必殺奥義。

梵天よ、不滅を祓え

古代インド叙事詩の戦士たちが使用するこの技は本来、ブラフマー神の力を宿した武器という意味で、ブラフマーの力を宿した武器は全てブラフ・マーストラである。そして、ブラフマーとは宇宙の根本原理を人格化した神格。即ち、宇宙の真理である。

つまり、宇宙の真理を学び、ブラフマーに由縁のある武器を扱うことができるのなら、ギルガメッシュにも使用可能ということになる。如何に不屈の意思を持つ者であろうともこの光を見てもなお、戦意を保てる者はいない。

肉体も、精神も、この世から解脱させる神秘の奥義。並みの英霊ならば肉片一つ残さず浄化させる英雄の一撃である。生き残れる道理はない。現にイスカンドルの姿はどこにも見当たらない。

——だが、

「固有結界が消えないだと…?」

術者を失った以上、その結界は崩れ去るものだ。しかし、砂漠の世界が鉄とコンクリートの現代に戻ることはなく、兵士達も健在である。

(なんだ?何が起きている…?あの体勢、体力でブラフを避けられるはずがない。奇跡でも起こらない限りは…)

「ちよつと待て…まさかッ!あの少年!ウェイバー・ベルベットの令呪かッ!」

それは、普段の英雄王から考えるとあまりにも察しが悪すぎた。後から考える様々な要因が浮かんでくる。だが何にせよ、英雄王ギルガメッシュは致命的な隙をさらした。この隙を逃さぬ歴戦の猛者がこの固有結界に紛れ込んでいた。

「破魔の紅薔薇ッ!!」

地上から投擲された紅蓮の流星がギルガメッシュに迫る。咄嗟の思考で回避は不可能と判断。王の財宝より盾を取り出し、防御を試みる。

「熾天覆う七つの円環!!」

しかし、直ぐにこれは悪手と悟る。このランサーの槍は魔力の流れ

を断つ槍。常に魔力だけでその形を成しているアイアスとは最高に相性が悪い。

「ツチ!!」

1枚、2枚、盾が？がされていく。

取り敢えずこの場を離脱しなければならない。

そして悪寒

「約束された——」

ようやくと理解する。これまでの攻撃の意図するところを全て。

であればこそ、今放たれようとしている聖剣は、間違いなく切り札だろう。

この俺を殺すためだけに用意されたシナリオの幕引き。完全なるファイナーレだ。

——斬り抉る戦神の剣

「グツ!?!」

だが、それをさせる英雄王ではない。突撃してくる征服王を見て念のため仕込んでおいた迎撃宝具を発動させる。

これは、「後より出でて先に断つもの」の詠唱によって待機状態に入り、相手が切り札として認識する攻撃を発動させることで後から追従して動く後出し宝具である。そのくせ相手の切り札を潰し、こちらの宝具を先に発動させるという因果の書き換えを可能にする出鱈目能力を持っているのだ。

完全に英雄同盟の作戦を真正面から叩き潰した英雄王。しかし、その顔に笑みはない。

「…やられた」

切り札を潰し、その心臓を抉られて霊子に還ったと思われたセイバーだが、何故か既に復活し、剣を構えてこちらを睨みつけている。可愛い。

さらには何故かライダーもきつちり復活し、剣を構えてこちらを睨みつけている。

後ろには槍を回収したランサーが双槍を構えてこちらを睨みつけている。

つまるところ、状況はあちらに有利ということになる。

(にしてもセイバーとランサーはどうやって…ああ、そういうことか) 恐らくあの二人はライダーに俺が気付いた時点で既に遠坂邸の近くで待機していたのだろう。そして固有結界に取り込まれ、俺が疲弊し決定的な隙をさらすまで風王結界で身を隠していたということか。

説明されるでもなく一人で事情を把握した英雄王は自分を打倒するために集まった英雄同盟を見て一言呟いた。

「…俺にも声かけて欲しかったなあ」

真・英雄無双《中編》

ギルガメツシュ神話の中で有名な話として「冥界下り」というものがある。

非常に有名な話だが、まずは要所を押さえて簡単にあらすじを説明したいと思う。

神殺しの旅に出かけたギルガメツシュはある日、戦いの神ザババと対峙することになる。

山を切り落とすとまで言われる巨大な剣を振り回すザババに苦戦を強いられるギルガメツシュ。

やがて追い詰められた彼は、ザババによって切り裂かれた大地の分け目へと飛び込んで逃走を図った。

無事に逃げおおせたと安堵したギルガメツシュだったが、不運にもそこは冥界へと通じる通路だったのだ。

偶然にも冥界に足を踏み入れることとなったギルガメツシュはそこですでに死んでしまった己の民たちと再会する。再会を喜ぶギルガメツシュだったが、彼らは二度と地上に戻れぬという。

そのことを嘆きつつも彼は、かつての民たちが次の生へと向けて新たな門を潜る場面を目撃する。

ここで彼は、命が終わるものであり、死とは終わりから始まる新たな巡礼への門であることを知る。

彼は、自らの口でこう語っている。

「我、真実を見たり。死を超ゆること不可能なれど、恐れることなかれ。全ては流れの中にある。」

死を知り、この世の運命の流れを知った彼はその後も冥界にて数々の試練や冒険を乗り越え、現世に帰還を果たした際には、冥界にて習得した運命を司る技で、あれほど苦戦していたザババ神を一撃で仕留め、神の剣「千山斬り拓く翠の地平」を手に入れたという。

この「冥界下り」の中でギルガメツシュが見出した死に対する見方は、その後のユダヤ教や仏教に大きな影響を与えたと言われている。

「ギルガメツシュと神々の戦い」より抜粋

◇◇◇◇◇

「はあ…」

大きなため息をつく英雄王。

それは様々な要因からきたため息ではあるが、その理由の一つに乖離剣エアが使えないというものがあつた。先ほど試しにエアを呼び出し、千里眼を発動させてみたがこの状況で発動した場合、イスカンの固有結界を破壊できるが同時に遠坂邸も巻き添えを食らうことが判明したのだ。

靈的に冬木の地と繋がっていた遠坂邸のラインの中に無理やり割り込んできた征服王の固有結界は元々あつたラインをスタスタにし、遠坂邸を不安定な空間においてしまったのだ。

勿論、征服王が普通に結界を解除すれば解決する話であるが、もし仮にギルガメツシュが乖離剣で無理やりこの世界を切り裂いた時にはどんな反動を遠坂邸が受けるかわからない。

この事実が気が付いた瞬間、ギルガメツシュの中から一瞬で乖離剣エアを使うという選択肢は消滅した。

そのほかの方法としては単純に王の軍勢の兵士の数を減らせればいい。この固有結界が全員の心象から成り立っている以上は一定数の兵が減れば結界を維持できなくなるはずだ。

しかし、ここでまたため息の原因の一つだが、ギルガメツシュの大好物である超破壊宝具を使用できないというのがある。なにせ先ほども言ったように遠坂邸があるためだ。

余談だが、これがギルガメツシュの戦闘における数少ない弱点である。基本的に人知を超えた神を相手取っていた彼は頭の悪い大火力宝具に重点を置くようになってしまい、結果として宝具を使えない状況になると、大幅に戦闘能力を制限されてしまうのだ。

「やれやれ…まあ、能力を制限されるのには慣れているがな」

眼前に広がる英雄たちの同盟軍団。そのどれもが俺に剣を向けて

いる。その光景に「四面楚歌」という単語が頭に浮かぶ。

どうやら俺はまた勝手にヘイト値を貯めていたようだ。文字通り死んでも治らなかつた持病の一つである。だが――

「流石にこの仕打ちは理不尽ではないか？なあ、騎士王？」

ちよつとしたいらだちも込めてセイバーに話を振ってみる。

「…謝罪をするつもりはありません。貴方は強大な王だ。どうか卑劣な手段で討つことをお許し願いたい。そして願わくは…」

「私の憧れた王様のまま死んでいただきたい」

清廉で迷いのないセイバーの碧眼を見つめ返すギルガメツシユの紅眼。

「…迷いは晴れたのか？」

「いいえ、私は今も迷つたままです。考えがまとまらないのです。貴方は滅びを受け入れろという。確かにそれは正しいことだ。貴方に限らず、それは全ての王たちが果たしてきた重要な責務なのでしよう。」

己の苦悩を打ち明けるセイバー。

だがやはり、その瞳に迷いは見えない。

「しかし、私は騎士王です。あなたとは違い私はあのブリテンという国に忠誠を誓つたのです。騎士として。それは、それだけは私が捨ててはならない誇りなのです。」

彼女の瞳はただただ綺麗で、まっすぐで

「だからこそ、あなたには倒れてもらいます。貴方がいると私はあなたしか目に入らなくなる。思考が鈍り、感情が制御できない。もうこれ以上私の頭の中に入ってこないでいただきたい。」

「ふん、俺を殺せば頭の中から俺が、俺の言葉が消えてくれると？残念ながらそれは有り得ない話だよ、セイバー。」

「…確かにそうでしょうね。もう私は貴方を忘れることはできない。しかし、ここであなたがいなくなれば私は今以上に惑わされることはなくなるでしょう。もう、あなたのことばかり思い浮かべることもなくなるでしょう。」

「なるほど。まあ、それが貴様の決断ならば好きにするがいい。なに、

遠慮はいらぬ。全力で俺を叩き潰すがいい。まあ…できればの話だが。」

ギルガメツシュの放つ威圧感が一際大きくなったその時、黄金の光が彼の体を包んだ。

この砂漠にいる多くの者が一度目にした光景。

その光が晴れたとき、そこには黄金の戦装束を装着し、神々しいまでの輝きを放つ英雄王がいた。

その姿はまさしく伝承に語られた姿と全く同じである。

曰はく、

「ウルクの王、太陽神より賜りし黄金でその身を包み、神威を示した。その御姿、まさしく戦神の如き猛々しさと美神の如き美麗なり。黄金はあらゆる災厄を祓い、御身汚すこと能わず。嗚呼、偉大なるやギルガメツシュ王」

生前ギルガメツシュ王が愛用したという黄金の鎧。太陽神の加護から形作られたその鎧は絶対的な防御力を誇っているという。

また、太陽神の加護、絶対的防御力という観点から古代インドの大英雄カルナの鎧の伝説は、このギルガメツシュの鎧から派生したものではないかと考える説もある。

そんな伝説の防具が放つ輝きと禍々しい魔力に思わず尻込みする兵士たち。

瞬間、流星が駆けた。豹のように身体をしならせ、地を這うように黄金の王へと接近する。その両手にはそれぞれ長槍と短槍が握られ、体を覆う鎧は動きやすさを意識した必要最低限の軽鎧だ。

フィオナ騎士団が一番槍デイルムツド・オディナ

その名に恥じぬ勇猛果敢な突進に対し、ギルガメツシュは不敵な笑みを浮かべてただそこにあるのみ。武器を出すこともしない。

よほどその鎧に自信があると見たが、デイルムツドには関係のないことであった。なにせ彼の槍、破魔の紅薔薇はあらゆる魔力の流れを断つ破魔の槍である。この槍を前にしては如何なる英霊の防具も意味をなさないものになる。防御力の高さなど関係ないのだ。

しかし、その前提は英雄王によって覆されることになる。

「なにっ!？」

心臓を狙った一撃は、胸前に持って来た左の手甲によって容易に防がれ、そのまま英雄王が腕を振ったことによって完全に外へと衝撃を逃されてしまった。神秘はより強い神秘によって塗り替えられる。大英雄カルナの鎧の源流にデイルムツドの槍が通じるはずもない。

さらに、そのまま流れるようにランサーの懐へと飛び込んだギルガメッシュは黄金の手甲に包まれた右拳を思いつ切りランサーの顔面目掛けて振りぬいた。

苦悶の声をあげながら錐揉みに吹き飛ばされるランサー。

「輝く貌」の顔面をグーで殴るといふ偉業を成し遂げたギルガメッシュは満足そうな笑顔を浮かべていた。彼は自分以外のイケメンが嫌いだったのだ。

顔を見るだけで女が惚れるとかありえないだろいい加減にしろ！俺が女神口説くのにとれだけ苦労したと思ってんだ！（八つ当たり）

英雄王にあるまじき幼稚な思考をしていたギルガメッシュだったが、その余裕はすぐになくなった。

「ッ!？」

一瞬の悪寒の後、首を右に傾けたギルガメッシュの左首筋を槍が轟音とともに撫でていったのだ。恐ろしく正確で、見事なまでの槍の投擲だった。首を元に戻して正面を見据えれば投擲を終えた姿勢のデイルムツドが不敵に微笑んでいた。恐らく先ほどの投槍は王の軍勢の兵士から借りたのだろう。槍をなくした兵士が不満げにデイルムツドを睨んでいるのが見える。

「見事な投擲だったぞ、デイルムツド・オディナ。俺の拳をもらっておきなながらあの精密さとは恐れ入る。思っていた以上に根性のある奴だったようだな。」

「喜んでもらえたようで何よりだ、英雄王。てっきり俺の相手をするのは不満かと思っていたのでな。」

「あの投擲を見てそのような評価をする気にはなれぬ。ただ、貴様と戦うには邪魔者が多いと思っていたただけだ。故に、我が使い魔に露払いをさせるとしよう。」

「出ですよ！『天地制す覇来の獅子』!!」

王の財宝が開帳され、中から一匹の獣が悠然と歩み出てきた。

嘗てギルガメツシユと共に多くの戦いに参加し、数々の伝説を築き上げた黄金の獣。

気品すら感じさせるその獅子こそはギルガメツシユの伴侶である女神イシュタルの使い魔にして英雄王たる彼の宝具である。

門から現出した獣は周りの兵たちを威圧するようにぐるりと視線を巡らせた後、天に向かって咆哮を放った。指向性があるわけではなただの咆哮はしかし、大地を震わせ、天を落とすような勢いだった。正しく獣の王。神代にのみ存在を許された神獣である。

咆哮を終えた神獣は自身の主である英雄王へと視線を向け、英雄王もまた視線を合わせる。両者の間に言葉など不要だった。共に戦っていたあの頃からお互いにとって必要なものは視線だけだった。

やがて主から視線を外した獣の王は王の軍勢へと駆け出した。牙をむき、風を切り、再び主と戦える喜びに身体を震わせ、獅子は獲物へと飛び掛かった。

「…凄まじいな。あれが、英雄王ギルガメツシユの従えていた神獣か。」

文字通り、兵士たちをちぎっては投げている獅子の戦闘能力に戦慄するデイルムツド。兵士たちも反撃しようと槍や剣を叩き付けているがいかなる怪異か、刃が通らない。

兵士たちの武器は獅子の皮膚を貫通することなく表面で弾かれ、遂には繰り返し叩き付けていた武器はへし折れてしまっていた。まさに一方的な虐殺だった。

「…神代の獣の中には、人類の文明、すなわち人理を否定する者が稀に存在する。奴はそのうちの一体だ。奴には人が生み出すあらゆる道具を無効化する特性が付属されている。生半可な宝具では傷一つ付けぬよ。」

「…恐ろしいな。あれがヘラクレスの栄光の一つ、ネメアの谷の獅子の元と言われる怪物か…」

古代ギリシアの大英雄ヘラクレスが対峙した怪物の一体にネメアの谷の獅子というものがある。この獅子の毛は、矢や刃物を通さない性質を持っていたため、ヘラクレスは素手で獅子を羽交い締めにして首をへし折り、退治した後は毛皮を剥いで防具として使うようになったとされている。

そんな獅子のモデルになったとされているのがギルガメツシュの従えていた女神イシュタルの随獣である神獣なのだ。ギルガメツシュの死後、彼の息子であるエルマドウスに仕えていたことは残されていた彫刻のレリーフから確認できているものの、その後神獣がどうなったのかを知る者はいない。そのため、ネメアの谷の獅子はこの神獣自身、若しくはその子孫ではないかという説も存在している。だが、メソポタミアとギリシアでは距離が離れているうえに年代もかなり違うので信憑性のない話ではあるが。

「…厄介払いは奴に任せておくとして、こちらはこちらで正々堂々勝負と行こうではないか。」

己が神獣を見やり、少々考え込んでいたギルガメツシュだったが、直ぐにデイルムツドへと向き直り、不意打ちが得意なこの王にしては珍しく正面切つての勝負を提案した。

「少々意外だな。その…貴方はこういった騎士のような決闘に興味がないと思っていた。」

バーサーカーとの戦いを見ていたランサーは当然胡乱な視線で英雄王を見やる。

「ふん、確かに俺の戦闘スタイルは正々堂々とは言い難い。しかし、俺は英雄だぞ。必要に迫られない以上は真正面から向かってくるものには同じように己の武勇で応えたいものさ。」

？でもないが、本当でもないギルガメツシュの言葉。

しかし、無駄にカリスマ性のある彼の言葉は割と真剣に聞こえたようだ。

「流石は我ら英雄の祖と呼ばれる男だ。これはその首を落とす瞬間が楽しみになって来た。」

英雄らしく（見える）堂々としたギルガメツシュの態度に感化され

たのか好戦的でいながら爽やかというよく分からない笑みを浮かべるデイルムツド。

「やれるものならやってみろ。では、尋常に…」

「勝負!!」

こうして戦いの火ぶたは切って落とされた。

先手は敏捷性で勝るランサーだった。

文字通り目にも留まらぬ速さで無手の英雄王へと接近する。

武術を極めた人ならざる者、英雄にのみ許された高速移動。一呼吸で間合いを詰めたデイルムツドはあえて力を抜き弛緩させていた右腕に一瞬で筋肉という名の魔力を注ぎ込み、槍と同化させる。正しく手の延長線上に槍。体の一部と言っても過言ではないほどの一体感。その状態から腰のひねりも加えた完璧な一刺は英雄王の眉間へと向けられていた。心の臓を抉れぬのであれば鎧に守られていない顔を狙うまでのこと。

本来であれば視認することすら不可能であろう神速の一撃をギルガメツシュは王の財宝から取り出した剣、メロダック原罪を盾のように構えることで破魔の紅薔薇グレイジャールグの軌道を逸らすことに成功した。しかし、デイルムツドは双槍使いである。左手に握っている短槍を巧みに操り、ギルガメツシュの首を落とそうと試みる。

この攻めに対しギルガメツシュが王の財宝より召喚したのは中世の騎士が愛用した盾だった。美し芸術品のような輝きを放つ盾を左の手甲に装着し、ギルガメツシュは自身の首を狙う短槍を迎撃する。

長槍と剣、短槍と盾による攻防はしばらく続いた。

己の敏捷性を生かしてギルガメツシュの周りを絶え間なく移動して間合いを図り、側面からの攻撃を試みるデイルムツドは正しく蝶のように舞い、蜂のように刺すという言葉が似合う。対するギルガメツシュは堅牢な守りでデイルムツドの攻撃を防いでいるが、豪華な黄金の鎧と美麗な盾に長剣も相まってどこか物語の騎士を連想させる。実際の騎士はデイルムツドの方なのだが。

だが、状況は動くことになる。何度目かの膠着状態に陥ったその瞬間、ギルガメツシュが盾を前面に押し出してタツクルを仕掛けたの

だ。

予期せぬ攻撃にたまらず押し込まれるデイルムツド。そして反射的に後ろへと跳躍した彼はそこで己の失策を悟った。

「光よー」

天へと掲げた英雄王の剣に光が集っていた。

黄金の鎧に盾と天高く振り上げられた光り輝く剣。

その非現実的で幻想的な英雄王の姿にデイルムツドは場違いにも「光の騎士」などという感想を抱いた。

しかし、見とれている場合ではない。今すぐにも離脱しなければこれから放たれる光の斬撃に吞まれてデイルムツドの霊体は消滅するだろう。

「なにっ!？」

だが、デイルムツドはその場から移動すること叶わなかった。何時の間にか槍兵の武器である足に足枷のように縄が括りついていたからだ。この縄こそは北欧神話において怪物フェンリルを繋ぎ止めるためにドワーフたちが作り出した拘束道具「グレイプニル」。伝承の怪物さえ縛り付けた束縛から抜け出す術をランサーは持たない。

正面对決に應じると見せかけての罠。実にギルガメツシユらしい悪質な手口だった。ちなみにギルガメツシユはこれでもまだ真剣勝負の域を出てないと考えている。ただ行けると思ったからトラップし掛けただけである。

「さあ、光に吞まれて消えよ！原罪——」メロダツク

ギルガメツシユの右手が振り下ろされる。剣から光が溢れ出す。

この光景の前にデイルムツドができるあがきはただ一つだけだ。

「必滅の黄薔薇ッ!!」ゲイ・ポウ

稼働する身体の筋肉をすべて稼働させ、全力で放った投擲。

真名解放に伴い威力の増したその一撃は剣を掲げるギルガメツシユの黄金の手甲に吸い込まれ：

「グッ……!？」

先程まで傷一つ付けられなかった鎧を容易く貫いて右腕を貫通した。たまらずギルガメツシユは剣を手放す。

必滅の黄薔薇はその槍を折るまで永遠に消えない痛みと傷を残す。つまり、現在の英雄王は片腕を潰された状態というわけだ。

——正しく致命的な隙だった。

しかし、ランサーの援護に回ろうとするセイバーは縦横無尽に暴れ回り、兵士の数を減らす神獣を抑えるので精一杯だ。ライダーもその兵士たちもまた然り。

ならば自分かと思い、敢えて手元に残した破魔の紅薔薇で足元の拘束宝具の解除を試みるが流石に神代の宝具というだけあって上手くいかない。

だが、この機会を逃せば最後、英雄王は決して隙を見せないだろう。(もう失敗はできないっ……！)

ランサーは一度ギルガメッシュを仕留めそこなっている。確かな隙があつたにもかかわらずだ。

ここでまたしくじれば主に合わせる顔がない。

これは主ケイネスが強大に過ぎる英雄王を仕留めるために、苦渋の決断で他の陣営と協力して挑む作戦なのだ。デイルムツドは忘れない。主の悔しそうな顔を。そして、あまり信用するには至らなかったであろう自分に英雄王の殺害を命じた時の決意に満ちた顔を。

ケイネスが聞けば怒るだろうが、デイルムツドは、英雄王ギルガメッシュの偉大さとその力の強大さに感謝していた。

何故なら彼の力が、その伝説への畏怖が、眠っていたケイネスの本能を叩き起こしたからだ。すなわち戦うものとしての気概と、騎士を従えるだけの器である。

不遜にもデイルムツドは、ギルガメッシュと戦うことを決意したケイネスの顔を見て初めて、心の底から彼を主として自身の騎士道を全うすることを誓ったのだ。

彼こそが現世における自身の主にふさわしいと認めて。

(ケイネス殿に……いや、わが主に勝利をツ!!)

そう決断すれば迷いはなかった。

「おおおおお!!」

雄たけび声をあげて気合を入れる。

そしてデイルムツド・オデイナはグレイプニルに繋がれた自身の左足を手元に残った破魔の紅薔薇で切断した。

デイルムツドは、痛みを闘志と誇りで塗りつぶし、残された右足だけで地面を蹴り、空中へと跳躍した。

喰らえ！喰らえ喰らえ喰らえ喰らえ喰らえ

己の槍にただ命じる。

この空気中に存在する全ての魔素を喰らい尽せと

あの英雄王を打破するに足る力を己に寄越せと

——だが、所詮は破魔の紅薔薇。対軍宝具ではなく、ただの対人宝具でしかない。

（ダメだー！これでは足りない！あの英雄王を倒すには到底たりないッ！！）

悔しさに奥歯をかみしめる。英霊としての己の貧弱さに嫌気がさす。

『令呪を持って命ずる——』

声が聞こえた。仕えると決めた今生の主の声が。

これまでの不義を晴らしてみせると誓った相手が。

『——わが騎士よ、その忠誠を示せ。』

瞬間、槍を握る右腕の筋肉が膨張した。

——血管が何本か千切れたが気にしなかった。

槍がさらに魔力を喰らい始めた。

——槍の表面にひびが入った気がしたがどうでもよかった。

彼の頭の中で一つの単語がぐるぐるとりフレインしていた。

“わが騎士”

その一言が欲しかったのだ。

自身の主に、騎士として認められたのだ！

しかもそれだけではない！騎士として最初の命が下されたのだ！

「忠誠を示せ」

ハハハハハ！主殿はまだ満足してないらしい。このデイルムツドはかつてないほど満身創痍だというのに！

だが、命である以上は仕方あるまい

主の期待に応えずして、どうして騎士を名乗れようか!!

「破魔の――」

紅蓮に輝く槍を構える彼の姿は、

「――紅薔薇ウウウツ!!」

奇しくも彼の憧れるアイルランドの光の御子に酷似していた。

デイルムツドの誇りとケイネスの令呪。

正しく主従一体となった一撃を前にして流石のギルガメツシュ王にも余裕などなかった。

「熾天覆う七つの円環!!」

相性が悪いことは百も承知だ。しかし、投擲という攻撃に対し、絶対の防御力を誇る宝具もまたこれ以外考えられなかったのだ。

「グッ……」

もはや最初の奇襲時の威力など比較にならない。

圧倒的魔力と破魔の紅薔薇が持つ魔力殺しの特性によって瞬く間に花卉が散らされていく。

（次の盾をツ……!!）

もはやアイアスで耐えられるレベルの宝具ではない。

ギルガメツシュは己の判断ミスを悔やみながらAランクの宝具を自身の前に重ねて展開した。

これで流石に持ちこたえるだろうと思いかけたその時、目の前で展開されていた盾が全て砕けた。

（な、ん……!?）

眼前に迫る紅蓮の槍を回避することなど、できようはずもなかった

た。

「ハア、ハア、ハア……」

渾身の破魔の紅薔薇を放ち終えたデイルムツドは、空中浮遊後、受け身をとることもできずに無様に地面に衝突した。

正しく己のすべてをかけた一撃だ。

——だが、

「…見事だ。正しく英雄の一撃であった。」

英雄王は倒れない。

「馬、鹿な……!?!」

驚愕に目を見開くデイルムツド。

そんな彼を見やる無傷の英雄王は、デイルムツドの状態を見て思わず眉をしかめた。

ひどい有様であった。

右腕は血管がいくつも破れ、殆ど千切れかけの様な形で辛うじて右肩に繋がっている。

左足は無く、身体中血まみれであった。

それでもなお戦う意思を感じさせる眼は素直に賞賛に値する。

「俺にこの鎧の真名を解放させたのはいつぞやの神との戦以来だ。一先ず賞賛を受け取るがいいデイルムツド・オディナ。貴様は誠の騎士である。」

伝説の英雄王からの掛け値なしの賛辞に対し、デイルムツドはあくまで儀式的に礼を返すだけであった。

「…惜しいな。貴様ほどの勇士であれば或いは…いや、言うまい。」

何か大事なことを告げようとした英雄王はしかし、己の私情を抑えた。

そして、心底残念そうな顔をしながらも淡々と必滅の黄薔薇をへし折って、自身の右腕にかかった呪いを解除した。そして未だにギルガメッシュを睨み付けるデイルムツドへとボロボロの状態となった破魔の紅薔薇を無造作に投擲した。

「ッ!？」

驚きながらも残った左腕で難なく受け止めたデイルムツドは困惑しながらギルガメッシュへと問うた。『何故か?』と。

「…応えねばなるまい。忠義の士に——」

己が主の命を果たさんとするその矜持に!!」

英雄王が讃える。

忠誠の大義を、その気高き魂を

「故にこそ、貴様には俺の全力を見せてやるッ!!」

英雄王の宣言とともに、彼の上半身を覆う黄金の甲冑がそれぞれのパーツに分かれて弾け飛んだ。英雄王から離れたパーツは、何時の間にか四方八方に展開された王の財宝の門に収納されていく。

鎧を外した彼の肢体は、神秘的な紅い稲妻のような刺青が施されていた。

これこそ神々から与えられた神の加護の証。神との誓約である。

「来い、ゲイ・ボルク」

英雄王は王の財宝から禍々しい呪いを発する魔槍を取り出し、自身の魔力を注ぎ込んだ。

その槍は古代ケルトにおける大英雄クーフリーンが師のスカサハより授かったという伝説の魔槍の原典。

神殺しの際にも使用され、実際に神の心臓を喰らった魔槍を手に、ギルガメッシュはランサーへと背を向けた。

「最後に問おう。

これから俺は、冥界で習得した奥義をお前に放つ。これは避けようのない死の運命だ。

それでもなお、主の命に従って俺に挑むか?」

返答は、槍を手に無理やり立ち上がったデイルムツドの眼が語っていた。

「フィオナ騎士団が一番槍、デイルムツド・オディナ。いざ、推して参る!!」

「…いいだろう。忠道大儀である!!この一撃、手向けとして受け取るがいい!!」

ギルガメツシユの背中に刻まれた紋章が輝きを放つ。

冥界の女主人にしてクタの都市神である女神エレシユキガルの加護である。

運命を、死に至る因果を操るべく、ギルガメツシユの紋章が輝きを増す。

そして禍々しい魔力によって膨張していく呪いの朱槍。

命あるものならば恐怖せずにはいられない恐ろしい負の気配を前にしてもしかし、デイルムツドの歩みは止まらない。

手に残った最後の槍を杖のようにして己の体を支えながら、一歩一歩前へと進んで行く。

その姿は騎士というよりもどこか、尊い巡礼者を思わせた。

彼を動かす原動力はただ一つ。主の命を果たすこと。ただ、それだけである。その愚直なまでの思いは、彼に最後の一撃を放たせた。

『冥府へ誘う——因果の槍』

左腕による破魔の紅薔薇の投擲は、結局英雄王には届かなかつた。

しかし、デイルムツドの顔に悔いはない。

『確かに見届けたぞ。わが騎士の忠誠を。』

最後の主の言葉に満足げな笑みを浮かべながら、忠義の騎士は心臓を抉られ、現世を去った。

真・英雄無双《後編》

「ギルガメツシュの恋文」という有名な逸話がある。

これは破天荒な話の多いギルガメツシュ叙事詩の中でも極めつけに可笑しな話だが、余談として紹介しようと思う。

ギルガメツシュは、神殺しの旅の最中で、本来ならば敵対関係にある女神と恋に落ちてしまう。所持持ちでありながら、禁断の関係にのめり込んでいく若きギルガメツシュ王。

しかしこの不祥事は噂となり、ウルクにいた彼の妻である女神イシュタルの耳に入ることとなる。当然、イシュタルは怒り狂い、彼女の怒りによって大地は震え、天は裂けた。ウルクの民たちは怯え、精霊たちも騒ぎ立てる。悪霊でさえも逃げ出すであろう女神の恐ろしさ。

7日間も続いたその怒りを鎮めたのは、異国の地にて精霊に事態を知らされたギルガメツシュだった。彼は大慌てで身の潔白を証明する手紙と、自身の思いを綴った恋文を括り付けた矢をウルクに向かって放ったのだ。

その後の数か月間、ギルガメツシュは女神の気が済むまで異国の地から恋文を矢に括り付けて放ち続けたのだ。

この話は、異国の地から海を越えて矢を届けるという神話特有の信憑性に欠けた逸話と、妻以外の女に懸想し、拳句のあてにはそれがばれて大慌てするギルガメツシュの愚かさとその人間味が表されている。

この話に影響を受けたのかはわからないが、かつてメソポタミアの都市クタが存在した地域では、年に一度男性が矢に恋文を括り付け、意中の相手に送るという風習があるらしい。

「ギルガメツシュと神々の戦い」より抜粋



英雄王が騎士と死闘を繰り広げていたその時、少し離れた場所では獣と人が覇を競い合っていた。

「陣形を整えなおせ！一人でも欠ければ一瞬で隙を突かれるぞお!!」

「奴に武器は効かない！フアランクスは無意味だ!」

「盾だけでも構え続けろ!さもなければ喰われるだけだぞ!!」

矢継ぎ早に指示が飛び交い、嵐の如く暴れ回る獅子を包囲するように新たな陣形が構築されていく。流石は歴史に名高い王の軍勢といったところか。軍の統率力、意思伝達、兵士達の練度は非常に高いレベルのものだ。

しかし、空駆ける戦車に搭乗して状況を見る征服王イスカンダルの顔は険しい。

「:まずいな、このままではわが軍の敗北は必須。流石は神代の獣と言ったところか。」

大王の慧眼は既に暴れ回る獅子の正体を見抜いていた。

古代ギリシアの大英雄ヘラクレスが退治したという「ネメアの谷の獅子」——そのモデルとされている怪物だろう。

伝説通りであればその攻略方法は一つしかない。

即ち、ヘラクレスのように一切の武具を捨てて素手で首をへし折ることである。

無論イスカンダルもそんなことができるとは欠片も思っていない。いくら自身がヘラクレスの血を引いているとはいえ、あの神獣相手に素手で挑むなどまさに蛮勇でしかないからだ。

内心先祖への畏怖を改めるイスカンダルだった。

「にしても奴め、あのような宝具まで持つておるとはなあ。——実に羨ましい!」

「そんな呑気に感想を述べている場合ですか!早く何とかしなければ味方の被害は増え、この固有結界が解除されてしまいますよ!」

「わかっておるわい!...まあ、そうさせんためにお主の剣を借りようって話なんだがな。」

伝説の神獣を前にしてもいつもと変わらず豪胆に笑って見せる征

服王。

そんな彼を諫めたのは、彼と同じ戦車に無理やり同乗させられていた騎士王アーサーだった。

「…本当に私の剣ならばあの獅子を倒せると?」

「恐らくあの獣には人間の武器なぞ効かんのだろう。あちらこちらに転がった槍やら剣が証明しとるわい。であれば、武器持たぬわれらには奴は倒せん。」

しかし、その剣は星々が鍛えた聖剣であろう?——もし奴を倒せる武器があるとすれば、余はお主の光の剣以外にはないと思つとる。「なるほど。確かに貴公の言う通りなのかもしれない。しかし、問題はどうかやって我が聖剣の一撃を浴びせるか、ですね。」

今なお暴れ回っている神獣のもうひとつの脅威はその敏捷性の高さや機動範囲にあつた。凄まじい速さで大地を、空を駆け回り、ヒットアンドウェイを繰り返す。まさか空中戦も可能だと思わなかつた兵士たちは空からの奇襲に対応しきれず英霊の座へと返還された。

これほどの機動力を持つとなれば、開放に溜めの間を必要とされる聖剣など軽く躲してしまふだろう。

「ふむ、それはこちらで何とかしよう。とにかくお前さんはタイミングに合わせて聖剣をぶつ放してくれたらそれでいい。」

「分かりました。…にしても先程から思っていたのですが、妙に嬉しそうですねライダー?」

普段からニヤニヤ顔をさらしている征服王ではあつたが、あの神獣の力を見てからというものさらにニヤニヤに拍車がかかったように思える。まるで憧れの有名人に出会つた子供のように逸る心を頑張つて抑えているように見える。——抑えきれないが。

「フハハハハハ!そりゃあ嬉しくもなるだろうさ!これから我らはあの“ヘラクレスの栄光”第一の試練に挑めるのだぞ!オリュンポスの神々でさえ手を焼いた怪物にな!これほどの名誉がどこにある?!」

「…なるほど、あなたらしいですね。」

心底嬉しそうに伝説との邂逅を語るイスカandalに対し、セイバーは呆れながらも納得していた。

ちなみに「いや、ご本人ではなくあくまでも原典なのですが」などという空気の読めない突っ込みは入れなかった。
騎士王は人の心が分かる王様なのだ。

英雄王の宝具である神の獣は、本能にて敵の動きが変わったことを感じ取った。

先程までも人間の集まりにしては俊敏に動いていたように見えるが、今回ののは違う。

まるで軍が一つの生き物であるかのように動き、集い、盾を構える。呼吸、足運び、士気、そのどれもが別もののように充実している。

——獣は、王が指揮をとっているのだと確信した。

「フアランクス第一形態!!守りを固めろ!!」

「!!!ハッ!!!」

正面、左右の3面に盾を持った兵士たちが周りを取り囲むように配置され、

一層気合の入った掛け声とともに防御を固める。

「騎馬隊突撃イイイイ!!」

「!!!オウッ!!!」

続いて立派な馬に跨った兵士たちが周囲を旋回し始めた。

大地を震わす蹄の足音、均整の取れた盾の配置、神代の獣を前に恐怖ではなく歓喜を押しえつけ、この世界の太陽が如き灼熱の覇気をまき散らす益荒男たち。

見事な軍だった。

獣は生前、主の息子に仕え世界中を軍と共に見て回ったが、当時の大帝王の軍に勝るとも劣らない精鍛さと豪傑ぶりであった。

だが、それだけであった。

彼らは何も仕掛けてはこない。盾を構えた連中はその場から動かず、騎馬隊は周りをぐるぐると周回するのみ。

これでは折角の軍もただの見世物である。

もはや時間の無駄だと判断した獣は、主の命を遂行すべく、四肢に

力を込めた。

そしてその身体が兵たちへと爆発的な筋力を解き放つその寸前で、獣は異変に気が付いた。

煙幕である。

筒から飛び出る目くらましではない。騎馬兵たちが大地を削り取ったことで発生した砂漠の世界の煙幕である。

砂埃が視界を覆い、獣の視界を曇らせる。

それだけではない。四方八方から兵士たちの大音声と、盾や武器を打ち合わせる音が聴こえる。

音は、ある時は左からまたある時は右から、そして遠方からも聴こえる。

敢えてタイミングをずらすことで、砂埃煙幕と同時にこちらの感覚を麻痺させるつもりなのだろう。また、一定のリズムで繰り返されるそれは、どこか精神を不安定にさせる雰囲気を持っていた。

地形を生かして心理を揺さぶる姑息ながらも上手い作戦だった。恐らく獣に理性があることを逆に利用した策なのだろう。

だが、残念なことにこれは人間相手の場合にのみ有効な策だ。

獣であれば、一回目の咆哮で煙を晴らし、二回目で音を止める。そして訪れた静寂の間に一足で征服王の首を取れる。

それは獣の傲りであった。

真なる主と別れ、脆弱な人と戦い、飼いなされた家畜のような余生を過ごしたが故の本能欠如。

獣は、己の主が最も嫌う慢心に身を浸していた。

故にこそその報いか

——光が見えた。暗雲を晴らす太陽のごとく、穢れを祓う浄化のごとく、清廉で高潔で純粹無垢な光。

何者も侵すことのできない聖なる輝き。

「ッ!？」

衰えた感覚が獣に回避を訴えかける。

だが、この危機感知もまた彼の全盛期とは程遠い鈍さであった。
だから簡単に付け入られるのだ。人間に。

『ヴァイア・エクス・ブグナティオ遙かなる蹂躪制覇オオオオオ!!』

上空から滑るように獣に迫っていた征服王の戦車は、いとも簡単に獣の肢体を吹き飛ばした。

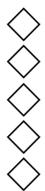
そして、吹き飛ばされる方向は当然、光の方向だ。

獣が無様に地面に叩きつけられるのと、征服王が勢いもそのままに上空に離脱したのは同時だった。

『エクス・ス・カバリ約束された勝利の剣!!』

放たれる光の斬撃。それは星の息吹。輝ける命の奔流

眩い輝きを前にして獣が思うのは、ただ主に対しての謝罪だけであつた。



「戯け。」

気が付くと、目の前には敬愛する主が腕を組んで立っていた。

真紅の瞳は爛々と輝きを放ちながらも絶対零度が如き冷たさに満ちており、一言口にした侮蔑の言葉には怒気が込められていた。

「貴様、遊んでいたな？」

こちらへ問う声は低く、無機質だった。

質問に返すための言葉を持たぬ獣は視線だけで「是」と答えた。

間違いなく獣は遊興に耽っていたのだ。効かぬ武器を振り回す無力な人間をあざ笑い、本気も出さずに玩具のように弄んでいたのだ。

「…俺は確かに遊び心を解するが、それとこれとは話が別だ。」

主は意味のない怒りは抑えるが、逆に抑える必要のない怒りに対してはどこまでも冷酷になれる王だった。

こうなった時の主は正直、天空の神々よりも恐ろしい。

「貴様は俺の牙であろうが。それが人間相手に慢心とは…笑わせてく

れる。——よいか、これは王の戦であるぞ。王自身は兎も角、家臣である貴様には遊びも慢心も許されぬ。」

そう、遊びなど許されない。獣のやった行為は、主の顔に泥を塗ることと同義だったのだ。

英雄たちの頂点であることへの拘りか、自分自身への戒めか、主は「英雄王」という名が穢されることを殊更に嫌っていた。

「俺は寛大な王だ。一度目の失態はこの眼をつぶろう。だが…二度目はないぞ?」

剣のように鋭利で冷たい眼差し。

次にしくじれば、王はもう獣を戦いに呼ぶことはなくなるだろう。それは嫌だ。

あの頃のように、もう一度主を背中に乗せて戦いたいのだ。

あの高揚感を、冒険心を、そして主が紡ぐ伝説を、この心に焼き付けたいのだ。

今でも思い出す。

——たった一人で神と戦うと宣言し、ウルクの守護を己に命じて戦いに赴いた主の背中。

——王座にて眠る冷たくなった主の肉体。静かに啜り泣くその妻。いつだって獣は、大事な時に主のそばにいられなかった。

だからこそ気を引き締める、もはや失態は見せられぬと丸くなった心の牙を研ぐ。

——だってもう、置いて行かれたくないから。

「…少しはマシな目つきになったな。」

ふと、獣は自身の身体が無傷なことに気が付いた。

今更ながら、主が王の財宝經由ゲイト・オヴ・パヒロンで救ってくれたことに気がついたのだ。

「獲物は征服王だが、最悪この結界さえ解除できればそれでよい。あの女は俺が抑えておく。今度はしくじるなよ。」

簡潔に命を下す主。

昔から変わらないその姿を見て変わってしまったのは自分のほうだったのだと獣は改めて実感した。

ではそうはいかなかったようで千里眼で見たところ、中に宿っていたのは晩年の獅子の魂であった。

ゲイト・オウ・バレロン
王の財宝とて完璧な宝具ではない。特に元はイシュタルの随獣であったものを伝承補正によって無理やりつなぎ合わせたのでこう言った不都合が起ることも致し方無いことではあった。

しかし、それとこれとは話が別だ。

いくら不都合があったとしてもそれがこの英雄王ギルガメツシユの武器である以上は怠慢も誤作動も許されない。それは当然のことであるとギルガメツシユは考えているし、そう弁えている者以外を傍に置く気はない。

だが、ここでギルガメツシユを悩ませたのは、獣自身には衰えたという自覚がないことだった。

これもまた宝具となった影響か、征服王の軍に嬉々として突っ込んでいく鈍い動きの獣を見たギルガメツシユの内心は複雑であった。そして確実に征服王たちに足元をすくわれるであろうことも見え透いていた。

故にこそ、ギルガメツシユは敢えて放置したのだ。ようは一回痛い目を見る、ということである。結果的に獣は昔の勘を取り戻しつつあるので良しとしよう。弱いままでは困るのだ。

王として、何より戦士としてのギルガメツシユの直感が告げている。

何か良くないことが起るのだと。それはこの英雄同盟の比ではない。いや、これも結構響いたが…主にメンタルに。

兎も角それが眼前に迫った時、ギルガメツシユが信頼を寄せる兵器が使えないなどという状況だけは避けたい。

そう考えると、今回の襲撃は悪いものではなかった。

獣に覚醒を施し、誇り高い忠義の騎士と出会った。

「ふむ、中々に実り多き夜であった。——今宵はこの一戦で幕引きとしよう。」

これ以上の激戦、対話はもはや蛇足ですらある。いらぬ情緒で不要な戦だ。

端的に言う、英雄王は興が覚めたのだった。

それに、時臣たちからの魔力供給が滞ってきている。時臣一人では荷が重かろうと桜と凜も合わせて魔力を貢がせていたのだが、流石に真名解放をしすぎたようだ。王の財宝から与えた宝石や魔具も残量が少ないらしい。

いざとなればギルガメッシュは海神の加護で魔力を自力で生み出せるが、先ほども言ったように今宵はもう興が覚めてしまった。

故に、これから彼が行うのは獣が固有結界を解除するまでの時間稼ぎと、軽い事実確認である。

「来い、『レバノン・メラム 輪廻の弓』」

再び上半身に黄金の鎧を纏ったギルガメッシュが宝物庫から取り出したのは、一目で古いことが見て取れる木製の大弓だった。

豪華絢爛な装備が多く、実際に今も黄金の鎧を纏っているギルガメッシュの姿にこの弓はどこかアンバランスに見えた。

しかし、その弓から溢れる匂い立つような濃い神気と、静かな森を思わせる神秘さが、ただの古びた弓ではなく、超一級品の宝具であることを確信させる。

それもそのはず、この弓こそはギルガメッシュが持つ宝具の中でも指折りの宝具。

その正体は、彼が嘗て対峙した森の神フンババが守護していた太古の杉の木より制作された神秘の塊である。

何千年と在り続けた杉の木に、森の神の神気が流入し、それを自ら王の斧で切り取ったギルガメッシュが職人に命じて弓へと加工されたのだ。

そんな弓を構え、英雄王が見据えるはセイバー。

黄金と古木、甲冑と木弓、絢爛と静謐。まさに矛盾するような武器とその主だが、不思議なほどその組み合わせは上手く成り立っていた。

「さて、まずは確認から行くとするか。これにくたばってくれるなよセイバー？」

だが、英雄王は手元に弓を呼び出したにも関わらず、矢を番える気

配はない。そして手元の武器はそのまま背後に王の財宝を展開した。

黄金の砲門から顔を覗かせるのは、アスカロン、グラム、赤原猟犬フルンディングを始めとした竜殺しの武器が二十挺以上。竜の因子を持つセイバーにとつてはまさに天敵というべき武器たちだ。

それらが王の指示で一斉に掃射された。

宝具を解放した直後で疲労を隠せないセイバーはしかし、懸命にそれらの宝具を聖剣で迎撃していく。

一閃、アスカロンを打ち落とす

二閃、グラムを迎え撃つ——が、押し負けて吹き飛ばされる

三閃、赤原猟犬フルンディングを崩れた体勢から弾き飛ばすが、しつこく追ってくる。面倒なので柄を掴んで聖剣を叩き付ける。

四閃、——剣を振るうこと叶わず魔剣が数本、体に刺さる。

五、十、二十、と全ての剣を捌き終えた時、既にセイバーは満身創痍だった。

だが、彼女の心が折れることはない。

例え何千という宝槍、宝剣が空から降り注ごうとも、彼女を止めることは叶わないだろうと思わせるほどの意思を彼女は目に宿していた。——そしてその意思を支える宝具が彼女の手の中にはあった。

「そら次だ、貴様の鞘を見せてもらうぞ。」

だが、英雄王は既に彼女の奥の手を見抜いていた。

斬り決る戦神の剣で破壊されたにもかかわらず、即座に回復した心臓。

乖離剣を見せたにもかかわらず、それを防げると思っている自信。

これらを見て気がつかないほど英雄王は鈍くない。

王の財宝から無造作に一本の大剣が放たれた。これもまた竜殺しの剣。その中でも最高位に位置する一本を、英雄王は何のためらいもなく使い捨てる。

「爆ぜろ、『幻想大剣・天魔失墜』」

それは真名解放ではない。

ただ剣の柄に嵌められていた宝石の魔力を無理やり暴発させただ

けだ。

だが、それは指向性がないがうえに、脅威となりうる。

『——ツ^ア全^{サア}て遠^ロき理^ン想郷!!』

眼前で暴発した竜殺しの魔力を防ぐべく、セイバーはほぼ無意識に奥の手である聖剣の鞘を解放した。

それは防御というより遮断であった。鞘が数百のパーツに分解してセイバーを取り囲み、その身を守護する。

眩い光を放つこの宝具こそ、ギルガメツシュの宝物庫にも存在しない究極の防御宝具。

伝承に曰はく、

——持ち主に不老不死を与え、老化を抑え、呪いを跳ね除け、傷を癒す。

——五つの魔法さえ寄せ付けず、多次元からの交信は六次元まで遮断する

恐らくエアでさえ傷一つ付けられないであろう宝具を前にして、英雄王もまた己の宝具を発動させる。

“全^{シヤ}知^{ナク}なるや全^パ能^{イルム}の星”

神々から与えられた千里眼と、4000年にも渡り人類史を見守り続けた英雄王の精神性が昇華されたこの宝具は、星の輝きの如く地上の隅々へと行き渡り、万象を見通すことが可能となる。ともすれば、星の内海さえも：

——座標特定開始、並行演算開始、

英雄王は静かに弓を構え、矢を番えた。

——座標特定、演算終了

王の^{ゲイト・オプ・パレロン}財宝の演算機構も使用して割り出した座標に笑みを浮かべ、ギルガメツシュは展開されている奇跡の鞘に向かって矢を放った。

「

怪訝な表情を浮かべるセイバー。それもそうだろう。

この鞘の守りを前にしては如何なる宝具も無力と化す。恐らく英雄同盟を組むに至った要因の一つである乖離剣さえ防ぐであろうこの鞘に向かって矢を放つとは…

セイバーへと直進していた矢は、全て遠き理想郷にぶつかる寸前で掻き消えた。

結界に衝突して消えたのかと思案したその時、右肩に激痛が走った。

「ツグ!?」

驚愕、騎士王アーサーは己の右肩に刺さった槍を見て、ただただ驚くことしかできずにいた。

（馬鹿な?!今の私に攻撃は届かない!もし攻撃を受けるとすればそれは全て遠き理想郷にいる私ということになる。だが:そんなことできるはずがないツ!）

困惑し、矢を抜くことも出来ずにいるセイバー。

だが英雄王に慈悲はない。次射が放たれ、右頬にかすり傷をつけて矢は後方に去っていった。

「そ…ん、な……」

己の最も信頼する宝具を突破され、声を震わせるセイバー。

だが、英雄王に言わせれば別段驚くようなことではない。

五つの魔法さえ寄せ付けぬ?外界に身を置いている?究極の守り? ?

——それがどうした?

そんな肩書はこの男にとって何の意味も持たない。

魔法が通じぬなど知らぬ。外界にいるのなら外界に矢を放つ。究極の守り?そんなものは存在しない。多次元からの交信は六次元まで遮断する?ならばさらに上の次元を通すまでのこと。

「さて、今宵はこれで仕舞にするか。」

立て続けに矢を放つ英雄王。

ここでようやくセイバーは悟った。究極の守りは、目の前の男には無意味なのだ。

ならばッ!

「ハアアアッ!!」

セイバーは全て遠き理想郷による守りを解いた。

全て遠き理想郷ア ヴァを回復のためだけに使用すると決め、魔力放出を利用してギルガメツシユへ突貫を仕掛ける。

「ほう？通じぬと分かった防御は捨てるか…思い切りのいい判断だが、それは悪手だぞ？」

王ゲート・オブ・パレロンの財宝がセイバーを取り囲むように展開され、新たな竜殺しの武器が露出する。

その数軽く八十挺以上。

顔を引きつらせる騎士の王に英雄王は厳かに告げる。数は力なり、と。

そして容赦なく放たれる宝具の嵐。

どれほど強固な龍个体であったとしても、この巖を削るマシンガンが如き砲弾の数々には耐えられぬだろう。

ましてやセイバーの肉体は少女のものでしかない。これに耐えられる素の耐久性を彼女は持ち合わせていなかった。

故に、これは苦渋の決断。

「全て遠き理想郷！」

展開せざるを得なかった。否、展開させられた奇跡の鞘が迫りくる竜殺しの宝具を防いでくれる。

しかし、この状況が英雄王の望んだ状況であることは明白だった。そして次に彼がとる行動も。

「

放たれる矢。如何なる手段を用いているのかはわからないが、セイバーは眼前に迫っているこの矢が、外界にいるはずの己の肉体に向かって放たれていることを、その身をもって理解している。

だが、避けようがない。全て遠き理想郷ア ヴァを解けば竜殺しの宝具に貫かれ、このままでは矢に射抜かれる。

まさしく詰みだった。

「……えッ？」

だが、訪れるであろう痛みを想像して歯を食いしばっていたセイバーは間抜け顔をさらすことになる。

英雄王の矢が外れたのだ。

外したのではなく外れた。それは矢を放った本人が眉をしかめていることから明らかだった。

しかし、弓兵にあるまじき打ち損じをした彼の顔にはこれといって悔しいといった感情は浮かんではいなかった。ただ眉をしかめるのみで寧ろ想定通りとでもいうような淡々とした無表情だった。

「…ふん、やはりずらされたか。流星は究極の守りなどとはざくだけのことはある。」

称賛しているのかよく分からない態度で意味深なことを呟いた英雄王はふと上空を見上げ、笑みを浮かべた。

釣られて上空を見上げたセイバーは、今宵の宴が終わったことを悟った。

「固有結界が…?!」

砂漠の世界から現代への帰還を果たす風景たち。

その光景を唾然と眺めていたセイバーは、視界の端で征服王が戦車に乗って撤退していく所を捉えた。

「今宵はここまでだな。」

前を見れば、既に黄金の甲冑を解除した現代衣装の英雄王がこちらを見据えていた。いつのまにやら王の^{ゲイト・オブ・パレロン}財宝も消えている。

「…どうやらそのようですね。」

ここに至って戦闘を続行するほどセイバーも無粋ではない。

だが、その美しい翡翠の瞳には相も変わらず強い意思が浮かんでいた。

「だが、次に見えた時こそ…私は…」

にもかかわらず中途半端に言葉を区切るセイバー。

己の道に対する迷いは断ち切ったと思っていたが、どうやら少々やけになっていただけらしい。

今でも迷い続け、己の言葉を探すセイバーに、少しだけ昔の自分を重ね、微笑ましいものを覚えるギルガメッシュ。

「ああ、次に会ったその時こそ、騎士王としてのお前の答え、見つけれぬといいな。」

だからかもしれない。いつもよりちよつと優しい顔で優しい言葉

をかけてしまったのは。

「へッ?!あ…は、はい…」

何故か少し顔を赤くしたセイバーは小さな声で「お邪魔しました」と挨拶し、風のように去っていった。

思わずその可愛らしさに頬を緩ませるギルガメッシュだったが、ふと昔の「恋文」のことを思い出し、青白い顔で身震いをした。

そんな情けない英雄王の手を、一仕事終えた獣がぺろりと舐めた。

影の刺客

英雄王との激戦を終え、セイバーは妙に火照った頬を冷やすように夜風を切つて疾走していた。

新たな拠点となった古びた日本屋敷へ足を向ける彼女の頭の中は、考え事で埋め尽くされていた。

自身の願いについて。王としての自分について。

そして

——それが、王の責務だからだ。

——王がいつまでも滅びを認めず民たちの身命を手放さないなど…それこそ暴君に他ならない。

——それに、後に続く者たちもいる。

英雄王が放った言葉について。

(分かっているのです。それが正しい道であることは。しかし…)

思えば、セイバーは港の倉庫で英雄王と出会って以来、彼に振り回されてばかりだった。

その戦闘能力に圧倒され、王としての器の大きさに羨望を抱き、一瞬だけ覗かせた人としての顔を見て呆気にとられた。

(今考えると本当に不思議な王だ。)

賢者のように思慮深く、聖人のように寛大で、暴君の如く獰猛な覇者。でありながらふとした瞬間に見せる人間性。

流石は英雄の祖と言うべきなのか。彼は、英雄が持ちうるだろう要素をほぼ全て持ち合わせていた。

もはや嫉妬の念も消え失せた。あるのは畏怖と尊敬のみだ。

「正しく完璧な王、か…」

ポツリと呟き、セイバーは自虐的な笑みを浮かべた。

それに比べて何と余裕のない我が身か。頑固で、愚かで、滅びを認められない幼稚さ。

これでは国を救うことなどできようはずもない。

そしてマスターに信用されることも

「アイリスフィール…」

セイバーは己の胸に手を当て、中にある鞘の存在を改めて確認する。

アイリスフィールの命を少しでも長引かせるために必要な鞘を。

彼女の事情は全て、真のマスターである切嗣から聞いていた。

その悲惨な生い立ちと、いずれ訪れるであろう悲しき別れ。それらを淡々と語る切嗣の眼には確固たる信念の炎が渦巻いていた。

もはやなりふり構ってはいられないのだろう。言葉少なにだが、必要がないからと避けていたセイバーとの会話をした彼の顔には憔悴が浮かんでいた。

ただでさえ聖杯問答で揺らいでいた彼女の精神は、切嗣から知らされた真実によってさらに狼狽し、疲弊することになる。

——守ると誓いを立てた女性を犠牲にすること前提で進んでいた聖杯戦争。

——英雄の祖が語った王としての責務。

セイバーは自身の中でひたすらに問答を繰り返したが一向に答えは出ず、不安定な精神のまま、鞘を託されて戦いに挑んだ。

結果はただただ英雄王に圧倒されただけであったが。

ふと、鞘を突破してこちらを射貫いた時の力強い彼の視線を思い出した。

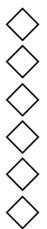
何故かまた赤くなつて来た顔を覚ますために先程よりも増速する。

(ええいッ！とにかく今は早く帰らなければ…)

セイバーの最優先事項は一刻も早くアイリスフィールの元に戻り、鞘を返却することだ。

そうと分かれば実行あるのみ。セイバーは努めて無心を心掛け、帰路を急いだ。

——そして帰還したセイバーが見たのは、もぬけの殻となった屋敷だった。



——危険だ。

衛宮切嗣は初見で英雄王の危険性を見抜いていた。その戦闘能力、その頭脳、その精神性。全てが彼にとって脅威だった。

これでまだ強者特有の慢心など見せていれば付け入る隙もあっただろう。

しかし、彼の王はどこか異様なほどに隙が無かった。

パターンを理解しようと心理分析も試みたが、どこか捉えどころのないその性格は次の行動を読み取ることが出来ず、切嗣は頭を抱えることとなった。

だからこそ、ケイネスの提案した英雄王打倒のための共同戦線は非常に都合の良い話だった。

たとえ英雄王を打倒出来なくとも、その戦力がどれほどのものかは図れるはず。それに、他陣営を排除できるいい機会だ。

狙うはランサーのマスターケイネス・エルメロイ・アーチボルト。切嗣が仕留めそこなった魔術師である。既にランサーに付けられたセイバーの左手の呪いはアヴァロンで治癒してあるものの、潰しておくに越したことはないだろう。

決断してからは早かった。ケイネスの工房を狙撃できる絶好のポイントを見つけて潜り込み、機会をうかがった。機会は彼らが英雄王に掛かりきりになっていている時。その瞬間を狙い、ケイネスを撃つ。もし仮に外してもその時は婚約者のソラウを殺せばいい。切嗣の分析では、ケイネスはかなりソラウに入れ込んでいる。目の前で射殺されれば動揺し、激昂するだろう。冷静さを失った魔術師など切嗣にとつてはただの獲物だ。敢えて姿を見せ、サブマシンガンで牽制しつつ起源弾を撃ち込んでやればお仕舞いだ。

——だが、切嗣は目論見に反して一発も弾丸を放つことはできなかった。

(アサシンだとッ?!)

苦勞して発見した狙撃ポイントから暗視ゴーグル越しにケイネスを監視していた切嗣は、黒衣を纏ったサーヴァントを発見してしまった。

骸骨の仮面を身に着けたその姿に既視感を覚える。

(港の倉庫の時と同じ状況か…)

思えばあの時も切嗣はケイネスを狙撃しようとし、結果としてアサシンに邪魔される形で撤退を強いられた。

あの時の撤退判断は間違っていたとは思わないが、こうも邪魔をされると、引き金を引いておけば良かったという気持ちにもなる。

だが、暗殺者である切嗣にとって焦りや苛立ちは禁物だ。深く深呼吸をし、己の気持ちを水に流した。

感情は不要。必要なのは理性と確実性。

そして冷静に計算した切嗣が選んだ選択は、再びの撤退であった。

彼は征服王と同じくアサシンとギルガメッシュが組んでいると想像している。

つまり、今切嗣が視界に捉えているあのサーヴァントは英雄王の指金である可能性があるということだ。

あの英雄王であれば既にアイリスフィールが偽のマスターであることも見抜いているだろう。下手をすると切嗣が本当のマスターということにも気が付いているかもしれない。

だからこそ、切嗣はあのアサシンに補足されるわけにはいかなかった。

決断し、すぐさま撤退の準備を始める切嗣。

『おや、どこに行かれるのですかな?』

「ッ!?!」

切嗣の行動は早かった。流れるようにコートからキャリコム950を取り出し、剣でも振るうかの如く、振り向きながら銃弾を背後にばら撒く。無論、効かぬと分かってはいる。飽くまでも目くらましだ。

「Time alter ——— double accelerate!!」

サーヴァントから逃走するべく、二節の呪文を唱えた切嗣の体が加速の世界へと踏み込む。通常の二倍の挙動で動きながら後ろへ手榴弾を放り、目隠しになってくれることを祈ってただひたすらに走る。

『中々に素早いすな。人間にしては。』

「グッ!？」

だがこれで逃がしてくれるほどサーヴァントは甘くない。押し倒され、羽交い絞めにされる。先程の「揺り戻し」も相まって身体が悲鳴を上げている。

こうなってしまうっては切嗣に出来る足掻きはただ一つ。手元の令呪に視線をやり、魔力を流す切嗣。

しかし、彼の令呪が一角消費されることもなかった。

『やめたほうがいい。妻の：いや、聖杯のことを考えるのであればな。』

「なにッ?!」

その言葉に思わず動揺する切嗣。

それもそうだろう。アイリスファイルが聖杯の器であることを知っているかのような口調。

そして、彼女を人質に取っているかのような態度。

感情を捨て、機械となったはずの切嗣の心が不安と焦りで軋み、背筋を嫌な汗が流れる。

『察しの通り、君の姫は我々が預かっている。返してほしければここへ来い。一人でな。』

言外にセイバーを呼べば妻を殺すと宣言されたようなものだ。切嗣は思わず奥歯をかみしめた。

顔を歪ませる切嗣はよそに暗殺者のサーヴァントは住所の書かれた紙を一方的に押し付け、あっさりと夜の闇に消えた。

◇◇◇◇◇

「…眼が覚めたか、女?」

低音で響く滑らかなバリトンによって眠っていたアイリスファイルの意識は呼び覚まされた。威圧的なもの言いながら聖職者のような雰囲気を感じる。

目の前の男は誰であろうかと寝起きで霞んでいる目を凝らし、彼女は驚愕することになる。

「ッ！言峰綺礼…!？」

夫が最も注意を払っていた人物の一人。空虚なる聖職者にして教会の代行者がアイリスフィールの目の前に立っていた。

急ぎ、いつの間にか寝かされていたベッドから起き上がろうとするが何故か体は動かなかった。

「動こうとしても無駄だ。お前の体は現在、アサシンの神経麻痺毒によって拘束されている。」

「ッ！何が目的なの?!」

淡々と何の感情も込めずに現在の状況を説明する綺礼。

その姿に本能的な恐怖を覚えたアイリスフィールは自由になる首だけを動かして問う。

「目的か…今となつては無いのだが、一応問うておくか。——女よ、貴様の夫である衛宮切嗣は何のために空虚な戦いを繰り返しているのだ？」

取り敢えず時間つぶしに聞いておくか。そう感じ取れるほどに言峰綺礼の質問と、アイリスフィールに向ける関心は薄かった。

自身を誘拐した者とは思えない態度に困惑を隠せないアイリスフィール。

そもそも、これまでの経歴から切嗣が推測した言峰綺礼と今日の前に立っている男とではあまりに印象が違った。

眼こそどこか虚ろで恐ろしいが、その身にまとう雰囲気は神に仕える聖職者そのものだ。

そして何より緊張感に欠けていた。より具体的に言う気だるげな雰囲気を感じるといふか、早く帰りたいそうにしているといふか。

何となくだが目の前の聖職者が危害を加えることはない判断することはできた。

「…恒久的世界平和のためよ。」

だからこそアイリスフィールもただ一言で問われた質問の答えを返した。

流石に予想外の答えだったのか一瞬眉を吊り上げた言峰綺礼だったが、それ以外の反応は特に見せずただ一言「そうか」と呟き、瞑

目した。

狭い部屋に訪れる沈黙。

流石に居心地悪くなつてきたアイリスフィールだが、男は眼を閉じたままだ。ともすればこのまま眠りに落ちるのではないかというほど静かな空気にいよいよ我慢できなくなつたアイリスフィールは先程から考えていた推測を口にした。

「…ねえ、もしかしてだけど、貴方は誰かに指示されているの？私を此処に連れて来いと。」

「そうだ。」

思い切つて問いかけたのだが、返つて来たのは恐ろしくあっさりとした肯定の答え。

もうアイリスフィールは嫌になつて来た。ここまでやる気のない男に誘拐される女の身にもなつてほしいと。

だが、そうなる問題は誰の指示で動いているかだ。これを聞き出せば黒幕の思惑も分かるはずだ。これは流石に答えないだろうとよく分からない期待を込めて再び問いを投げかけた。

「答えなさい！貴方は誰の指示でこんなことをしたの！」

「英雄王ギルガメッシュだ。」

一瞬だった。特にためらう様子もなく彼は答えを返した。

さらには余程暇なのだろう。懐に忍ばせていた聖書を読み始めた。

アイリスフィールは泣きたくなつた。もう聞けばなんでも答えるんじゃないかこいつ…？

「なんで私を攫つたの…？」

「さあ？」

なんかもう疲れたアイリスフィールは首を起こすのもやめてソファアに寝ころび、綺礼に問いかけた。返つて来たのは適当な答え。もはや疑うまでもなく何も知らされていないのだと彼女は確信していた。

またしても訪れる沈黙の時間。

五分

十分

特に何をするでもなく天井の染みを数えるアイリスフィールと聖書を黙読する言峰綺礼。

「…暇ね。」

「ああ。」

「……」

「……」

「暇だから聖書音読しなさいよ。」

「嫌だ。」

即答だった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「アイリッ…」

暇人が部屋でごろ寝していた頃、衛宮切嗣は己の妻を救うために示された住所まで車を飛ばしていた。ハンドルを握るその手は小刻みに震え、前を見据える視線は鋭く、顔色は悪い。一目でわかるほどに彼は動揺していた。気が付いてしまったのだ。アイリスフィールを失うということがどういふことなのか。

それはただ愛する人を失うというだけではない。己の願い。数多の屍を乗り越えてきたこれまでの全てが無に帰すということなのだ。嘗てない焦りが脳から冷静さを奪っていく。

だが、まだ救いもある。それは相手が恐らく切嗣と取引をする腹積もりということだ。

でなければアイリスフィールは切嗣に居場所を教えられることもなくその人格を剥ぎ取られ、聖杯を抜かれているはずだ。

相手の言葉を信じるならば、だが。

「クソッ!!」

苛立ちを吐き出し、荒い運転で赤信号を通過する。

アクション映画さながらのハンドルさばきで車を駆りながら横目で助手席に置いた武装を確認する。

キヤリコム950、コンテNDER、手榴弾5つ。そして、令呪が3画。

忌々しいことに相手が英霊だった場合、この中で一番役立つのは最後の令呪に他ならない。

年を取ってからは考えないようにしていた己の力のなさに憤慨する。

衛宮切嗣は英雄にはなれない。

ずっと前に悟った筈の事実だ。聖剣も鎧も宝具など持たない。あ
るのは霊体には効かない銃弾と血に濡れた理想だけ。それで構わな
いと自分に言い聞かせた。だというのに…今はどうしようもなく、圧
倒的な力を持つあの黄金の英雄王を羨ましく思っていた。

(…此処か。)

意味のない考え事をしながらも切嗣はしつかりと目的地まで車を
運転していた。

静かに停車し車を降りる。そして極力足音を消しながら目の前の
民家へと近づいていく。見た目は完全に普通の家だが、油断はならな
い。

長い年月をかけて磨き上げた暗殺者としての技量を駆使し、家の中
を探索していく。居間、二階、向かいの部屋。しかし、何も出てこな
い。あつたものと言えば二階にあつた十字架ぐらいだ。

(となると残るは地下か…)

難なく地下への隠し扉を見つけた切嗣はコンテNDER片手にゆつ
くりと階段を下っていく。

すると正面に光の漏れた扉が見えた。

気配を殺して扉に近づき、耳をすませる。少しでも中の情報を得よ
うと神経を集中させる。

「ふーん、クラウディアって言うのね。素敵な名前の奥さんね。」

「ああ、名前だけでなくその中身も素晴らしい女性だった。——気付
くのが遅すぎたがね…」

「そんなことないわ！妻となった女ならばたとえ死後であろうとも夫
に思われるのは良いことのはずよ！それに、世の中には妻の良さに気

が付かない、けんたいいき？の夫婦もいると聞いたわ。全く、信じられないわ！」

(ちよつと待て)

何故か仲良くおしゃべりに興じる己の妻と男の声が聞こえてきた。慎重に扉を開き、中の様子を伺う。

するとそこにはソファァーに寝そべって楽しそうにおしゃべりに興じる妻と

聖書片手にその相手をしている眼の死んだ聖職者がいた。

訳の分からない状況に心底動揺した切嗣はフラフラと中に入っていく。

「そもそも結婚というのは…あら？切嗣！来てくれたのね！丁度言峰さんと夫婦の話をしてたのよ！——言峰さん、こちら私の夫の衛宮切嗣です！」

「ああ、これはどうも。言峰綺礼です。しがな聖職者ですが、奥様の退屈しのぎに付き合っております。」

「……」

朗らかに再会を喜ぶ妻とやけに丁寧な挨拶をしてくる長身の神父。というかアサシンのマスター。

頭が動かない。状況理解を脳が拒絶している。

(何でこいつらこんな仲が良いんだ？えっ？誘拐犯とその被害者の間に芽生えた友情的な？ふざけんよ、こちとらどれだけ頑張つてここまで来たと思つてんだ。時速200kmで飛ばしてきたんだぞ。ゴールド免許剥奪だぞオイ。)

完全にバグった衛宮切嗣。そんな彼を現実に引き戻したのは言峰さんだった。

(ツ！あいつ…笑つてやがるツ！僕が動揺してるのを見てニマニマと笑つてやがるツ!!)

仏頂面なので分かりにくいだが、言峰は完全に笑つてい——間違えた。嗤っていた。

いつになく動揺している衛宮切嗣の醜態を嘲笑い、それを覆い隠すようにニコニコとしていた。いつそ不気味なくらいに。

そのふざけた姿に毒気を抜かれそうになるがなんとか怒りを飲み干し、切嗣は冷静さを取り戻した。

取り敢えず今やるべきことは状況を理解することだと判断し、真面目な顔で問いを投げかけた。

「……真面目に問う。貴様、何故アイリスフィールを攫った？」

「さあ？」

「……」

何故かアイリスフィールまで一緒に首を傾げて答えを返す。その仲良さげな姿と同じ角度で傾いている首に怒りが募る。事前に打ち合わせしていたんじゃないかとまで思い始めた。

「——ハア……」

なんかもういろいろと疲れた切嗣は態と大げさなため息をつき、近くのソファアームにドカッと腰を下ろした。取り敢えず言峰がこちらに敵意を持っていないことは分かった。というよりも敵意を持っていたのなら既にアイリスフィールも切嗣も殺されていただろう。

流石の魔術師殺しもこの狭い部屋で代行者相手に勝ちを拾えるとは思っていなかった。

「——で、実際のところ貴様の目的は何なんだ？」

「私自身はお前たちに関心はない。Mrsアイリスフィールの中にある聖杯にもな。」

無駄に発音のいいミセスに腹が立つがグツと押さえつけ、聖杯に興味がないといった事実に関心驚愕しながらも切嗣は黒幕を探ることにした。

「では誰の「英雄王ギルガメッシュだ」……。」

探るまでもなく自分から暴露してきた。

何で英雄王はこいつに間諜を任せようと思ったのか疑問に思ってきた。

「……少し真面目に話すのならば、私は英雄王に借りを返すべく動いているだけだ。それ以外の事情などない。——だから英雄王がサーヴァントを蹴散らして来るまでここで寛いでいるがいい。」

セイバー、ランサー、ライダー、何れも大英雄達。そんな彼らに同

盟を組まれて英雄王は戦っている。しかし、綺礼は英雄王が敗北する可能性など微塵も考えていなかった。

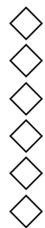
だからいきなり戦闘中の英雄王から「アイリスフィールを人質にして衛宮切嗣を呼び寄せ、自分が行くまで待機している」という指示にも従ったのだ。

英雄王に二言はない。

数分後、黄金の粒子が逆巻き、無傷の英雄王が不敵な笑みと共に姿を現した。

「さて、要件は簡単だ。——その聖杯を寄越せ。」
長い夜は終わらない。

王の杯



「さて、要件は簡単だ。——その聖杯を寄越せ。」

それが黄金の粒子と共に姿を現した英雄王の最初の言葉だった。

一人用の豪華なソファアームに腰を埋め、頬杖を付いているその姿は恐ろしく様になっている。——ともすればその傲岸不遜な要求にも従ってしまいそうなほどに。

だが、切嗣がその言葉に従う道理はない。

彼は毒が抜けたのか上体をゆっくりと起こし始めたアイリスフィールを庇うように彼女の隣に移動した。

「寄越せと言われて簡単に渡すだけでも?」

「そいつは人の身には余る代物だ。事情は…知らぬようだな。であれば端的に一言で説明しよう。——その聖杯は汚染されている。」

「ツ!!」

思わず驚愕する切嗣とアイリスフィール。

彼らの驚きは聖杯が汚染されていたという事実だけに対するものではない。勿論それもあるが、何よりも英雄王の言葉を微塵も疑わずに受け入れたことに対する衝撃だった。

(なぜだツ!!なぜ…疑えないツ!!)

何の根拠がないにもかかわらず、彼らは心の底から英雄王の言葉を信じていた。

相手に信じ込ませることに特化し、疑うという防衛機構さえ無効化する魔性のカリスマ。

——ともすれば洗脳すら容易くやってのけるであろうその呪いじみた力に思わず戦慄する切嗣。

そんな彼らの内面を知って知らずか、英雄王は真剣な面持ちで彼らを見据える。

「英雄王ギルガメッシュの名に懸けて誓おう。これより語るは全て事実であると。故、最後まで語り終えるまでそなたらが口を挟むことは

許さぬ。」

そして彼は語り始めた。アインツベルンが過去に犯した過ちを。聖杯の中に眠る悪神に仕立て上げられ英霊となった青年の話を。

疑惑、驚愕、失望、憤怒、——そして絶望。様々な負の感情が衛宮切嗣に襲い掛かる。

この世全ての悪が聖杯を汚染しており、願いを破壊によって叶えるという事実。即ち、数多の犠牲を払い手に入れようとしていた願望器が実は使い物にならないと知らされた時の虚無感^{ウツロイ}は尋常ではなかった。

これがまだ英雄王ではなく他の人物の口から知らされた事実であれば、切嗣はそれを嘘だと断言し、これまで通り聖杯戦争に集中出来ただろう。

しかし、語り手が英雄王であるがゆえに切嗣は疑いたいのに疑えないというジレンマに陥ることとなった。

何度も何度も話の途中で嘘だと思いつつ努力をした。だが、それらの努力は全て無駄だった。

なにせ英雄王には何のメリットもない。あの王ならば、このような作り話を作る必要もなく切嗣から聖杯を奪えただろう。

故に切嗣はこの話を信じた。いや、信じざるを得なかった。

葛藤しながらも英雄王の言葉を飲み込んだ切嗣の苦悩する様子は、言峰綺礼に言わせればまさに極上であった。

正直英雄王が来たら帰ろうかと考えていたが、もうしばらく留まっておこうと考えるくらいにはこれから起こる問答に興味があった。

「まあ、そういう訳だ。残念ながら今回の聖杯は諦めるのだな。」

「……」

「その泥に汚れた聖杯は俺にとっても些か都合が悪い。故にこちらで処理をしておいてやる。感謝し、疾く聖杯を捧げよ。」

苦渋に満ちた表情の切嗣とやけに嬉しそうな綺礼。

そんな彼らを眺めるギルガメッシュは少々焦っていた。

ランサーを仕留めた後から感じている嫌な予感。あまりにも曖昧

な感覚であるため、千里眼でも糸口がつかめない事象。

ギルガメツシユはこの原因を聖杯であると仮定した。即ち三騎の英霊を飲み込んだ聖杯の中のこの世全ての悪が胎動を始めたのではないかと。

あれとギルガメツシユの相性は最悪だ。まともにやり合えば間違はなくこちらが劣勢に立たされるだろう。

故にギルガメツシユは回収と破壊を即座に決定した。

ラスボス降臨など言語道断。生まれ落ちる前に殺してくれよう。

「……」

だが英雄王の決定に対し、衛宮切嗣は一言も発しない。肯定も否定もなく、ただ憎悪の視線で王を射貫いている。

その不快な視線に思わず眉を寄せる英雄王だったが切嗣の事情も多少は把握している。聖杯にかける並々ならぬ思いの強さも。

故にこそ、ただ一言口にした。

「諦めよ、貴様の願いは叶わない。」

「——ッ！」

切嗣の殺気が濃くなる。アイリスフィールが怯えながらも彼の手を握るが、切嗣の剣？な雰囲気は鎮まることはない。これまで犠牲にしてきた全てのものが無に帰そうとしているのだ。もはや妻を気遣う余裕など彼にはない。

殺し続けたのだ。

少数を切り捨て、大を生かすために。

命を数で捉えて天秤にかけ、傾いた方を救うべく、もう一方は殺し尽くす。

たとえ選ばれなかった方に己の大事な人——家族、愛する人——がいたとしても、感情を切り離して殺し続けた。

守られた数こそが貴いと信じて。

だがこの方法では限界があると切嗣も知っていた。故にこの連鎖を、人間の闘争に対する性を塗り替えられる奇跡を欲したのだ。

だというのに……これでは誰も救われない。

切嗣の中で憤怒が、絶望が、嘆きが、裁き切れぬ罪に沸騰した地獄

の釜のように煮えたぎる。

その大きな感情の渦は、彼が憎み蔑む英雄たちの祖。英雄王ギルガメッシュへと向けられることとなる。

「英雄」という欠陥構造を生み出したことへの恨み。

圧倒的な力を持ちながらも人類を救おうとせず、争いを良しとするその姿勢への憤慨。

ふと、英雄王の顔を睨みつけていた切嗣の感情に蓋が乗せられた。

——英雄王ギルガメッシュ。伝説の英雄にして規格外の英霊。彼が武器として使用している王の財宝にはありとあらゆる宝物が収納されているという。

「…まだだ。僕はまだ、願いを叶えられる。」

「ほう?」

面白いとばかりに唇を吊り上げる英雄王。そんな彼の紅眼を真っすぐに見つめ、切嗣は確信をもって問いを投げた。

「原初の英雄王。あんた、聖杯を持つてるんじゃないのか? 汚れてない真つ新なやつを宝具として。」

「フ、フハハハハ!! 然りッ!!」

それはこの聖杯戦争という儀式を土台から崩す衝撃の事実であった。祭典の参加者が既に戦利品を手に入れているなどイベントが成り立たなくなってしまう。

だが、英雄王だけは特別だ。彼こそはありとあらゆる伝説中でも頂点に立つ男だ。そんな男がアーサー王伝説における聖杯探索のもととなった宝を所有していないはずがない。

睨んだ通りだと冷静さを取り戻した切嗣はほくそ笑んだ。

「——だが、貴様にやると誰が言った? 俺は貴様のような輩にくれてやる宝具など一つも持ち合わせてはおらぬ。」

「——ッ!」

「どうしても言うのであれば、それ相応の対価を差し出すのだな。」

当然と言えば当然の反応だった。いくら英雄王がそれなりに慈悲深いとはいえ、ただで切嗣に聖杯をやるような男ではないだろう。

切嗣は英雄王に価値あるものとして差し出せるものなど持ち合わせてはいない。

——となれば彼に取れる行動は一つ。

「…セイバーに遠坂邸を襲撃させると言ってもか？」

武力による脅しだった。恐らくセイバーは断るだろうが令呪を三画も使えば従わざるを得ないだろう。英雄王の防御宝具で固められているとは言え、聖剣の光であれば焼き払えるだろうというのが切嗣の見立てだった。

「なるほどな。俺がこの場に姿を現したことを逆に利用するという訳か。悪くない手だ。」

だが、その認識は甘い。確かに展開してある防御宝具では防ぎきれないかもしれない。それでも遠坂邸には英雄王の信頼する獅子が護衛についている。令呪で強制的に戦わされるセイバーなど敵ではないのだ。

「——さら、刮目するがいい！これこそが浅ましくも貴様らの求めていた願望器よ！」

しかし、英雄王は敢えて切嗣にさせられることにした。

「これが……聖杯……ッ」

部屋の中央のテーブル上に、ゲート・オブ・バビロン 王の財宝から出現した黄金の杯が置かれた。

感極まったように聖杯を見つめる切嗣とその妻アイリスフィール。理想を実現するために追い求めていた物が遂に目の前に現れたのだ。それも愛する妻の犠牲なしで。

彼は心の底から歓喜し、感謝し、久方ぶりに心からの笑顔を浮かべていた。

“だが忘れてしまいか人間よ。安易に叶う理想は理想ではない。

“望外の喜びに浸る人間を見つめるは原初の王。

彼はその千里を見通す眼でもってその浅ましき心を見抜いていた。

“故に、王が問おう。貴様の理想が何たるか”

「——衛宮切嗣に問う。汝、その杯をもって何をなさんとする？」

巨大な覇気が静かに部屋に満ちる。

先程までの英雄王とは明らかに違う。姿勢や姿が変わったわけではない。ただ何か切り替わったかのように威圧感が増し、存在そのものが膨れ上がったように感じる。

人外にして神性の証である真紅の瞳が真つすぐに聖杯を手に取り、うとする切嗣を見据える。

安易に答えを返すことは許されないと眼が告げていた。

もし己の信条に背いたのなら英雄王は即座にその背徳を見抜き、首を刎ねるだろう。

首元に剣を押し当てられているような緊張感に襲われながらも切嗣は乾いた喉を震わせて慎重に答えを返した。

「……人類の救済。争いを根絶した恒久的世界平和の実現だ。」

切嗣の願いを聞いた英雄王は暫く何も答えなかった。嘲笑うこともなく、否定するでもなく、視線を少しずらして考え事に耽っていた。やがて視線を切嗣に戻した英雄王が再び問いを投げかけた。

「それは具体的にどのような手段で実現させるのだ？」

「……分からない。だからこそこの聖杯に手段を問い、実現させる。」

「それは無理だ。」

「——ッ！何を根拠に……」

「それは貴様の妻に眠るものとは違って無色の聖杯だ。純粹無垢と言いつても良い。——では問うが、貴様は物の道理を知らぬ赤子にどうやって世界救済の方法を説く？」

「それは……」

「説明できぬということとは、つまりそういうことだ。貴様自身にも分からぬ救済の方法を願望として成就させようなどと、土台無理な話だ。」

「しかしッ！」

「願望器とはその名の通り、貴様の知り得る方法でのみ願望を成立させる宝具。」

「……………」

「貴様がこれまでなしてきた人類の救済とやらの規模を世界規模まで

拡大する。これを奇跡と言わず、何と言う?」

「……う……」

「それでも叶えられぬのなら、貴様の理想は理想として破綻している。」

「…違う……」

「もう一度言おうか? 貴様の願いは…叶わない。」

「違うツ!!」

血を吐くような切嗣の絶叫が部屋に響き渡る。

「何か、何か方法があるはずだ…でなければ僕がこれまでやってきたことは一体何なんだ……?」

疲弊した切嗣の弱弱しい眼が縋るように英雄王へと向けられる。

「な、なあ英雄王? 君なら知っているはずだろ? 争いを無くし、世界を救う方法を…?」

「知らぬ。」

だが英雄王は冷たく一蹴するのみ。

哀れな男を眺める真紅の瞳には何の感情も浮かんでいなかった。

幽鬼のように顔色を無くし、絶望に膝をつく切嗣。

「切嗣ッ!」

急いでそばに駆け寄るアイリスフィール。

夫に寄り添う彼女の眼尻には涙が浮かんでいた。あまりにも哀れな夫の姿を見て溢れてきたのだろう。

しかし、その宝石のような涙をぬぐうことなくただ夫に寄り添う姿は、無感動に事態を眺めていた英雄王の心を少しだけ動かした。

「……もう分かったであろう。このような代物は人の手には余る。」

これは彼なりの気遣いであった。これ以上夫の傷ついた姿を見たくないであろうアイリスフィールへの。

「……待て。」

だが英雄王の気遣いを無にする狼藉者がいた。完全に心が折れたと思われていた衛宮切嗣だ。

彼は餓えに苦しみ、餓死寸前の獣のような危険な光を眼に宿し、聖杯へと手を伸ばした。

「戦いだ！闘争本能があるからいつまで経つても人間という生き物は醜く殺し合うんだッ!!だが、その本能を聖杯で消し去ってやれば世界は平和に……」

「戯けー!」

雷のような一喝だった。思わず理性を取り戻した切嗣を厳しい眼で見据え、英雄王は語る。

「闘争本能を失った人間がどのような末路を辿るのか貴様には想像できないのか？抵抗という概念を失った彼らは病魔と闘う気概、侵略者から祖国を守る使命感、人の世を発展させる術、それらを全て失うのだぞ。それがどれほど惨たらしいことか……」

蔑むような視線で切嗣を睨み付ける英雄王。

だが、目の前の願望器への欲望からか狂気に浸かりつつある切嗣は止まらない。

「ならばッ！人間という存在を根底から塗り替えてやるッ！戦争をせざるも理解共存に至り、不公平という概念を平等に変える力と理性を持った存在にすればいい!」

「ならぬ。」

それはただただ拒絶であった。否定であった。

英雄王は、切嗣を認めなかった。

「——ッ！何故なんだ!?!どうして僕の願いだけを否定するッ!?!あの騎士王は？征服王は？彼らの願いを認めておきながら、どうして僕の理想を認めないんだッ!?!」

子供の癩癩のように認めてもらえないことを嘆く切嗣。その無茶苦茶な感情の吐露は目の間に追い求めた万能の願望器があるからこそなのだろう。

理想に焦がれ、人の世の平和を願う男を英雄王は醒めた眼で見ている。

「貴様、俺のことを聖人か何かと勘違いしていないか？全てを許し、導きを与える都合の良い存在か何かと。——間違えるなよ。俺は己の見据えた王道のみを征く王だぞ。認められぬ者は否定し、拒絶する。当然のことだ。」

己を英雄達の王であると定めた男は語る。己の王道を。認められぬ世界を。

「俺は今の人間の形にこそ価値を見出している。それが根底から覆された世界など…視るに堪えぬ。もし仮にその様な世界になったのであれば——俺手ずから滅ぼしてくれよう。」

それが本気であると切嗣は分かった。分かってしまった。

恐らく目の前の王は切嗣が想像する理想の世界へと至った時、躊躇なくその世界に住む人々を皆殺しにしても世界を滅ぼすだろう。

恐ろしい、と思った。切嗣は、ただただ目の前の王が恐ろしくて仕方なかった。

だが、英雄王に譲れぬものがあるのと同じように切嗣にも譲れぬものがある。

「……それでも僕は止まらない。世界を救うんだ。僕はね、僕が背負ってきた全ての人々の犠牲を無駄にしないためにも願いを叶えなくちゃいけない。」

理想を叶える手段はないと王は告げた。しかし、それでも、切嗣は立ち止まることなどできない。決定的な何かを失うその時まで。

「……愚かな。」

だが、英雄王は決して認めようとはしない。寧ろ、先程までよりも怒り心頭に見える。

事実、一言発した侮蔑の言葉には彼を知るものならば即座にその場から失せるであろう程の怒気が込められていた。

「……これまで犠牲にしてきた人々の為に戦うことの何が悪い？僕は何と言われようと理想を叶え、世界を救ってみせる。」

「下らんな。未だに己の間違いに気づけないとは。」

終わりの見えない問答を終わらせるべく、英雄王は真実を告げる。

「よく聞け、貴様は誰からも何も託されてなどいない。背負ってなどいない。」

それは決定的な一言だった。

怒気を露にする英雄王にも強気で立ち向かっていた切嗣が顔から表情を失う程には。

「今まで犠牲にしたもののために戦う？見当違いの罪悪感で果たされる理想などただの偽善だ。良いか？貴様が今まで積み上げてきたのは犠牲にさせられた人々の屍だ。断じて彼等が進んで犠牲になったのではない。」

「……」

「彼らの内、一人でもお前に何か言葉を、思いを託して死んだ者がいたか？もし仮に託されていたとして、貴様は今日に至るまでその重荷を背負って生きてきたのか？——背負ってなどいないだろう。人の死を、自らが殺めた者の命を本当の意味で背負えるものなどほとんどいない。」

思い出す。驚愕の眼差しで自分を撃った息子を見る父。

空で散った母代わりだった女。

魔術師一人を殺すために巻き込んだ人々。

皆死んでいった。切嗣の判断で。正しいと信じた空虚な命の物差しで。

「貴様が見捨てた者たちを哀れに思つて理想を果たそうとしているのなら、それは意味のないことだ。

謂れなき憐憫はただの侮辱だ。憐れむことなかれ。悔いよ。」

切嗣の中で何かがひび割れ、崩れていく音を聞いた。

辛うじて体制を保っていた理想という仮面が剥がれ落ち、罪悪感に打ち震える素顔が露になっていく。

「そも、救いを与えるという考えからして間違いだ。命とは終わるもの。それがどのような終わりであれ、喜劇であったか悲劇であったかを決めるのは死ぬ間際の本人であろうよ。」

「ぼ、僕…は…」

どうすればいいのかと縋るような視線が英雄王へと向けられる。

今度は、拒むことはなかった。

「あるがままの世界を見ればよい。悲しきことあれば涙すればよし。望外の喜びあればこれを素直に受け入れればよい。」

我慢ならぬことあれば立ち向かうがよい。——まだ間に合う。お前には、背負えるものが残っている。」

チラリと切嗣に寄り添うアイリスフィールへと視線を向けて英雄王は告げた。

「人となれ衛宮切嗣。さすれば人としての貴様の願い、誕生の祝福として俺が叶えてやらんでもない。」

「……本当か？」

「無論だ。この俺を誰と心得る？——英雄王ギルガメッシュユダぞ。」

不敵に微笑み、王は杯を手を取った。

それぞれの道。訪れる運命の戦い。

「アイリスフィール!!マスター!!」

屋敷へと帰還した切嗣とアイリスフィールを迎えたのは己のサーヴァントの大声であった。

思わず眉をしかめる切嗣だがそんなことには気付かずセイバーは嬉しそうに二人へと駆け寄った。

「良かった！御無事だったのですね…。念話で聞いても二人とも応答してくれないのでそこら中探していました。」

英雄王との戦いで疲弊していたにもかかわらず彼女は文字通り、街中を駆けまわっていた。その証拠に、身にまとっている黒いスーツはくしゃくしゃで、髪形もかなり乱れている。

「ツ!!私としたことが。さあ、アイリスフィール!早く私の鞘を!!」
「ごめんなさいねセイバー。でも、もう大丈夫よ。」

更に彼女の暴走は止まらない。主が無事だったことを確認したその次は流れるように取り出した鞘をアイリスフィールに押し付け始めた。

その姿に微笑ましいもの覚えながらも彼女はやんわりと断った。
怪訝な顔をするセイバーだったが、顔色の良いアイリスフィールを見て安堵したのか鞘を仕舞った。

「それで、何があったのですか?」

安堵を見せていた顔から一転、セイバーは鋭い目つきとなって二人に問いかけた。

その反応も当然だろう。それだけの心配を二人はセイバーに掛けたのだ。

そして、さらに残酷な真実をセイバーはこれから聞かされることになる。

「……セイバー。話があるんだ。」

「ツ!!?——分かりました。」

切嗣が自分から話しかけてきたことに驚く彼女だったが、その真剣

な表情と一抹の罪悪感を漂わせる瞳を見てただ事ではないと判断し、重々しく頷いた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「なあ、本当に大丈夫なのかよ?」

「おう!寧ろこの程度怪我のうちに入らぬわ!」

「入るだろ!右腕千切れ掛けてたろうが!」

ハア、とウエイバーはここ最近で慣れた溜息をつく。

昨夜の敗戦から命からがら戦車で離脱したライダーはボロボロだった。

戦車は傷だらけ、右腕は千切れ掛けで、魔力もほとんど空だった。

はつきり言つて無様な敗北だったにも関わらず、目の前の赤毛の巨漢は諦めるという言葉を知らないらしい。

その凶太い神経に呆れるやら安堵するやら。

ともかく暫くは戦闘も無理だな、と考えていたその時――

ピンポーン

ごく普通にチャイムが鳴った。

現在の時間は午前十時。おじさんは市の図書館に出かけているがおばさんが対応してくれるだろうと考え、再び己のサーヴァントへの説教に戻ろうとしたウエイバー。

「ウエイバーちゃん?お友達が訪ねて来たわよお〜!」

しかし、それは一階から嬉しそうに彼を呼ぶおばさんの大声によって遮られることとなった。

「お友達?こんな極東の島に?一体どこのどいつだ?」

そもそもウエイバーには友人と呼べる人がほとんどいない。

それも聖杯戦争真つ只中のこの町にわざわざウエイバーに会うためにやって来るような知り合いに心当たりはなかった。

「:..なあ坊主。こりゃあ怪しくないか?」

「確かに怪しいけど:..まあ、顔ぐらいは拝んでおくか。」

相手が誰であれ、こんな朝っぱらに民家で戦いを始めるような奴はいないと考え、軽い気持ちでウエイバーは階段を下っていた。

「やあ、ウェイバー君。久しぶりだね。元気にしていたかい？」

「もおくウェイバーちゃんたら、こんなに紳士的で素敵なお友達がい
たならもつと早くに教えてくれれば良かったのに！」

「……」

リビングから漂う紅茶のいい香り。

滅多に出さないおばさん秘蔵の茶葉を優雅に楽しんでいるのは柔
らかな笑みを浮かべた金髪の男。——金髪の男。

「……」

「どうしたんだいウェイバー君？魂を誰かに盗まれたような顔をして
……うん？おお！このクッキーは実に美味ですな！ハーブですか？」

「あら、まあ！お察しの通りよ！舌も肥えていらっしやるのね。確か
お名前は……」

「ケイネスです。ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。しがたい貴族
の一人でウェイバー・ベルベット君と同じ学び舎で学んでいる者で
す。」

「そうでしたわね！Mr. ケイネス。宜しければどうぞごゆっくりと
寛いで行って下さいな！」

「そうしたいのですが、実は昼の飛行機でロンドンに帰国する予定で
して……帰る前に少し、ウェイバー君と話をしておきたかったです。」
「そうなの……残念ね……なら、ウェイバーちゃん！しつかりとお見送り
して差し上げるのよ！おばさんは自分の部屋にいるから。」

茶目っ気のある上品なウインクを残し、おばさんは自室へと戻って
行った。

取り残されたのは相変わらず優雅に紅茶を嗜むケイネスと、呆然と
立ち竦むウェイバーのみであった。

「——そこで突っ立ったままかね？美味しいお茶とクッキーがある。
座ったらどうかね？」

「……」

おばさんが立ち去った途端、この家の主がごく尊大な口調と態度
を取り始めたケイネス。その見慣れた姿にウェイバーは少しだけ安
堵した。

流石に先程までの好青年ぶりがケイネスの素だったら色々怖い。
「…一体何の御用ですか？」

聖杯戦争前のウェイバーであればこの状況だけで白目をむいて現実逃避に走っていただろう。しかし、今の彼はケイネスの向かいの席に腰を下ろし、彼の眼光と真正面から向き合っていた。

思いがけない生徒の成長に驚いた様子を見せたケイネスだったが、すぐに興味を無くしたように紅茶で喉を潤し、口を開いた。

「さっきご婦人に話したのと同じ内容だ。」

「ご婦人…？ああ、おばさんのことですか。」

「…君、目上の方にはもう少し敬意を払うべきだと思うがね。」

呆れたように呟くケイネス。その姿にまたしてもウェイバーは衝撃を受けた。さっきのは芝居じゃなかったのか！と。

それはともかく、ケイネスが先程話していた内容と言えばロンドンに帰国するという話だったが…

「まさか、本当に時計塔に帰るんですか!？」

「何をそんなに驚く？私はサーヴァントを失ったのだ。もうこれ以上このふざけた戦争に肩入れする意味はない。」

「……」

正論と言えば正論だった。だが、ウェイバーにはにわかには信じられない話だった。

彼に聖遺物を盗まれてもなお諦めずに聖杯戦争に参加した彼がサーヴァントを失ったとは言え、途中辞退するという決断を下したことが。

訝しげにケイネスを見るウェイバー。そんな彼に対し、ケイネスはため息を一つついて再び口を開いた。

「戦争が進んでいくうちに理解したのだ。これは私のような優秀な魔術師が出るべき戦ではない、とな。」

「…というところ？」

「この戦争のカギを握るのは英霊達だ。召喚したその英霊のスペックによって勝者が決まるといっても過言ではない。無論、マスターとして戦術によって補える部分はある。しかし、私の戦争はあの英雄王が召

喚された時点で既に敗北が決まっていたのだろう。あれが相手ではどうあつても勝ち目はない。特に真つ当な魔術師である私にはな。」
最初、ウエイバーはその殊勝な言葉の数々がケイネスの口から飛び出してきたことを信じられなかった。

だが彼の良く知るケイネスとは違い、その翡翠の眼には以前のような苛烈さが少し薄まっているように感じた。落ち着きを得たというか、貫録を得たというか、上手く言葉にはできないが、何となく彼もこの聖杯戦争で得るものがあつたのだと察した。

「それで、僕に話というのは？」

「決まっているだろう——よくも私の聖遺物を盗んでくれたな小僧ツ
!!

「ヒイツ!？」

先程までの貫録はどこへやら、眉間に皺を寄せ、額に血管を浮かばせてケイネスは大声で怒鳴り散らした。

ある意味いつも通りのケイネスに妙な安堵感を覚えるウエイバーだったが怖いものは怖い。情けなくも悲鳴を上げた彼は椅子から転がり落ちた。

「あれを取り寄せるのに幾ら掛かったと思っっているんだツ!!ええ? 貴様に弁償できるのか!？」

ヒステリックに唾飛ばしながら怒鳴るケイネス。ウエイバーはおばさんにはれないかと気が気でなかったが、よくよく周囲を見てみれば防音の結界が張られていた。その手際の良さに感心する間もなくケイネスの説教は続く。

「だいたい君はいつもそうだ。レポートにおいても自分で提示した論題からいつも趣旨が逸れている。いいか? 論文というのは——だから君には恋人の一人もできはしないんだ。だいたい君は——ソラウもランサーが消えてから塞ぎこんでしまっているし…つてそんなことはどうでもいい! だいたい君は——」

止むことない言葉の暴力。ウエイバーの普段の素行から彼の人格を全否定。論文のうんちくを垂れたかと思えば何故か婚約者ソラウの話になり、急に怒り出したかと思えばウエイバーに八つ当たり。だ

いたい君はというフレーズが区切りとなって兎に角話が止まない。

30分ほど続いた毒舌のマシガンはウエイバーのメンタルに的確なダメージを与え、彼の眼から生気を奪っていた。

「——ふむ、こんなものか。」

いろいろと愚痴を吐き出して満足したのか彼はやつと腰を下ろし、喋り過ぎで疲れた喉を紅茶で潤した。

「……結局先生は何しに来たんですか？」

「うん？だから君と話をしにだが？」

一方的な言葉の暴力は話とは言わない！と突っ込みを入れたくなったがグツと堪え、今だにはつきりとしめないケイネスの真意を問いかけることにした。

「だから、どうして僕と話をしに来たんですか？」

「——君は優秀な魔術師ではない。」

いきなり貶されたウエイバー。先程までの口撃で多少は耐性が付いたとはいえ、やはり罵倒は堪える。それが本人の気になっている事柄であり、自覚があるのであれば尚更。

しかし、ウエイバーは反論しようとはしなかった。

理由としては真に優秀な魔術師であるケイネスに言っても無駄であるということと、彼の眼には言葉に反して蔑みの感情が見えなかったからだ。

「凡庸で平凡。取り立てて得意な分野もなく、その才では君自身が一流の魔術師として大成するのは不可能に近い。というか不可能だろう。」

「あ、あの流石に言い過ぎじゃ？」

「事実だ。」

「……」

「——だが、君は己のサーヴァントを生還させている。英雄王と対峙したにもかかわらず的確な状況判断と令呪を使用することによって今も聖杯戦争のマスターで在り続けている。∴私は脱落したにもかかわらず、な。」

何かを思い出すように己の手の甲を擦るケイネス。今もマスター

であるウェイバーは知っている。そこが令呪の位置であったことを。「君は低俗で、愚かで、考えなしの貧乏学生だが…それだけの男ではないのだろう。」

「……」

「言いたいことはそれだけだ。兎も角、聖遺物の弁償はきっちり果たしてもらってからな。覚えておけ。」

紅茶を飲み干し、ケイネスはスツと立ち上がった。その所作一つ見ても分かる。彼がいかに洗練された貴族であるのかが。

「…お見送ります。」

「うむ。」

ウェイバーもまた立ち上がり、ケイネスを玄関まで送る。

すると防音結界が解け、耳ざとく帰宅の気配を感じ取ったおばさんがパタパタとスリッパを鳴らしながらやって来た。

「あらあ、もう帰ってしまわれるの?」

「ええ、残念なことに表にタクシーを待たせていますので。」

「そう…また何時でも遊びにいらしてくださいね?私の主人ともぜひ会ってほしいの。きつと貴方のことを気にいると思うわ!」

「そうですね。貴方の御主人ということはきつと素敵な方なのでしよう。」

「まあ!お上手ですこと!」

「ではまたお会いしましょう。ご婦人。」

手の甲に優しく口付け、ケイネスは朗らかな笑みを浮かべて去っていった。

「とつても素敵な人だったわね〜!」

「——うん。そうだね。きつと僕が思っていたよりもずつと。」

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトはウェイバーが考えていたよりもずつと器が大きく、目上の人への礼儀を欠かさない紳士で、洗練された本物の貴族だった。

彼は言った。弁償させるから覚えておけと。それはつまり無事に時計塔に戻って来いということだろう。

「……」

ウェイバーは所謂井の中の蛙だった。世界を知ったつもりで、自分を、他人を理解したつもりで生きていた。けれど、この聖杯戦争で学んだことがたくさんある。世界の広さを、自分で勝手に狭めていた価値観を。まあ、つまるところ

「僕はまだまだ全然なっていないってことか…」

一人呟き自室に戻る。

「なんだ、ようやくと気が付いたのか？」

背後から聞こえてきた声に不機嫌そうな顔でウェイバーは振り返った。

「おいライダー…お前僕が困ってるの見てただろ？何で助けなかったんだよ？」

恨みの籠った視線で薄情者のサーヴァントを睨み付けるウェイバー。だが、その程度の視線に怖気づくような可愛い男ではない。ニヤリと人の悪そうな笑みを浮かべて巨漢のサーヴァントは己のマスターの背中をバンバン叩いた。

「助けるも何も、良き教師ではないか！あのケイネスという男は。己の生徒の不義を怒り、注意する。まあ、些か私情が混ざり過ぎていたような気がせんでもないが…」

ライダーをしてあの説教嵐は恐ろしかったのか、軽く身震いしていた。

「——だが、あの男の言うとおりだな。礼を言うのを忘れておった。貴様の機転のお陰で余は生還することが出来た。感謝するぞ、我が契約者ウェイバー・ベルベットよ。」

真面目な顔で礼を告げる己のサーヴァント。

その殊勝な姿に思わず照れくささと恥ずかしさを覚える。

「ぼ、僕はお前のマスターだからな！当然のことをしただけだ！…だからよせよ礼なんて。気恥ずかしい。」

「ハハハハハ!!照れるな照れるな!!胸を張れ！お前は征服王の賛辞を得たのだぞ？」

「うるさい！取り敢えず僕はもう一回眠る。お前も霊体化して早く回復しろよ。」

「ええ…余今からゲームしたいのだが…」

「ふぎけんな！それじゃあ僕が眠れないだろうが！」

「ふむ。——じゃあ、お前も一緒にゲームをすれば良い。さて、もう一つのコントローラーはどこだったかの？」

「ちよツ!?何勝手に決めたんだよ！僕はやるなんて一言も…」

「おお！あつたわい！」

「話聞けえ!!」

「良いではないか。それに先ほど己の見識の狭さを痛感したばかりであらう？ならばこれもまた新たな世界を知るための第一歩だ！」

「……」

相変わらず無茶苦茶なサーヴァントに振り回されるウェイバー。

だが、確かに知らない世界を知ることにも大事なのかもしれぬ。

「……ちよつとただぞ。」

「おお！それでこそ我がマスター！」

彼らの聖杯戦争はまだ続く。



「……すいません。暫しの間、一人にしてください。」

それが切嗣とアイリスフィールにより聖杯の真実を聞かされたセイバーが辛うじて絞り出した発言だった。

首肯するマスターを見た彼女は一礼して部屋を出ていった。

「セイバー……」

心配そうな顔で彼女の出たいった障子を見つめるアイリスフィール。

彼女の肉体は今、身体の内側に秘められた英雄王の聖杯によって前までとは比べ物にならないほど健康になっていた。汚染されていた方の杯は既に英雄王によって摘出されている。今頃は彼によって一欠片も残さず消滅されているだろう。

これではイリヤスフィールを取り戻し、再びアイリスフィールから聖杯を取り出して親子そろって人としての肉体を望めば万事うまく

くいくと英雄王は教えてくれた。まさしく人となった瞬間に切嗣が望んだ願いを寸分違わずに叶えて見せる計画である。

しかしこの方法をとる場合、彼らのサーヴァントであるセイバーの願いは叶えられないことになる。さしもの英雄王も聖杯は一つしか所持していなかった。——そう何個もあっても困るだけだが。

だから切嗣とアイリスフィールは心苦しいながらもセイバーに告げるしかなかった。

「君の願いは諦めてくれ」と。

この話を聞いたセイバーは最初、健康になったアイリスフィールの身を心の底から喜び、最後には複雑そうな顔をしていた。

「……だけど彼女がどれほど悩もうと、僕は君とイリヤの肉体を諦めるつもりはないよ。そして人としての肉体を手に入れた君たちを今度こそ背負って見せる。僕の命に懸けて。」

ギョツと妻の温かな手のひらを握り占めて切嗣は宣言した。

涙を浮かべながらも嬉しそうな笑みを浮かべて手を握る返すアイリスフィール。

「英雄王に感謝しなくちゃね。」

ニッコリと微笑むアイリスフィール。しかし、笑みを返しながらも切嗣の内心は複雑であった。

帰り際、先に部屋を退出したアイリスフィールに続いて帰路に着こうとした切嗣の耳に確かにその声は聞こえてきたのだ。

「アイリスフィールか……あれは、いい女だな。」

驚き振り向いた切嗣の視界に映ったのは、妖しげな笑みを浮かべた件の英雄王であった。

肉食獣が獲物を狙うような野性的な目付きで己の妻を見る男。

その瞬間、切嗣の脳内を英雄王ギルガメッシュの様々な伝承が駆け巡った。

曰はく、異国の女神に手を出した。

曰はく、妖精たちを口説いた。

曰はく、美しい人妻を虜にした。

英雄王は武勇において間違いなく英雄の頂点だったが、流石という

べきなのか、その手の色の話においても何気に頂点に立つ男だった。「英雄色を好む」の元となった性格は伊達ではないということか。

思わず睨み付ける切嗣の視線に気が付いた英雄王は邪悪な笑みを浮かべた。

切嗣に人道を説いたあの威厳ある英雄王を返してほしい。

心の底からそう思った。

(まあ、多分僕に発破をかけたただけだろうけど。死ぬ気で守れよ?さもなきや奪うぞってね。)

言われるまでもない。切嗣は不敵な笑みを浮かべた。

原初の王だか何だか知らないが、妻と娘は絶対に守り切る。

己の命に懸けて

一方その頃、部屋を退出したセイバーは一人畳の上で正座をし、考え事に耽っていた。

考えるのは当然、叶わなくなってしまった己の理想についてだった。

彼女とて悲しき運命にあったアイリスフィールとイリヤスフィールに人としての肉体が与えられることは嬉しく思う。

しかし欲深いことに、アイリスフィールの中に正常な聖杯があるという事実が彼女を苦しめていた。

(私は…一体どうすれば…?)

ここで頭に思い浮かぶのは例のごとく英雄王だった。

重傷だな、とセイバーは苦笑した。

——しかし、セイバーには妙な確信があった。

あの英雄王ともう一度、正面から対峙したその時、彼女の答えは出るのだという確信が。

だからこそセイバーは願いが叶わないと知った今もそこまで取り乱すことなく、冷静でいられる。ただ一抹の悔しさと、何故か納得が心の中にあつた。

きつと自身の中で答えは、結論は出ているのだろう。

もはや祖国救済は叶わぬ祈願であるという結論が。

だが、はいそうですかと納得できるような軽い気持ちで彼女は世界と契約を結んだ訳ではない。

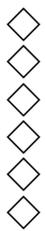
故に彼女は決断する。

元よりセイバーは器用な人間ではない。

どちらかと言えば不器用で、分かりやすいことを好む性質だった。だからこそ答えを出すための手段も単純かつ明快で真正面から己の身の丈をぶつけられるものがない。

何時間と悩み続けた彼女は遂に決意を固めた。

「マスター。頼みがあります。」



「ハア…」

ギルガメツシユは小さくないため息をついた。

汚染された聖杯を乖離剣で消滅させた彼は現在、遠坂邸の修復作業にあたっていた。

ライダーの固有結界の中でこびりついた砂粒をお掃除宝具で綺麗に洗い落とし、時折征服王によってズタズタにされた霊脈のラインを修復する時臣を手伝う。

彼とてこのように便利な道具として王の財宝を駆使することにゲート・オブ・バビロン不満がないわけではない。

しかし、時臣はともかく凜と桜、それに葵に頼まれたとあつてはさしものギルガメツシユも逆らえない。いつの時代も女は強し、である。

だが、ただで使われる英雄王ではない。彼は、これを機会に遠坂邸を魔改造してやろうと密かな野望を秘めていた。もつと豪華絢爛にもつとクールオブビューティーに。

フハハハハ！と英雄王は悪役さながらの邪悪な笑みで王の財宝ゲート・オブ・バビロンを解き放とうとした。

「うん？——使い魔か。」

しかし、上空より飛来した美しい小鳥を見たギルガメツシュの手が止まった。辛うじて遠坂邸は存亡の危機を免れた。

特に敵意の見られぬその小鳥を手のひらに呼び寄せ、その足に括りつけられていた紙を取る。

「——時臣、急いで作業を終わらせるぞ。」

使い魔に括りつけられていた手紙を読んだ英雄王は急に真面目な顔で己の契約者に告げた。

急な変貌に驚くも英雄王がやる気を出してくれるのは時臣にとっても有り難い。

「はい。しかし、一体どうされたのですか、王よ？」

「セイバーからの招待状だ。明日の午前4時に〇〇公園で待つ。このことだ。」

「行かれるのですか？」

「当然だ。——英雄王は挑戦を断らぬ。」

不敵な笑みでギルガメツシュは答えた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

時刻は午前3時50分。

流星に辺りまだ薄暗く、人々は寝静まっていた。

この時間となると流星に寒さが堪えそうだがサーヴァントである彼女にとっては関係のない話であった。

人払いの結界が張られた朝の公園でセイバーは目を閉じ待ち人の到来を望んでいた。

——いや、本音を言うと彼が来るのが少し怖くもある。己の答えを知るその時が。醜い自分をさらしてしまうのではないかという不安が彼女の中で渦巻いていた。

だが、彼は来る。

人払いの結界の中に一際大きな気配が踏み込んでくるのを感じた。静かに瞼を開いたセイバーの視界に移りこんで来たのは黄金の甲

胃だった。

もはや見慣れた鎧姿で彼は迷うことなくこちらへと歩み寄る。堂々と歩みを進めていた彼はやがてセイバーの間合いギリギリの位置で止まった。

踏み込めば一気に詰められるがそれはあちらも同じという位置。

彼はこれから起こることを理解していた。

「――鞘はどうした？」

それが英雄王の第一声だった。

真紅の瞳が輝きを増している。恐らくはセイバーの中に全て遠き理想郷がないことを見抜いたのだろう。

「置いて来ました。」

故にセイバーもまた簡潔に答えた。

訝しげな視線を向ける英雄王に対し、先ずセイバーは頭を下げた。

「――貴方に感謝を。アイリスフィールに身体を与え、キリツグを救ってくれた。それにイリヤスフィールも……」

「礼を言われるようなことではない。それに、そのイリヤスフィールとやらは俺には関わりのない話だ。」

素直ではない英雄王にクスリと微笑むセイバー。

だが直ぐにその顔を引き締め、聖剣を手元に呼び出した。

鞘も風の結界もない抜き身の刀身。

その眩い黄金の輝きに改めて眼を奪われる英雄王。

「これより先の戦いに鞘の守りは不要。――それに、貴方には通じませんしね。」

振り切ったように爽やかに微笑むセイバー。

涼やかな闘志と覚悟を漲らせ、彼女は宣言した。

「貴方に決闘を申し込む!!」

セイバーは聖剣の柄に両手を置き、ギルガメッシュの眼を真っすぐに見つめて宣言した。

此処に、運命の戦いが始まる。

見届けよ、その勇姿を。



「貴方に決闘を申し込む!!」

彼女には分かっていた。己の答えはもはや、自分の内側に問い掛けて出るものではないのだと。この聖杯戦争中、飽きるほど自己問答を繰り返しても意味はなかったのだから。

——ならば、問う相手を変えればいい。

己よりもこの胸の内を知り、国を導いた偉大なる王へと。

ただ言葉を尽くすだけではないけない。

ただ答えを尋ねるだけでもいけない。

彼女は命を懸けた死闘を通じ、剣でもって英雄王を理解するつもりでいた。

死と生の狭間で英雄王と交わり、彼の視点を得られたのなら己の答えも自らの手で得られると考えて。

「…良いだろう。貴様の覚悟に免じて俺も乖離剣は使わないでおく。これよりは、我が武器と我が武技でもって語ろう。故に誓うがよい。貴様もまた己が剣でのみ語るとな。」

「ええ、誓いましょう!これよりは我が聖剣によつて私を示す!」

それは口頭での約束なれど、王としての誇りを重んじる二人にとつては何よりも堅い誓いとなった。

ルールは定まった。あとは斬り合うのみ。

セイバーは聖剣を構え、ギルガメッシュは宝物庫より美しい剣を一本引き抜いた。

武器は構えた。後は戦いの合図を待つのみ。

だが、剣を構えたその瞬間から二人には妙な予感があった。

先手も何もなく、ただお互い同時に戦いの火蓋を切るのだという予感が。

——その予感は現実となる。

穏やかな風が二人の頬を撫でたその瞬間、一拍も遅れることなく二

人は同時に動き出した。

一瞬でゼロになる距離。

振り上げた剣を振り下ろす。ただ全力で、渾身の力で。

そしてその初撃の選択もまた、互いに同じであった。

故に、これから起きるのは鏢迫り合いだろう。刃が重なり、お互いの力を競い合う一種の膠着状態へと陥るはずだ。

しかし、その予想は外れることとなる。

聖剣と宝剣が衝突する。——それと同時に身体中に電流が流れたかのような衝撃が走った。

「——ツ!？」

驚愕もまた同時だった。そのまま鏢迫り合いをするでもなく二人は大きく距離を取った。

セイバーは最初、先程の現象をギルガメツシユの宝具によるものかと分析した。

だが、珍しく驚いた顔をしているギルガメツシユを見るにその可能性は薄いだろう。

それに、害のある衝撃には思えなかった。寧ろ何か欠けていたものが埋まったような、歯車が噛み合ったような、そんな感覚だったような——

「決闘の最中に考え事か？」

だが思考に浸る余地は与えられなかった。セイバーより幾分早く戦意を取り戻したギルガメツシユが新たに呼び出した槍で刺突を繰り出してきた。

条件反射により、剣で受け止めるセイバー。——今度は未知の感覚に襲われることはなかった。

やはり先程のギルガメツシユの武器が原因なのかと考えるが、今となつては詮無き事。セイバーは戦いへと意識を傾けていった。

斬り、弾き、いなし、また斬りかかる。

音楽のように決まったりリズム性はないが、武具たちの衝突が奏でる音はとても心地よいものだった。思えば、ギルガメツシユと直に剣を交えるというのはこれが初めてであるということにセイバーは今さ

らながら気が付いた。

だからこそ、彼の戦い方には実に驚かされることとなる。

ギルガメツシユの周りに王の財宝の門が幾つか現れる。ゲイト・オブ・パレロン

それはさながら石を投げ入れ広がった水の波紋のようで——ギルガメツシユは黄金の波紋から露出した柄を掴み取り、セイバーに切り掛かって来る。

川を流れる水のように、流麗で華麗な剣技。

——いや、それを剣技と呼ぶのが果たして正しいのかどうか。

斧があつた。槍が、槌が、棍棒があつた。

彼はその全てを武器の特性を活かしながら巧みに操り、猛攻を仕掛ける。恐らくはセイバーの弱点や癖を探っているのだろう。多種多様な武器でセイバーを翻弄してくる。

(武器に合わせて動きが最適化されている…？——いや、己の攻撃に合わせて武器を選択しているのか。)

それを防ぐセイバーの精神状態は嘗てないほど安定していた。

極めて冷静にかつ効率的に英雄王の攻撃を防ぎ、弾いていく。

だが弾かれ砕かれることも計算の内なのか、彼の手から武器が尽きることはない。

やはり驚くべくはその戦術眼か。

手の振りの延長に武器が現出し、それをそのまま振るってみせた英雄王。

さながら居合のようなその攻撃は一手先を読んでいなければ不可能だ。

「ハアツ!!」

理の戦術を駆使する英雄王と誇りの剣を振るう騎士王の剣が、何度目かの鏝迫り合いを起こす。

火花を散らす剣と二人の視線が絡み合う。

「——理想が叶わぬと知った割には落ち着いているな、セイバー。」
美しい碧眼を見てギルガメツシユが言葉を紡ぐ。

もつと感情的になると想像していたのだろう。言葉には小さくない驚きを感じられた。

「そうですね。私自身、もっと取り乱すものと思っていました。しかし、不思議と穏やかな気持ちでいる。今はただ、貴方のことが知りた
い。」

罅迫り合いを止め、二人は大きく後方に下がって距離を取った。

「俺のことが知りたいだど？——分かんないな。俺のことは知ること
と、お前が騎士王としての答えを得ること。この二つに何の関係があ
る？」

珍しく、心底不思議そうな顔をして英雄王は問い掛けた。

そんな彼にセイバーは美しく微笑み、再び剣を構えて切り掛かって
来た。

答えを返さないセイバーに怪訝な顔をしつつも打ち合わせていた
ように迎撃するギルガメッシュ。

十合、二十合、三十合、：

途切れることなく、飽きることなく繰り返される。

二人の織り成す円舞は命の奪い合いでありながらどこか神聖で犯
しがたい儀式のようであった。

首を断とうと振るった剣の切っ先が届かない。心臓を刺そうと突
き出した槍が躲される。どちらも、あと一手が届かない。

それはギルガメッシュの千里眼による先読みの結果か、それともセ
イバーの直感の賜物か。

——いや、それだけではないだろう。

予定調和のようにギルガメッシュがセイバーの上段からの一撃を
下段から剣を振り上げ受け止める。衝撃と余波で大地が揺れる。歯
車のように噛み合う二人の力。

それを振り払うようにギルガメッシュが手元を器用に動かす。妙
手により、セイバーの聖剣が下に、彼の剣が上へと逆転する。

訪れた機会を逃すはずもなくギルガメッシュは隙のできたセイ
バーの胴体へと刺突を放つ。しかし、これもまた予定調和のようにセ
イバーはひらりと身体をひねって躲して見せた。

それを追うべくギルガメッシュの横薙ぎが迫る。

だがこれも軽々と受け止めて見せるセイバー。そして再びの罅迫

り合い。

二人には妙な確信が生まれつつあった。お互いの剣が絶対に当たらないという確信が。

黄金をそのまま刀にしたような双剣をギルガメッシュが交互に振るう。刺突に横薙ぎ、逆薙ぎからの袈裟切り。攻撃パターンを手数が多い双剣へと変えたことでその剣の壁は苛烈さを増していく。息もつかせぬ連撃の嵐。重く、鋭くなる一撃。

だが、セイバーはそれを聖剣一本で防いでいく。剛の一撃には柔で、柔には剛で。心得たとばかりに剣を合わせていく。

流派どころか出身も武器も違う二人の英霊。本来ならば何の接点もないこの二人はしかし、終わることない剣の詩を奏で続ける。

一体いつ終わるのか。

三つの夜を超えた時か、魔力が切れた時か、気力が尽きた時か。――その全て否であると答えよう。二人の剣戟は止まない。終わりがあるとすればそれは、どちらかが読みを外した時だ。

死に近いようで最も遠い境界面で二人は踊っていた。

その未知の感覚にセイバーは心躍らせ、ギルガメッシュは驚きに目を見開いていた。

この現象が起きた原因は至って単純。ようはこの二人の接近戦における技量が全く同じだった。ただそれだけである。

武にのみ特化した達人の域には届かぬものの、英霊としては恥じぬ技量。

(これは…)

やがてセイバーは気が付き始めた。

己の剣と、英雄王の剣の根底にあるものが同じであることを。

(守りの…守護の剣。弱きを助け、強きを挫く騎士の剣。)

彼は騎士ではない。剣筋も正統なものではないし、戦法も出鱈目な我流だ。

しかし、通じるものがあつた。

その剣技に染み付いた覚悟が、信念が、己の民を守るために求めたものであるとセイバーに訴えていた。

(同じだ。私とギルガメツシユは同じなのだ!!)
鳥肌が立ち、顔には笑みが浮かぶ。
未知の感動と幸福感にセイバーは酔いしれていた。

対するギルガメツシユは嘗て味わった衝動を思い出していた。

神々に操られた哀れな傀儡。泥より生まれし兵器。正史であれば
友となっていたであろう彼の宿敵。即ち、

(エルキドゥ…)

今戦っているセイバーとは似ても似つかぬ。

だが、ギルガメツシユはその美しい碧眼に、浮かぶ嬉しそうな笑みに、共鳴する剣戟に、思わずその姿を重ねてしまっていた。

思っていたよりも女々しい自分に思わず苦笑するギルガメツシユだが、エルキドゥとはそもそも彼の心を地上に繋ぎ止める為に作られた存在。彼の心を縛っているのも道理と言える。

(だが…これほどまでに心を揺さぶられたのはいつ以来か…)

ギルガメツシユはこの剣戟がお互いの技量による一種の膠着状態であることを見抜いていた。同じレベルの者たちが張り合っているだけだと。

しかし、それだけではないことにも業腹ながら気が付いていた。

(——同じなのか。俺と騎士王が。)

何かが惹かれ合い、共鳴しているのを感じる。

千里を見通す眼であっても捉えられぬ何か。

加速。加速、加速、加速——そして加速。

ギアを上げるがごとく剣撃の速度が上がっていく。

煌めく剣。嵐がごとき猛攻。膨れ上がる王の気迫。

しかし、セイバーは動じることなく剣を合わせる。

少しでも技量が劣っていれば容易く引き裂かれていただろう。少しでも技量が上回っていれば隙を付いて切り捨てていただろう。だが、同じなのだ。同じであるが上に、鏡合わせのようにセイバーは少しも息を乱すことなく全ての剣を受け止める。

交わる剣、合わさる呼吸、共鳴する心。

セイバーの美しい碧眼が、ギルガメツシユの禍々しい紅眼を真つ直ぐに捉える。

その純粹で曇りなき視線はギルガメツシユという男を理解しようとしていた。その心に触れようとしていた。

——故にこそその報い

英雄王が畳み掛ける。もはや武器の切り替えはなかった。彼の手握られているのは一振りの剣のみだ。何の剣であるかは知らないし、どうでもよかつた。

小細工は効かぬ。であればこちらも余計なことは考えずにただ剣を振るうことのみ専心する。

剣戟が苛烈さを増す。戦略を放棄した英雄王が本能の赴くままに剣を振るう。

そして鏢迫り合い。

「ハアツ!!」

均衡する二人の力。交わる視線。そして暴かれるその心。

——彼女は確かに垣間見た。英雄王ギルガメツシユの心象を。その魂の一端を。

無限に広がる虚空の闇。

燃えゆく星と命

燦然と一人輝く黄金の光

「ッ!？」

寒気が走った。

理解できぬものを見たかのように震える心。

「」

気合い一閃。英雄王の剛撃が明らかに動揺したセイバーに迫る。

半ば無意識に防ぐが体勢が崩れる。

「グッ…!!」

均衡は崩れた。

張り合っていたはずの剣が、噛み合っていたはずの歯車がずれていく。

圧倒され、押し切られる。

合わせようとする剣が一拍遅れる。

辛うじて直撃は避けるが防戦一方となるセイバー。

——もうセイバーには分からなかった。

確かに同じものを見たはずだった。剣の中に、彼女と同じ信念を見たはずだった。

だというのに——

「なぜこうも違うのだッ!？」

見えない。ギルガメッシュが見えない。

掴みかけたはずだった。理解できたはずだった。

「ツ…どうして!?!どうして貴方はこんなにも強いのだ!?!私と同じ筈だ! 同じ信念でもってその剣を振るった筈だ!なのに、どうして貴方は折れない!?!愛した国の滅びを見て、全てが無為に消え去ったのを見て、どうしてそのままでも在り続けられるのだ!?!」

剣戟が止んだ。

聖剣の切っ先は地面を向いており、柄には力が込められていないのが見て取れる。

戦意喪失。——いや、答えを前に恐れをなしたか。

その怯えたような姿を見て直感的に悟った。——見たな、と。

この身を理解しよう欲し、僅かながらであれそこに至ったのであれば応えねばなるまい。

それこそが先達たる俺の役目だろう。

「…どうして、か。——なに、簡単なことだ。」

答えを求める碧眼と、答えを与える紅瞳が交差する。

ギルガメツシユはセイバーの中に美しい草原を幻視し、セイバーはギルガメツシユの中にどこまでも広がる宇宙に燦然と輝く星を見た。

お互いの心象が今、繋がった。

思えば、彼と彼女は似ていた。

完璧な王としてデザインされ、事実その通りに生きたものの、人としての自分を捨てきれなかった英雄王。

祖国救済のため、数々の希望を背負って完璧な王として振る舞いながらも少女アルトリアを秘めていた騎士王。

二人はもしかしたら誰よりもお互いのことを理解し合える存在だった。

その苦悩を、歩んできた道のりを分かち合える存在。共鳴していたのは心ではなく魂だったのだ。

似た在り方をした同志に、答えを求める騎士に、

今こそ答えよう。己の在り方を。

王は、——いや、男は吼える。

「俺は信じている！俺の選んだ道が、人類の歩む道が、必ず意味を持つのだと信じている！」

理想主義で夢見がち。楽観的で真っ直ぐな瞳。人の可能性を愚直に信じ続けるその姿。

——英雄王と呼ぶにはあまりに単純で、青臭い。

「故に——」

けれど、それが彼の答えなのだろう。

英雄王という黄金の甲冑に隠された彼の。

「——俺は後悔なんてしないツ！世界の全てが俺を否定しようとも、人理が間違っていると証明されようとも、後悔などしない！」

セイバーはギルガメツシユの視点を垣間見た。

彼はただ信じて見守っているのだ。人類が旅立つその時を。積み上げた歴史と思いが形を成すその時を。

我が子の成長を見守る父のように。星に願いを託す少年のように。

「お前のことも視ていたよ、アルトリア。その足搔きを、嘆きを、そして民たちへの愛を。終わりは儂く、理想には至らなかつたとしても、決して無駄ではなかつた。この俺が認めよう。」

慈愛に満ちた優しい顔でギルガメッシュは告げた。

思えば、彼は見守っていたあの頃からこの少女にどこか通じるものを感じていたのかもしれない。

「だから——」

ほんの一瞬、共鳴した騎士王アーサーへとギルガメッシュは最期の助言を送る。

「お前も信じればいい。お前の国の滅びを、それに抗つた事実を。意味はあつたのだと。ブリテンは確かに在つたのだと。」

(ああ、そうか…)

「信じる」——それがどれほど難しいことか。ただ思いを託すのとは違う。

美しいところ、醜いところ、清濁併せ呑む覚悟と愛を持ち、起こる事象全てに目を逸らさず正面から向き合わなければならぬのだ。

逃げることは許されない。途中で放り出すなどあつてはならない。

だが、国を愛する気持ちだけは誰にも負けないという自負が騎士王にはあつた。

(信じれば良かったのか。私たちの全て、民たちの犠牲、無意味なことなど何もなかつたのだと。)

そも、騎士道における忠誠とは主君が騎士を、騎士が主君を信じる事によって成り立つ道。

民たちは、アーサーの主君はアーサーを信じて王冠を託したのだ。なればこそ、アーサーもまた民を信じなければなるまい。

滅びを回避できなかつた無念はある。悔しさも、情けなさも。

しかし相手を認めず、信じる事もせずに懺悔など出来ようはずもない。

信じること。受け入れること。

これはきつと騎士として国に仕えたアーサーが果たすべき王としての役割なのだろう。

「――私は、騎士王だ。」

一人呟く。するとどうだろうか、体中に力が駆け巡る。

この充実した覇気、胸に宿る使命感。これほどまでに力を感じたのはあの選定の剣を抜いた時、いや王冠を戴いたあの瞬間以来か。

王としての自覚が沸き上がる。誇りが胸に満ちる。

顔を上げると、目の前には王としての在り方を説いた原初の王。一介の騎士に過ぎなかった小娘を王にしてくれた男だ。彼には返し切れない恩ができてしまった。

だから迷惑ついでもう一つ、願いを聞いてもらうことにする。

「英雄王ギルガメッシュよ、最後に一つ頼みがある。」

「――赦す。申してみよ、騎士王。」

「人々の祈りと願いの結晶。我が聖剣の輝きが見たい。付き合ってもらえるか?」

「…良いだろう。貴様の光、願いの力を魅せてみせよ。」

領き、騎士王アーサーは静かに聖剣を頭上に掲げた。

今ここに証明する。彼らの願いと祈りを。その光の美しさを。

彼らの生が無意味でなかったと世界に知らしめよう。

――光が集う。

祈りと願いが形を成した救世の光。

それは祈りであるがゆえに純粹無垢。

それは願いであるがゆえに美しい。

嘗てあつた国の民と王。あまりに儂く無惨な終わりではあつたけれども、希望という光を持ち続けた彼らの心はきつと、美しいものはずだ。

“この一撃でもって未練を断ち切り、王としての責務を果たす。”
騎士王は覚悟を胸に光の束を紡ぎ続ける。これまでの軌跡を、己の国の最期を頭に思い浮かべながら。――それでも、それを受け入れるために。

対する英雄王は乖離剣を宝物庫より抜き出していた。

決闘は終わったのだ。これより始まるは王の証明。騎士王の証。なればこそ、彼もまたそれにふさわしい英雄王の証で応じるべきだろう。

「目覚めよ、エア。此度の相手は少々手強いぞ?」

英雄王ギルガメツシユは乖離剣を頭上に掲げた。

回転を始める刀身。紅い暴風が吹き荒れ、大地を削る。

放つは地の理。正史であれば星の聖剣でも相殺すら出来なかったその力をしかし、ギルガメツシユは本気で解き放つ気でいた。

これも全て騎士王を信じるが故のこと。

「さあ、時は満ちた!今こそお前の、お前を信じた者たちの輝きの真価を示す時だ!魅せてみるがいい!嘗てあつたブリテンという国の光を。騎士王の誇りを!!」

「ええ、——今こそ王の責務を果たす時。聖なる剣よ、我が民たちよ、騎士王アーサー・ペンドラゴンの勇姿を見届けよ!!」

光の輝きが頂点に達する。

〃輝ける彼の剣こそは〃

過去・現在・未来を通じ戦場に散ってゆく全ての兵たちが今際の際に懐く——哀しくも尊き夢。

その意志を誇りと掲げ、その信義を貫けと糾し

今常勝の王は高らかに手にとる奇跡の真名を謳う

其は

『約束された——勝利の剣!!』

輝ける命の奔流。それが光となって放たれた。

迎え撃つは紅き暴風。

世界を滅ぼす乖離の剣を躊躇なく英雄王は振り下ろした。

「天地乖離す——開闢の星!!」

迸る光の奔流と荒れ狂う紅い風がぶつかり合う。

極光が世界を焼き、時空を切断する風が全てを切り刻む。

真つすぐに突き進む二つの巨大なエネルギーはやがて、どちらに傾

くこともなく巨大な光の柱となって上空の曇に穴をあけた。
視界を埋め尽くす黄金の光。

そしてアーサー王は無意味でないことを悟った。

「ほら、だって……こんなにも美しい。」

聳え立つ光の柱。

力強く、そして美しいその姿に深く心打たれた。

星の聖剣は、乖離剣を相殺して見せた。

その奇跡を、栄光を、祈りと願いの力を、騎士王は眼に焼き付けた。

——やがて光は小さくなっていく。

それが世の理だ。永遠に続くものなど有りはしない。

いずれ消えゆくとなら分かっているからこそ世界は美しい。

光の収束と共に、彼女の心も何かが解けていくのを感じていた。

それは王の責務を果たしたが故の達成感か、それとも終わりを認めてしまったが故の虚無感か。いずれにせよ騎士王アーサーはここに消えた。

「……終わったのですね。」

王の責務を果たした少女はポツリと感慨深く呟いた。

「ああ、これで終わりだ。——聖剣の輝き、騎士王の勇姿。確かに見届けさせてもらった。胸を張るがよい、お前こそ誉れ高き騎士の王である。」

そんな少女へ優しく微笑みかけるのはギルガメッシュだった。

見事に己が役割を全うした彼女へと惜しみない賛辞を贈る。

「ありがとうございます。英雄王ギルガメッシュ。誇り高き貴方に最大の敬意と感謝を。」

「赦す。存分に俺を褒め称えよ。」

柔らかく微笑むセイバーに気をよくしたのか調子に乗り出すギルガメッシュ。

そんな彼を少々呆れた眼で見る彼女の眼はしかし、穏やかだ。

——ふと、頬を撫でる優しい風に導かれるようにセイバーは聖剣を

黄金の粒子に変え、鎧を解いた。

後に残ったのは蒼いバトルドレス姿の少女一人だけ。様々な思いが胸に去来する。

責務を果たしたことへの達成感。

一抹の寂しさ。

そして胸の中で燦る温かい気持ち。

全ては目の前の男のおかげであった。

やがてギルガメツシュを見詰める彼女の瞳に決意の火が灯る。

「よしッ！」と小さく呟いて気合を込めた彼女はキリツと凜々しくギルガメツシュの瞳を見つめた。

「ギルガメツシュ。貴方にアルトリア・ペンドラゴンとして伝えておきたいことがあるのですが……いいですか？」

戦いは終わったにも関わらず、今にも戦に赴きそうな気迫を放つセイバー。

そのあまりにも鬼気迫った覇気と覚悟に王の役目果たしたんじや？と首を傾げるギルガメツシュ。

しかし、そこまで真剣に言うのならと特に深く考えるでもなく頷いた。頷いてしまった。

ギルガメツシュの許可をもらった彼女は大きく息を吸い込み、長い深呼吸を一つ。

——思えば、一目ぼれだったのかもしれない。アルトリアは、初めてその姿を眼にした時から彼に心惹かれていた。ただ、騎士王としてのアーサーが彼女の思いを分かりにくくしていただけ。

だから、アーサー亡き今、彼女の思いを阻害する者はいない。

真紅の瞳を見つめ、微笑み告げた。

「——私は、貴方が好きです。」

今までと変わらぬ凜々しい声音でありながらしかし、その言葉には方を越える思いが込められていた。

「」

絶句し、言葉を無くしたギルガメツシュ。彼とて鈍感ではない。その短い告白に込められた思いなど直ぐに読み取れた。

しかし、百戦錬磨の英雄である彼は返答をすることもできず啞然と
していた。

それはあまりにも予想外の告白だったからか。それとも、目の前で
微笑む彼女の笑みがあまりにも美しすぎたせいかな。

困惑した様子の彼を見たアルトリアは思う。もつといろんな顔を
見てみたいと。

自分の欲求に素直になった彼女は未だ硬直状態にあるギルガメツ
シュへと歩み寄り——その唇へ接吻を交わした。

柔らかな感触と、甘い香り。

それを名残惜しいと感じた時には彼女はすでに離れていた。

風に揺れる鮮やかな金髪。草原を思わせる涼やかな緑の瞳。赤み
を帯びた白い頬。

女を思わせながらもその身に帯びる雰囲気は凛々しく、瞳は力強
い。

「——では、また明日。」

恥じらいながらも満面の笑みでギルガメツシュを見つめ、セイバー
は風のように走り去っていった。

朝日がアルトリアという少女の誕生を祝福するかのように、駆ける
彼女を照らしていた。

恋せよ乙女

Q. 剣を交わすことでお互いに似た境遇であることが分かり、一瞬とは言え魂が共鳴したマイソウルフレンドが所帯持ちの自分に告白してきた。どうすればよいのだろうか？

A. 爆発してください。

「ハア……」

英雄王ギルガメッシュは尋常ではない深いため息をついた。

原因は言うまでもなく騎士王改め恋する乙女のアルトリアだ。

あろうことか彼女は騎士王としての答えを得た途端に、少女として告白してきたのだ。

嬉しくないわけではない。

確かに容姿は戦女神さながらの凛々しさと美しさに彩られている。

性格は生真面目だがお堅いということもなく、ジョークも解する気さくさも兼ね備えている。

その健気で聖女が如き清らかな魂は英雄王をして愛でる価値ありと認めざるを得ない。

最後に見せた笑顔も女の子らしくてなかなかチャーミングだった。ギャップ萌えという奴だろう。

——だが、その告白は受け入れられるものではない。自分は妻がいる。

そして何より、昔から恋愛というやつが致命的なまでに苦手嫌いだったのだ。

イシュタルは別だ。

あれは女神の力を味方につけるために己のスペックを総動員して恋に落としたのだ。

——その過程で自分も恋に落ちたのは想定外だったが……

ともあれ、次に会った時には正面から丁寧に断らなければなるまいと昨日の出来事を思い出していたギルガメッシュ。

ピンポン

その時、遠坂邸にチャイムの音が響き渡った。現在の時刻は午前9

時。

子供たちはテレビに夢中で葵は朝食の片づけの最中。

時臣は何やら滅多に掛かって来ない電話の応対に追われている。

「まったく、どこのどいつだ…？」

仕方なくギルガメツシユは重い腰を上げた。

人類最古の英雄王を来客の応対に向かわせる遠坂家の人々は、なかなか精神を鍛えられていた。

ガチャ

「——おはようございます。」

「……」

バタン

渋々開いたドアを一旦閉じた。

そしてもう一度先程の光景を思い浮かべる。

白い上物のお洒落なコートに青いスカート。

足にはニーソックスとブーツ。

顔はすごく見覚えがあつた。具体的に言うとな昨日の朝、公園で斬り合つたような顔。

もう一度ゆっくりとドアを開ける。

するとそこには少し拗ねたような面持ちの美しい顔があつた。

自分のとはまた違った色合いの金髪に、綺麗な碧眼。

どっからどう見ても美人でセイバーな彼女が現代衣装で少女らしくお洒落をして立っていた。

「どうして私の顔を見た途端にドアを閉めるのですか？」

「……何をしている？」

あからさまに拗ねて見せるセイバーいや、——アルトリア。

彼女に冷静な声で突っ込みを入れるギルガメツシユの眼は些か疲れしたような色をしていた。

「昨日、言ったではありませんか。『また明日』と。」

だから来ましたとばかりに笑顔を浮かべる彼女に頭痛が止まないギルガメツシユ。

そんな彼を見たアルトリアは美しく微笑み告げた。

「買い物に行きませんか？」



「粗茶ですが…」

「有難うございます。」

場所は移って遠坂邸の居間。

葵の出した紅茶を優雅に楽しむアルトリア。

見かけは完全にただの少女だが、その正体は今でも剣の英霊である。

凜と桜は自室に退避し、紅茶を注いだ葵もさっさと退散していった。

こうなると居間に残るのは一組の男女のみ。

「それで、買い物に行きたいとは…どういった風の吹き回しだ？」

「どういったも何も、そのままの意味です。——思えば私はこの現世を楽しんだ記憶があまりないので、貴方に案内してもらいたかったです。」

穏やかな顔で語るアルトリア。

「それで俺のところに来たという訳か…。確かに俺は現世を十分に堪能しているが、別に俺である必要はないのではないか？」

「いえ、私は貴方と一緒にいきたい。貴方と一緒になら、私でも純粋に楽しめると思っています。——私は楽しむのが下手ですから。」

猛アタックを仕掛けてくる少女アルトリア。

昨日の今日でこれとは恐ろしい子！と戦慄する一方で、その少し寂しそうな顔を見せられてしまっただけは彼もなかなか断れない。

なまじ共鳴した分、多少彼女の心の動きに過敏になっているのだ。

「…分かった。共に町へ繰り出すとしよう。だが、その前に——」

ギルガメッシュは王の財宝ゲート・オブ・バビロンを起動させた。

アルトリアとギルガメッシュはただでさえ目立つ存在だ。二人で出かけるとなれば衆目を集めずにはいられない。

ギルガメツシュとて讃えられるのには慣れているが、今回ばかりは別だ。

人混みに上手く紛れる為にも認知阻害の指輪が必要だろうと思っただの。

だが――

「うん？故障か…？」

いつまで経っても指輪が出て来ない。ゲート・オブ・バビロン 王の財宝に限って故障はないだろうが、とにかくおかしい。

疑問に思ったギルガメツシュは直々に自分の腕を黄金の波紋の中に突っ込んでみた。

もしかしたら手前でつかえているかもしれない。

「まったく、今日は何だっただ――痛ッ!？」

その瞬間、手の甲に痛みが走った。

文句を垂れながら宝物庫の中を探っていたギルガメツシュは突如腕を引っこ抜く。

何事かと思い引っこ抜いた手を見ると、何かに抓ねられたかのように赤く腫れていた。

「大丈夫ですか!？」

慌てて駆け寄ってくるアルトリアを片手で制し、ギルガメツシュは首を傾げた。

(はて？前にもこんなことがあった気が…？)

「ああ、赤く腫れてしまっていますね…本当に大丈夫ですか？」

心配そうに見つめてくるアルトリアに大丈夫だと簡潔に答え、ギルガメツシュは指輪を諦めて出かける準備を始めた。

◆◆◆◆◆

「…ギルガメツシュ。貴方は騎乗スキルも所持しているのですか？」

アルトリアは車の助手席でポツリと呟いた。

「ああ、一応持っているぞ。だが、そもそも俺の身体は神々にデザインされたものだ。わざわざスキルで区分しなくとも、大概のことは出来

る。」

巧みなギアチェンジと加速。滑らかなハンドルさばき。

アイリスファイルの運転を味わった身から言わせてもらおうと、彼の運転はまさに完璧だった。

それを特に誇示するでもなく楽しそうに運転をする英雄王。

その横顔を時折チラチラと伺いながらアルトリアは改めて車内を見渡してみた。

(その…凄く…高そう、です。)

上品な革張りのシート。低い車体。明らかに普通の乗用車とは違うエンジン音。——俗に言うスポーツカーという代物だ。

アイリスファイルが暴走させていた車も高そうだったが、今乗っているこのスポーツカーもあれと同じ、いやそれ以上に高そうな内装と外装だった。

免許はどうしたのか?とか、何故サーヴァントが車を持っているのか?などと無粋なことは問わない。——セイバーだって無免許でバイク乗り回していたのだから。

「…安物であることは許せ。本当はもつといい車があるのだが、何故か王の財宝から出せなくてなあ…反抗期か?」

(これで安いんですか!?!というか王の財宝に車収納してたんですね!?)

驚愕のアルトリア。

もはや非常識すぎてどこからツツコミを入れればいいのか分からない。

「だが、これもいい車ではある。——うむ、神代の舟には敵わぬが良き乗り物だ。これもまた現世に来た甲斐があるというもの。」

本当に楽しそうな英雄王。

思えば、彼は聖杯問答の際に言っていた。この時代を見極めるために来たのだと。

その言葉通りかどうかはわからないが、彼は己の眼で現代の街と人を見つめ、己の手で現代の発展した技術に触れている。

その姿を見ていると、何だか戦いと聖杯しか頭になかった自分が損

をしていたような気持ちになる。

「……帰りは私が運転してみてもいいですか？」

「おお！お前もこの車の良さが分かって来たか！——良いだろう、お前のハンドルさばきを見せてもらおうではないか！」

今からでも遅くはないはずだ。

現代に触れ、心のままに楽しむ。

愛車を褒められて嬉しそうな英雄王を見て微笑み、少女は胸を高鳴らせた。

◆◆◆◆◆

「……道理で駐車場が混んでいたわけだ。」

大型ショッピングモールに到着した二人は早速連れ立って散策を始めたのだが、如何せん日が悪かった。

今日は日曜日。

ギルガメツシユもアルトリアも曜日など気にしないので注意を払っていなかったが、よりにもよって一番人が集まる日にやって来てしまったらしい。

「その……人目が凄いですね……？」

しかもアルトリアの錯覚でなければ、ショッピングモールを訪れているほぼ全ての人々の視線がこちらに向いている気がする。

鋭利な金髪のイケ面と女神が如き美貌の少女。

そして二人とも持っているカリスマスキル。

人の眼が集まるのは必然だった。

「……予定変更だ。先ずは変装が最重要使命だな。」

その気になれば一睨みで視線を払える自信がギルガメツシユにはあつたが流石にそれは憚れた。

となれば少しでも自分たちの容姿が目立たぬように努めるほかない。

「変装、ですか……？」

可愛らしく首を傾げるセイバーに頷き、ギルガメツシユは千里眼で

見つけた服屋へと彼女を連れて入っていった。

「いらっしやいま…せ…」

固まる店員をスルーし、奥へと向かうギルガメツシュ。

そこには様々な小物が置かれていた。伊達メガネや帽子、サンングラスなどまさに変装にはもってこいの品々。

暫く棚の品を見ていたギルガメツシュは無造作に黒縁の伊達メガネを装着し、黒い中折れ帽を頭に被った。

(さて、鏡は…)

「おお！とてもよく似合っています!!」

鏡を探していたギルガメツシュはしかし、興奮した様子の少女に遮られた。

これがお洒落男子というものなのですね！キリツグにも見習わせたい…などとブツブツ言っているアルトリアに嘆息しながら彼はツツコミを入れる。

「いや…似合ってたならダメだろう…目立たせないための変装だぞ…？」

だが、事実として彼にそのメガネと帽子は似合っていた。

伊達メガネは少々鋭すぎるその紅眼を柔らかくし、帽子は日本では珍しい純正の金髪を隠していた。

「…まあ、いいか。そら、次はお前だぞセイバー。」

心得たように近づいてきた店員にメガネと帽子を預け、購入の旨を伝える。

自然と恭しくお辞儀をした店員には眼もくれず、ギルガメツシュはアルトリアのための変装キットを探し始めた。

「い、いえ…私は別に…」

何やら照れる彼女をガン無視し、ギルガメツシュは小物を漁る。

「ふむ、これなんかどうだ？」

消極的なアルトリアを置いて店内をうろついていたギルガメツシュは青い縁の伊達メガネと女性用の洒落た茶色い帽子を彼女に差し出した。

変装としては些か安易だが、差し出されたアルトリアはとても嬉し

そうにそれを受け取った。

「——良く似合っている。」

身に着け、鏡を探す彼女にギルガメツシュはシンプルな誉め言葉を送った。

彼には詩の才能も添付されていたが、この場では過大な言葉で飾るよりも率直に伝えたほうがいいと思ったのだ。

「あ、ありがとうございます…」

頬を赤く染め、嬉しそうに照れる彼女。

ギルガメツシュの見込んだ通り、それらの小物は彼女によく似合っていた。

青いメガネは彼女をより理知的に見せ、洒落た帽子が大人っぽさを演出している。

「よし、これを貰おうか。」

サクツと変装道具を購入したギルガメツシュ。

お礼を言ってくるアルトリアにひらひらと手を振った。

「さて、買い物と行くか。」

先ず向かったのは本屋。

その蔵書の多さに驚くアルトリアを連れ、ギルガメツシュは気ままに本棚を見て回る。

哲学書、歴史書、ミステリー小説、少年漫画の続巻。

少しでも興味の湧いた本を片っ端から手に取るギルガメツシュ。

自分はどうしようかと本棚の間を歩くアルトリアはふと、目に付く本を見つけた。

「アーサー王物語」

王の責務から解放された少女は感慨深くその表紙に手を添わせる。

目の前にある本が真実を語っているのかは分からない。或いは後世の人々によって都合よく捻じ曲げられた創作物かもしれない。

けれども、例えそうだとしても、彼女は残るものがあつたのだと信じている。

柔らかく、何かに思いを馳せて微笑む少女。

——ふと、後ろから伸びてきた男の腕がその本を掴んでいった。

何事かと振り向いたアルトリアの正面にいたのは、買いたい本を山積みにしたギルガメツシュ。

彼は何食わぬ顔でアーサー王物語を山の中に加えた。

驚き目を見開く彼女を置いて彼はまた本の探索に出かけてしまった。

「フッフ、素直ではないというか、何というか…」

彼の持つ本の山の運搬を手伝おうと歩き出したアルトリアはまたしても目に付く本を見つけた。

「———すいません。この本も加えていただけませんか？」

もう十分に探索したのか会計に向かおうとするギルガメツシュに声を掛ける少女。

チラリと差し出してきたその本の題名を見た彼の顔が引き攣った。

「ギルガメツシュ叙事詩」

悪戯っぽく微笑む彼女に嘆息しながら彼は渋々その本を山に加えた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……よく食べるな。」

山積みになった空の皿を見て思わずギルガメツシュは呟いた。

二人は現在、昼食を取るために少々お高いレストランを訪れていた。

最初は遠慮していたセイバーだったが、気が付けばテーブルに皿の山を積み上げていた。

ギルガメツシュの言葉に恥ずかしそうにする彼女だったが、フォークを持った手が休まることはない。

「まあ、そう嬉しそうな顔をするのなら注文した甲斐がある。———その君、この欄に並んでいるデザートを全て持って来てくれ。」

メニューを適当に指さしてウェイターに注文するギルガメツシュ。

果たしてそれを注文と呼んでいいのか。金に糸目をつけないその豪快さに戦慄するウェイターとアルトリア。

「あ、あの…流石にこれ以上は頼み過ぎでは…？」

「うん？金の心配をしているのなら大丈夫だぞ。我が黄金律を持ってすれば全てのメニューはおろか、この店ごと買い取ることも可能だ。

——というか、買うか？」

「……」

メニューに載っているデザートと同じ感覚で店ごと購入しようとする彼に急いで首を横に振るアルトリア。

そうか、とあっさり購入の検討を止めた彼は優雅に紅茶を口に運ぶ。

特に金持ちであることを見せびらかしているわけではないが、彼は時折こういった出鱈目な価値観を見せる。

そのことに驚きつつも不満などあるはずはない。

実は非常に金の掛かる女であるアルトリアと、規格外の黄金律を誇るギルガメツシュ。

金銭的な意味でもこの二人の相性は抜群であった。



「なかなかやりますね…」

「当然だ。言っただろう？この身は神々により全ての才を与えられていると。この程度の球技など造作もない。」

ギルガメツシュとアルトリアのペアは現在、公園でバドミントンを楽しんでいた。

きつかけは、昼食を済ませぶらぶらとショッピングモールを散策していたその時、アルトリアが興味を示したので、ギルガメツシュが財力に物を言わせてスポーツショップでやたらと高いラケットと羽を購入したのだ。

最初は遠慮していた彼女だが、公園で打ち合ううちに楽しくなったのか、今ではやたらと綺麗なフォームで羽を打ち返していた。

初めてラケットに触れたにしては大したものだ。が、生憎と相手はチートボディーの持ち主であるギルガメツシュ。瞬く間にコツをつ

かみ、プロ顔負けの無駄に洗練されたフォームで悠々と彼女の相手をしていた。

だが、彼は忘れていた。アルトリアという少女が持つ負けず嫌いという特性を。

結果として、根本的に相性がいい二人は途切れることのない高度なラリーを続け、公園中の注目を集めることとなってしまった。

ただでさえ人間離れした美貌の二人だ。中には写真を撮る人もいる。

流石に居心地が悪くなってきたギルガメツシュ。

「な、なあそろそろ止めないか？」

「何を言うのです？勝負はまだまだこれからですよ!!」

あつ、これ終わらねーやつだ。

ギルガメツシュが気付いた時には既に時遅く、手を抜くと怒り、差をつけると拗ねる彼女の相手を強いられることになるのだった。

◆◆◆◆◆

「やはりこの車はいいですね!!」

「当然であろう!!」

結局、購入した全ての羽が使い物にならなくなるまでバドミントンを楽しんだ二人は現在、ドライブと洒落込んでいた。

ドライブバーはアルトリア。

運転がしたいと頼み込んでくる彼女にギルガメツシュがハンドルを譲ったのだ。

華麗にギアを変え、ハンドルを回すアルトリア。それを褒め称えるギルガメツシュ。

現在、二人のテンションはMaxであった。

普段は真面目なアルトリアですらコーナーを狙ってドリフトかましていることから、その振れ切れようが分かるとういうものだ。

実はとすべきか、ギルガメツシュは兎も角アルトリアもスピード狂だったのだ。

地面を舐めるように疾走する鉄の騎馬に大興奮のセイバー。

それは自分がハンドルを握っているが故だろう。
そして助手席なのに楽しそうなギルガメツシュ。

彼は普段から自分しか運転しないのでこの助手席というのは初めてだったのだ。

(こう、何と言うか…いつ事故が起こるかわからないスリルがいいなあ!!)

謎の理由で興奮している英雄王。

——現代の若者のように、偉人である二人の英霊は冬木の道路を駆けける。

◇◇◇◇◇◇◇◇

暖かい色。

眩しく、燃えるような夕陽。

「綺麗ですね…」

「ああ…」

海岸沿いの駐車場に停車した二人は、海の地平線に沈もうとする夕陽を眺めながら散歩していた。

昼の終わりと夜の到来を告げるその光は、力強くも儚かった。

海風が吹き付ける。

とても冷たい風だったが、英霊である二人には関係のない話だった。

「私は——」

暫く無言で海岸沿いを歩いていたその時、ポツリとアルトリアが呟いた。

足を止め、ギルガメツシュは彼女に向き直った。

「——私はもう聖杯を求めません。ですが、この現世に留まるつもりでいます。」

「何故だ？」

「…マスターとアイリスフィールに頼まれたのです。どうか、イリヤスフィールを救うために力を貸してほしいと。私もあの幼子を救う

ために騎士として剣を振るうことに異議はありません。彼らの安全を保障できた後、私は現世を去ろうと思っっています。」

今後の方針を伝えたセイバーの瞳がこちらを捉える。

その目は暗に問うていた。『貴方はどうするのか?』と。

「…俺は現世に留まるつもりはない。見るべきものをこの目で見極め、英雄たちの勇姿を見届けた。後はあの征服王と決着をつけるのみだ。」

「……そうですか。」

きつぱりと言い切った英雄王。その瞳には迷いなど欠片もなく、未練も何も残していないことを意味していた。

分かっていたとはいえ、アルトリアの胸中にズキリと鈍痛が走る。

「……では、私の思いには応えてもらえないのですね…?」

「……そうだ。」

少々迷ったものの、彼ははっきりと答えた。

一気に沈んだ顔となるアルトリア。心なし浮きだっていた顔が陰る。

さながら太陽が雲に覆われたかのようにだった。

「……分かっていました。貴方は愛妻家の英霊として後世に伝わっている。多少の浮気話もありましたが誠実な貴方のことだ。全て誤解なのでしよう。」

「……。」

「しかし、それでも私の思いは知ってほしかった。——剣で共鳴したあの時確信したのです。貴方は、私の運命の人なのだ。」

「……それは」

「出来れば、貴方にとっての私もそうでありたかった。」

共鳴。

間違いなくそれは俺とセイバーが根本的に近い者であるから起きたことだ。

『運命の人』という表現とて誇張ではない。

恐らく出会いさえ違えば、俺は彼女と結ばれていただろう。

だが、それはもしもの話だ。

俺は女神を妻に持つ英雄王としてこの聖杯戦争に参加した。

生前ならともかく死後にあつてその在り方を歪めることは出来ない。

——涙を浮かべ、悲しそうな彼女を真っ直ぐに見つめ、ギルガメツシユは告げる。

「お前は美しい騎士であり——女だ。それだけは事実だ。胸を張れ。」

「……フッフ、もしかして慰めているのですか？」

少々不愛想ながらアルトリアを気遣うギルガメツシユ。

その姿を見たセイバーはクスリと嬉しそうに微笑んだ。

「む？よもや俺が恋愛下手に見えたのか？だとしたら心外だぞ。」

不機嫌そうに眉を吊り上げる英雄王。

そもそも恋愛初心者はセイバーの方だろうと、ぶつくさ言っている。

気付いていないかもしれないが、あの戦いから彼はこういった素の表情を見せるようになった。無意識のうちに彼女に心を許しているのだろう。

アルトリアはそのことを誇らしく、嬉しく思う。たとえ受け入れられないとしても——だからこそ

「——鬱陶しいかもしれませんが、どうか私が貴方を思うのを赦して欲しい。」

儂くも力強い瞳。

「……ふん、人を思うのに許可などいるものか。俺もお前のような美女に思われるのは気分が良い。残り少ない時間ではあるが、お前が頼んでくるのであれば買物であれ何であれ、多少は付き合おう。」

恋人というには遠く、友人にしては近い距離で肩を並べ、二人は夕陽の中歩いて行く。

王の戦

「いかななあ……」

赤毛の巨漢、ライダーのサーヴァントであるイスカンドルはポツリと呟いた。

「何がいけないんだよ？今も僕に勝ったばかりじゃないか？」

拗ねたような口調で言葉を返したウェイバーの手にはゲームのコントローラが握られていた。つい先ほど、己のサーヴァントにゲームで敗北を期したところだったのだ。

勝者であるライダーが何を嘆いているのかと責める彼の視線は未だテレビの画面に向いている。——どうやら現代の娯楽にすっかり夢中になってしまったらしい。

そんな己のマスターに苦笑しつつ、コントローラを置いてサーヴァントは口を開いた。

「実は英雄王を打倒する策を練っていたのだが……どうやっても敗北する未来しか見えなくてなあ……」

「ふーん……って、お前……僕をゲームでボコボコにしながらそんなこと考えてたのか!？」

憤慨する己のマスターにイスカンドルは年季が違うわいと胸を張る。

実際、ゲーム初心者のウェイバーを片すのは楽勝だった。

「……けど、確かにあの英雄王を倒すのは難しいよな……」

「ああ……」

二人して黙り込む。

難しいどころの話ではない。事実不可能に近い挑戦だ。

イスカンドルなどギルガメッシュの戦闘能力を知るためだけにウェイバーの反対を押し切って他陣営と同盟を組み戦いを挑んだというのに、ウェイバーの令呪がなければ生還することもままならなかった。

「——やっぱり、令呪しかないか。」

その時、ウェイバーの声が響いた。

先日の戦闘を思い出していたイスカンドルは思わずその鋭い視線を己のマスターの手の甲に向けた。そこにはギルガメッシュの奥義を喰らいかけた彼の運命を塗り替えた武器がある。

手の甲を見やるウェイバー。

令呪を見つめるその視線は、初めてあった時よりも鋭く、理知的で、

一人の将のように見える。

「…ふむ、軍師あたりが適任か。」

「はあ？」

イスカンドルは今のウェイバーを見て思ったことをそのまま口にした。

突如彼の口から出た軍の位に怪訝な顔をするウェイバー。また何時もの戯言かと思つたのだ。

「如何なる逆境であろうとも、常に最善の策を見出し、軍を導く——正に軍師だ。」

だが、いつになくライダーの顔は真剣だった。その眼は強敵を前に熱を放つ英雄の眼ではなく、現代の娯楽に眼を輝かせるイスカンドルの眼でもない。人を見極め、その才を見出す王の眼。

彼は征服王イスカンドルとしてウェイバー・ベルベットを見ていた。

その事実を感じ取ったウェイバーの胸に、何故か正体不明の熱いものがこみ上げてくる。

この感情は何だろうか？認められたことへの喜び？——いや、そんな軽いものではない。これは感動だ。憧れていた王に認められたことへの感動。

「……そうか、臣下とはそういう意味だったのか。」

笑みを浮かべ、イスカンドルを見上げるその眼を見てようやくつと征服王は気が付いた。己が現代に來たその意義を、英雄王が述べた言葉の意味を。

「——ウェイバー・ベルベットに問う。汝、余の臣下となり、覇の軍に加わる覚悟はあるか？」

「……」

言葉を失った。

あり得るはずのないその提案に、王の軍勢を見た時に抱いた夢が叶おうとしている現実には、ウェイバーは言葉を失った。

ちっぽけで、卑屈で、虚栄心の塊である自分が歴史に名高い征服王に、羨ましいほどの輝きと冒険心を持った男に認められ、軍師を勧められている。

「ど、どうして僕なんか……？」

信じられない状況に直面したウェイバーは何時ものように体を小さく縮め、自分を恥じるようにボソボソと口を開いた。

「どうしてもこうしてもあるかッ！お前は余の命を救い、その能力を示した。誇るべき偉業だ。称賛されるべき判断だ。胸を張れ。」

「……」

嘘偽りのないその言葉。

嘗てない榮譽にウェイバーは嬉しさと照れから顔を真っ赤にしていた。

「……ふむ、お前の自己評価の低さは分かっていたつもりだったが、このままでは罅が明かな。——今、この場で決めよ。余に仕えるか、それともマスターであり続けるか。」

答えを返さないウェイバーへと征服王が再度問い掛ける。その真剣な声音から、先延ばしにするのは不可能だと悟った。そんな事を申し出るような輩を征服王は軍に加えないだろう。

二者択一

入るか、入らないか。

答えはもう己の中で出ているのだ。だが、期待を裏切ってしまうのではないかという不安が、どうしても卑下してしまう自分が、王の軍勢に相応しくないと考えてしまう。

「……」

黙り込むウェイバーを征服王が見据えている。

思えば、征服王は最初ウェイバーのことなんて見てなかった。ただ己の冒険心と野心のままに聖杯戦争をかき回していた。それが今で

は見向きもしてなかった己の契約者と向き合い、同じ道を駆けようと手を伸ばしている。

(同じ道…王の軍勢が駆けるあの大地…)

思い浮かぶ。

青い空、砂の大地、進軍する王の兵たち。

先頭に行くのは我らが王。周りを固めるのは歴戦の英雄達と軍師である自分——

「——あなたこそ、僕の王だ。僕を導いてほしい。同じ夢を、同じ大地を、共に歩ませてほしい。」

答えは出た。隙あらば直ぐに出てくる卑下な自分に打ち勝ち、ウエイバーは己の本心を告げた。

「当然だ。ウエイバー・ベルベットよ、お前を将の一人として認め、我が軍に加える。余に仕え、知恵を絞り、軍勢をこの先へと進ませて見せよ。」

此処に主従が誕生した。



「王の帰還であるぞ」

セイバーを武家屋敷まで送り、遠坂邸に帰って来たギルガメッシュは気だるげに肩を回しながら居間へと入った。

「王さまおかえりなさい！でくと、どうだった？」

「デートではない。ただの買い物だ。」

女の子らしく他人の恋愛に興味深々の凜を軽くあしらひ、王は特別に設けた遠坂邸内の自室へと足を向ける。

「王よ、お帰りなさいませ。」

「時臣か。何用だ？俺は少々疲れているのだが…」

その途中で己の契約者である時臣とも出くわしてしまった。早く自室で休みたい彼はぞんざいな態度で接する。——正直、敵と戦うよりも疲れていた。やはり恋愛事は嫌いである。

「実は、王が出かけている間にこのような手紙が届きました…」
時臣は恭しく手紙を王に差し出した。

何となく嫌な予感がしつつも受け取り中身を見てみる。

「……なんだ、こう、最近の流行りなのか？ 決闘を申し込むというのは…」

そこには筆ペンで書いたのか、無駄に達筆な字で英雄王に決闘を申し込む旨が記載されていた。場所と時間まできっちり指定されている。裏には「マケドニアの征服王より」などとご丁寧不差出人の名前も記載されている。

「流行りかどうかはわかりませんが…こうも決闘が続くと聖杯戦争の在り方を思い出せなくなりますね…」

時臣も頭が痛いとはばかりに額を押さえている。ギルガメッシュも同意見だった。下手に策略を巡らされたり、遠坂邸を固有結界に放り込まれるよりは単純明快で綺麗に決着のつく方法ではあるが、いまいち釈然としない。

「だがまあ、挑戦を受けた以上は受けねばなるまい。丁度奴とは決着をつける予定だったしな。」

◆◆◆◆◆

冬木大橋。

太陽が沈み、闇が訪れるその時間。人払いの結界の中で巨漢の男と彼に寄り添う従者のような少年が何をすることもなく佇んでいた。

彼らが待つのは黄金の王。

即ち、英雄の始まりにして神話の頂点。

万夫不当の英雄王である。

彼の王の強さは身をもって体験している。

強力な原典宝具の数々と何処かの神話系統に属する未知の奥義。

真紅の魔眼と手数の高さも相まって、もはや存在自体が反則の存在である。

——だが、決して無敵ではない。勝機はあるはずだ。

征服王イスカンダルと軍師ウェイバー・ベルベットの視線が交わ

る。策を生み出し、魔力も十分。お互いの在り方を定め、覚悟を決めた。もはや後戻りはできない。

「……来たか。」

故に、強大な気配が橋に侵入し黄金の粒子が逆巻いた時もウェイバーは動じることなかった。

黄金の甲冑。鋭利な真紅の瞳。

戦闘準備を整えた英雄王はチラリとウェイバーに視線をやり、口を開いた。

「その少年を避難させなくて良いのか？ 戦いの余波だけで死にそうだが？」

開口一番、皮肉を飛ばす英雄王。その唇は笑みを描いており、どういう心境からその言葉を選んだのかは不明だった。

しかし、彼の言葉は真理である。

ウェイバー・ベルベットという平凡な魔術師の少年がこれから起こる神話の戦いに放り込まれて命を保てる保証はどこにもない。

彼はただの人間。英霊を前にしては自衛さえままならない貧弱な命なのだ。

「心配は無用だ。こいつは余の臣下である。共に戦場を駆け、己の武器を振るい、敵の首を討つ将の一人である。」

だが、征服王はそれを否定する。彼は己の臣下なのだ。共に戦うに値する価値ある命なのだ。

ウェイバーの肩に手を置き、イスカンドルは胸を張る。

「そうか。やはり見込んだ通りの関係になったか。」

そんな彼らの少し歪な関係をしかし、英雄王は笑わなかった。寧ろ、懐かしいものを見るような好意的な態度である。

「……やはりお主は余と坊主の関係がこうなることを予期していたようだな。一体どんな眼をしておるのだ？」

今回のことに関しては千里眼ではなく、彼という特殊な個体が備えていた知識によるものである——が、一々説明するのも面倒である。

英雄王は誤魔化すように肩をすくめて見せた。

「……まあ、些末事よな。これから始まる戦に比べれば。」

征服王の魔力が膨れ上がる。

空間が、彼の放つ膨大な覇気と魔力によって軋みを上げる。

鳴り響くは雷鳴。

吹き荒れるは熱砂。

灼熱の太陽の元、

軍団の足音が迫りくる。

「——集えよ我が同胞たちッ！今こそ原初の伝説を倒し、我らは最果てへと至るッ！さあ、開戦だッ！！」

固有結界が発動する。

現代の風景が征服王たちの心象で塗りつぶされ、今は亡き戦場を甦らせる。

禁忌とされる大魔術に三度放り込まれた英雄王。最早見慣れた景色と肌を焼く灼熱の太陽。——だが、太陽を遮る何かを見た。それは線の集合体のような何かで、例えるならば：雨が近いだろうか。だが、砂漠に雨は降らない。ましてやここは固有結界の中。在り得ざる事象だ。

であればアレは何か？答えは簡単だ。

「以前、貴様が降らせた血の雨だ。存分に味わうがいい。」

——槍である。

固有結界の支配者である征服王が英雄王の現出する場所と時間を僅かながらに指定することで、最初から待機させていた兵たちによる投槍での奇襲を成功させたのだ。

取り込まれた瞬間、眼前に迫る槍の雨。不意打ちに等しいその攻撃に対し、英雄王は片腕を無造作に振った。すると彼を守るように一瞬で数多の盾が現出する。

「この程度の奇襲で俺を仕留められると？」

「——思つたらんさ。」

悪寒が背筋に走る。

急ぎ、視界を防いでいる盾を収納し、頭上を見上げる。そこには太陽を背に、こちらへと急降下するライダーの戦車があった。稲妻を纏い、重力を味方にして速度を増すその威容。あれに潰されれば、ギル

ガメツシユとて命はない。

(迎撃は間に合わない。あの速度と角度では防御も無駄か…)

ライダー決死の突撃を安易に止められるとは彼も思っていない。だが、詰みではない。

ギルガメツシユは刹那の間に征服王から視線を外し、横を見た。千里眼により拡大された景色に映るのは騎乗し、待機する兵たち。恐らくはライダーが仕留めそこなった時、ギルガメツシユの退路を断つために配置されているのだろう。良くできた軍略に感心しつつ、そのうち一人に目を付けた。

(…仕方がない)

◇◇◇◇◇◇◇◇

彼ら騎馬隊に課せられた任務は、王自ら仕掛ける攻撃を防いだ英雄王の挟撃だった。

提案したのは彼らの大王——ではなく、彼のマスターである小柄な少年だという。さらに王曰く、その少年を王の軍勢に加えたいのだろうか。

その話を王の号令と共に英霊の座で聞いた彼は相も変わらず困った王だと苦笑しつつ、その少年には懐疑的だった。

王が突如新しい配下を連れてくることは珍しくないため、驚きもしなかったが今度の臣下は現代の魔術師で、戦士でもなく貧弱な精神と肉体の凡庸な少年であった。

見どころも特になく、彼によって立案された策もミスがないようにと作られた弱気で保守的なものだった。王が補正を加えたものの、大よそ少年の意見に肯定的だったというのも気に喰わない話だ。

地面とぶつかる寸前に向きを変えた戦車に轢かれたであろう英雄王を警戒しつつも、彼はそのようなことをつらつらと考えていた。

パリンツ

その時、何かが割れるような音がした。水晶玉を落としてしまった時のような、繊細な物の壊れる音。はて、一体何が壊れたのだろうか

と少し視線を後ろにしたその時、彼の視界に黄金の甲冑に包まれた足が見えた。そして首には走る衝撃。

バキツ

骨を折られたような異音と共に、騎乗していた彼の命は絶えた。文字通り瞬間移動を果たし、強烈な蹴りで一人仕留めた英雄王は蹴りの勢いもそのままにふわりと回転し、持ち主を失った騎馬に跨った。

当然馬は暴れ出すが、圧倒的な覇気で強引に沈め、手綱を握る。

(やはり壊れたか…)

驚愕する兵士たちを尻目に騎乗した英雄王は粉々になった手元の宝具を見た。この宝具は、ランクこそ高くないものの目視で確認した目標物まで使用者を空間転移させる優れ物である。——欠点を挙げるとすれば、緊急脱出などに使うものではないため非常に壊れやすいとう点か。

だが、使ってしまったものは仕方ない。彼は手元に残った最後の破片を砂漠に放り、兵士たちに向き直った。

「さて、貴様らのせいで貴重な宝具を一つ使い捨てた。弁償してもらうとするか。」

馬に跨り、王は片手をゆるりと上げた。すると後光が差すかのよう

に彼の背後が黄金に染まり、数多の武具が顔を出す。

ゲート・オブ・パレロン
「王の財宝ツ!!」

片手を振り下ろすのと同時に圧倒的な暴力が解放された。

槍が、剣が、斧が、王の眼前に広がる有象無象を吹き飛ばす。

抵抗は無意味だ。防御も、回避も。

無限に等しい質量と、先を見る王の権能。

逃れられる道理はなく、軍勢は紙切れか何かのように蹂躪されていく。

残酷で、無慈悲

圧倒的で、絶望的だった。

「投槍を投擲、これ以上撃たせるなツ!!」

征服王の新たな臣下となった少年が、与えられた騎馬の上から指示

を飛ばす。

これ以上好き勝手をさせていては固有結界の維持に関わるのだ。
今はまだ、その時ではない。

「「応ッ!!」」

予想していたよりも力強く、覇気を感じさせるその指示に兵士たちは笑みを浮かべて返事を返す。危機に瀕してはいるものの、少年の不思議な頼もしさが心に響いたのだ。なるほど、我らが王はまた面白い奴を拾って来たらしい、と。

だが、彼らの思いは別として英雄王の猛攻は止まない。

彼の王は、自身の周りに盾を配置して投槍を防ぎ、兵士から奪った馬を巧みに操って陣を整えようとする王の軍勢に追い打ちを掛ける。

思うがままに戦場を駆け、気の赴くままに蹂躪する。

暴力の化身、財の極み。躊躇うことなく王の権能を駆使する彼を止められる猛者は、この場にはいなかった。

(やれやれ、歯ごたえがないな。乖離剣を警戒しているのは知っていたが、それまでか。)

一方の英雄王はと言うと、そのあまりの手ごたえのなさに疑問を抱いていた。

乖離剣を使わせなかったために、細心の注意を払ってくるのかと思いきや、以前の襲撃ほど焦っているようには見えなかった。

故に王の財宝でちまちまと戦っていたのだが……このまま雑魚を蹂躪していても埒が明かないと判断した。

故に、英雄王は選択する。乖離剣の開帳を。

元より征服王相手ならば不足はないと思っていたのだ。

この世界を切り裂き、そして橋の上で決着をつける。些か興ざめではあるが、正に理想の終わり方だ。

「さあ、目覚めよエア！お前にふさわしき舞台が整った!!」

英雄王は騎乗したまま乖離剣を引き抜き、頭上に掲げた。

刀身が回転し、紅い暴風が吹き荒れる。

最早こうなっては止めることは不可能。

此処に、正史と同じ結末が訪れる。

「天地乖離す開闢の星ツ!!」

世界を切り裂く一撃が放たれる

時空を切り裂く紅い風は偽りの大地を削り、剥がしていく。

空は裂け、兵は座に還り、全てが現代へと——あるべき姿に戻っていく。

ところで、

英雄王にとって一番の隙とは何だろうか。

敵が未知の宝具を使ってきた時？否。彼には未知なんて存在しない。

予想もしない奇襲を受けた時？否。予想不可の攻撃も、王の財宝は容易く防ぐ。

答えは単純。

切り札を使った直後だ。

乖離剣エア。その反則じみた力を持つ剣に唯一の弱点があるとすれば、如何に英雄王といえどもこの宝具の使用中は王の財宝を使わないことだろう。

切り札とは、その存在に絶対の自信と信頼を寄せているからこそ成り立つものだ。

次いで言うと、乖離剣解放中では王の財宝を開いたところで意味はないだろう。全てを破壊する暴風なのだから。——開くとすれば、乖離剣解放の前後だ。

そして英雄王は今回、宝物庫を閉じていた。

身を守る盾は見渡らず、解放直後の現在、身体は硬直している。

『令呪効果発動。』

『乖離剣によって固有結界を破壊された瞬間、英雄王の背後に空間転移し、真名解放せよ』

「遙かなる蹂躞制覇オオオ!!」

開戦前にウェイバーが発動させておいた令呪が今、効果を発揮する。

征服王イスカンドルをその戦車ごと英雄王の背後に空間転移させたのだ。

迫る雷の戦車。

ゼウスの牡牛を従え、征服の王たるイスカンドルが今、原初の英雄に覇を唱える。

「――」
雷光が爆ぜる。滾るゼウスの紫電は空気を焼き、真名解放により一瞬でトップスピードに踏み込んだ神牛の突進が迫る。

避けられるはずなどなかった。

一人の男の肢体がボールのようにバウンドしていく。

アスファルトを削り、血が飛び散る。

数回目のバウンドでようやくと衝撃を拡散させたのか、男の動きは止まった。

それを見届けたライダーの戦車もまた動きを止める。

白煙を上げる車輪の向こう。

そこには掛け値なしの本気を浴びせた王が橋の手すりにもたれかかるように倒れていた。

黄金の甲冑はボロボロで、時折紫電が帯電しているのが見て取れる。先程の攻撃の残滓だろう。顔は此処からでは分からないが、血を流しているところを見るに無残な様子となっているのではないだろうか？

だが、一つ問題があるとすれば――

「…なぜ、生きておるのかのお…？」

生き残れる道理などなかった。だというのに、英雄王はまだ動こうとしている。

呆れた生命力と頑丈さだった。

だが、瀕死であることに変わりはない。疾く首を刎ねるべく、征服王はキュプリオスの剣を引き抜き、戦車の手綱を引いた。

――が、牡牛たちは動こうとしない。いや、動けなかった。

怪訝に思ったイスカンドルが車輪を見てみると、そこには何かしら

の拘束宝具が絡みついている。驚きに目を見張ったその瞬間、数多の宝具が飛来した。

「フンッ！」

剣を振るい、叩き落としていく。

動けぬ戦車から離れ、瀕死のはずの英雄王を見やる。

「ええい、貴様不死身か何かかッ!？」

思わず悪態をついてしまう。その視線の先には、ふらつきながらも英雄王が橋の手すりに手を掛けて立ち上がっていたのだ。何かしらの治療宝具を使用しているのか、身体の周囲には王の財宝が展開され、緑色の暖かな光を放っていた。

「……ふん、不死身ではない。この鎧に助けられたと言っておこう。」

さらには征服王の悪態にも返事を返して見せた。驚く征服王に向かって不敵に微笑む英雄王。

その言葉の通り、英雄王は黄金の鎧によって一命を取り留めていた。正確に言うと、乖離剣発動前に真名解放した鎧によって、だ。「備えあれば患いなし」とはよく言ったものだ。

だが、流石に今回の肝を冷やした。まさか事前に令呪を条件付けで使用しているとは思わなかったのだ。ウェイバーの残り令呪数を見れば、千里眼で内容まで知ることも出来ただろうが、二人が主従関係になったことが何故かものすごく嬉しくてうっかり忘れていたのだ。

まあ、今回は二人に軍配が上がったということにしておこう。

——自分を納得させた英雄王は手すりを乗り越え、橋の下に飛び込んだ。

「なにッ!？」

驚愕する征服王は思わず手すりに駆け寄る。戦車に轆かれて頭を打ち、気でも触れたのか。己の宿敵の姿を追って下を覗き込んだ征服王は、己の杞憂が霧散していくのを感じた。

——闇夜の川に黄金の光が輝く。

「フハハハハハッ!!」

天翔る王の御座

古代インド神話に登場する黄金とエメラルドで形成された空飛ぶ舟。水銀を燃料とする太陽水晶によって太陽エネルギーを発生させ駆動する古代オーバーテックノロジーの結晶が橋の上から飛び出してきた。

「なんとおっ!?!」

一瞬で橋の上まで上昇した黄金帆船は一旦静止した。

空中に浮かぶ美しきその威容。

神秘的な舟の王座に腰掛け、王は不敵な笑みを浮かべた。

「だが、次を譲るつもりはないぞ。——覚悟しろ、反撃の時間だ。」

輝舟の周囲に、ゲート・オブ・パピロン王の財宝の門が複数開いた。

「チイツ!?!」

上空から仕留めるつもりなのだろう。

イスカンドルは急ぎ、拘束された戦車へと駆け寄り、拘束道具を剣で斬り払った。

「行くぞッ! 『ゴルディアス・ホイール神威の車輪』!!」

機動力を取り戻した二匹の神牛、ゴッド・ブル飛蹄雷牛が吼える。

頭上から降り注ぐ劍群を避けるように戦車が走り出した。

「逃がすかッ! 『ゲート・オブ・パピロン王の財宝』!!」

「又オツ!?!」

冬木大橋にガトリング砲が如く降り注ぐ宝剣たち。アスファルトに容易く穴をあけるその威力と量に戦慄しつつ、征服王は空へと退路を求めぬ。

「——空中戦とはこれまた懐かしい。良いぞ、付き合おうではないかッ!!」

黄金帆船が空を駆ける征服王の戦車を追う。エメラルド色の軌跡を描きながら物理法則を無視した軌道を魅せる黄金の舟。——だが、征服王としてライダーのクラスで召喚された戦車乗りだ。アーチャーのクラスである英雄王に負けるわけにはいかない。

「ハアッ!!」

手綱を振るい、加速を促す。嘗てない主の切羽詰まった様子に神牛たちも力を振り絞る。

紫電が勢いを増し、追尾してくる英雄王の宝具を幾つか焼き払う。空を足場とする車輪が回転数を増し、トップスピードに踏み込む。

「フハハハハハ!!面白いッ!このような鬼ごっこはイシユタル以来だぞ!!」

思っていた以上の奮戦を見せる征服王に嬉しそうな英雄王。彼は久々の空中戦に心を躍らせながら人差し指で軽く玉座の肘掛けを二回ほど叩いた。

「ギアを二つ上げるぞ!上手く逃げ切れよ?さもなければ串刺しだッ!!」

天翔る王の御座の内部機構が王の指示により稼働する。ギアが二段変換され、唸るような音と共にエメラルド色の翼が輝きを増す。

宣言通り、王の舟はさらに加速を始めた。

最早速度で張り合っても魔力量で敗北すると読んだ征服王は動きで英雄王の追尾から逃れようとしていた。即ち、空中と言う地理を生かした三次元の立体起動。

急反転、からの急上昇。180度旋回からの急降下。

現代の戦闘機では即座に機体が崩壊すること間違いなしの、物理法則を無視した超起動。流石はライダーというべきか。神話の戦車を操るに足る実力だった。——だが、英雄王はその全ての挙動に付いて来る。

「ええいッ!一体どうなつとるんだあの舟は!?出鱈目な軌道をしよつて!!」

音すら置き去りにする古代兵器たちのドッグファイト。雷が煌めき、剣群が飛び交う混沌とした現代の空で英雄王は笑う。

「フハハハハハッ!!逃げ切れるとでも!?!」

彼は完全に修復した肉体で玉座に腰掛け、眼でライダーの戦車を追っていた。

舵輪を操る必要などない。何せこの舟は、叙事詩において「思考と同じ速度で天を駆ける」と謳われた究極の空中戦闘機。彼はただ、征服王の戦車に追いつきたいと願うだけでいいのだ。

千里を見通す真紅の魔眼が輝きを増す。先程は見落としがあった

せいで手痛い一撃を貰ったが、次は見落とすつもりはない。

(さて、あと数手で詰みか…なかなか楽しかったが、仕方あるまい。)

雲へと突っ込んだ征服王を追うため、先回りをすべく舟を操る英雄王。

ライダーもかなりの消耗を強いられていた。雲を抜けてきた時にはもう逃げ切るだけの魔力も体力も残っていないだろう。

(うん?あの馬は…?)

だが、舟を操っていたギルガメッシュはその時、遠方からこちらに駆けて来る一頭の巨馬を視界に捉えた。黒く艶やかな毛並みと逞しい体躯。美しさと力強さが同居したその馬の名は「ブケフアラス」。征服王イスカンダルに幼少のころから付き添う相棒である。彼の戦車と同じく空を駆けるその馬の背には小柄な少年が乗っていた。

(あれは…!?)

「これで最後だッ! 『遙かなる蹂躞制覇』 オオオ!!」

その少年の顔を捉えた瞬間、雲を突き破り、雷を纏った征服王の戦車が飛び出してきた。

「——ツチ」

軽く舌打ちをしたギルガメッシュはすぐさま玉座から跳躍した。

機動力においては群を抜いた性能を誇る天翔る王の御座だが、その耐久性は残念ながらライダーの戦車と張り合える程ではない。

「その舟は貴様にやるッ!——だが、貴様の戦車も頂くぞッ!!」

あっさり舟を手放した英雄王はしかし直ぐに次の舟を召喚した。確かに天翔る王の御座は便利な宝具だが、予備機体などいくらでもある。

宝物庫から取り出した先程よりも少し小柄な機体に乗込み、英雄王は腕を振るった。

「ゲイト・オブ・バビロン
王の財宝!!」

蜂の巣にされる征服王の戦車。既に限界を迎えていたのだろう。余りにもあっけなく、神威の車輪は跡形もなく破壊された。

だが、まだ決着ではない。

千里眼は確かに捉えた。征服王が令呪によって転移される瞬間を。

相も変わらず見事な令呪の使い方だが、転移先の見当はついている。「やはり、か。」

視線を横にやった英雄王は、征服王と少年を乗せたブケファラスが地上に降りていくのを見つけた。恐らく空中に留まる為の魔力すら尽きたのだろう。

それに合わせるように英雄王も舟を地上に降ろしていく。



「またお前に助けられたな…礼を言うぞウェイバー。それからもう一つ。——すまんなあ、折角計画通りに進んでいたのに仕留めきれなかったわい。」

警護のために貸し与えていたブケファラスを駆り、またしても窮地を救って見せた少年を讃える王。そんな彼の言に照れくさそうにしつつ、少年は答えた。

「礼なんかいいよ。——僕は、お前の臣下なんだから。それと英雄王のことは仕方ない、かな。もともとこんな雑な作戦で仕留められるとも思ってたしね。」

気にしていない、と少年は強がって笑った。笑うしかなかった。——これが最後の会話であると分かっていたから。

「……余は臣下に恵まれておるの。」

笑って終わろうとするウェイバーに応えるため、王もまた笑みを浮かべた。

その眼尻に浮かんでいる涙には見て見ぬふりをし、彼は王として臣下に最後の命を下す。

「ウェイバー・ベルベットよ、お前はまだわが軍に加わるには未熟で幼い。お前にはまだ、知るべき真実と、見るべき世界と、重ねるべき年がある。」

朗々と語るイスカンドルの胸には短い間であつたが共に過ごした幼い契約者との日々が思い起こされていた。

恐らく、このまま自分が死ねば少年は後をついて来たいと願うだろ

う。だが、それはまだ早い。少年にはまだまだ無限の可能性が広がっているのだ。それを今、摘み取るような真似は王として看過できない。故に、

「——生きろ。その生を全うし、小さくとも意義のある死を抱け。その命の火が火種となり、僅かであれ世界を灯したその時、余は我が軍勢と共にお前を迎え入れるであろう。」

時は未だ満ちず。その小さな生に与えられた責任を果たせと王は告げた。

ウェイバーは遠い未来へと思いを馳せる。

成長した自分。

これまで乗り越えてきた苦難を胸に、彼は王の軍勢へと駆け寄る。

満面の笑みと共に迎え入れる大王。そんな王を見て苦笑しつつ、出発の準備を始める英雄たち。

「必ず。」

此処に契約は成った。王は領き、死地へと向かう。少年は、その雄姿を見届けようと眼を開く。

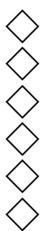
何時の間にやら地上に降りて来ていた英雄王に最後の戦いを挑まんと征服王は己の愛馬に跨り、高々と剣を掲げた。

「彼方にこそ栄えありッ!!我らの夢、今生では届かなくとも、後に続く者がいるッ!我らを忘れぬ者いる限り、夢を諦めぬ限り、我らは世界に挑み続けるッ!——いざ行かん、最果て^{オケアノス}へッ!!」

世界へ、そして英雄王へと彼は吼える。

無謀と笑うことなかれ。無意味と侮ることなかれ。

これは王の戦である。



「——夢より覚めたか?」

「……ふん、此度も良き遠征であったわ。良き臣下にも出会えたし、な。」

数多の武具に貫かれ、英雄王の前に膝をついた征服王。敗北し、消滅しようとする彼へと言葉を送る。

「また、幾度なりとも挑むがいいぞ。次は、あの少年も一緒にな。」
「ハハハ、そうだのお…そう、するか。」

あれほど存在感を放っていた大王の威圧感が薄れていく。様々な爪後を刻んだ思い出深き現代から消えようとしている。

「……次こそは負けぬぞ、我が宿敵よ。」

「貴様が一方的に宿敵と言っているだけだがな。もっと、こう友好的に…」

「——いや、貴様は余の敵だ。」

「…ああ、そう。」

ふざけるように、最期の時を笑って終わるために、二人は軽口を叩く。

「——先に行く。いずれまた会おうぞ、ギルガメツシュ。」

「ああ。世界を駆け、この俺に追いついて見せるがいい。イスカンダル。」

己の王が敗北し、現世から消える最期まで少年は王の勇姿を眼に焼き付けていた。

決着はついた。

勝ったのは英雄王。分かっていた結果とは言え、口惜しさが胸にこみあげる。

唇を噛み、喪失感に耐えていたウェイバーはその時、力強い視線を感じた。顔を上げるとそこには彼を見つめる真紅の瞳があった。

「ッ!？」

視線が交わる。魔眼が圧倒的な死を振りまく。だが、ウェイバーは震えながらも視線を外すことはなかった。確信があったのだ。外した瞬間に、己は死を迎えるという確信が。

死ぬわけにはいかない。自分はまだ未熟で、若く、あの軍勢に相応しくないのだから。

一体何秒の出来事だったか。ウェイバーにしてみれば、数十分のこのように感じたが、それは錯覚だろう。

結果として、ウェイバーは小さな勝利を収めた。

先に視線を外した英雄王は、特に何も言うことなく去っていったのだ。

「まだまだ全然なっていないってことか……」

緊張から解放されたウェイバーは瓦礫となったアスファルトにしゃがみ込み、夜空を見上げた。

一人という事実が胸が凍りそうになる。胸にぽっかりと穴が開いたかのように喪失感が押し寄せる。

だが、残るものが確かにあった。

まだ遠い未来を思い、少年は胸に手を当てる。

確かな鼓動を刻むその音は、王が言っていたオケアノスの潮騒のようだった。

女神降臨・憑依変性

心地よい感覚を後頭部に感じる。

柔らかくて、スベスベしてて、最高級の枕みたいな寝心地。

生前にこの感触を何度も味わったことがある。俺が頼むまでもなく彼女の方から頭を掴んで無理矢理膝に載せていたのだ。今となつてはいい思い出。

いい思い出だよな？すごく首が痛かったような記憶があるが……

いや、きつといい思い出だ。うん。だって女の子の膝枕だぞ？そんなのいい思い出に決まってるじゃないか。うん。

——などと考えていたその時、頬に激痛が走った。

「……いいひやい（痛い）」

抓られてると理解し、渋々眼を開ける。どうやら、現実逃避は此処までらしい。

「いい加減、起きたらどうです？あ・な・た。」

するとそこには、満面の笑みを浮かべた俺の女神の姿があった。生前と変わらない美貌。不思議な安堵が胸に押し寄せる。やはり男にとって大事なのは妻なのだ実感する。

その輝かしい笑顔の背景は黄金のように輝いて——というか、本当に輝いていた。

「ここは……王の財宝の中か？」
ゲート・オブ・パピロン

周りを見渡せば見覚えのある数々の宝具が転がっていた。これほど煌びやかで節操のない宝物庫はこの世にただ一つのみ。

確信をもって王は妻に問い掛けた。

「ええ、そうよ。貴方の意識だけ持ってきたのよ。簡単に言うと、エレシユキガルの真似事ね。」

優しく微笑む良妻賢母。

だが、エレシユキガルの名を出した時だけ眼が笑っていないのは気のせいかな。うん、気のせいだろう。

「へ、へえ〜。ところで何でここに？いや、再会できたのはうれしいんだが…」

若干震える声で尋ねる英雄王。

「神殿に仕えていた星詠みの婆は覚えていて？あの婆さんが言っていたのよ。私の夫が死後、英霊として降臨した地にて運命の人と出会う、とね。そんな不吉なこと言われたら不安になってしまいうじゃない。——実際に変な虫が湧いているしねえ。」

妖艶な流し目。弧を描く美しい唇。

挑戦的で、挑発的な魅惑の表情。

だが、俺は知っている。それは彼女が怒っている時の仕草だと。

背筋に冷たい汗を感じつつ、脳内で余計なことをしてくれたあの食えない星詠みのクソ婆を罵る。

「でも、どうやって宝物庫に潜り込んだんだ？」

「それは簡単よ。私を奉る祭壇や宝具を全て貴方の蔵に収納させたの。エルマドウスに命じてね。だから今の私は貴方の蔵の中でも姿をとることは出来る。流星に実体で現世に降臨するのは無理でしょうけど。」

ようやくと納得がいった。つまり、今の彼女は勝手に放り込まれていた祭壇を利用して宝物庫内に顕現した電脳体のようなものか。だが、電脳体であるがゆえに現世まで姿を現すことは出来ない、と。

——まあ、本物の神が降臨したところで世界の修正を喰らって消滅するだけだろう。

神々は滅んだのだ。

「……それで、結局目的は何なんだ？」

「決まっているでしょ？——あの女を殺すのよ。」

愛と嫉妬と戦いの化身である女神イシユタルは、恐ろしく美しい顔で嗤った。

† † † † † † † †

「ギルガメツシユ。急に呼び出しとは……どうされたのですか？」

以前決闘をした公園。ある意味思い出深きその場所に、セイバーは呼び出された。

突然の手紙には驚いたが、乙女的にこういう展開は大歓迎だ。

受け入れてもらえないとは分かったが、そう簡単に割り切れるものではない。もしかしたら、という期待に胸を膨らませてしまう。

『……』

しかし、目の前に黄金の男は目を閉じたまま何も答えない。何か言い出しにくい案件なのだろうか？閉じたその表情は、少し苦しそうにも見える。

「あ、あの……大丈夫ですか？」

呼び出されておきながら蔑ろにされているセイバーだが、今はそんな事よりも常と異なる彼の方が気掛かりだ。

『……』

しかし、王は応えない。これはただ事ではなさそうだと直感したセイバーは即座に鎧を纏い、周囲を警戒しながら彼へと近づいていく。「どうしたのですか？」

小声で呼びかけながらじりじりと距離を詰める。もしかすると、変装したアサシンの仕事ではないかと疑うが、それは違うと直感は告げている。

そして――

その眼が開いた。

「ッ……」

禍々しい真紅の瞳。色合い自体は彼のものと一緒だが……何かが違う。無意識のうちに聖剣を構え、警鐘を鳴らす直感に従ってセイバーは距離を取った。

「貴様、何者だ？」

戦闘態勢に移行した騎士王を眼前に、しかしギルガメッシュの形をしたソレは微笑んだ。

『おやおや、最近の小娘は挨拶の時も剣を手放さないのか？』

明らかに彼とは違う口調。本物よりも粘着質で、冷酷で、残酷で、艶やかな声。支配者の息遣いを感じる。強者特有の気を感じる。

身体から溢れ出す冷や汗を感じながらセイバーは再度問うた。

「もう一度だけ問う。貴様、何者だ？」

鋭い視線。顔立ちこそ少女のものであれ、その身に纏う雰囲気は紛れもない戦士のもの。空気を引き締めるようなその覇気を受けてしかし、ソレは微笑んだ。

『問われたのならば、応えねばな。』

虚空に黄金の波紋が浮かび上がる。何度も目にした彼の宝具の燐光。眉を顰めるセイバーを他所に、ソレは中から現れた不思議な液体の瓶を手に取り、一気に飲み干した。

「何を……」

しているのか。と尋ねることは出来なかった。

『ウフ、フッフ……アハハハハハハハ！』

液体による変化が如実に起こる。

男にしては長かった黄金の頭髮が更に伸び、女性の長髪に。切れ長の瞳はそのままに、男らしい鋭利な美貌が丸みを帯び、女性らしい繊細な肌。

身体もまた変化していく。

長身が心なしに縮み、代わりにと言わんばかりに胸部の肉が増える。逞しい筋肉も失われて滑らかな曲線に。萎んでいくようでありながら、その実艶やかに。弱体化しているようでありながらその実、神威が増す。

さらに

『黄金の鎧よ、我が光輝となれ。』

一言念じれば、ギルガメッシュが使用していた黄金甲冑が彼女に合わせて変形していく。

面積の何割かが削られ、その艶めかしい女体を覆うように。

全ての変化が終わった時、そこに立っていたのはギルガメッシュでありながらそうではない黄金の女だった。

流麗な流し目でセイバーを捉え、魔性の女が名乗る。

『我が名はイシユタル。』

貴様が色目を使った男の——妻だ。』

」

絶句である。もはや意味不明である。ギルガメッシュに呼び出されたと思ったら、その妻が夫の肉体を乗っ取っており、拳句の果てに不思議な液体で性別を反転させて女神を名乗っている。頭がパンクしてしまいそうだった。

しかし、即座にセイバーの意識は現実に戻されることになる。

——突如飛来した剣群によって。

「ツ……」

たとえ不意を討たれようが、そこは常勝の騎士王。無意識に近い状態でも動いてくれる身体によって、造作もなく全てを打ち払った。

「何をするのですツ！ええと……女神イシユタルツ！」

一瞬呼び方に困るが、本人が名乗っていた尊名で呼ぶことにした。一応これでも気を遣ったつもりだが、女神さまはそう捉えなかつたらしい。

『様を付けよ、小娘！それと、軽々しく私の名を呼ぶなツ!!』

理不尽な、などと抗議することそのままならない。腕を一振りすれば、女を背景として展開される数多の門。セイバーも良く知るその宝具が、牙をむいていた。

『ゲイト・オブ・バビロン王の財宝』

黄金の燐光が踊る。ありとあらゆる宝具の原典が収納された宝物庫。無限の質量を誇る絶対の宝具が発動する。

女王の様に彼女が腕を振るえば途端に稼働する剣群。

「何故、貴方がその宝具を使えるのです!？」

あれは彼の宝具の筈だ。他人が使っている所を見るのは、気分が悪い。思わずセイバーは問い掛けていた。

しかしイシユタルは詫びれることもなく、寧ろ豊かな胸を張った。『夫の財産を管理するのは、妻の務めであろう？そんなことも知らないのか？』

「ぐツ……」

いちいち心に刺さる嫌味を飛ばしてくる黄金の女。セイバーは直感に頼るまでもなく悟った。自分の苦手なタイプの女性だ、と。

理屈は通じない。自分に正直で、目的のために一直線で手段は問わない。ただ我欲の為だけに犠牲を出せる強欲なる女神。

『さあ、死ね。剣にその身を裂かれ、槍に柔肌を貫かれ、毒でもがき苦しみ、炎に焼かれて死ね。』

しかも、殺意Maxときた。何が原因かは知らないが、大層ご立腹らしい。惨たらしく、残酷な死を少女に与えるべく夫の財宝を無尽蔵にばら撒く。

だが、はいそうですかと死ぬるほどアルトリアは容易い女ではない。

「風よッ！」

風王結界を限定的に開放し、迫る剣群を薙ぎ払う。そして鎧を解除し、余剰魔力を全て推進力に回す。港の初戦でランサー相手に使用した乾坤一擲の構えである。

「ハアアアアッ!!」

聖剣の切っ先を地面に向け、魔力を噴射。セイバーは、真つすぐに駆ける風となった。

『ツ……ゲート・オブ・バビロン主の財宝!!』

数舜の動揺。しかし即座に復活したイシユタルが腕を振るう。セイバーが駆け抜ける風の道を塞ぐように展開される波紋。だが——遅い。

ランサーに防がれた突撃を再び使用したセイバーとて、何の考えもなく突っ込んだわけではない。宝物庫を展開する速度。状況判断能力。剣群を放つ射撃の粗雑さ。戦いの中で観察し、直感を研ぎ澄ませ

た結果、あの女神は遠隔操作に近い形で彼の身体を操っているのではないかと推測。

故に、接近戦に持ち込めば比較的あっさり勝負はつくだろうと見積もった。彼の身体を傷つけるのは本意ではないが、致し方ない。殺すのではなく、意識を奪う程度の心算でセイバーは剣を振るった。

しかし

「ッ……いー」

刃と刃が噛み合う感覚。セイバーの一撃は、容易く受け止められていた。問題はそこからだ。受け止めるだけならば何の不思議もない。肉体のスペック的にはあちらの方が上なのだから。しかし、無意識のうちにはセイバーは彼女を見くびっていた。戦闘は出来ぬ愛の女神であらうと。

『七頭の戦鎚シタ』

「ッ……いー」

何時の間にか女神の手に握られていた槌。

七匹の蛇が絡み合ったような獰猛なデザインの鎚頭を持つその戦鎚は、ただ持つだけで敵を打ち倒すという神の宝具。女神イシユタルが生まれた時から持っていたという宝具。

数舜輝きを放った槌により——セイバーの身体は弾き飛ばされた。

『嘗められたものだな。私は確かに愛の女神だが…同時に戦女神でもある。夫の宝物庫に

仕舞ってある我が宝具を使えば、小娘の斬撃を受け流すなど容易い

ことよ。』

「くっ……」

『まあ、分らんか。貧相な胸の小娘には……』

ピシリッと空気が凍る音がした。鋭さの増す碧眼。増大する魔力と怒気。女を自覚してからというもの、屋敷でひたすらいちやつく切嗣とアイリスフィールを眺めること数日。

アイリスフィールの胸部に設置された母性の塊を見て、だらしなく顔を歪めるマスターの姿を目撃したセイバーは悟ったのだ。自分に不足している魅力を。

だからそれなりに気にしていたというか、一周回ってかんがえないようにしていたというのに……女神イシユタルは間違いなくセイバーの琴線に触れやがった。それも、思いつきり。

「……胸の大きさが何だというのです？」

『何だ、知らなかったのか？うちの夫は巨乳好きだぞ？』

「……」

むべなるかな。

事実である。それは、敢えてそのことを考えないようにしていたセイバーの直感もしつかりと悟っていて……絶望と怒りが、貧相な胸の内から湧き上がってくる。

「……では、その小娘の一太刀を浴びてみるか？傲慢なる金星の女神よ。」

完全に目の座った騎士の王が剣を構える。

『死ね、小娘。』

「貴方がな、女神。」

前代未聞のキャットファイトが開始された。

† † † † † † † †

「英雄王！英雄王はいずこにおられますか!？」

遠坂邸にアサシンの大声が響く。優雅に聖杯戦争の幕引きを考えていた時臣は眉を顰めた。

「何だね？騒々しい……」

自由に遠坂邸へ入れる権限は与えているものの、こんな品のない大声で騒がれては迷惑だ。一言注意しようと顔を出した不機嫌そうな

この家の主。その姿を捉えた瞬間、アサシンは彼へと迫った。

「大変ですッ！大聖杯が！陛下のおっしやっていた大聖杯がッ！――」

「お、落ち着き給え。初めから順を追って説明してくれるかい？」

骸骨仮面の男に迫られて腰の引けていた時臣だが、姿勢を正して問い直した。彼の口にした“陛下”とは間違いなくギルガメッシュのことだろう。いつの間にかここまで手懐けていたのかは知らないが……この慌て様を見るに、よっぽどの事らしい。

「実は、このアサシンザイド。英雄王閣下に命じられて、大聖杯の様子を監視していたのですが……なんと先程、黒い泥の様なモノが杯から溢れ出てきました……」

「黒い泥？」

「はい。このザイド、即座に閣下から渡されていた宝具を地面に設置してバリケードを作り上げたのですが、あと数時間もすれば破られるかと。」

ふむ、と時臣は自身の顎に手をやった。

間違いなく、異常事態だろう。無色であるはずの願望器から泥が溢れ出すなど。それに、この事態を予期していたかのような英雄王の采配。

本人が不在である今、問い詰めることは叶わないが、これはもしかしたら英雄王から課せられた試練の様なモノなのかもしれない。

この程度、自分たちで乗り切って見せよという無言の。

「その泥とやらを監視する者を数名派遣し、それ以外の全てのアサシンを集結させる。遠坂の名において、冬木市にまで被害が及ぶことだけは避けねばならん。」

「御意。」



頭上より黄金の雨が降り注ぐ。

「グッ！」

それを苦心しながらも防ぐのは騎士王セイバー。ギルガメッシュよりも狙いが甘く、放たれている宝具にも一貫性はない。故に、ライダーの固有結界の中で味わった爆撃に比べると些か見切りやすく防ぐのにもそこまで苦労はなかったが……それも最初のうちだけであった。

『どうした小娘！その棒切れを振るうので精一杯か!?!』

女神イシュタルはセイバーが必死に距離を詰めようとするのを見て取るや否や、宝物庫より光り輝く神の舟。天舟を召還。遙か上空に飛翔し、一方的な宝具の爆撃を開始した。

騎士王の誇りを具現したと言っても過言ではない聖剣を棒切れ呼ばわりされ、セイバーとて腹が立った。しかし、反撃の機会が訪れない。剣が届かない。

聖剣を解放すれば即刻叩き落とせるだろうが……間を置かずにとれる剣群のせいで溜めの時間を取れない。

サーヴァントたる自分が主を置いて外出するのだ。当然、不測の事態に備えて韃はマスターに預けている。

つまるところ、詰みだった。

『アハハ！やはりこの程度か、小つさい小娘！所詮貴様なぞ、胸も身長も器も小さいただの薄汚い野良犬よ！もはや見るに堪えぬ。疾く――消え去るがいいッ!!』

「言わせておけばッ！」

宙に浮かぶ天舟。露出された腰に手を当て、悠然と女神は小娘を見下ろす。程度の低い戯言だが、一々癩に障るその罵倒。言い返したいのは山々だが、剣を振るうのに必死で言葉が出てこない。

しかし、実際のところセイバーはそこまで腹を立てているわけでは

なかった。直感ではあるが、あの女神が悪に属する者とは思えなかったからだ。ギルガメツシュの身体を乗っ取ったというのは流石に目に余る行動だが、それは夫である彼自身が叱責を下すだろう。

であれば、セイバーが今なすべきことは彼女の意識を沈め、彼の意識を取り戻すことだろう。

『フン……これでは、ブリテンとかいう国も程度が知れているな。』
「――」。

だが

女神はアルトリアを完全に怒らせた。

言っておくが、これまでセイバーは手加減していたのだ。中身が違うとはいえ、ギルガメツシュの身体を傷つけるのは気が進まない。だからそれなりに気を遣って戦っていたのだが……今の言葉は駄目だ。良くない。赦せない。

「……貴様、侮辱したな？」

譲れぬものがある。例え、今の言葉を放ったのがギルガメツシュ本人であったとしても、彼女はソレを許さない。

「私の祖国を、侮辱したな？」

凍てつくような殺気が満ちる。美しい碧眼から放たれるその絶対零度の視線に、女神も笑みを消し、思わず構えた。

風よ

口にしたセイバーの鎧が消える。そして暴風となった剣の切っ先が地面に向き――

『さっせんッ！』

すかさずイシュタルは宝物庫を展開させた。セイバーの意図は明確だ。先ほど地上にて使用した魔力放出による突貫だろう。確かにあの出力であればこの空まで届きうるだろうが、それを許す女神では

ない。

嵐よ

『なにッ!?!』

しかし、騎士王は女神の予想を超えた。荒れ狂う風の魔力を剣に纏わせ、セイバーはそれを剛腕で振るつたのだ。結果、巻き起こる竜巻が如き暴風。視界を遮られるなどというレベルではない。舟をも揺るがす天変地異。

『正気かッ!あの娘……!』

毒づきながらイシユタルは上空へと天舟を移動させようとする。流石にこんな暴風の中では碌に操縦もできない。

光よ

嵐から距離を取っていた女神はその時、間違いなくその黄金を見た。何千という時を重ねようとも色あせることのない希望の光。騎士王が振るつた栄光と願いの結晶。

『まさかッ!?!』

そのまさかである。収束していく光。嵐の中にあつてなお輝くその一点。セイバーは間違いなく、やる気であった。

女神よ、一度口にした言葉は消せぬのだと思ひ知れ。

「^エ約束^ッされた——」

宝物庫より盾を全面展開。盾であれば何でもいい。この身を守護できるのなら何でもいい。女神は夫の宝具を乱用することによって対城宝具すら容易に防いで見せる防御壁を築き上げて見せた。

「——勝利^カの剣^リ。」

しかし、女神は知らなかった。

調子に乗ったギルガメッシュの計らいにより、体内に本物の聖杯を埋め込まれて無尽蔵の魔力を手に入れたアイリスフィールとも魔力供給ラインを繋いだセイバーのことを。

その気になれば、聖剣を連発できると言うガチの騎士王を。

「そして止めの——約束ユクされた勝利カの剣バ!!」

『馬鹿なッ!』

幸いにも、と言うべきか。

敗北の原因を作ったのが夫であることに気が付けないまま、女神は騎士王によって撃墜された。

† † † † † † † † † †

「……それで?」

仁王立ちする騎士王の眼前には、正座させられた黄金の女性の姿がある。改めて説明すると、夫であるはずのギルガメッシュの身体を乗っ取り、挙句の果てに薬で女体化まで果たしてしまった女神さまである。

うん。

やはり、意味不明である。

『なんだ? 私は反省などせんぞ?』

敗退したにもかかわらず、態度を改める様子のない女神。よっぽどセイバーに敗れたのが屈辱的らしい。彼女と眼を合わせようともしない。

ハア、とこれ見よがしに大きなため息をつき、セイバーは一応理由を尋ねて見ることにした。

「どうしてこんなことをしたのです? サーヴァントである私を倒すの

は確かに理にかなっていませんが、私はもう既に聖杯への願いを捨てました。殺される筋合いはないと思うのですが？」

自分でも随分と甘ったれたことを言っている自覚はあったが、これがセイバーの本心であった。現在残っているサーヴァントはセイバーの、アーチャー、アサシンの三騎のみ。うち二体が聖杯に興味がないと言っている以上、これ以上の戦争は無意味というモノだろう。『……』

しかし、女神は黙して語らない。プイツと視線を外し、怒りからだろうか？頬を赤く染めている。

「一体どうしたのです？理由を説明していただけないと、私も今回の件をなかつたことには出来ないではありませんか？」

もう少しよく女神の様子を観察すればその頬の赤みが、怒りではなく羞恥心と読み取れただろうが……生憎と、セイバーはそういうことに鈍感だった。直感Aなのに。

「私自身、貴方の夫には貸しがあります。このようなことで遺恨を残すのは好ましくない。どうか、理由を説明していただけませんか？」襲われたのはセイバーの方だが、以前よりも精神的に余裕のある彼女は非常に寛大だった。一方的に襲ってきた女神相手にも腰を低くして理由を尋ねる辺り、良くできた人間性と言えるだろう。

そして、

女神イシュタルは、それが気に喰わない。

『だって——』

ポツリと彼女の口が開かれた。ようやつと口を開いてくれる気になつたのかと思ひ、セイバーは優しく聞き返した。「うん？」と。

その幼子にするような態度に益々腹を立て、女神イシュタルは堰を切つたように話し始めた。

『だってーズルいであらう！なんだあの逢引きは！私の生前ですらあんな事なかったというのにッ！それを貴様……ギルガメツシユもギルガメツシユよ。やれ指輪を取り出そうとしたり、これ見よがしにすぽーつかーとやらを取り出そうとしたり、というか貴様……誰の許しを得て我が夫に接吻しておる？——殺すぞ？』

立ち上がって地団太を踏み、齒軋りする女神。肩の力が抜けていくのを感じながら、セイバーは言った。

「ああ……つまり、嫉妬していたと?」

『他に何かある!?!』

「……」

流星は愛の女神と言うべきか。愛情深すぎて恐ろしい。彼女を妻に出来たギルガメッシュにも自然、頭が下がる思いだった。

貴方は英雄王ですよ、紛れもなく。内心で賛辞を送っておく。

「ええと……一応、私振られたのですが……?」

『知っている。だが、それとこれとは話が別だ。』

「……」

何となく、英雄王の懐が広い理由の一端が分かった気がする。

「ともかく、この聖杯戦争に参加しているのは貴方の夫の方です。即刻身体をかえ——」

その瞬間である。英霊である二人の身に、寒気が走った。

まるで奈落の底に引きずり込まれるような、偶然にも開いてしまった地獄の釜に落ちてしまったかのような……

『へえ?』

「こ、これは……!?!」

興味深そうに眼を細めるイシュタルと総身を震わせるセイバー。

サーヴァントであるが故に状況の危険性を悟ったセイバーが即座にマスターたちの元へと向かおうとするが、その細腕をイシュタルが掴んだ。

「何をしています!?!」

ふざけている場合ではないと騎士王が怒鳴るが、イシュタルはどこ吹く風。寧ろ楽し気な笑みまで浮かべて口を開いた。

『見に行くぞ、小娘!』

「見に行くって……そもそも貴方はそろそろ彼に身体を返した方がいいのでは……？」

『嫌じゃ。』

「……」

『折角、天命の粘土板を使ってまで意識を封印したのだ。直ぐに破られるであろうが……出てくるまでは、私も自由に現世を楽しみたいのだ。』

もはや現世を楽しむことなど出来ないだろうに女神は駄々をこねる。その様子に嘆息し、セイバーは渋々頷いた。

「分かりました。では、舟を用意していただけますか？幸いにも我がマスターから至急様子を伺うよう指示がありました。今すぐ現場に急行しなければなりませんので。」

『遊び心のない奴よな？まあよい。私はお前に下された身。今はその首、繋いでおいてやる。』

先程までの殺意は何処へやら。堅苦しいセイバーの態度に肩を竦めながらもイシユタルは了承した。どうやら、この事態の方に関心を取られたらしい。

若しくは、僅かながらもセイバーのことを認めただか。

奇妙な縁で出会った二人の女は、舟に乗って空を駆け征く。

王の意識は、まだ封印されたままである。